北陸自動車道遺跡調査報告

—— 上市町木製品・総括編 ——

（本文）

神田遺跡　　飯坂遺跡

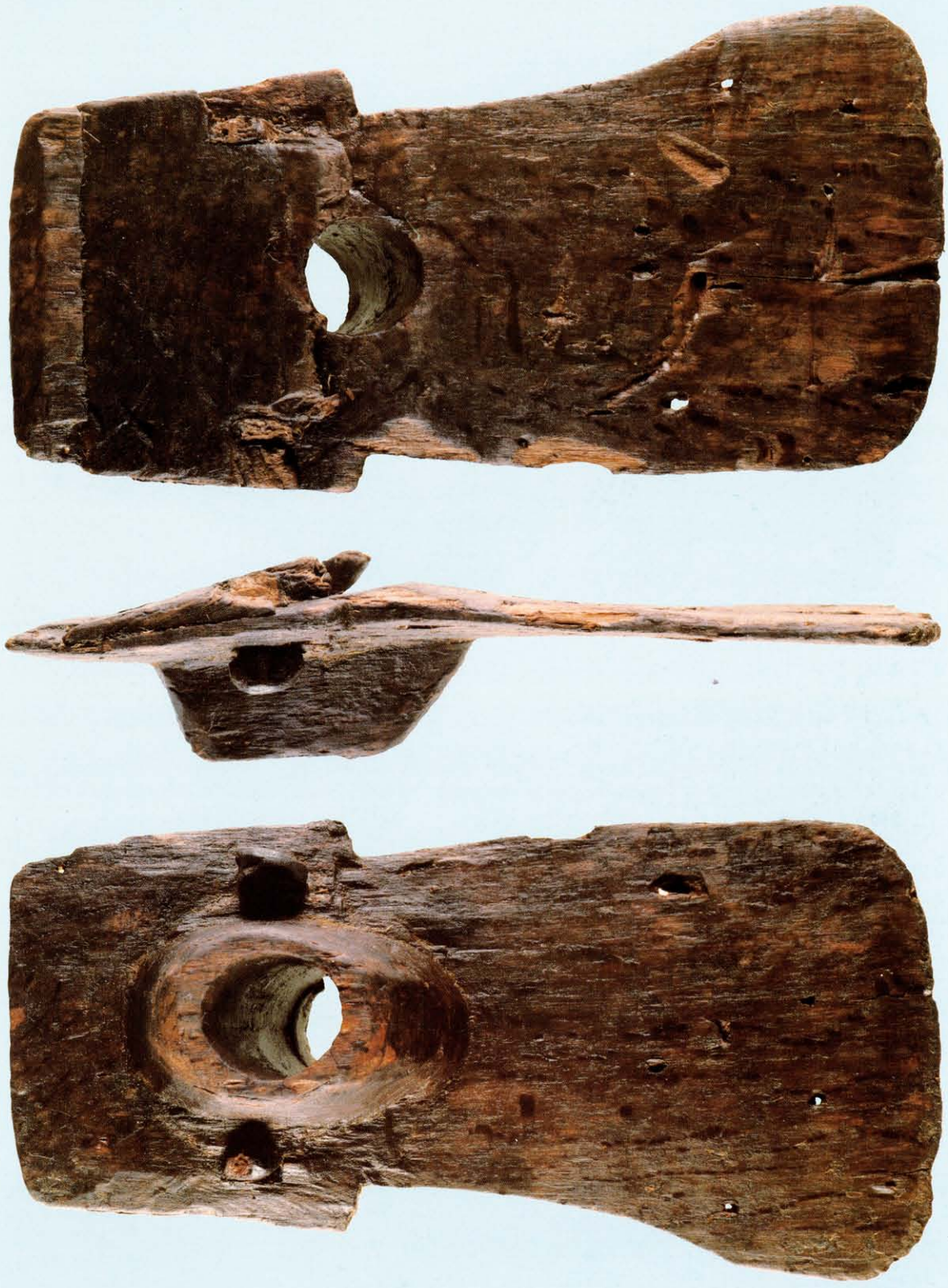
正印新遺跡　　江上A遺跡

下経田遺跡　　江上B遺跡

中小泉遺跡　　東江上遺跡

1984年3月

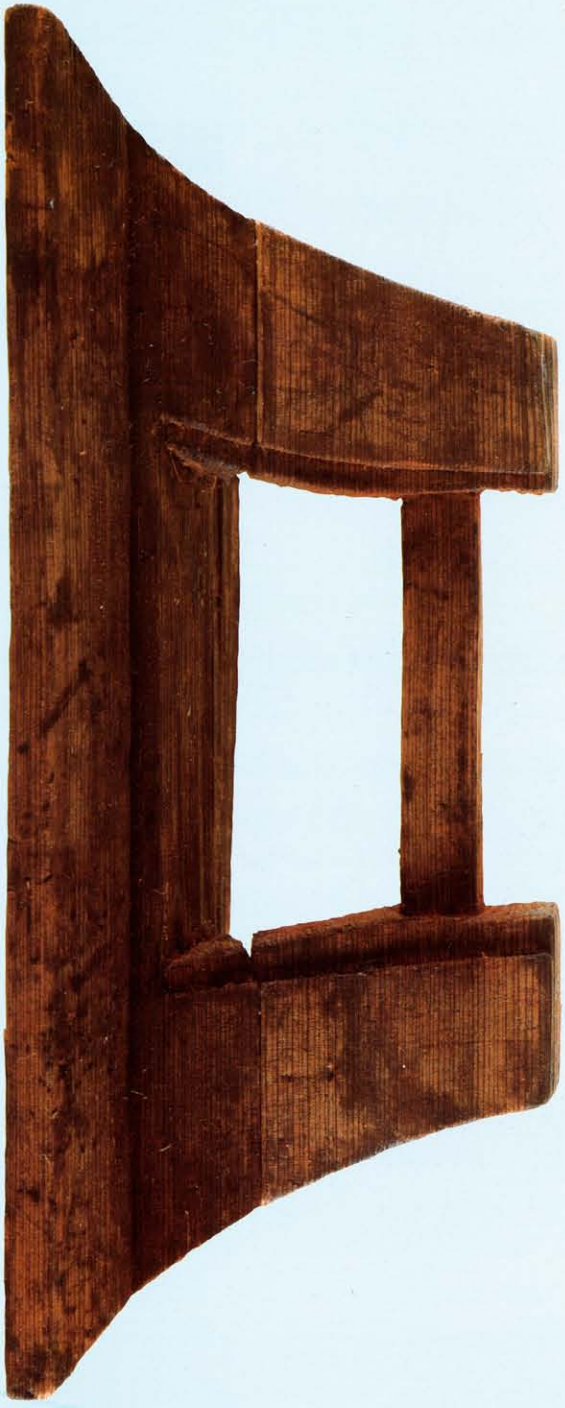
上市町教育委員会



江上A遺跡

江上A遺跡

江上A遺跡



江上A遺跡

北陸自動車道遺跡調査報告

—— 上市町木製品・総括編 ——

（本文）

神田遺跡　　飯坂遺跡

正印新遺跡　　江上A遺跡

下経田遺跡　　江上B遺跡

中小泉遺跡　　東江上遺跡

1984年3月

上市町教育委員会

序

上市町では町の北西部を走る北陸自動車道の建設に先立ち，あわせて８遺跡の発掘調査を実施しました。当遺跡群は，昭和48・49年に行なわれた分布調査で発見されたもので，それまでこのような平野部に遺跡があることはまったくわかっておりませんでした。背後に3,000ｍ級の山岳地帯をひかえる当町は，そこに源を発する上市川がたびたび氾濫し，そのため平野部は人々の生活に適さないだろうとの見方がありました。ところが発掘調査の結果，縄文時代から江戸時代に至るまでの土器・木器や住居跡・水路などが発見され，洪水と闘いながらも絶えることなく生活を続けてきた先人の偉大さを知ることができました。

発掘成果の中で，特に重要なものとして，弥生時代の遺構群と弥生時代から江戸時代にわたる約50,000点に及ぶ木製品の発見が挙げられます。「弥生の発見，上市江上遺跡は語る」と題して51回にわたって紙上掲載されたほどです。ご存じのように，弥生時代は米作りと鉄器の使用が始まった時代で，今日の私達の生活基盤が形づくられたと言われております。正印新・江上Ａ・江上Ｂの各遺跡では住居跡や倉庫が，中小泉遺跡では水路や堰が，飯坂遺跡では方形周溝墓が発見されました。このことから３つ以上の家族が共同墓地を中心に点在し，その間に水田が作られている弥生時代後期の村の跡が，今では一面の水田地帯の地下深くに埋没していることが明らかになりました。また遺跡の時期を決める目安となる弥生土器は，山陰地方，近畿地方，東海地方，東北地方など全国各地域との交流が，その当時から活発に行なわれていたことを教えてくれました。

木製品は，遺跡群が湿潤なところに形成されていたために残ったもので，通常の遺跡では腐触して残らないものです。このような条件にあったため，植物の種子や花粉，動物の骨なども多数残されており，土器・石器だけでは語ることができない問題にもアプローチできる特徴があります。例えば，樹木やその他の植物から当時の自然環境や植物利用の様子を知ることができ，木製農具や堰からは当時の農業技術の状況を復元できます。また，木製の漁具・狩猟具・容器・火おこし具・紡織具・楽器などから，日常生活の様子も知ることができました。

本書は幸いにも，木器の樹種や植物の種子・花粉，動物の骨の同定など，それぞれ専門分野の先生方に御協力いただき，その成果をあわせて掲載することができました。

今年は当遺跡群が発見されてから，ちょうど10年目にあたります。昭和53・54年に行なわれた発掘調査で掘り出された遺物が膨大な量であったため，整理作業に４年間を費しました。その間，遺構編，土器・石器編を順次刊行してきましたが，この木製品・総括編の刊行をもって整理作業はすべて完了したことになります。しかし，発掘された多くの遺物は，上市町及び富山県の歴史を物語る資料として大いに活用され，本書も我国の弥生時代社会の様子を明らかにしていくための新たな踏台として，多くの方々に活用されれば幸いです。

さて，調査の実施から遺物整理に至るまで，日本道路公団新潟建設局，富山県教育委員会をはじめとする関係機関の多くの方々から多大の御協力をいただきましたことに対し衷心より厚くお礼申しあげます。

昭和59年３月

上市町教育委員会

例　言

1．本書は，高速自動車国道北陸自動車道（上市工事区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，昭和53・54年度に実施し，報告書は，遺構編，土器・石器編，木製品・総括編の三部作として刊行する計画で進めており，56年度に第一分冊遺構編を，57年度に第二分冊土器・石器編を刊行している。本書は，第三分冊の木製品・総括編である。

3．本書に収録したのは，富山県中新川郡上市町に所在する下記の８遺跡である。

神田遺跡・正印新遺跡・下経田遺跡・中小泉遺跡・飯坂遺跡・江上Ａ遺跡・江上Ｂ遺跡・東江上遺跡

4．本書の刊行は，日本道路公団（新潟建設局）の委託を受けて，上市町教育委員会が行い，出土遺物の整理及び本書の編集は，富山県埋蔵文化財センターが担当した。

5．本書の作成にあたって，遺物整理・実測・製図などの業務は，下記の者が担当した。

富山県埋蔵文化財センター：橋本　正・岸本雅敏・狩野　睦・酒井重洋・宮田進一・神保孝造・久々忠義・橋本正春（以上調査担当者），上野　章・関　　清・山本正敏・池野正男・松島吉信

杉崎容子・土田節子・土田ユキ子・坪田和子・坪田信子・矢後知恵子・山口チズコ・清水由美子・須藤順子・中溝治代・小竹富佐子・山口玲子・平野裕子・古邸千佳子・松田千春・殿邑宏美・笹倉都貴子・荒井一美・塚田一成・

富山大学学生：贊　元洋・北野博司・楠　正勝・吉田秀則・荒川　史・木原　光・田上浩幸・遠山昌和・中川　渉西田昌功・林　浩明・原田和幸・松田知幸・森　秀典・横山貴広・宮田佐和子・南出そのみ・武藤　秀・吉田由香坂口美智子・江幡和子・田辺いずみ・曽根千穂，竹内純子

なお，調査ならびに整理期間中の事務は下記の者が担当した。

富山県埋蔵文化財センター　昭和54年度　所長竹内俊一　主任川口　稔　文化財保護主事山本正敏
昭和55年度　所長竹内俊一　主任荒井真一郎　文化財保護主事山本正敏
昭和56年度　所長古岡英明　主任荒井真一郎　文化財保護主事神保孝造
昭和57年度　所長古岡英明　主任金田　弘　文化財保護主事神保孝造
昭和58年度　所長古岡英明　主任出村昭夫　文化財保護主事狩野　睦・池野正男

上市町教育委員会　昭和54年度　社会教育課長井戸川義邦　社会教育主事広島丈志　主事斎藤　隆
昭和55年度　社会教育課長井戸川義邦　社会教育主事広島丈志
昭和56年度　社会教育課長荒川武夫　社会教育課主任広島丈志　同主任稲垣博子　主事高慶　孝
昭和57年度　社会教育課長荒川武夫　社会教育課主任広島丈志　同主任稲垣博子　主事高慶　孝
昭和58年度　社会教育課長荒川武夫　社会教育課主任広島丈志　同主任稲垣博子　主事高慶　孝

6．自然遺物の同定分析にあたっては，下記の先生方に引き受けていただき，玉稿をいただいた。

大阪市立大学理学部　粉川昭平，大阪府立大学農学部　藤下典之，早稲田大学教育学部　金子浩昌，
広島大学総合科学部　安田喜憲，元興寺文化財研究所　松田隆嗣，富山大学教養部　吉井亮一，
富山県木材試験場　飯島泰男，長谷川益夫，

7．本書は，調査担当者が編集・執筆を行い，執筆分担は下記のとおりである。

Ⅰ　Ａ酒井重洋，Ｂ宮田進一，Ｃ狩野　睦，Ｄ久々忠義，Ｅ宮田進一

Ⅱ　Ａ・Ｂ・Ｃ久々忠義，Ｄ宮田進一

Ⅲ　Ａ粉川昭平，吉井亮一，Ｂ藤下典之，Ｃ飯島泰男，長谷川益夫，
Ｄ安田喜憲，Ｅ酒井重洋，Ｆ・Ｇ・Ｈ久々忠義

8．本書に掲載した木製品の写真撮影は，株式会社チューエツ写真部と株式会社立業社に委託した。

9．木器の写真図版の縮尺は，統一をはかっていない。実測図版のスケールを参照願いたい。

10．遺物番号は，遺跡単位で一連番号を付した。

11．遺物の出土区，出土遺構，出土土器・石器については，すでに刊行した『遺構編』及び『土器・石器編』を参照されたい。

12．遺物の分類は遺跡ごとに行い，統一をはかっていない。

13．遺物整理，本書の作成にあたって，次の諸機関・諸氏から指導と助言をうけた。記して謝意を表する。

文化庁，奈良国立文化財研究所，元興寺文化財研究所，富山県木材試験場，富山大学地学教室，富山大学考古学研究室，京都大学，富山考古学会，富山県警鑑識課

坪井清足・佐原　真・町田　章・西山要一・橋本澄夫・仲上　誠・宮石宗弘

目　　次

序

例　言

I　木製品

A　正印新遺跡……1

B　飯坂遺跡……1

C　中小泉遺跡……2

D　江上A遺跡……5

1．木製品……5

2．ガラス玉……39

3．骨角器……39

E　江上B遺跡……43

II　総　括

A　遺跡群の概要……47

B　弥生時代の時期区分……49

C　江上弥生遺跡群について……54

1．はじめに……54

2．白岩川・上市川流域の弥生遺跡群……56

3．江上弥生遺跡群の推移……58

D　中世の遺跡の性格……73

1．遺物の年代と器種構成……73

2．遺跡の性格……76

参考・引用文献……77

III　自然遺物

A　江上遺跡群出土の種実遺体……79

B　木製品の樹種……89

C　江上遺跡群の泥土の花粉分析……101

D　江上A遺跡およびB遺跡から出土したヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* STANDL. とメロン仲間 *Cucumis melo* L. の遺体について……107

E　桃の核の大きさ……118

F　炭化米の大きさ……119

G　動物遺体……120

H　昆　　虫……120

表　（本文）

表１　江上Ａ遺跡鍬・鋤の計測表…… 10
表２　江上Ａ遺跡石包丁形木器の計測表…… 15
表３　江上Ａ遺跡火鑽杵の計測表…… 16
表４　江上Ａ遺跡火鑽臼の計測表…… 17
表５　江上Ａ遺跡鳴子形木器の計測表…… 18
表６　江上Ａ遺跡弓の計測表…… 20
表７　江上Ａ遺跡鏃形木器の計測表…… 20
表８　江上Ａ遺跡矢羽根形木器の計測表…… 22
表９　江上Ａ遺跡桶の計測表…… 24
表10　江上Ａ遺跡蓋あるいは底板の計測表…… 25
表11　江上Ａ遺跡杓子の計測表…… 26
表12　江上Ａ遺跡栓の計測表…… 28

図版　（本文）

第１図　鍬Ａの部位名称…… 6
第２図　えぶり…… 7
第３図　鍬Ｂ…… 7
第４図　鍬の分類(1)…… 8
第５図　鍬の分類(2)…… 9
第６図　鋤Ｂの部位名称…… 10
第７図　鋤Ａの部位名称…… 10
第８図　鋤の分類(1)…… 12
第９図　鋤の分類(2)…… 13
第10図　石包丁形木器の部位名称…… 15
第11図　鳴子形木器の分類…… 19
第12図　籠の復元図…… 26
第13図　器台の復元図…… 27
第14図　ガラス玉…… 38
第15図　骨針…… 38
第16図　江上Ａ遺跡出土木器の組み合せ…… 39
第17図　遺跡群の時代…… 48
第18図　フェアブリッジによる西暦紀元後の
　　海水準変動…… 48
第19図　江上弥生遺跡群の時期区分…… 49
第20図　中期Ⅰ期の土器…… 49
第21図　中期Ⅱ期の土器…… 50
第22図　天王山式系統の土器…… 50
第23図　中期Ⅲ期の土器…… 50
第24図　器種構成の変化…… 51
第25図　後期土器の時期区分と主要器種の変化…… 53
第26図　前期古墳と弥生遺跡の分布…… 55
第27図　白岩川・上市川流域の弥生遺跡群の分布…… 56
第28図　遺跡周辺の地形横断図…… 56
第29図　白岩川・上市川流域の弥生遺跡群…… 57
第30図　祭祀に用いられたとみられる遺物…… 62
第31図　弥生時代遺跡群の時期変遷…… 65
第32図　江上Ａ遺跡土器群の位置(1)…… 67
第33図　江上Ａ遺跡土器群の位置(2)…… 69
第34図　江上Ａ遺跡土器群の位置(3)…… 71
第35図　江上Ａ遺跡遺構配置図…… 41
第36図　江上Ｂ遺跡木製品出土地点…… 43
第37図　県内出土の中世土器編年図…… 74

木 器 図 版 （別冊）

図版１　正印新遺跡
図版２　正印新遺跡
図版３　正印新遺跡
図版４　正印新遺跡
図版５　正印新遺跡
図版６　正印新遺跡
図版７　中小泉遺跡
図版８　中小泉遺跡
図版９　中小泉遺跡
図版10　中小泉遺跡
図版11　中小泉遺跡
図版12　中小泉遺跡
図版13　中小泉遺跡
図版14　中小泉遺跡
図版15　中小泉遺跡
図版16　中小泉遺跡
図版17　中小泉遺跡
図版18　中小泉遺跡
図版19　中小泉遺跡
図版20　中小泉遺跡
図版21　中小泉遺跡
図版22　中小泉遺跡
図版23　中小泉遺跡
図版24　中小泉遺跡
図版25　中小泉遺跡
図版26　中小泉遺跡
図版27　中小泉遺跡
図版28　中小泉遺跡
図版29　中小泉遺跡
図版30　中小泉遺跡
図版31　中小泉遺跡
図版32　中小泉遺跡
図版33　中小泉遺跡
図版34　中小泉遺跡
図版35　中小泉遺跡
図版36　中小泉遺跡
図版37　中小泉遺跡
図版38　飯坂遺跡
図版39　飯坂遺跡
図版40　飯坂遺跡
図版41　飯坂遺跡
図版42　江上Ａ遺跡　鍬
図版43　江上Ａ遺跡　鍬
図版44　江上Ａ遺跡　鍬
図版45　江上Ａ遺跡　鍬
図版46　江上Ａ遺跡　鍬
図版47　江上Ａ遺跡　鍬
図版48　江上Ａ遺跡　鍬
図版49　江上Ａ遺跡　鍬
図版50　江上Ａ遺跡　鍬
図版51　江上Ａ遺跡　鍬
図版52　江上Ａ遺跡　鋤
図版53　江上Ａ遺跡　鋤
図版54　江上Ａ遺跡　鋤
図版55　江上Ａ遺跡　鋤
図版56　江上Ａ遺跡　鋤
図版57　江上Ａ遺跡　鋤
図版58　江上Ａ遺跡　鋤
図版59　江上Ａ遺跡　石包丁形木器
図版60　江上Ａ遺跡　石包丁形木器
図版61　江上Ａ遺跡　臼・杵
図版62　江上Ａ遺跡　臼・杵
図版63　江上Ａ遺跡　臼・杵
図版64　江上Ａ遺跡　弓
図版65　江上Ａ遺跡　弓
図版66　江上Ａ遺跡　鏃形木器
図版67　江上Ａ遺跡　たも網
図版68　江上Ａ遺跡　斧柄
図版69　江上Ａ遺跡　鳴子形木器
図版70　江上Ａ遺跡　鳴子形木器
図版71　江上Ａ遺跡　鳴子形木器
図版72　江上Ａ遺跡　鳴子形木器
図版73　江上Ａ遺跡　火鑽杵
図版74　江上Ａ遺跡　火鑽臼
図版75　江上Ａ遺跡　火鑽臼
図版76　江上Ａ遺跡　火鑽臼
図版77　江上Ａ遺跡　紡錘車・琴柱・刀子柄
図版78　江上Ａ遺跡　杓子
図版79　江上Ａ遺跡　杓子
図版80　江上Ａ遺跡　杓子
図版81　江上Ａ遺跡　鉢
図版82　江上Ａ遺跡　鉢
図版83　江上Ａ遺跡　鉢
図版84　江上Ａ遺跡　鉢
図版85　江上Ａ遺跡　槽
図版86　江上Ａ遺跡　槽
図版87　江上Ａ遺跡　槽
図版88　江上Ａ遺跡　櫂
図版89　江上Ａ遺跡　桶
図版90　江上Ａ遺跡　桶
図版91　江上Ａ遺跡　桶
図版92　江上Ａ遺跡　底板か蓋
図版93　江上Ａ遺跡　底板か蓋
図版94　江上Ａ遺跡　底板か蓋
図版95　江上Ａ遺跡　底板か蓋
図版96　江上Ａ遺跡　栓
図版97　江上Ａ遺跡　栓
図版98　江上Ａ遺跡　栓
図版99　江上Ａ遺跡　矢羽根形木器
図版100　江上Ａ遺跡　はしご
図版101　江上Ａ遺跡　棒
図版102　江上Ａ遺跡　棒
図版103　江上Ａ遺跡　棒
図版104　江上Ａ遺跡　棒
図版105　江上Ａ遺跡　棒
図版106　江上Ａ遺跡　棒
図版107　江上Ａ遺跡　棒
図版108　江上Ａ遺跡　棒

図版109　江上Ａ遺跡　棒
図版110　江上Ａ遺跡　棒
図版111　江上Ａ遺跡　棒
図版112　江上Ａ遺跡　棒
図版113　江上Ａ遺跡　棒
図版114　江上Ａ遺跡　棒
図版115　江上Ａ遺跡　棒
図版116　江上Ａ遺跡　棒
図版117　江上Ａ遺跡　棒
図版118　江上Ａ遺跡　棒
図版119　江上Ａ遺跡　棒
図版120　江上Ａ遺跡　板
図版121　江上Ａ遺跡　板
図版122　江上Ａ遺跡　板
図版123　江上Ａ遺跡　板
図版124　江上Ａ遺跡　板
図版125　江上Ａ遺跡　板
図版126　江上Ａ遺跡　板
図版127　江上Ａ遺跡　板
図版128　江上Ａ遺跡　板
図版129　江上Ａ遺跡　板
図版130　江上Ａ遺跡　板
図版131　江上Ａ遺跡　板
図版132　江上Ａ遺跡　板
図版133　江上Ａ遺跡　板
図版134　江上Ａ遺跡　板
図版135　江上Ａ遺跡　板
図版136　江上Ａ遺跡　板
図版137　江上Ａ遺跡　板
図版138　江上Ａ遺跡　板
図版139　江上Ａ遺跡　板
図版140　江上Ａ遺跡　板
図版141　江上Ａ遺跡　板
図版142　江上Ａ遺跡　板
図版143　江上Ａ遺跡　柱根
図版144　江上Ａ遺跡　柱根
図版145　江上Ａ遺跡　柱根
図版146　江上Ａ遺跡　柱根
図版147　江上Ａ遺跡　柱根
図版148　江上Ａ遺跡　柱根
図版149　江上Ａ遺跡　柱根
図版150　江上Ａ遺跡　柱根
図版151　江上Ａ遺跡　柱根
図版152　江上Ａ遺跡　柱根
図版153　江上Ａ遺跡　柱根
図版154　江上Ａ遺跡　柱根
図版155　江上Ａ遺跡　柱根
図版156　江上Ａ遺跡　柱根
図版157　江上Ａ遺跡　柱根
図版158　江上Ａ遺跡　柱根
図版159　江上Ａ遺跡　柱根
図版160　江上Ａ遺跡　杭
図版161　江上Ａ遺跡　杭
図版162　江上Ａ遺跡　棒
図版163　江上Ａ遺跡　棒
図版164　江上Ａ遺跡　棒
図版165　江上Ａ遺跡　棒
図版166　江上Ａ遺跡　棒
図版167　江上Ａ遺跡　棒
図版168　江上Ａ遺跡　棒
図版169　江上Ａ遺跡　棒
図版170　江上Ａ遺跡　棒
図版171　江上Ｂ遺跡
図版172　江上Ｂ遺跡
図版173　江上Ｂ遺跡
図版174　江上Ｂ遺跡
図版175　江上Ｂ遺跡
図版176　江上Ｂ遺跡
図版177　江上Ｂ遺跡
図版178　江上Ｂ遺跡
図版179　江上Ｂ遺跡
図版180　江上Ｂ遺跡
図版181　江上Ｂ遺跡
図版182　江上Ｂ遺跡
図版183　江上Ｂ遺跡
図版184　江上Ｂ遺跡
図版185　江上Ｂ遺跡
図版186　江上Ｂ遺跡
図版187　江上Ｂ遺跡
図版188　江上Ｂ遺跡
図版189　江上Ｂ遺跡

Ⅰ 木 製 品

A 正印新遺跡

正印新遺跡は，弥生時代中期から古墳時代・中世・近世の複合遺跡で，溝・井戸・住居跡・高床倉庫跡・土壙などが検出された〔酒井1981〕。出土遺物は，弥生時代中期から古墳時代の土器・石器，中・近世の陶磁器類を初め「遠賀川式土器」が発見され注目された〔酒井1982〕。また，溝・土壙内からは，木製品が出土したが用途を知ることのできるものは少なく杭・板・棒・加工痕を残す木片が大半を占める。（図版１～６）

弥生・古墳時代

用途不明の木製品と柱根がある。木製品（６・８）は，ＳＤ10出土でいずれも片側が握り手状にふくらむもので，６は対する端に抉りを設ける。２は，長さ39cm，幅1.3cm，厚さ５mmで一端を山形に削り，切り込みを入れ，他の一端は剣先状に尖らせるもので斎串状の木製品である。13は，ＳＢ21（高床式倉庫）の柱根で大形材の割り材を用い外面は丁寧に削られる。また，底面から抉りが幅約４cm，長さ約28cmで設けられる。同様の柱根は，江上Ａ遺跡のＳＢ14・20に一例ずつみられ建物等の転用材の可能性をもつ。住居跡ＳＢ22（12・16）の柱根はいずれも大形材の割り材で外面に成形痕をとどめる。ＳＢ24は，弥生中期の住居跡で同一箇所で２～４回の建替えが推測できる。柱根は，20を除き丸木材を利用し木材の利用方法・材質がＳＢ21・22と異なり時期差と考えられる。また，江上Ａ遺跡でも同様に大形材の割り材を柱とする住居跡が多くＳＢ21・22は，木材の利用法は共通する。

中・近世

ＳＤ001・ＳＢ23・ＳＫ26･29から検出され，生活用品が大半を占める。ＳＤ01出土木器は，下駄・漆器・柄杓・用途不明の木製品がある。下駄（１）は，針葉樹の心持材より作る一木造りで歯は厚く全体にがっしりした作りである。前壺には，指あたりが残る。柄杓（３）は，薄板を桜皮により綴じ合せ作られ，底板には削り痕が残る。漆器椀（５）は，高い高台が付き，底面が厚く作られる。外面は，黒漆を施し白灰色の円を描き中に花文を朱描する。内面は，朱漆が施される。塗りは，全体に雑である。同様の漆器椀は，小矢部市桜町遺跡〔伊藤・安念1982〕に多くみられその形態は似る。７は，一端に方形の孔をあけ，他方に抉り込みを設け，中央部に一対の小孔を穿つ木器で，自在鉤の部分とも考えられる。４は，ＳＫ26出土の柱根で切口に工具痕を残す。また，ＳＤ001同様の漆器椀の破片が出土している。これらはいずれも近世の木製品である。曲物底板（４）は，ＳＫ29出土で炭化米と伴に出土した。楕円形を呈し，側面に木釘痕を数本残す。10は，掘立柱建物ＳＢ23の柱根で心持ち材を使用している。

樹種は，９～13・16がスギ，15がヤマナラシ，17がクヌギ，18・19がシイノキである。

B 飯 坂 遺 跡

木製品の総数は木片も含めて54点である。その大部分はＸ４～９，Ｙ50～58区にある中世の溝から出土している。弥生時代後期の方形周溝墓の周溝からは９点出土している（図版38～40）。樹種は９～12がハンノキ，13がヤマグワ。

１は細長い板材の一側面にえぐりを入れている。長さ76cm。建築材か。２は一端に突出部をつくり，もう一端を細く尖らせた，用途不明の木製品である。板目材，長さ53.5cm。３は長さ38cm，一辺1.6cmの角材の両端を削り出して細くしたものである。４は長さ21cmの下駄である。幅は6～8.4cmで，両端がすぼまり，後壺付近で最大幅となる。前の木口が厚く1.4cm，後の木口は0.9cmであり，台部の裏の下半分は削られて薄くなっている。５～８は曲物の底板である。推定底径16.8～19cmで，厚さ0.5～0.7cmである。柾目材。５～７の片面は黒漆塗りである。９～13はＳＢ18（中世以降）の柱根である。柱根は直径16～30cmの心持ち丸材を用い，下端木口は鋭く尖り杭状になっている。

C 中小泉遺跡

中小泉遺跡より出土した木器及び，自然木に何らかの加工を加えたものの総点数は2,028点である。時代的には弥生時代中・後期，古墳時代前期，中世のものがある。量的には弥生時代後期から古墳時代前期に属するものが多く，中でも溝（ＳＤ27）より発見されたものが最も多い。これらの木製品のうち用途が推定できるものは少なく，棒ないし板状の用途不明品が大半をしめる。（図版７～37）

弥生・古墳時代

１．鍬・鋤（１～３）

ＳＤ27の東側シガラミより２点出土した。１は二又の歯を持つもので，歯の１本は途中で欠損している。長さは一部歯の先端を欠くが56.4cm，最大幅10cm，厚さは頭部で１cm，歯の先で1.5cmと歯が若干厚くなるが，身の両面はほぼ平坦である。歯の長さは23cm，幅1.6～4.4cmで先がやや尖る。頭部は山形状をしており，身の中央で両側に「く」の字状のえぐりが入る。柄穴は５×２cmの方形で，柄穴の長軸両端の断面が「∩」状をしている。柾目材を使用。３は身の右半分を欠損しているが，１とほぼ同形態の頭部と，身の両側に「く」の字状のえぐりが入る。平面形は，ナスビの縦断面に似た形状である。長さは63.7cm，現存幅5.7cmで，推定の刃部幅は約12cm程度になると思われる。厚さは頭部で2.2cm，刃部で1.6cmと頭部が若干厚くなっている。刃部の裏面には３～５cmのゆるく湾曲した線状痕が見られる。柄穴は方形で，長さ6.2cm，推定幅で約４cm程と思われる。着柄角度は約56度である。柾目材使用。２はSD27東側シガラミの下流より出土。形は歯の下半部及び先端を欠くが，二又の歯を持つもので，現存長は28.4cmで，身の最大幅は10.4cm，厚さ４cmと厚手な作りである。身の上部には段を設け，先端を欠損しているが，幅4.5cm，長さ３cm，厚さ３cmで，断面がかまぼこ形をしており，裏面の平坦面に柄を付ける着柄軸が残っている。肩は下がりぎみで歯へとうつる。柾目材使用。

樹種はすべてクヌギである。

２．編板（８）

１点ＳＤ27西側シガラミより出土した。長い板目材の側面に刻みをつけたもので，菰や俵等を編む時用いたものと思われる。現存長は78.7cm，幅11cm，厚さ２cmで刻みのある側面の厚さは0.5cmと薄くしている。刻みの間隔は，0.5・１・2.2cmの間隔で刻み２個を１組とするものと，１個だけの刻みがあり不揃である。刻みのある側に１個所3.5×0.9cmの方形状の穴を設けている。

３．用途不明木製品（図版９～32）

(1) 棒状木製品（４・５・７・42・43・48・49・51・53～56・63・66・68・69・71・72・77～79・81・82）

端部を削るもの（４・５・７）

４は完成品で，長さ58.8cm，径2.1cmの断面楕円形の棒で，両端の表裏を端から２cmほど削り差込状としている。５は上端を欠くが，下端の両側を右左対称に削る。下端の側面に長さ２cm，幅1.8cmのクサビ状の木片が入っている。７は断面円形の樹枝で下端を欠く。現存長は25.9cm，径1.6cmあり，先端部を削り突起状としている。７はＳＤ27東側シガラミより出土した。

端部を尖らすもの（63・65・66・71～73・76・77・81・82）

端部を尖らせ杭状にしたもので，大小あり，大形の63・65・66・82はSD27のシガラミ（63東側，65・66・82西側）に用いられていた。また小形の77も東側シガラミより検出した。樹種は81がスギである。

一端に頭部を作るもの（48・49・78）

下端を欠損するが，残存の先端部の２～６cm下を削り頭部としたもので，48はＳＤ27東側シガラミより出土したも

ので，現存長85cm，幅５cmあり，先端を四面から削りくぼませて頭部を作る。49は現存長62.1cm，幅４cmで先端部を四面より削りやや頭部状としている。78は現存長104.6cm，幅６cmで，一面を削り頭部状としている。

その他の棒（51・53～56・68・69・79）樹種は54・55がスギである。

51は長さ95.1cm,幅4.5cmあり，２ヵ所で若干の削りにより段を作る。断面はかまぼこ形をしており，下端は径3.5cmの円形をしている。53は先端部を欠損するが尖るものと思われる。現存長70.5cm,幅4.5cmで下端にえぐりを入れ矢羽状としている。54は下端を欠損しており，上端から９cmほど削り段にしている。55は両端を欠損しており，上端部を２cmほど削り段をつけている。56は下端を欠損しており，先端より13cm下に2.4×1.8cmの方形の穴を穿っている。なお下端の欠損部にも穴の痕跡がある。68・69・79は細長い棒で，68は長さ99.2cm,幅５cm，69は長さ125.4cm,幅5.3cm,79は長さ111.4cm，幅3.8cmある。68・69にはちょうな痕がよく残っている。54はＳＤ27東側シガラミより出土した。

(2) 板

穴を持つもの（９～15・17・19～21・24）樹種は14・17がスギである。

９・10は先端近くに穴を持つ。９は0.9×0.6cm，10は8.8×3.5cmの方形の穴で,いずれも下端を欠損する。11～15・17・19～21・24は片側ないし両側に穴を持つ。11は長さ101.4cm,幅13.6cmで,右側下端を一部欠損するが,先端の両側に円形と方形の穴を持ち，右側に方形と楕円形の穴が各１個穿たれている。12は先端及び左側を欠損し，両側に楕円形状の穴を持つ。13～15は左側に円形・方形の穴を穿ったもので，13は長さ125.2cm,幅13.2cmで，右下端を一部欠損する。14は下端を欠き，15は長さ94.6cm,幅9.5cmで，右先端を一部欠損する。17は下端を欠き，先端の中央右よりに方形の穴を穿つ。19は右側及び下端を欠損しており，左側に方形の穴を２個穿つ。20は両端を欠き，中央より右側に円形の穴を穿っている。21は長さ29.6cm,幅8.2cmで中央より左側に円形と方形の穴を各１個穿っている。24は両端及び左側を欠き，右側に円形の穴を穿っており，木口面がゆるく湾曲する。木取りは15・19が柾目材で，他は板目材である。

穴を持たないもの（29～41・44・47・50・52・70・104）樹種は47がスギである。

29は下端を欠損しており，現存長202.3cm,幅24cmあり，先端より10cm下に幅６cm，深さ２cmのえぐりがある。30は現存長113.4cm，31は現存長148cmで，木口面がゆるく湾曲しており容器(槽)の一部かもしれない。32は下端を欠き，右先端が尖り，現存長131cm，幅9.5cmあり，両面にちょうな痕をよく残している。33は左側及び下端を欠き，表面に荒い加工痕が残っている。34は長さ107.7cm,幅13cmあり先端をやや弧状にする。40は長さ51.3cm，幅11.7cmで，厚さ4.4cmと比較的厚く,農具の未成品と思われる。44は先端を欠損しており，左下端を尖らし，表面には線状痕が残っている。50は長さ177.8cm,幅12.4cmで，右先端が長さ９cm，幅４cmほど出ている。52は長さ88.8cmあり右側を欠き，厚さは１cmと薄く，右側面に1.5～２cm間隔で14ヵ所のえぐりを入れている。104は長さ8.2cm，幅7.9cmと小さく，先端をやや尖らせ，下端を弧状にくぼませる。木取りは33・50・52・70・104 が柾目材で，他は板目材である。32・44はＳＤ27の東側シガラミより出土した。

一端を矢板状に尖らすもの（58～62・64）樹種は58・59・61・62がスギである。

いずれも上端を欠損するが，厚さ1.5～2.5cmの板目材で，下端を両面より削り尖らせて矢板状にしている。

中　世

１．下駄（83・84・94・95）

４点出土した。すべて一木作りで，83・84・94は連歯下駄，95は前後の歯を若干肥厚してつくりだしているが，台部より分離していない。後壺は83・84・95が後歯の前に穿っている。木取りは83・85が板目材，94が柾目材である。83は長さ23.9cm，幅10.7cmで，使用のため前歯は若干の痕跡を残すだけである。また表面の摩滅も著しく，前壺の周辺に足裏状の浅い凹が残っており，主に右足用と思われる。前後の壺では後壺1.2cmに比べ，前壺0.8cmと小さい。なお後歯のなかほどを幅２cmほどえぐっている。84は長さ22.2cm,幅9.9cmで，台表及び歯の摩滅は著しく，特に後歯に比

べ前歯がすりへっている。94は長さ25.3cmで，両側を欠く。使用のため歯は摩滅しており，台表面の前壺の上が足指により凹んでいる。95は長さ28.1cm，現存幅９cmで，推定幅18cmと他の下駄よりも大きい。台平面形は一部角をおとした前後に長い八角形状で，前後の壺は方形に穿っている。台底は調整されず，加工痕が残る。84の樹種はモクレン。

２．箸状木製品（85～93）

25点出土した。完形品はなく，四角い棒を削り先端を細く尖らす。断面は六角形状ないし方形である。

３．杓子状木製品（97）

長方形の板目材から握部を削り出し，身の先縁を丸くかどをおとしている。身の片側半分を欠くが，長さ24.8cm，柄幅2.8cm，厚さ0.6～0.8cmで，両面とも平滑に調整している。

４．折敷（99）

折敷の側板の隅にあたるもので，底板と固定する木釘が一辺に２本残っている。長さは6.2cm，幅2.9cm，厚さ0.8cmで両面に黒漆を塗っている。

５．漆器（100）

11点出土しているが断片が多い。100の法量及び高台は，口径約14.8cm，器高５cmで，底部は径約7.2cm，深さ0.3cmにわたって削り高台状としている。

その他

遺物包含層及び溝覆土上面より出土したものをまとめた。

１．弓状木製品（６）

断面がほぼ丸い樹枝を用い，全体を丁寧につくっている。現在長は57.6cm，最大径2.1cmで，先端部を両側辺から1.8cm程削り落とし，台形状の突起をつくり弓と推定できる。時代的には弥生～古墳時代と思われる。

２．田下駄状木製品（96）

長さ44cm，幅26.7cm，厚さ３cmの長方形状の下駄形をしており歯はなく，方形の３～２×0.8～1.2cmの壺を３ヶ所穿つ。前壺は右側に偏しており，両面にちょうな痕がよく残っている。加工等より弥生～古墳時代に属すと思われる。

３．底板（101・102・105）

桶あるいは曲物の底板と思われる破片で，101は一端が弧状をしており，長さ21.8cm，幅8.2cm，厚さ1.3cmある。102は上端に側板をとめる穴があり，長さ16.4cm，幅６cm，厚さ0.4～0.8cmある。105は円形の底板の半欠品と思われ，長さ8.6cm，幅４cm，厚さ0.5～0.8cmある。樹種はすべてスギである。

４．棒（25・26・42・43・57・67・74・75・80・103・106～109）

25・26・57は穴を持つもので，26は下端を欠き，２×1.2cmの方形の穴を穿つ。そのうちの１ヶ所には棒状の木片が残る。42は長さ15.7cm，幅2.2cmで，左側中央に幅1.9cmのえぐりが入る。67・74・75は端部を杭状に尖らすものである。103は下端を欠損しているが，断面は1.9cmとほぼ円形で栓と思われる。106は下端を欠くが，先端を尖らせ，先端より７cm下を削り断面を方形にしている。107は長さ14cm，幅3.8cmあり，左側面に幅0.4cmの溝状のえぐりを入れる。108は長さ15.6cm，幅3.2cmで，断面がかまぼこ形をしている。樹種は67・106～109がスギである。

５．板（16・18・22・23・27・28・45・46・98・110～112）

16・18・22・23・28・98は円ないし方形の穴を持つもので，いずれも一部を欠く。23は先端部にそって，浅い切り込みが入っている。28は長さ29.8cm，幅10.7cm，厚さ2.6～8.5cmで，表面はほぼ平坦で，下端の中央に径5.5cm，深さ3.6cmの穴を穿っている。裏面は上端よりゆるやかに厚くなり，途中で４cmほどの段を作る。その段の下に３×2.2cmの穴を穿って，棒状の木片を差込んでいる。27・45・46・105・110～112は穴を持たないもので，27は両側を欠き，先端中央部を長さ及び幅とも4.2cmの断面六角状にしている。45は両側を欠損しており，右側に半円状のえぐりを入れる。46は長さ21.5cm，幅4.2cmの方形の板で，両面に線状痕が残っている。樹種は110～114がスギである。

D 江上A遺跡

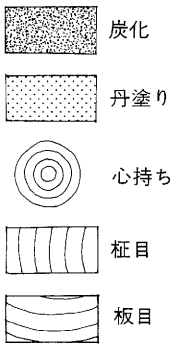
1 木製品

江上A遺跡から出土した木製品の総点数は，14,855点である。そのうち，人為的な加工痕を認めるもの（木器）は約38%にあたる5,605点である。

木器のうち，用途が推定できるものは，次の表のものがある。用途の不明なものについては，板・棒とし，形や穴などの特徴によって分け，以下説明する。樹種については，III．自然遺物「木製品の樹種」を参照願いたい。

出土した場所は，多くはSD01・SD02・SD03などの溝内からである。（第35図参照）

1.農　具	鍬・鋤・えぶり・石包丁形木器・杵・臼・（田舟）
2.工　具	斧柄・刀子柄・火鑽杵・火鑽臼・鳴子形木器
3.狩猟具 漁撈具	弓・鏃形木器（ヤス）・たも網・櫂
4.紡織具	紡錘車・編板・椅子・矢羽根形木器
5.容　器 食　器	鉢・高杯・槽・桶・蓋・杓子・籠・器台
6.楽　器	琴柱
7.建築材	栓・梯子・（ねずみ返し）・柱・井筒・橋



1．農　具（図版1～63）

1．鍬（1～12・14～17）

鍬は18点あり，3種に分類する。舟形突起をもち，身の幅と長さの比率がおおよそ1：2になるもの（鍬A）が13点，舟形突起をもたず，身の幅と長さの比率がおおよそ1：4ないし1：5になるもの（鍬B）が3点，刃部が三又状になるもの（鍬C）が1点ある。なお，鍬・鋤の部位名称は，〔瓜生堂遺跡調査会1980〕にならった。

鍬Aは，平面形の違いなどから，A_1～A_6の6類に分ける。

鍬A_1（4・5・12）　頭部に「山」形の突起部を作り出し，頭部と刃部の境にくの字状のえぐりを入れるもの。刃部側縁が比較的長い。身は舟形突起の両脇に方形の穴を穿ち，頭部の前面にはえら状の張り出し部（ゲタと呼ばれる）がある。身の後面はほぼ水平であるが，前面は，頭部と刃部境がやや厚く盛りあがり，明瞭な稜をなす。着柄角度は約70度で，柄穴はすべて丸い。4は12に比べ一まわり大型である。舟形突起は，4が刃部側が尖るAタイプで，12は刃部側も丸いBタイプである。12は刃縁が左あがりである。

鍬A_2（1・2・7）　頭部は四角く，頭部と刃部の境にくの字状のえぐりを入れるもの。くの字状のえぐりが，刃部側への切れ込みが長いため，刃部側縁が短い。身は舟形突起の両脇に方形の穴を穿ち，頭部の前面にはゲタを作り出す。着柄角度は約70度で，柄穴はすべて丸い。身の表面はほぼ水平であるが，前面は頭部と刃部境がやや厚く盛りあがり，明瞭な稜をなす。1は，このゲタに身とは別の板（以下あて板と呼ぶ）が，はめ込まれている。あて板には，舟形突起の両脇にある穴と重なって方形の穴があり，両穴にまたがって，断面方形の栓がさし込まれている。栓は後面に軸より一まわり大きい頭部があり，後面からさし込まれたものであろう。

この資料によって，他の舟形突起の両脇に穴のある鍬が，その前側にあて板をはめ込み，両脇の穴へ栓をさし込んで固定していたことが知られる。

あて板は，頭部の形とほぼ同形のもので，ゲタにさし込む部分を薄く，下端はやや厚く作っている。柄に直接あたる部分は，丸く切りとっており，柄にあたる辺も，先を尖らせている。柄穴とこのまるいえぐりは，わずかにズレをもち，柄にくい込んでいたかもしれない。あて板の木目方向は，身と平行であるが，身の前面に対して約35度であたる。

木下正史氏は，ゲタの機能を耕起反転する際に頭部にかかる力に耐え得るよう，細身の頭部を補強する工夫と考えている。畿内において，弥生中期のゲタをそなえた鍬が，弥生後期から古墳時代に蟻じゃくりと呼ぶ溝を頭部に掘り込む鍬へ変化していくが，一木で作り出されたゲタが別木になって，蟻じゃくりの溝に身と直交する木目方向に挿入され，身の反りや縦割れを防止する役割をより効果的にした発展的なものと考えるわけである〔木下1980〕。

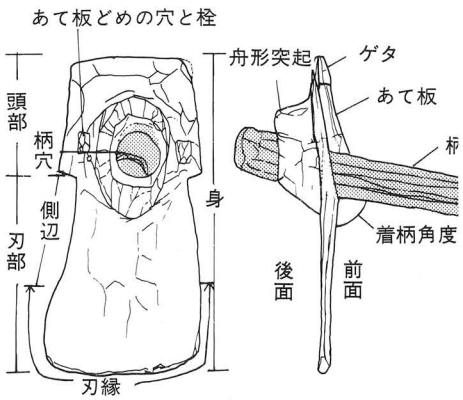
ゲタが，別木のあて板をはめ込み，柄穴両脇の穴とであて板を身に固定させるための造作であることが，鍬１の例で明らかになった。木下氏が考えるように，あて板が身の反りや縦割れを防ぐためのものと考えることができるが，身の縦割れを防ぐためのものであれば，あて板の木目方向が身に対して直交しているほうが効果的と考えられるが，鍬１のあて板の木目方向は身と同方向である。あて板が身の木目方向と直交すると，柄との接触によってあて板が木目にそって割れる可能性があろう。鍬を打ち込んだ時に，柄穴のまわりに最も大きな力が加わるが，その力を分散させたり，力を柄からあて板へ伝え，そのはずみの力が身を起こし，耕起のために有効に力が働くといったことも考えられよう。また，あて板が若干柄にくい込むようであり，柄の弛みや抜けを防ぐ効果も大きいものがあったであろう。当遺跡のものは弥生後期に属するが，蟻仕口のものではなく，畿内より一段階遅れるのかもしれない。２・７は１に比べ一まわり大型である。舟形突起はいずれもＢタイプである。1は刃先が潰れている。1・2は刃線が左あがりである。

鍬A_3（３・11）　頭部は両角が丸みをもち，頭部から刃部上半までをしの字状にえぐり，撥形になるもの。刃部側縁が短い。身は舟形突起の両脇に穴を穿ち，頭部前面にはゲタを作り出す。身の後面はほぼ水平であるが，前面は頭部と刃部境がやや厚く盛りあがり，明瞭な稜をなす。着柄角度は70度である。舟形突起はＡタイプで，柄穴はいずれも丸い。３は，柄が装着されたままの状態で出土した。柄の長さは94cm，断面は径２cmの円形で，完全なものである。11は刃線が右あがりである。

鍬A_4（９）　頭部は両角が丸みをもち，頭部から刃部上半までをしの字状にえぐり，撥形になるもの。刃部側縁が長い。身は舟形突起の上方に１つだけ穴を穿ち，頭部前面には三方にゲタを作り出す。身の厚さは一定で，後側へ反り，前面に稜をもたない。着柄角度は70度である。舟形突起はＡタイプで，柄穴は丸い。９は刃線が左あがりである。

鍬A_5（10）　頭部側辺に方形の突起を作り出すもの。刃部側縁が長い。舟形突起の両脇に穴はない。身の後面はほぼ水平であるが，前は頭部と刃部境がやや厚く盛りあがり，明瞭な稜をなす。着柄角度は75度である。舟形突起はＡタイプで，柄穴は丸い。

鍬A_6（８）　平面形が方形のもの。刃部の幅が頭部に比べてやや広く，刃部側縁は短い。身の厚さは一定で，後側へ反り，前面に稜をもたない。着柄角度は50度である。舟形突起はＡタイプで，柄穴は方形である。後面は加工痕をよく残しており，未成品の可能性がある。



第１図　鍬Ａの部位名称

鍬Ａについて

平面形の違い，頭部の形，刃部側縁の長さなどで，６類に分類したが，他の特徴での分類も可能である。それは，身の長さ，舟形突起の平面形，身の縦断面形，あて板どめの穴とゲタの位置，着柄角度，柄穴の平面形，刃縁の形状などである。

頭部上端の山形の突起や，頭部側縁の方形の突起，頭部の隅が角張るか丸いかなどは，機能差を示すのではなく，製作者あるいは使用者の違いによるものであろう。

刃部側縁の長さは，８～10cmの鍬A_1・鍬A_4・鍬A_5は，３～５cmの鍬A_2・鍬A_3に比べて長い。この長さの差異が地中への打ち込みの深さに関係があるとすれば，両者に用途の違いがあるものと考えられよう。例えば，鍬A_1・鍬A_4・鍬A_5は水田などの耕起に，鍬A_2・鍬A_3は畑地の耕起に適するだろう。

身の長さが30cm未満の１・７・９・12と30cm以上の２～４・８・10・11の2種がある。また，舟形突起の平面形が雨滴形（Ａタイプ）の３～６・８～11と丸い（Ｂタイプ）１・２・７・12の2種がある。身の長さと舟形突起の２種の違いは，製作者あるいは使用者の違いを示すものであろう。

身の縦断面形では，身の表面が水平で，前面が頭部と刃部の境で肥厚して稜をなすもの（１～４・７・10～12）と，身の厚さは一定だが，身に反りがあり稜をもたないもの（８・９）の2種がある。また，あて板どめの穴の位置とゲタの形態の違いに，次の3種がある。①舟形突起の両脇に穴があり，前面頭部上辺にゲタをもつもの（１～５・７・11・12)。②舟形突起の上位に１つ穴をもち，前面頭部三辺にゲタをもつもの（９)。③あて板どめの穴やゲタをもたないもの（８・10）である。

身の縦断面形とあて板どめの方法の違いは，相互に関連をもち，時期的な違いを示しているものと考えられる。その場合，①が古く②が後出的なものであろう。

着柄角度と柄穴の平面形では，着柄角度がおおよそ70度で，柄穴の丸いもの（１～７・９～12）と，着柄角度がおおよそ50度で，柄穴が方形のもの（８）の２種がある。この違いは，機能差を示すものかもしれない。８が鍬ではなく鋤であるという考えがあるが，未成品とも考えられ，はっきりしない。

刃縁が右あがりになるもの（11）と左あがりになるもの（１・９・12）がある。この違いは，使用のため，その部分が摩滅した結果であろう。その場合，前者は，使用者からみて左方で使われ，後者は右方で使われたことを示すものと考えられ，使用者が右利き，左利きの両者がいたことを示すものであろう。

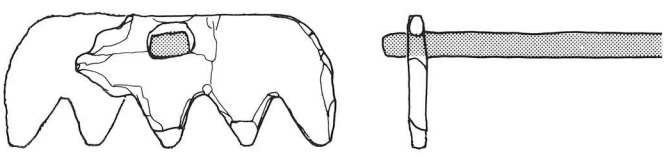
鍬Ｂ（14・16・17）　平面形が短冊形を呈する細長いもの。頭部は，両側辺が削られ，刃部の幅よりやや幅狭になる。14は，長さ26cm刃部の幅6.5cmで,その比が４：１になる。頭部には長方形の柄穴がある。頭部の厚さは，刃部の厚さより厚い。着柄角度は50～60度である。柄はないが，柄穴にさし込む部分を方形に作り出した柄が，身に直交する形で装着されるものと考えられる。

鍬Ｃ（15）　刃部が3本に分かれた，三又状の又鍬と考えられる。三又のうち１本を欠き，頭部も欠失していて，着柄法は不明。推定の身の長さ54cm，刃部の幅11cmである。

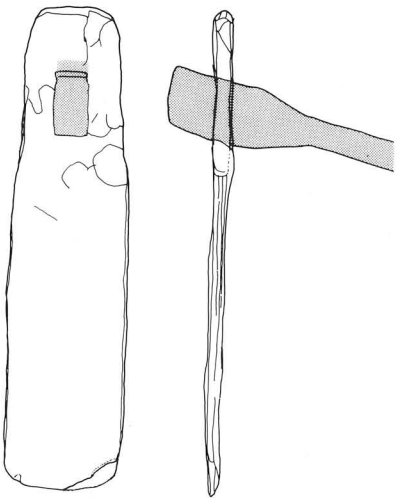
樹種は１～３・８・11はカシ類，７・９・10・12はクヌギ，３の柄はムクロジである。

２．えぶり（13）

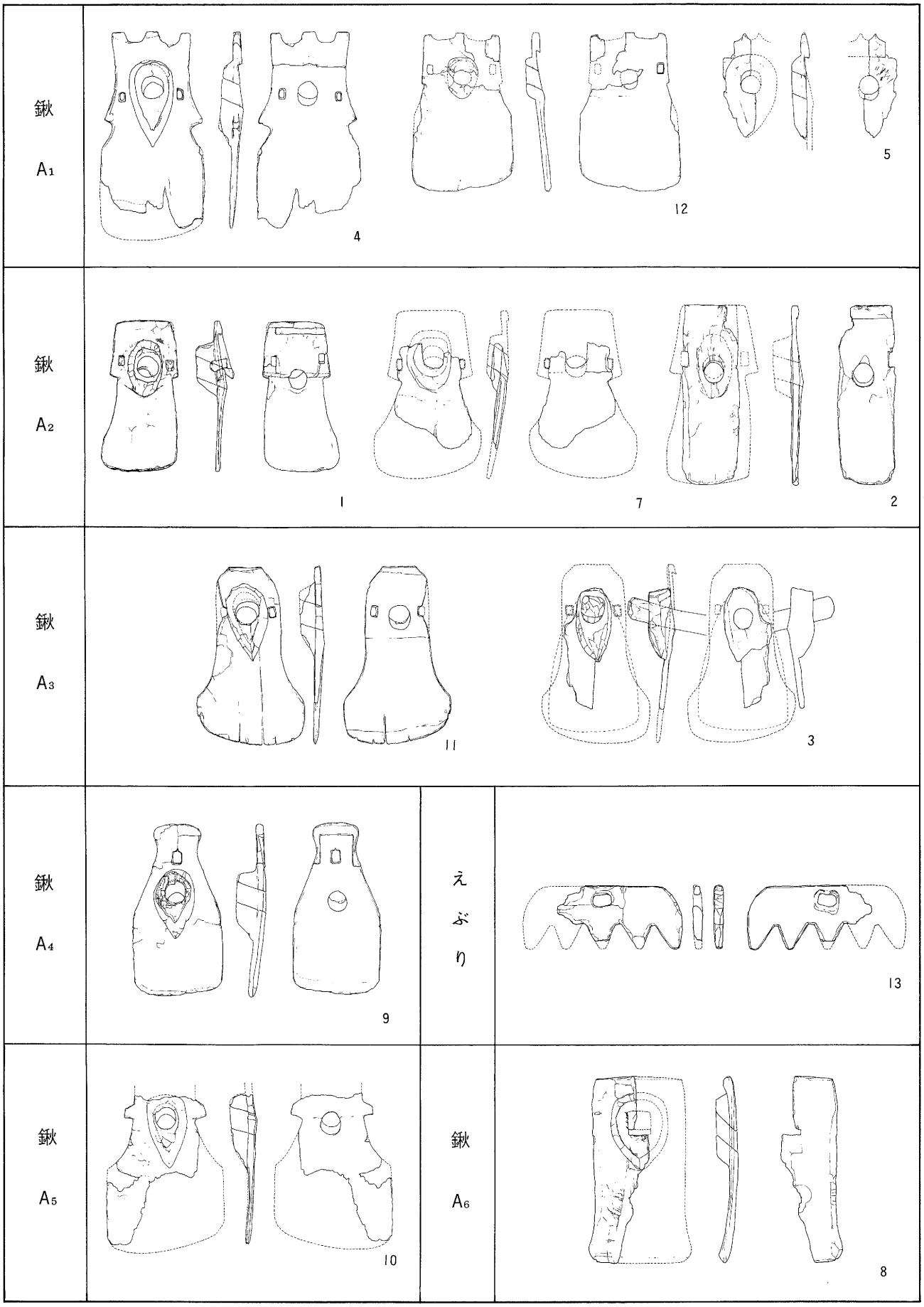
１点だけある。左端を欠くが，身の幅推定18cm，高さ７cm，厚さ１cmのもの。刃部は深さ４cmの鋸歯状で，切れ込みを４つ入れ５本の突起を作り



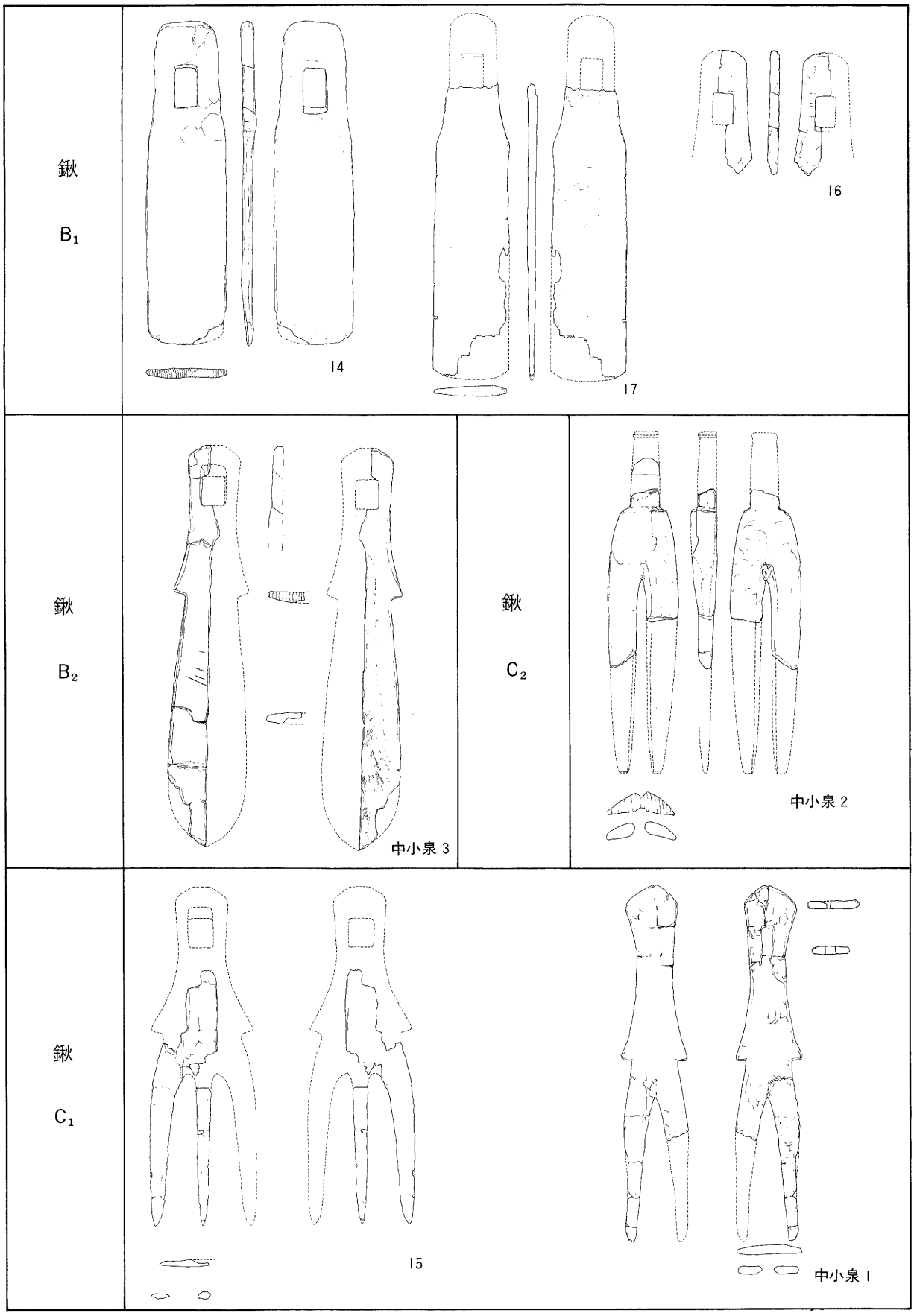
第２図　えぶり



第３図　鍬Ｂ



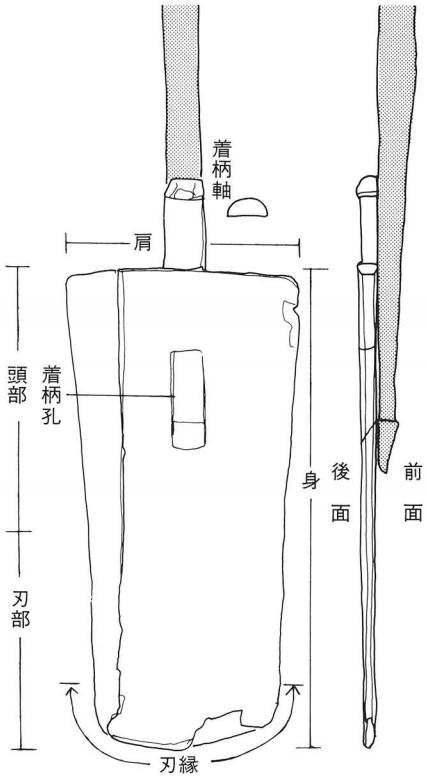
第4図　鏃の分類(1)



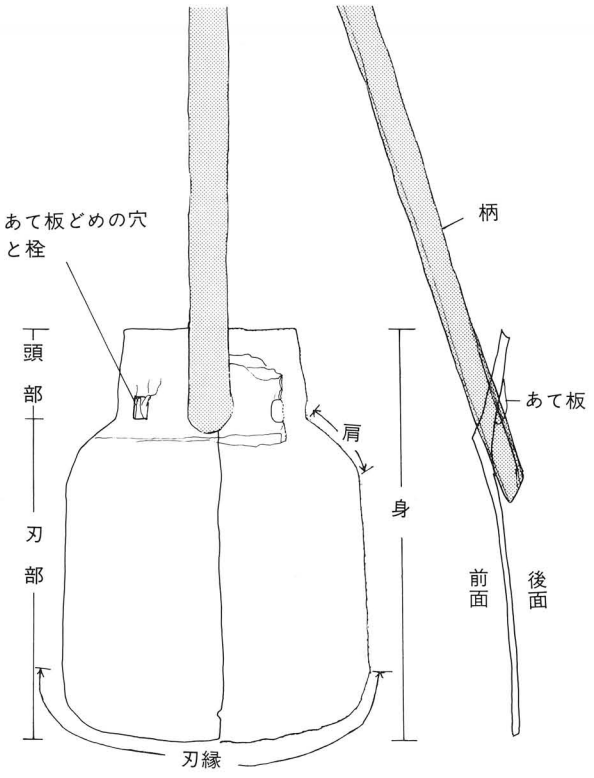
第 5 図　鍬の分類(2)

表1　鍬・鋤の計測表

番号	種類	出土区	法量 cm 全長	幅	厚さ	着柄角度	舟形突起	柄穴
1	鍬A2	SD01 DE区	24.0	12.7	0.9(6.3)	70°	B	丸
2	〃	SD03	29.9	9.5	1.2(1.9)	〃	〃	〃
3	鍬A3	SD01 C区	19.9以上	7.8以上	1.0(4.3)	〃	A	〃
4	鍬A1	SD03 B区	32.5以上	17.3	1.1(3.8)	〃	〃	〃
5	〃	SD03 D区	17.2	5.4以上	(2.5)	〃	〃	〃
6	鍬	SD03 B区	8.7	5.4	1.7	〃	〃	〃
7	鍬A2	SD03 D区	17.6	12.6	1.3(2.9)	〃	B	〃
8	鍬A6	SD03 B区	31.0	10.1	1.4(3.5)	50°	A	方
9	鍬A4	SD03 C区	28.5	14.8	5.0(1.5)	70°	〃	丸
10	鍬A5	SD02	16.5以上	24.7	0.9(4.5)	〃	〃	〃
11	鍬A3	SD01 CD区	29.7	17.8	1.1(3.6)	〃	〃	〃
12	鍬A1	SD03 B区	26.6	16.7	1.1(2.9)	〃	B	〃
13	えぶり	SD01 D区	10.5	20.7	1.6	90°		方
14	鍬B	SD01	51.2	12.8	1.5	50°～60°		
15	鍬C	SD03 D区	40.2	7.7	1.2			
16	鍬B	SD03 A区	19.6以上	5.6以上	1.7	50°～60°		
17	〃	SD03	46.1以上	11.5	1.7	〃		
18	鋤A1	SD03 B区	32.0	12.5	0.5	150～160°		丸
19	〃	SD01 E区	31.0以上	23.8	0.8(1.9)	〃		〃
20	鋤A2	SD01	31.6	20.4	1.2(1.7)	135°		〃
21	〃	SD05	35.4	25.1	1.1(1.8)	160°		〃
22	〃	SD03 D区	20.3	19.4	1.0(1.9)	140°		〃
23	鋤A3	SD03 B区	31.3	16.4以上	0.5(2.1)	145°		〃
24	鋤A1	SD01 CD区	28.7以上	9.7	1.0(0.9)	150～160°		〃
25	〃	SK41	24.4以上	7.1以上	1.7(1.7)	〃		〃
26	〃	SD01	26.0	21.5		〃		〃
27	鋤B	SD01	37.0	19.5	1.0	180°		方
28	〃	SD05	45.4	13.7以上	1.4	〃		〃
29	〃	SD01 BC区	36.7以上	5.2以上	1.0	〃		〃
30	〃	SD01	32.6以上	8.4以上	1.0	〃		〃
34	鋤C	SD01 CDE区	68.2	12.9(3.4)	1.2(1.6)	〃		



第6図　鋤Bの部位名称



第7図　鋤Aの部位名称

出す。柄穴は隅の丸い方形で，着柄角度は90度である。柄は身に直交する形でつくものである。えぶりは水田面のならしに用いられたとみられるが，小型であることから，穀物を乾燥させる時に平均に広げるためのものかもしれない。

樹種はクヌギである。

3．鋤（18～34）

鋤は17点あり，身は14点で他の3点は鋤の把手である。

平面形が隅円方形の刃部と方形の頭部からなり，刃部の縦横断面が湾曲するスコップ状の着柄鋤（鋤A）が9点，長方形のもので，柄を緊縛するための着柄軸をもつ着柄鋤（鋤B）が4点，柄と身を一木で作るもの（鋤C）が1点ある。

鋤Aは，平面形の違いから，A_1～A_3の3類に分ける。

鋤A_1（18・19・24・25）　刃部が一辺26cmの隅円方形で，縦8cm横14cmの方形の頭部がつくもの。頭部から刃部上半にかけての外周は，はっきりとした段をなし，いかり肩になる。刃部と頭部の境は約20度の屈曲をもってつながり，その境は前面に稜をなす。頭部には，丸い柄穴とその両脇に方形の穴がある。18と19は，その穴に栓が残されている。頭部後面上辺は斜めに削がれている。

方形の穴と残されている栓は，鋤にも鍬と同様のあて板が装着されていたことを示しているが，鋤の頭部にゲタはない。頭部後面上辺の斜めそぎは，鍬のあて板がゲタにはまり込む部分の特徴と同じで，鋤においては，あて板側にゲタを作り出している可能性がある。

着柄角度は150～160度である。24は刃部中央に一対の小穴があるが，柄を緊縛するためのものか縦割れを紐で結んだ補修孔であろう。

鋤A_2（20～22）　刃部が一辺20～25cmの隅円方形で，縦8cm横12cmの方形の頭部がつく。頭部から刃部上半にかけての外周は，なだらかにつながり，鋤A_1のような段にならず，刃部の上辺がなで肩になる。頭部には，丸い柄穴とその両脇に方形の穴があること，頭部後面上辺が斜めそぎになること，刃部と頭部の境に稜があることなどは，鋤A_1と同じである。柄穴の脇にある穴が，22は一辺1cm以上で大きいが，他のものは一辺1cm以下でやや小さい。着柄角度は，20が135度，21が160度，22は140度である。

鋤A_3（23）　刃部が一辺26cmの隅円方形で，縦4cm横14cmの方形の頭部がつくもので，頭部から刃部上半にかけての外周は，はっきりとした段をなし，いかり肩になる。平面形は鋤A_1に近いが，頭部の長さが半分ほどで短い。また頭部と刃部の境は，前面に強い段を作る。柄穴は刃部上位に設けられ，あて板どめの小穴はみられない。頭部後面上辺は，斜めそぎになる。着柄角度は145度である。23は，表面が炭化している。

鋤Aについて

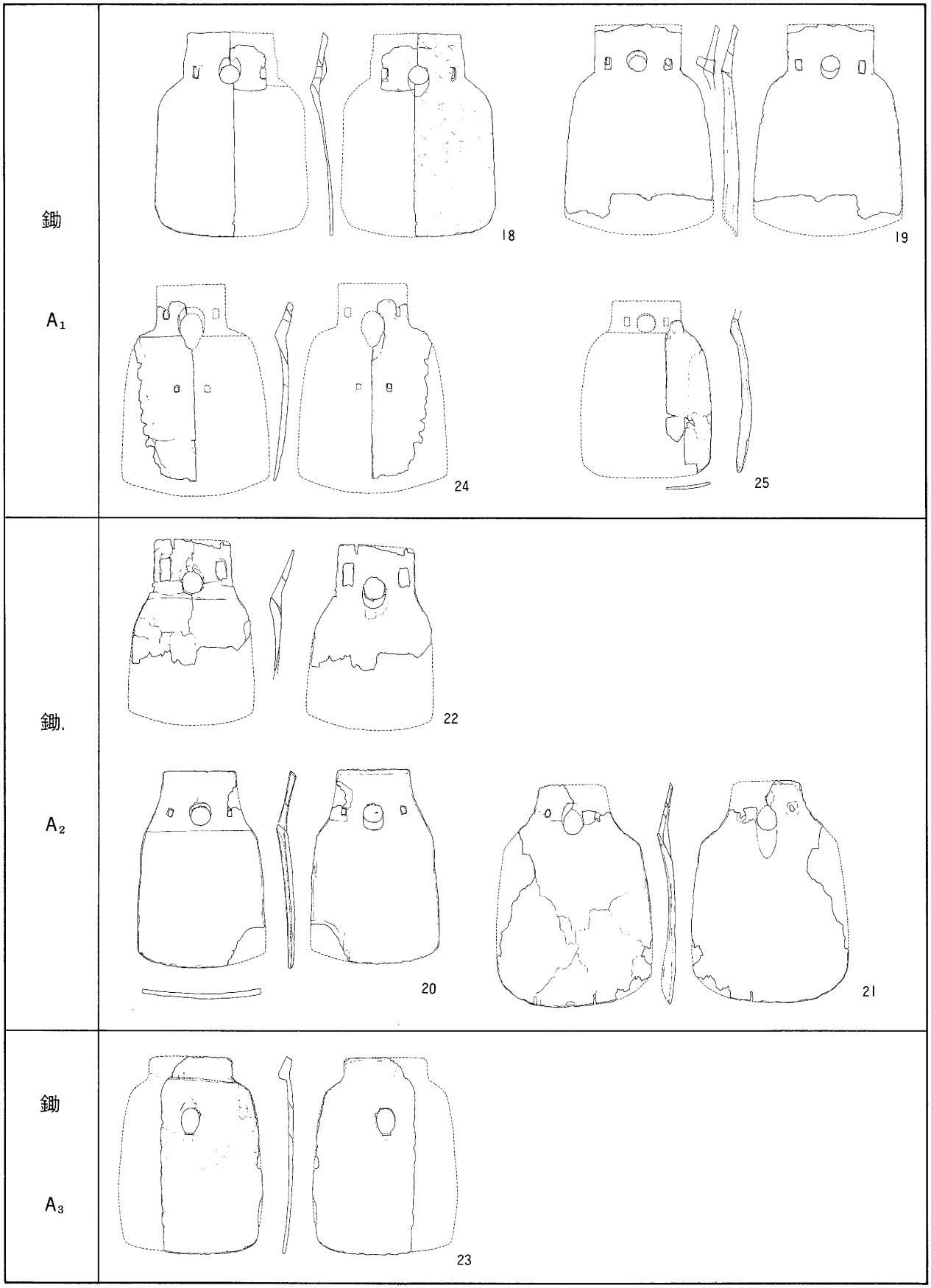
鋤A_1と鋤A_2の平面形の違いは，製作者あるいは使用者（所有者）の違いを反映しているものと思われる。

鋤A_1・鋤A_2と鋤A_3の柄穴の位置とあて板どめの穴の有無は，着柄方法の違いであり，それは時期差を示しているものと考えられる。その場合，前者が古く，後者が新しいもので，着柄法が簡略化していく方向性をあらわすものと考えられる。

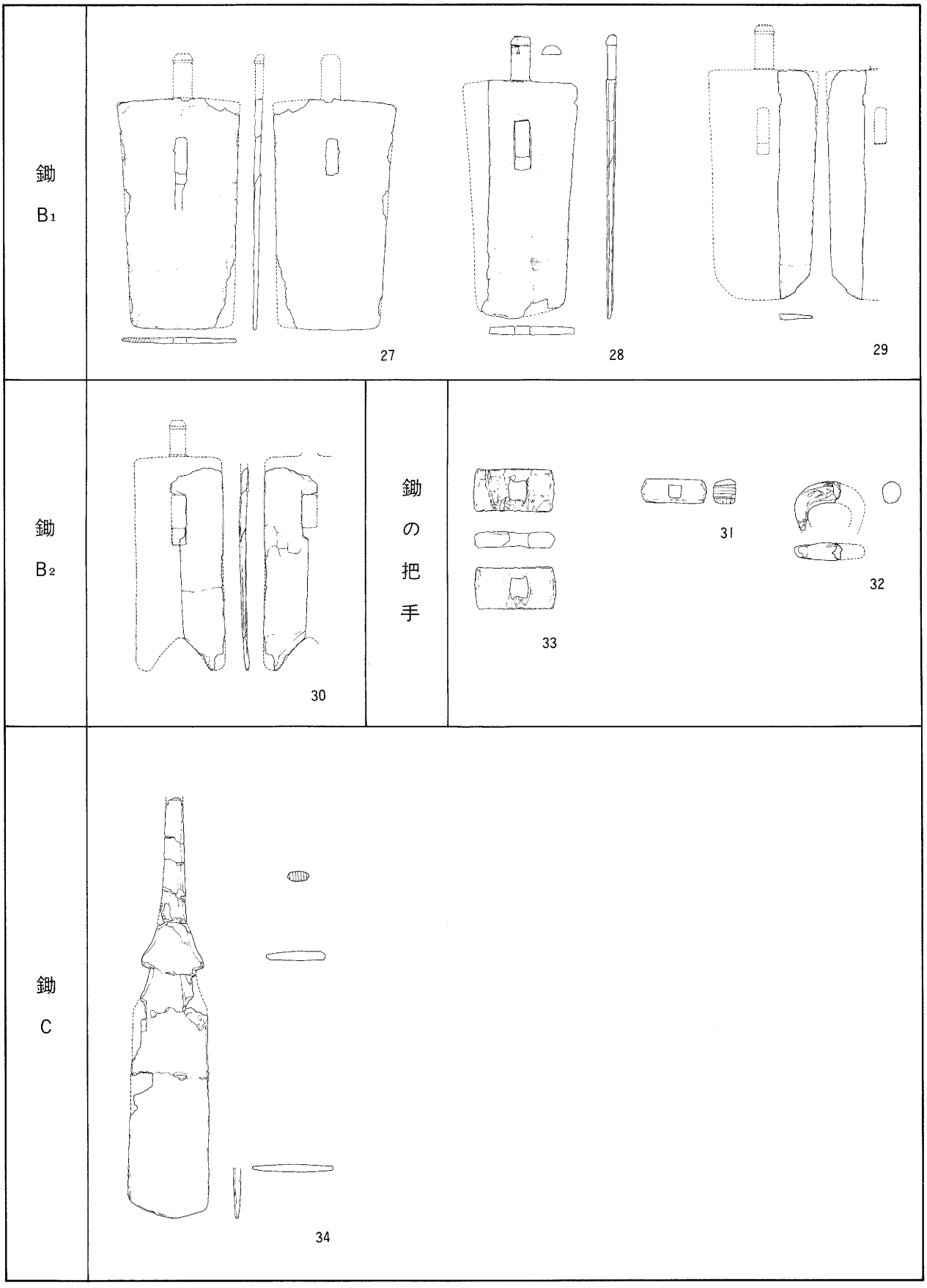
鋤B（27～30）　身の長さ25～26cm，刃部の幅10～11cmで，その比が2.5：1になる平面形が長方形のもの。上辺に，長さ5cm，幅3cmの断面形がかまぼこ形の着柄軸がつく。着柄軸の先は頭部を作り，頭部の下には紐ずれの痕跡がみられる。刃部中央に方形の穴があるが，柄の先端を固定するためのものであろう。柄の先端がさしこまれるのか，穴を介して別木によって固定されるのであろう。

刃縁は，水平な27と中央部がやや張る28・29（鋤B_1）とV字状にくい込む30（鋤B_2）がある。

鋤C（34）　身と柄を一木で作り出すもの。身は長さ27cm幅9cmの短冊形で，柄部と身の境は，両側からくの字状のえぐりを入れて，平面形がナスビ形になる。



第 8 図　鋤の分類(1)



第9図　鋤の分類(2)

刃縁は，中央部がやや張り出す。柄部は幅３cm厚さ1.5cmで断面形がやや扁平な円形である。柄のもとのほうは，欠けていてない。

樹種は18・21～25・28・34がカシ類，19・20・27・29・30がクヌギ，26がキハダである。

鋤の把手（31～33）　31と33は，柄の先の断面形を方形に作り出し，別木をさし込んでT字形にするもの。31は，長さ11cm幅４cm厚さ４cmの断面方形のもので，中央に一辺１cmの穴があり，その中に柄の一部がさし込まれたまま残っている。32は，柄の先を環状に作り出すもので，その断面形は径３～４cmの円形である。33は，長さ13cm幅７cm厚さ2.5cmのやや扁平なもので，中央に一辺３cmの方形の穴がある。把手としてはやや把みにくい感じであり，把手でないかもしれないが，ここに含めた。

樹種は31がカシ類，33がムクロジである。

４．柄（232・233）

232は，長さ110cm，断面が径３～４cmの円形の心持ちのもの。柄の軸はまっすぐで，先細りになる先端部は，断面形をかまぼこ形につくる。最先端部は，基部の幅2.4cm，長さ４cmの平面形が三角形の頭部を作る。全体に幅５mmの細かなけずり痕をよくとどめている。

233は，長さ72cm，断面が径３cmの円形の心持ちのもの。柄の軸は弓反りに湾曲し，ほぼまん中から先端にかけての断面形を，かまぼこ形に作る。最先端部は，長さ５cmを残して削り，頭部を作る。基部の先端部も，長さ４cmのところで浅い段がめぐる。

232・233は，鋤に装着された柄と考えられる。先端部にある平坦面は，身に直接接するところであろう。柄の頭部との境で，緊縛されるものと考えられる。

樹種は31がカシ類，33がムクロジである。

鍬・鋤の用途

鍬・鋤は機能・用途からみた場合，それぞれ３種がある。根木修氏の研究〔根木1976〕に拠ると，水田においては，鍬Ｃ・鋤Ｃは反転具，鍬Ａは砕土具・移動具(打引鍬・引鍬)として用いられたものであろう。また，耕地の獲得（開墾）や水路の掘削には，鋤Ｂは深掘用の反転具（長柄鋤），鍬Ｂ・鋤Ｃは深掘用の耕起具（打鍬），鋤Ｃは土の移動具（スコップ）として用いられたと考えられる。水田耕起具と土木開墾具との比率は，15：13とほぼ同数である。前者の主力は鍬Ａであり，後者の主力は鋤Ａである。

５．石包丁形木器（35～42）

石包丁形木器は８点あるが，いずれも欠損部があり，完全なものはない。

木取りは，いずれも柾目板を平行四辺形に裁断したもので，刃部の線に対して，木目が斜め方向からくる特徴的なものである。

身の長さは，推定で20～25cm幅4.5～６cm厚さ１～1.5cmのもので，一辺に鋭利な刃部を作り出すもの。また，一面に，刃部と平行に長さ７～10cm幅１～1.5cmの溝を掘り込み，溝に重ねて，径１cm未満の穴を二つ穿つ。

先端を欠失するものが多く，先端部の形態はわからないが，36・37は，先端部にえぐり込みがあり，二又に分かれるものかもしれない。

右端（基部）は，長さ10～15cmあり，35のように刃部側を大きく削り，幅２cmと狭く整形しているものがあり，この部分が握部にあたると考えることができる。

刃部は，水平かやや内湾するものが多く，37のように，刃こぼれ状になっているものがある。

42は，穴や溝がなく，未成品であろう。

石包丁形木器は，石川県，滋賀県，奈良県，大阪府，兵庫県などで出土が知られ，弥生時代後期のものが多く，弥生時代中期・古墳時代前期のものもある。使用痕が観察される場合が多く，石器が消滅する中期末から後期にかけて石包丁にかわる実用の穂摘具と考えられるものである。奈良県纒向遺跡（古墳時代前期）では，木製の儀伏朱塗の大型木製高杯・鳥形木製品・船形木製品とともに出土し，穂摘み儀礼的な祭祀的な性格とみる見方もある。

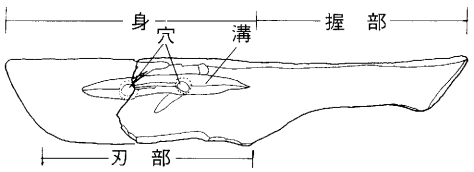
本遺跡（弥生時代後期）のものは，数も多く使用痕をもつことから実用の穂摘み具とみたい。石包丁の消滅は，それにかわって鉄鎌が使用されるようになったとする考えがある〔木下1966〕が，両者の間に鉄器で加工して鋭利な刃部を作り出した石包丁形木器を使う段階があったことを示すものであろう。

石包丁には，穴に重なって溝を掘り込んでいるものが少ないが，石包丁形木器のものは溝を伴うことが多い。この溝があることによって，効率よく穂摘みができるといった使用時の利点も考えられるが，銅戈・銅矛などの金属器にみられる樋につながるイメージがある。あるいは，大陸では石包丁が鉄に材質を変えたか，鉄利器を穂摘み具に転用したことがあり，それが我国へ伝わった時にそれが木製に材質を変えて用いられたとすることも考えられないであろうか。

樹種は35～37・39・41・42がムクロジである。

表2　石包丁形木器の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm		
			長さ	幅	厚さ
35	石包丁形木器	SD03 C区	18.5以上	4.6(2.2)	1.6(1.0)
36	〃	SD01 A区	17.7	5.8	1.5
37	〃	SD03	17.9以上	5.7	1.2
38	〃	SD03 D区	15.7以上	5.5	1.3
39	〃	SD01 C区	6.9以上	2.3	0.8
40	〃	SD01 D区	11.2以上	4.5	1.2
41	〃	SD03	6.6	4.7	1.1
42	〃	SB16	15.1以上	4.3	0.8



第10図　石包丁形木器の部位名称

6．臼（43）

図示した43の他に，台部の破片が3点ある。いずれもSD03からの出土である。

43は上部を欠くが，台部は完全である。台部は径56cm，臼部との接合部の径28cmの裾広がりのもので，安定感がある。底面は，円錐形にくぼんだ上げ底になる。台部裾端は，幅2cmの面をなす。

臼部は，残っているところが，径20cm，深さ9cmで，底がまるくくぼむ。縁の厚さは5cmである。

樹種はホオノキである。

7．杵（44～48）

杵と考えられるものは，5点ある。いずれも，先端部のみであり，完全なものはない。木取りは，46が心持ちである他は割材を用いる。杵は，木口面を使う竪杵である。径9cmのもの(44・45・48)が多いが，46・47のように，6～7cmのやや小さいものもある。

つき面は，すりこぎ状にやや張り出すもの（45・46・47）と，小さな凹みでデコボコしているもの（44・48）がある。44～46は，基部近くが細くなってゆき，握部が作出されるのであろう。47・48は，つき面と反対側が切りとられており，何かに転用されたか，つき面の再生がはかられたのかもしれない。

樹種は44がカシ，45・47・48がクヌギである。

2．工　　具（図版68～76）

1．斧柄（60・61）

斧柄は２点ある。木取りは，枝の部分を握部とし，幹の部分を斧を装着する台部とする。斧ははずれてないが，いずれも鉄斧を装着したものと考えられ，縦斧（ちょうな）として用いられたと考えられる。

60は，握部の長さ55cm，台部の長さ10cm，着柄角度は50度である。斧の装着部は，長さ14cm幅3.5cm厚さ２cmで，断面形がかまぼこ形のもので，先端部は，斧身を緊縛するために，一まわり大きく削り残している。斧身を緊縛するための紐がズレないためのものであろう。基部は，斧の装着面と約１cmの段をなし，斧の基部をこの段にあて，支えるものであろう。斧の装着面が幅狭で長いことや，基部との段が低いことなどから，板状の鉄斧が装着されたものと考えられる。握部は，背面からみると，手元から20cmの所で右へ屈曲し，右手で用いるのに適している。

61は，握部の大半を欠き，台部も焼けこげて，遺存状態が悪い。台部は長さ10cm，幅２～４cm，厚さ1.5～３cmで，先端部が尖っており，基部を袋状にした鉄斧を装着したものと考えられる。握部が細いことや樹種からみて斧柄でないかもしれない。樹種は60がカシ類，61がヤマナラシである。

2．刀子柄（104）

一端を欠くが，長さ７cm以上，幅４cm厚さ２cmの断面形が小判形のもので，中が幅５cm厚さ１～５cmの中空になるもの。この中空部に，刀子の茎をさし込むものと考えられる。

3．火鑽杵（87～90）

火鑽杵は，４点ある。いずれも割材を用い，細かな削りで，断面形を円形にしている。90を除いて，下端が黒くこげており，実際に使用されたものである。

87は，長さ42.5cmの完形品で，上端部の径１cm，下端部の径１cm，下端から約10cmの所が径1.4cmで，最大径がある。上端部に特別な加工がないので，手もみによる回転力が用いられたものと考えられる。

樹種は87・88がスギである。

表３　火鑽杵の計測表

番号	種　　類	出 土 区	法　　量　cm			備　　考
			長　さ	幅	厚　さ	
87	火　鑽　杵	SD01 E区	41.6	1.3	1.0	完形品
88	〃	SD03 B区	29.1	1.7	1.5	上部炭化著しい 上部欠損
89	〃	SD03 C区	20.8	1.2	1.2	上部欠損　一部炭化 使用痕みられない
90	〃	X25，Y26	13.7	1.1	0.8	上部欠損

4．火鑽臼（91～98）

火鑽臼は，８点ある。心持ちの98を除き，割材を用いるものが多い。長さ11.5～23.5cm幅1.7～3.4cm厚さ1.3cm～２cmの断面長方形の棒の柾目面に臼部をつくる。臼部は１～３cm間隔に３～６ヵ所に，はつりによる荒い凹みを連続して設け，その右側面に，縦溝を切り込む。

準備された凹みは多いが，火鑽杵との摩擦で黒く炭化している凹みは，１ヵ所だけというものが多い。

92・97は，側面に縦溝を刻まず，４も使用した凹みの側面にだけ縦溝を切っている。縦溝は，摩擦によって生じ

た火種が，そこに落ち込み，他のものに着火しやすくするための工夫であり，縦溝をもたないものに比べ，一段改良されたものといえよう。臼部の径は約１cmのもの（91・92・97・98）と約1.4cmのもの（94～96）がある。

93は，火鑽臼としての使用痕をもたないが，正面に８ヵ所，側面に６ヵ所の切れ込みをいれるものである。

樹種は91・94がスギ，92がカエデ，93がクヌギ，98はオニグルミである。

表４　火鑽臼の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備　考
			長さ	幅	厚さ	
91	火鑽臼	SD01	18.5	2.3	1.6	臼部３ヵ所使用１ヵ所
92	〃	SD03 C区	12.9	3.4	1.7	臼部６ヵ所 使用２ヵ所 表面全体炭化
93	〃	SD03 C・D区	15.9以上	2.2(1.8)	1.9	臼部なし 下部欠損
94	〃	SD01 B区	23.5	2.6	2.1	臼部４ヵ所 使用１ヵ所
95	〃	SD03 B区	15.3	1.9(1.7)	1.3	臼部３ヵ所 使用１ヵ所 表面一部炭化
96	〃	SD03	16.1	1.9(1.5)	1.5	臼部５ヵ所 使用１ヵ所
97	〃	SD03 A区	12.2	1.7	1.6	臼部４ヵ所 使用１ヵ所 表面炭化
98	〃	SD03 A区	11.5	2.3(1.9)	1.6	臼部３ヵ所 使用１ヵ所 表面炭化

５．鳴子形木器（62～86）

鳴子形木器は25点あり，すべてSD03からの出土である。長さ12.5cm～17.5cm，幅1.5～２cm，厚さ１～1.5cmの断面長方形の棒で，板目面に，凹みや穴を穿つもの。発見当初，穴に紐を通して連ね，家のまわりに張りめぐらし，外敵の侵入を察知するための鳴子と考えたので，この名を用いるが，現在は，橋本正氏の観察から，これは管玉や勾玉の穿孔時に用いる工具と考えられるものである。84の穴の中に白色の粘土がつまっていたことから，この穴に粘土をつめ，そこに未穿孔の玉を固定させたというわけである。

端部の形状に次の３種がある。

鳴子形木器Ａ　頭部と基部の両側辺を，左右対称に削るもの。

鳴子形木器Ｂ　基部の一側辺を削り，尖らせるもの。

鳴子形木器Ｃ　基部の削りが少ないか，ほとんど手を加えないもの。

穴の形状には次の３種がある。

Ⅰ　径４～６mmの円形の孔を１孔穿つもの。

Ⅱ　径２mmの円形の孔を２孔穿つもの。

Ⅲ　縦１～2.5cm，横0.5cm～１cmの長方形の凹みをつけたもの。

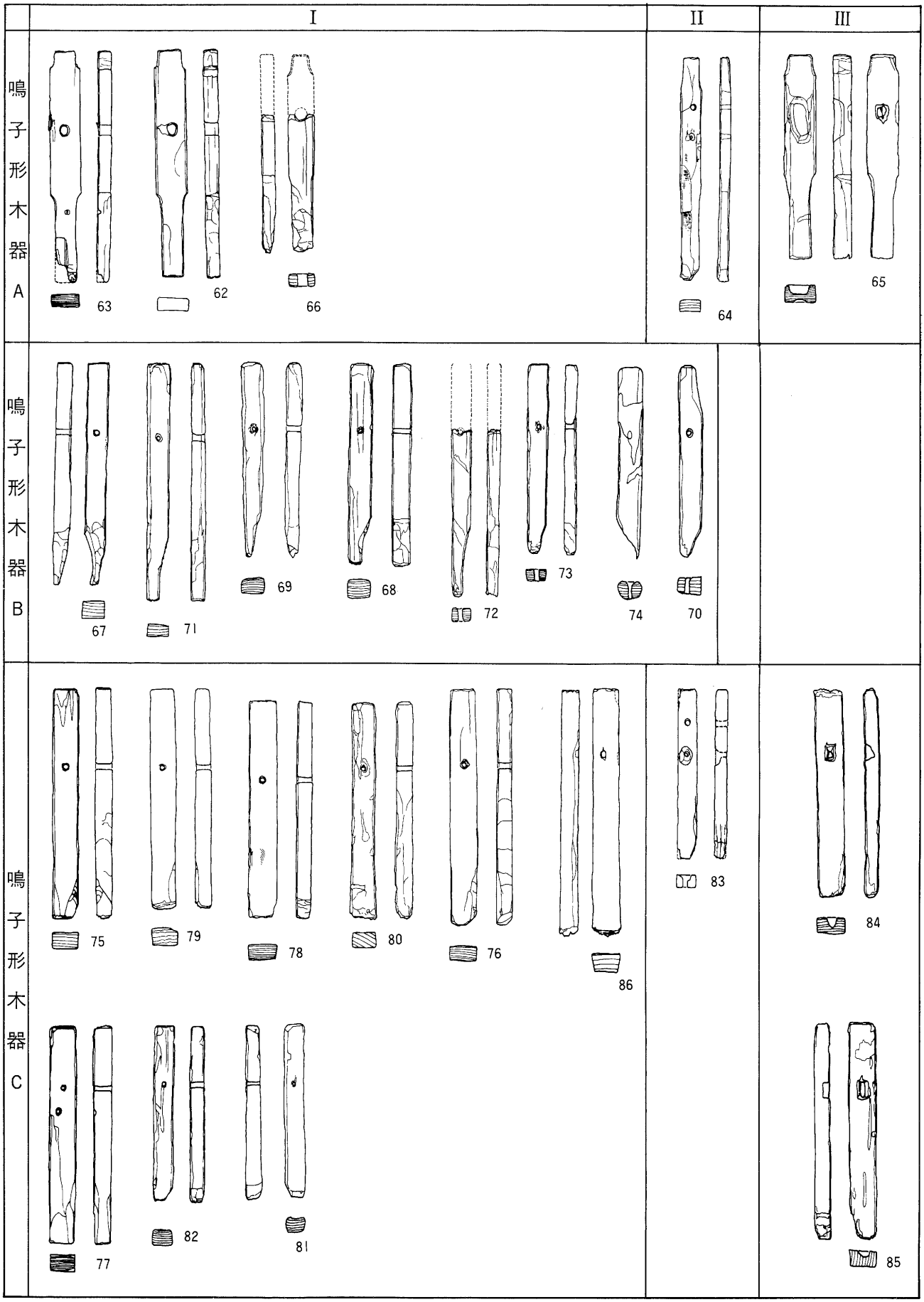
橋本正氏は，端部の形状を，それを使用する人の覚え，穴の形状は，ａ・ｂが管玉，ｃは勾玉あるいは小玉の穿孔に用いるといった用途の違いを示していると考えている。

63は，基部近くに未貫通の穴があり，錐の先端部があたったものであろうか。86は，穴が貫通せず，未成品であろう。

樹種は62～69・71～73・75～86がスギである。

表 5　鳴子形木器の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備　考
			長さ	幅	厚さ	
62	鳴子形木器A	SD03 C区	16.5	2.4	1.0	I
63	〃	SD03 A区	17.1	2.1	0.9	I
64	〃	SD03 B区	16.5	1.6	0.8	II
65	〃	SD03 C区	15.2	2.3	1.3	III
66	〃	SD03 A区	10.2以上	1.9	0.9	I．上部欠損
67	〃　B	SD03 D区	16.4以上	1.6	1.5	I
68	〃	SD03 B区	14.9	1.7	1.4	I
69	〃	SD03 B区	14.4	1.8	1.2	I
70	〃	SD03 C区	14.1	1.7	1.3	I
71	〃	SD03 C区	17.4	1.6	1.0	I
72	〃	SD03 B区	12.4以上	1.4	1.0	I．上部欠損
73	〃	SD03 D区	14.0	1.6	0.8	I
74	〃	SD03 D区	14.1	1.8	1.4	I
75	〃　C	SD03 D区	17.0	2.0	1.2	I
76	〃	SD03 B区	17.5	2.0	1.0	I
77	〃	SD03	16.2	1.9	1.2	I
78	〃	SD03	16.0	2.1	1.1	I
79	〃	SD03 A区	16.0	2.0	1.2	I
80	〃	SD03 B区	16.0	1.7	1.2	I
81	〃	SD03 C区	12.9	1.4	1.1	I
82	〃	SD03 C区	13.0	1.5	1.2	I
83	〃	SD03 D区	12.4	1.4	1.0	II
84	〃	SD03 D区	15.6	2．1	1.2	III．穴に白色粘土がつまっている
85	〃	SD03 D区	15.8	2.0	1.2	III
86	〃	SD03 D区	18.2	2.0	1.4	未成品か



第11図　鳴子形木器の分類

3．狩猟具・漁撈具（図版64～67）

1．弓（49～53）

弓は5点あるが，完形品はない。木取りは，断面がまるい心持ちのもの（51・52）と，断面がやや扁円で割材を用いるもの（49・50・53）がある。断面形は，幅2cm厚さ1cm前後のもので，59は，長さが1m以上になる。

両端部の形態には次の3種がある。

弓A　先端部を全体に細く尖らせるもの（49・52），49は先端部内側を幅1.2cmだけ，浅いえぐりをいれている。

弓B　先端部の両側辺を削り，突起状にするもの（50・53）。

弓C　先端部を長さ4cmだけ残し，その下を環状に削り，先端部に頭部をつくるもの(51)。51は，断面がほとんど正円に近く，弓弭の形態も異質で，弓でないかもしれない。

樹種は49がハクウンボク，52がウルシ，53がカヤである。

表6　弓の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備考
			長さ	幅	厚さ	
49	弓	SD01 C区	94.0	1.7	3.6	下部欠損
50	〃	SD01	71.5	2.9	4	下部欠損
51	〃	SD03 C区	64.7	3.7	3.7	下部欠損
52	〃	SD01	53. 2	2.2	3	下部欠損
53	〃	SD01 D区	31.2	3.6	2.4	下部欠損

2．鏃形木器（54～58）

鏃形木器は5点ある。身の長さと幅の比率からみて，やじりというよりはヤスとしたほうが適当であるかもしれない。いずれも割材を用いる。身部と茎部からなり，身の断面形の特徴で，2種類に分ける。

鏃形木器A（54～57）　断面形が，三角形または四角形のもので，稜線がはっきりとしている。長さが10.5～13.5cm，身部の最大幅が1cm前後の細長いものである。全体の3分の1下端をやや細く削り，断面形が円形の茎部とし，先端部は鋭く尖る。

鏃形木器B（58）　断面形が，円形のもの。茎部を欠くが，推定の長さ6.5cm，身部の最大径が1cmのもの。全体の4分の1下端をやや細く削り茎部とし，身部と茎部の境は明瞭な段をなす。先端部は鋭く尖る。

樹種は57がマツである。

表7　鏃形木器の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備考
			長さ	幅	厚さ	
54	鏃形木器A	SK29	12.5	1.3(0.7)	1.0(0.6)	
55	〃	SK27	11.8	1.2(0.8)	0.8(0.7)	
56	〃	SD01 B区	10.3	1.1(0.8)	0.7(0.5)	
57	〃	SK29	13.4	1.2(0.8)	0.9(0.6)	未成か
58	〃 B	SD03 C区	5.3以上	1.1(0.8)	0.9(0.5)	茎部欠損

3．たも網（59）

たも網は1点ある。径2cmの枝から径8mm前後の小枝が相対して伸びる材を利用する。

小枝を円形にたわめて両端をくくりあわせ,枠をつくるものと考えられるが,大半が欠けていて大きさは不明である。

枝の長さは47cmで，基部は細かい削りがみえ，枠部との境は，小さな段をつけている。

樹種はモミである。

4．櫂（131・132）

櫂は2点ある。131は板目板，132は柾目板を用いる。

131は，現存長80.5cmを測るが，柄の先端を欠いている。身の幅17.5cm厚さ2.2cm,柄の幅5cm厚さ2.2cmで，その境はなだらかにつながる。身と柄の長さがほぼ同じくらいになろうか。柄の側辺の角は面とりのけずりを施す。

132は，長さ90cmで，身の左側辺を欠くが,ほぼ完全なもの。身は全体の約5分の1を占め，柄の長いものである。身の幅推定10cm，厚さ3cm，柄の幅4cm，厚さ2cmで，その境はなだらかにつながる。

樹種は131・132がスギである。

4．紡 織 具（図版76・123・124・126～128）

1．紡錘車（99・100）

紡錘車は2点ある。円板は柾目板を用いる。

99は，径5cm，厚さ8mmの円板を二枚重ねたもの。中央に径8mmの軸が残っている。軸は葦・よしなどの中が中空の植物の茎を用いている。長さ9cm残っているが，先端の加工は不明である。

100は，径5cm，厚さ8mmの円板で，中央に径1cmの軸を通す円形の穴があけられている。

樹種は99がスギ，100がムクロジである。

2．編板（256～259）

編板は4点あるが，いずれも完形品ではない。木取りは，板目板のもの（256・257）と柾目板のもの（258・259）がある。

板材の側縁に小さな刻みを入れたもので，俵などの編物を編む時に用いるもの。小さな刻みは縦糸を固定する所で，刻みの数や間隔から，編物の種類が推定できるものと考えられる。

刻みの配列の仕方によって2種に分ける。

編板A（256）　刻みの間隔が一定でないが，ある規則性をもって並ぶもの。

256は，現存長98cm，幅14cm，厚さ1cmで，刻みのある側縁は厚さ1cmほどで薄くしている。左端を欠く。

刻みの単位は1つだけのもの（A）と，その間隔が，2～3cmの2つ1組のもの（B）があり，その配列は，……＋B＋B＋A＋B＋B＋A＋Bである。その間隔は，……（3cm）＋8cm＋（2cm）＋9cm＋9cm＋(2.5cm)＋8cm＋（3cm）＋7cm＋6cm＋（1.5cm）である。この数字の並びから，後から5番目のAの位置をまん中と考えると，全長74cmほどのものが編まれた可能性がある。

編板B（257～259）　刻みの間隔がほぼ一定のもの。

257は，現存長82cm，幅15cm,厚さ2cmで，刻みのある側縁は厚さ1cmほどで薄くしている。右端を欠く。右端に5cmの間隔をもって2つの刻みがある。

258は，現存長75cm，幅7cm，厚さ2cmで，右端を欠く。刻みは，ほぼ2cm間隔に，18以上刻まれている。

259は，現存長43cm，幅8cm，厚さ1cmのもの。刻みは6つあり，その間隔は，4cm＋4cm＋5cm＋5cm＋4cmでほぼ等間隔のものである。樹種は256・257・259がスギである。

3．椅子（267・269・270・272・273）

椅子と考えられるものは，５点あるが，267・270は，部分的で椅子である確証はない。

272は，両端に２孔づつ穴を穿ち，脚を装着するものと考えられる。一端を欠くが，長さ44cm，幅13cm，厚さ２cmで板目板を用いる。穴は一辺１～1.5cmの方形で，裏面は穴のそばに浅い方形のくぼみが伴う。

273は，両端に一孔づつ穴を穿ち，脚を装着するものと考えられる。一端を欠き，長さは不明。幅13cm，厚さ３cmで，板目板を用いる。穴は，2.4cm×５cmの長方形の大形のものである。

4．矢羽根形木器（175～181）

矢羽根形木器は，７点ある。長さ20～27cmのもので，一端を鋭く尖らせ，他の一端を二又にするもの。平面形が矢羽根に似ているのでこう呼ぶが，俵・蓆などの編物をとじあわせる際に用いるものかと想像されるので，ここに入れたが，確証はない。割材を用いる。

平面形と断面形の違いによって，３種に分ける。

矢羽根形木器Ａ（175～177）　断面形が径1.5～２cmの円形に近いもの。

矢羽根形木器Ｂ（179～181）　断面形が幅２～３cm，厚さ１cmほどの板状のもの。

矢羽根形木器Ｃ（178）　平面形が他とはやや異なり，二又の切れ込み近くからだんだんと細くなり，するどい尖端部へ至るもの。

樹種は175～180がスギである。

表８　矢羽根形木器の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備　考
			長さ	幅	厚さ	
175	矢羽根形木器Ａ	SD03 Ｂ区	24.4	1.5(1.0)	1.3(1.1)	
176	〃	SD03 Ｂ区	22.5以上	1.6(1.0)	1.3(1.0)	上端欠損
177	〃	SD03	21.0以上	2.1	1.7	
178	〃　Ｃ	SD03 Ｂ区	20.3	2.2(1.4)	1.3(1.2)	上端欠損
179	〃　Ｂ	SD03 Ｂ区	27.0	2.5(1.0)	1.1(1.1)	
180	〃	SD02 Ａ区	24.8以上	2.9(1.7)	1.0(0.8)	
181	〃	SD01 Ｃ区	25.9	2.2	0.8	

５．食器・容器（図版77～87・89～94・168・169）

1．鉢（117・122・124・125）

鉢は２点ある。いずれも，横木取りで，心去りの柾目面を口として，掘り込む。

117は，口縁部を大きく欠いていることや，口縁部の平面が楕円形になることから，正確な口径を出せないが，一応口径20cm，高さ15cm，底部径7.5cmで，底部に径２～４cmの楕円形の穴があいた底部有孔鉢である。

外面は幅２cmほどの面とりがあり，内面は長さ2.5cmほどの線状の刻みがよく残っている。

122は，口縁部の一部分で，全体の形は不明であるが，湾曲した体部の鉢であろう。内外面とも幅１cmの細かな削りによって整形している。

124・125は，鉢の未成品と考えられるものである。

124は，一辺40cm，厚さ14cmの方形の材で，板目面中央を一辺14cm，深さ４cmほどをくりぬいている。

125は，縦32cm，横20cm，厚さ7.5cmの方形の材で，板目面中央を一辺14cm，深さ４cmほどをくりぬいている。

樹種は117がトチノキ，122・124・125はスギである。

２．高杯（118）

杯部と脚部が，別々に作られた高杯の脚台部と考えられるものが，１点ある。

118は，底径が19.5cm，高さ6.4cmで，裏側を掘りぬき，厚さ２cmの椀を伏せたようなもの。上面は径７cmの平坦面をつくり，その中央に一辺３cmの方形の穴を穿つ。杯部との接続のための棒状の脚柱の一端が，この穴にはめこまれるものと考えられる。内外面とも幅２cmほどの削りがよく残り，整形も中途で，未成品の可能性が強い。

SE26の底に，敷かれたような状態で出土している。

樹種はキハダである。

３．脚付鉢（119～121・123）

脚付鉢は３点ある。形態はそれぞれ異なるが，いずれも，横木取りで，心去りの柾目面を口として，鉢部，台部ともに一木でくりぬいている。

119は，半分に割れているが，高く湾曲する脚がつく優美なもの。鉢部は，平面形が方形のもので，残存部の口辺の長さ36cm，底辺の長さ27cm，高さ５cm，口縁の厚さ３cm，底部の厚さ８mmを測る。鉢部の口縁部内側には，幅４mm，高さ２mmの小さな段がめぐる。このような段は，脚の外面内側にも施され，単なる装飾的なものとみられるが，あるいは蓋を受けるための段であるかもしれない。

脚部は，断面が３cm×４cmの方形の棒が，鉢部の外底面の四隅に掘り出されるが，長辺側の２本は，一辺２cmの方形の棒でつなぐように掘り残される。脚の高さ９cm，脚端部の幅は21cmである。

120も，半分に割れている。鉢部は，残存する口辺の長さが36cmで，両端を幅４cmほど残して，内側が皿状に浅くくぼむもの。厚さ３cmである。脚は高さ５cmほどの低いもので，厚さ２～４cmの板状のものが，両長側辺の外底面に掘り残される。側面からみると脚の中央がややえぐりこまれている。脚端部の幅は26cmほどで，口辺の長さより短い。鉢部が，皿状のくぼみであり，椅子と考えてもよいものである。

121は，およそ４分の３を欠失しているが，底面に一辺５cm，高さ約２cmの方形の低い脚が４ヵ所につくと考えられるもの。鉢部は四隅がまるい方形である。立ちあがりの厚さ１～２cmで，底面の厚さは６mmで薄い。深さは４cmで浅いものである。

123は，脚部の一部と思われるが，確かでない。

樹種は119～121がスギである。

４．槽（126・127・129・130）

槽は４点ある。いずれも，横木取りで，板目面を口として掘り込む。

126は，長さ約117cmのもので，右側辺を欠くが，幅50cmほどの，隅円の長方形平面のものになろう。両長辺を８cmほど，長辺を２cmほど残し，深さ７cmほどを掘りぬいている。外底面は全体にまるく擦れている。

127は，長さ94cmのもので，右側辺を欠くが，幅40cmほどの，隅円の長方形平面のものになろう。周囲を２～４cm残し，深さ８cmほどを掘りぬいている。外底面は比較的平坦で，両短辺の立ちあがりのところにやや屈曲部がある。

中央左端に網代の断片が付着しているが，直接的な関係はない。上半分は焼けこげて炭化が著しい。

129は，長さが176cmほどのもので，右側辺を欠くが，幅40cmほどと推定される細長いもの。両短辺に立ちあがりはなく，樋状になる可能性が強い。

130は，長さ66cm，幅28cm厚さ３cmのゆるく湾曲した板である。下端部12cmは厚さ４cmでやや厚くその境は段をなしている。あるいは，大型の桶の側板であるかもしれない。

126・127は，田舟と呼んでもよいであろう。129・130は槽と呼ぶのが適当でないかもしれないが，この類に含めた。

樹種は126・129がスギ，127がキハダ，130がオニグルミである。

5．桶（133～139）

桶の側板と考えられるものが6点，把手と考えられるものが1点ある。木取りは，138が板目板である他は柾目板を用いるものが多い。

厚さが1～2cmの湾曲した板で，下端が肥厚して段をなすもの。全体を窺い知れるものはないが，肥厚部で底板を受ける桶の側板である。側板が何枚で組み合わさるのかは不明であるが，いろいろな大きさのものがあったようで，今日みるような同じ大きさの側板をタガでしめつけるものではない。

133と134は湾曲の状態から口径を復元したものであるが，筒形のものになる。正円でなく，楕円形になる可能性のほうが強い。

口径は不明なものが多いが，長さでは，20cm強のもの（133・135），15cm前後のもの（137・138），39cm近くのもの（134・136）などがある。

134は，外面が赤く塗られている。

139は，桶の側面につく把手と考えるもので，本体に接合する部分が2ヵ所あり，その部分ではがれた痕跡がある。

樹種は133～138がスギである。

表9　桶の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備　考
			長さ	幅	厚さ	
133	桶	SD01	20.6	16.2	2.5(1.1)	
134	〃	SD05	38.8	14.4	3.1(1.8)	丹塗り
135	〃	SD03 B区	22.7	7.3(7.0)	1.5(2.5)	
136	〃	SE26	26.2	8.3	1.4	上端欠損
137	〃	SD03 D区	14.4	7.6	4.0	
138	〃	SD03 B区	14.5	9.7	3.3	
139	〃	SD03 D区	25.7	3.8(2.6)	3.3(2.1)	把手

6．蓋あるいは底板（140～149）

蓋あるいは桶の底板と考えられるものは，10点ある。木取りは，柾目板を使うもの4点，板目材のもの6点である。厚さ1cm内外の板を円形にくりぬいたものだが，平面形によって4類に分けられる。

蓋A（141～144）　平面形が正円となるもの。径が13cmの小形のもの（141～143）と径18cmの大形のもの（144)がある。142は中央に縦1.5cm横1cmの方形の穴を穿ち，片面は赤く塗られている。

蓋B（140・149）　平面形が長円形になるもの。140は長径22cm短径14cmのものである。

蓋C（145・146）　平面形は長円形に近いが，一端に突起部をつくり出すもの。145は右側辺を欠くが，長径25cm短径20cmほどのものに長さ3cmの突起がつく大形のもの。146も右側辺を欠くが，長径13cm，短辺10cmほどのものに，長さ7cmの突起がつく小形のもの。いずれも加工痕を残していることから，未成品の可能性が強い。

蓋D（147・148）　平面形がCの字状になるもの。147は，長さ17cm中央部の幅6cmのもので，右側辺を内側へ弧状にえぐり込むもの。148は，長さ22cm，中央部の幅4cmのもので，右側を弓状に削り，両端が尖る。外へ張り出す右側辺中央は幅4cm深さ1cmの四角いえぐり込みを入れる。樹種は144～149がスギである。

表10　蓋あるいは底板の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備　考
			長さ	幅	厚さ	
140	蓋　B	SD03	21.5	14.3	1.3	
141	〃　A	SD03	12.4	3.4	0.6	
142	〃	SD03 D区	12.8	13.1	0.6	丹塗り
143	〃	SD03 D区	11.9	7.3以上	1.0	
144	〃	SD01	17.5	4.7以上	0.7	
145	蓋　C	SD01	27.6	9.4	1.5	
146	〃	SD03 C区	19.9	5.1	1.0	未成品か
147	蓋　D	SD01	16.8	8.1	0.8	
148	〃	SD02	21.9	6.7	0.8	
149	蓋　B	SD03 D区	15.8	3.4	1.2	

7．杓子（105～116）

杓子と考えられるものは，12点ある。木取りは板目板を使うもの108・115の２点だけであとは柾目板を用いる。

杓子は，ものをすくったりかくはんしたりする道具で，身と柄からなる。身の形態によって３類に分けられる。

杓子Ａ（105・113・116）　身が椀状の深いくぼみになるか，それを意図したもの。いずれも未成品で，くぼみが中途であったり，荒い整形痕をとどめている。

105は，長さ30cmで，身の部分の長さが17cmで柄の長さに比して身の部分が大きい。厚さ２～４cmの柾目板を用い，径15cmのほぼ円形の身の中央を径８cm深さ２cmの椀状に掘りくぼめている。柄は幅６cm厚さ２cmで，身と柄の境がはっきりとしている。

113は，長さが38cm幅５～９cm厚さ２～４cmのもので，幅広の一端に径８cmほどの浅い掘り込みをもつもの。

116は，柄部の先端を欠くが，長さ26cm幅3.5～７cmのもので，幅広の部分は厚く，断面をかまぼこ形に整形したもので，平坦な面を掘り込む予定のものと考えられる。

杓子Ｂ（107・108）　長さが40cm近いもので，身の長さが10cm内外で柄の長さに比して，身の部分が小さいもの。

107は，身が長さ10cm幅４cmのやや方形のもので，柄は幅２cm厚さ1.5cmである。

108は，身が長さ８cm幅４cmの長円形のもので，柄は幅２cm厚さ1.5cmである。

杓子Ｃ（106・109～112・114・115）　身の長さが柄の長さとほぼ同程度のもの。身は長方形の板状のものである。

106は，柄部の先端部を欠くが長さ30cmで，身の長さ16cm幅５cmの方形のもので，先端部は細く尖る。柄は，幅2.4cm厚さ1.5cmで，身と柄の境は段をなす。

109は，柄部の先端部を欠くが長さ26cmで，身の長さ14cm幅６cmの方形のもので，柄は，幅２cm厚さ１cmで，身と柄はなだらかにつながる。

110は，長さ17cmで，身の長さ７cm幅４cmの方形のもので，柄は，幅２cm厚さ１cmで，柄と身はなだらかにつながる。

111は，柄部の先端部を欠くが，長さ34cmで，身の長さ14cm幅11cmの方形のもので，身の先端部は細くなる。柄は幅４cm厚さ２cmで，柄と身はなだらかにつながる。

112は，長さ32cmで，身の長さ10cm幅４cmで，先端部の縁は右あがりになる。柄部は，幅２cm厚さ１cmで，柄と身の右側辺はまっすぐで，左側辺がやや張り出して，左右対称にならない。柄の先端部は，径６mmの穴が穿たれている。

紐通しの穴であろう。

114は，長さ23cmで，身の長さ８cm幅５cmの方形のもので，柄は２～３cm厚さ１cm厚さ１cmで，柄と身はなだらかにつながる。身の厚さが2.4cmでやや厚く，Ａ類に含まれるものかもしれない。

115は，柄部を大きく欠くが長さ９cmで，身の長さ５cm幅４cmの方形のもので，柄は，幅３cm厚さ1.5cmで，柄と身はなだらかにつながる。樹種は105・107・108・110～112がスギ，106がクヌギ，109がカシ類，113がコナラである。

表11　杓子の計測表

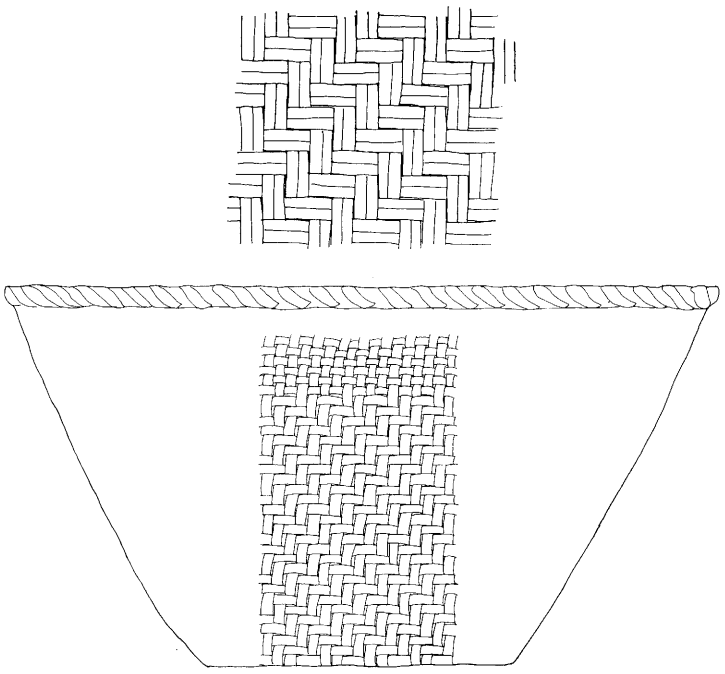
番号	種　類	出土区	法量 cm			備考
			長さ	幅	厚さ	
105	杓子 A	SD03 D区	30.0	14.5(5.6)	4.4(2.3)	未成品
106	〃 C	SD03	30.7	5.5(2.4)	1.6	刃部先端欠損
107	〃 B	SD03	36.9	3.3(2.5)	0.8(1.3)	〃
108	〃 B	SD01	39.7	4.1(1.9)	0.9(1.4)	
109	〃 C	SE26	25.7以上	5.7(3.1)	0.6(1.1)	柄部欠損
110	〃 C	SD03 B区	17.1	3.5(1.9)	0.7(0.8)	
111	〃 C	SD03 D区	33.6	10.9(3.6)	2.3	
112	〃 C	SD01	32.4	3.7(1.7)	0.8(1.0)	柄部に一孔
113	〃 A	SD03 C区	38.0	8.3(4.7)	4.3(2.3)	未成品
114	〃 C	SD03 D区	22.5	4.7(3.1)	2.1(1.7)	〃
115	〃 C	SD03	9.3以上	3.9(3.2)	1.8(1.7)	〃
116	〃 A	不明	26.1以上	7.0	2.6	〃

8．籠（128・433）

網代編みのものが２点ある。

128は，127に付着していた断片で，１本くぐり１本越え１本送りのもの。

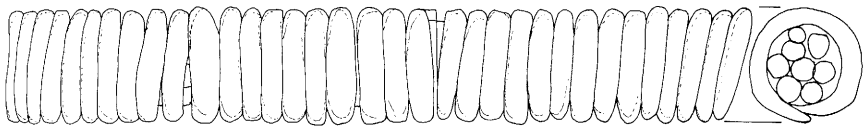
433は，平面形が隈円方形になる籠と思われるが，つぶれた状態で出土したことや，口縁部を欠くことから，正確な大きさははっきりしない。口径約20cm，底径約８cm，高さ約10cmほどのものであろう。素材は幅３mmほどのもので，底部は４本越え，４本潜り２本送りで，体部は，底部から27段までを２本越え２本潜り１本送り，それより上は１本越え１本潜り１本送りである。口縁部は欠けてわからない。



第12図　籠の復元図

9．器台（435・436）

435は，幅２cm厚さ１mmの樹皮を数枚重ねまきしたものを芯として，それに直交するように同じ樹皮をらせん状にまきつけたもので，口径18cm高さ６cmのものである。



第13図　器台の復元図

10．編物（434）

434は，直径1.5cmの茎を一端の縁とし，それと並行に直径３mmの細い茎を密接して並べ，それと直交するように幅８mmの薄い繊維が，細い茎を２本づつくぐって編んでいくもの。縦糸にあたる繊維は1.2cmの間隔をおいて，編み込まれる。

434の左上に重なって別の編物があるらしい。直径３mmの細い茎を５～６本あわせたものを網代編みのように編んだもののようにみえるが，はっきりしない。

６．楽　　器（図版76）

１．琴柱（101・102）

琴柱は２点ある。

101は，柾目板を用いたもので，完成品である。底辺の幅４cm高さ２cmの山形のもので，厚さは底部で１cm，頂部で５mmである。頂部の幅１cmでその中央に，弦をかける刻みがある。底辺中央も幅２cm高さ３mmを浅いえぐりを入れる。

102は，板目板を用いたもので，整形が荒く，未成品であろう。底辺の幅6.5cm高さ2.5cmの山形のもので，厚さは底部で１cm，頂部で３mmである。頂部は幅1.5cmで刻みはない。

樹種はいずれもスギである。

７．建 築 材（図版96～98・100・143～157・170）

１．栓（150～174）

栓は，25点ある。いずれも割材を用いた棒で，長さが６～17cm，一端を太くして頭部をつくり出すもの。頭部の径２cm，軸部の径１cm前後のもので，長さが15～17cmのものが多い。

頭部の断面形が円形のもの（栓Ａ），四角形のもの（栓Ｂ），全体が棒ではなく板状のもの（栓Ｃ）の３種がある。また，栓Ａは，頭部の平面形すなわち，頭部と軸部境の形状によってA_1～A_3の３類に分ける。

栓A_1（150～154・157・158）　頭部の平面形が方形につくられたもので，軸部との接合部に，はっきりとした段をもつもの。

栓A_2（159～165）　頭部の平面形が方形につくられたもので，軸部との接合部に段をもたず，ゆるやかにつながるもの。

栓A_3（167～170・174）　頭部の平面形が逆台形につくられたもので，軸部との接合部に，小さな段をもつもの。

174は，軸の下位側面に径３mmの木製のピンがさし込まれている。

栓B（155・156・173）　頭部の断面形が方形のもので，軸部との接合のし方は，栓A_1と同じくはっきりした段をなす。155は，軸部の下位両側辺が少し削られ細くなる。173は，軸部の断面形が円形になる。

栓C（166）　全体が厚さ８mmの板状のもの。頭部平面形は方形で，軸部との境ははっきりした段をなす。

樹種は150～153・155～165・167～171・174がスギである。

表12 栓の計測表

番号	種　類	出土区	法量 cm			備　考
			長さ	幅	厚さ	
150	栓 A_1	SD03	16.5	2.3(1.2)	1.6(1.2)	
151	〃	SD03	15.2	1.9(1.1)	1.9(1.2)	
152	〃	SD03 D区	16.6	1.7(1.3)	1.9(1.3)	
153	〃	SD03	8.8	2.0(1.5)	2.0(1.4)	下半欠損
154	〃	SD03	6.1	2.1	2.0	
155	〃 B	SD01 B区	15.2	4.2(2.0)	2.1(1.5)	
156	〃	SD03	13.1	3.1(1.3)	3.0(1.1)	右下部欠損
157	〃 A_1	SD03 C区	7.8	2.6(1.2)	2.5(1.4)	
158	〃	SD03 B区	7.7以上	2.9(1.3)	2.6(1.3)	下半欠損
159	〃 A_2	SD03 D区	15.8	2.3(1.0)	2.5(1.0)	下端欠損
160	〃	SD03 B区	17.5	2.6(1.1)	2.4(1.1)	
161	〃	SD03	17.3	2.6(1.2)	2.0(1.2)	
162	〃	SD03 D区	12.9	1.8(1.0)	1.5(1.2)	
163	〃	SD03 B区	11.8	1.9(1.0)	1.2(1.0)	上端欠損
164	〃	SD03 D区	9.9	2.2(1.2)	2.1(1.1)	下端欠損
165	〃	SD03	9.9	2.5(1.2)	2.5(1.1)	
166	〃 C	SD01	16.3以上	2.4(1.6)	0.7(0.6)	下端欠損
167	〃 A_3	SD03 C区	13.6以上	3.3(1.0)	2.6(1.2)	〃
168	〃	SD03	14.6	2.8(0.9)	2.2(1.0)	
169	〃	SD03 B区	15.3	2.3(1.0)	1.6(1.1)	
170	〃	SD03	16.5	1.7(0.8)	1.8(0.9)	上端欠損
171	〃	SD03 A区	11.9	1.5(0.7)	1.0(0.7)	
172	〃		13.4	1.7	1.1	
173	〃 B	SD03	10.4以上	3.4	3.3	下端欠損
174	〃 A_3	SD10	7.8以上	7.9	7.7	木製の釘がさしこまれている

2．はしご（182～184）

はしごは3点ある。

182は，長さ171cm幅14cm厚さ2～8cmで，踏台6段の完形品である。板目板を用い，下端はえぐり込みがあり，二又に分かれる。上端には長径5cm短径2cmの長円形の穴1つと，一辺2cmほどの方形の穴が4つある。右側の方形の穴の横は一段浅く掘られている。下端の二又は地中にさしこまれて固定するためのもので，長円形の穴は建物への緊縛のためのものとみられるが，方形の穴は，この材がはしごに転用される前に穿たれていた可能性もあろう。

踏台の間隔は22～26cm，幅は4cmほどで狭い。

183・184は，踏台2段だけ残ったものである。

183は，幅12cm厚さ10cm，踏台の幅は4cmで，板目板を用いる。

184は，幅12cm厚さ11cm，踏台の幅は6cmで，柾目板を用いる。

樹種は182・184はスギである。

3．柱根（図版143～157）

(1) SB14（303～306）

303と304は割材を用い，305と306は心持ちの柱である。303・304の直径約24cm，306は一まわり大きく直径26cmで，断面形はいずれもほぼ円形で，地中に埋め込まれた部分の長さが約24cmである。

306は，表面に幅2～4cmのちょうな痕をよくとどめ，底面には幅8cm深さ4cmの溝がある。SB14の柱根はいずれもその下に，厚さ1cmの板を2～3枚重ねておき，礎板としている。

(2) SB16（307～314）

いずれも割材を用いる。307～311は，直径15cmで断面形が円形のもの。312・313は，幅6～8cm厚さ4cm前後で，断面形が方形に近いもの。いずれも表面にはちょうな痕（波状加工痕）がよく残り，底面には幅4cm前後の鉄斧先の形状を残す加工痕がある。

307～310は，下から16～20cm上位に，幅2cm深さ2cmのはちまき状の溝をめぐらすが，307～310は，前面にめぐらさず，半分ほどだけである。311だけ全体にめぐる。

312と313は，両側面にだけえぐりをいれるが，312は下から20cm，313は下から15cmのところに入れる。

SB16は掘立柱建物と考えられるが，311・313は，307～311に比べて小さく，また梁行の中柱であることから，あるいは床を支える束柱であるかもしれない。

314は主柱が抜けて，長さ28cm幅8cm厚さ4cmの板が入っていた。

SB16の柱根は，地中に埋め込まれた部分の長さが約40cmである。

(3) SB18（315～320）

315～317は，割材を用い，直径18cmの断面形が円形のもの。いずれも表面には鉄斧による波状加工痕をよく残し，316の底面には幅4.5cmの斧先の形状を残す加工痕がある。

318・320は，心持ちの柱で，直径8～10cmの断面形が円形のもの，319は割材を用い，幅10cm厚さ8cmの断面形が方形のものである。318～320は，315の脇に接して埋め込まれたもので，添え柱である。

315～317は，地中に埋め込まれた部分の長さが約50cmである。

318～320は，315を補強する柱とみられるが，その場合，SB18は床持ちの建物で，床板を支える柱の可能性がある。

(4) SB19（321～324）

321～324は，割材を用い，一辺8～12cmの断面形がほぼ方形のもの。いずれも表面には，鉄斧による加工痕が残る。

地中に埋め込まれた部分の長さが，約35cm前後である。

(5) **SB17**（327～332）

327～332は，割材を用い，径16cmの断面形が不整な円形のもの。表面には部分的に加工痕を残すが，全体にあまり手を入れない。330は，底面は平坦でなく，斜めそぎでやや尖る。幅4.2cmの鉄斧による加工痕が残る。地中に埋め込まれた部分の長さは，80cm前後で深い。樹種はすべてコナラで直径70～80cmの木を6分割して用いているらしい。

(6) **SA24**（325・326）

325・326は，割材を用い，幅16～18cm厚さ8～11cmの断面形が方形のもの。地中に埋め込まれた部分の長さが約65cm前後で，深い。地中に埋め込まれた部分は，鉄斧による加工痕がよく残り，角がややまるみをもつが，地表面にあらわれる部分は，断面を整った長方形に，意識的にていねいに仕上げている。326の底面には幅3.5cmの鉄斧による加工痕が残る。

高床建物と考えるSB17に並行することから，SB17に付属した門と考えられる。

(7) **SB20**（333～338）

333・335・336は，割材を用い，一辺16cmの断面形がほぼ円形のもの。334・337・338は，心持ちのもの。333～337は表面に加工痕が残る。334は，径12cmの断面形が円形で，底部近くは幅16cm厚さ12cmとやや方形に近く，底面には幅8cm深さ4cmの溝を掘る。337は，径15cmの断面形が八面体に近く，338も径12cmの断面形が八面体に近いもの。

地中に埋め込まれた長さは，338だけが16cmと浅く，他は約60cmと長い。SB20は，高床の建物と考えられるもので，338は，その桁行の中央に位置することから，床を支える束柱であろう。

(8) **その他**（339～347）

339は，心持ち柱で，径28cmの断面形が円形のもの。底面には幅8cm深さ8cmの溝をもつ。表面には鉄斧による加工痕がよく残る。SB14の306とよく似た特徴をもち，もとはSB14の主柱であった可能性が強い。339は，正面に縦16cm横7cm深さ3cmの掘り込みがあり，その周辺には，線状の傷跡が集中しており，他の材を加工する際の作業台として，転用されたものであろう。

340は，縦に割れているが，底面から約30cm上に，はちまき状に溝をめぐらす。SB16の主柱によく似ており，もとはSB16の柱であった可能性が強い。

341・342は，心持ち柱で，径12cmの断面円形のもの。表面の加工は少ない。

343は，二本の枝が幹から分かれる部分の心持ち柱である。幹は径6cmの断面円形のもので，枝の出る上部を，厚さ3cmを断面かまぼこ形に切りとる。同じような柱は，静岡県山木遺跡で出土しており，高床倉庫の柱と考えられている。〔後藤守一編　1962〕

344は，割材を用い，径4cmの断面形が不整円形のもので，地表部分との境を，長さ24cmにわたって，一まわり細く削っている。

345は，割材を用い，幅14cm厚さ7cmの断面形がやや方形に近いもの。

346は，割材を用い，幅12cm厚さ8cmの断面形がやや方形に近いもの。

347は，割材を用い，一辺8cmの断面形が方形のもの。

樹種は303・306・333がカツラ，304・341はウワミズサクラ，305はオニグルミ，307～313・315～317・321～326・343～347はスギ，318・320・338はヤマナラシ，319はモミ，327～332はコナラ，333はカツラ，334はキハダ，335・337・342はヤマグワ，336はタモ，339はカゴノキである。

8．棒 ・ 板（図版101～141・160～167）

1．棒（図版101～167）

穴やえぐりの形状によって，５種がある。棒の多くは心去りの割材を用いるものが多く，木取りについての記述は必要なものについてのみ行う。

(1) 連孔棒

幅４cm前後の断面かまぼこ形を呈する棒に，円形や四角形の穴が連続して穿たれているもの。

穴の形が円形のもの（Ａ），四角形のもの（Ｂ）がある。

A（185）

185は，幅4.2cm厚さ2.5cmで，先端が細くなり丸味をもつ。直径約３cmの穴が６つ以上，約３cmの間隔をおいて並び，穴のある両側辺には，浅い溝が認められ，紐を巻きつけた時の緊縛痕と思われる。緊縛痕は，先端近くの穴のない側辺にも１ヵ所認められる。下端を欠く。

B（186～191）

186は，縦半分に割れ，両端を欠く。厚さ4.2cmでやや厚い。直径約２cmの穴が４cm間隔で６つ以上穿たれる。

187は，幅4.5cm厚さ1.2cmで，先端が角ばったままのもの。縦３cm横２cmの穴が３つ以上，約３cmの間隔をおいて並ぶ。188は，幅2.8cm厚さ1.2cmの小形のもので，一辺１cmの穴をもち，先端が丸味をもって尖るもの。189は187と特徴が似ており，同一個体の一端である可能性がある。190は，幅3.2cm厚さ1.5cmで，両端を欠く。中央に幅1.2cm深さ0.5cmの溝がやや斜めに施される。縦２cm横1.5cmの穴が３cmの間隔で穿たれる。溝を越えて11cm離れたところにも穿孔の形跡が認められる。191は，幅4.5cm厚さ1.8cmで，下端をやや細く削り，握部状に作っている。穴は一辺２cmで７cmの間隔をおいて並ぶ。

(2) 両端に穴のある棒

断面形が棒状のもの（Ａ）と板状のもの（Ｂ～Ｄ）がある。

A（200・201・205・206）

200は，一端を欠くが，推定の長さ約80cmで，両先端から16cm内側に，縦２cm横１cmの四角い穴を設けるもの。中央の太さは約３cmで断面が円形，穴のある所は幅４cmでやや太く，断面形も四角くしている。

201は，一端を欠くが，推定の長さ約90cmで，両先端から14cm内側に，縦２cm横１cmの四角い穴を設けるもの。太さは約３cmで断面が円形で，全体を通してほぼ同じである。最先端部の側面には幅２cm深さ0.4cmの溝を入れている。

205は，下端から32cmの所に一辺1.5cmの正方形の穴を設け，側面から約0.5cmの細い棒をさし込んでいる。細い棒は正方形の穴を貫通しており，穴の中にさし込まれていた別木の棒を固定する役割をもつものであろう。中央部の太さは約3.5cm，断面が円形で，穴のある所は幅４cmでやや太く，断面形が四角くしている。穴と先端の間の長さが長いが，もう一方の端も，同様な形になるものと思われる。

206は，先端近くに一辺３cmの正方形の穴を設けるもの。他の一端を欠くが，同じ形状がつくものと思われる。穴のある所は幅も６cmと広く，断面形が四角くなり，左側を斜めに切りとって尖らせる。

B（202・203）

202は，一端をわずかに欠くが，推定の長さ64cm幅６cm厚さ２cmの柾目板で，両先端に直径３cmの穴を設けるもの。穴と穴の間は幅4cmでやや細くけずる。表面には，幅1.2cmのちょうな痕が残る。先端部の木口は丸味をもたせている。

203は，縦半分に割れ，しかも一端を欠く。推定の幅約７cmで厚さ2.2cmの板目板で，一端に一辺４cmの方形の穴を設ける。先端は三角形に尖らせている。

C（192・193）

192は，幅6cm厚さ1cmの板目板で，一端を欠く。遺存する一端には径4cmのやや方形に近い穴を設け，欠けている側は，中央部を幅2cmの細長い穴を穿ち，二又になっている。細長い穴の両側には，径1mmの小穴を相対して設け，それは8cmの間隔をおいて並ぶ。遺存する先端は三角形に尖らせる。193は，幅6cm厚さ1cmの板目板で，両端を欠く。中央に，一辺2cmの方形の穴を設け，穴から3cm離れて幅2cmの細長い穴が両端まで続く。細長い穴の両側には，径1mmの小穴を相対して設け，それは9cmの間隔をおいて3組並ぶ。192と193は，その特徴から同一個体の可能性が強く，193の方形の穴を中心にして，対称の形になるものであろう。小穴が4対であるとすれば，推定の長さが57cmになろう。

D（194・198）

194は，長さ26cm幅4.5cm厚さ2cmの板目板で，中央に一辺3cmの方形の穴を設け，両端を紡錘形に削り出すもの。両先端は径1mmの小穴を設ける。

198は，推定の長さ31cm幅3cm厚さ1.5cmの板目板で，中央部に幅1cm長さ14.5cmの長円形の穴を設ける。両先端には径1mmの小穴を設ける。

(3) 有孔棒（195～197・199・204・271）

いずれも一部分で，全体を推定しがたい。

195は，幅7cm厚さ1.5cmで，一端を山形に尖らせ，中央部に幅4cmの細長い穴を設けるもの。196は厚さ2cmで，中央に一辺4cmの方形の穴を設ける。197は，幅3cm厚さ5mmで中央に長円形の穴を設けるようだが，縦半分に割れていて不明。199は長さ28cm厚さ1.5cmで，中央部に長さ19cmの長方形のえぐり込みが入るもの，縦半分に割れているようである。長方形のえぐり込みの上に，径1mmの小穴があるらしいが判然としない。上端左角にえぐりを入り，突起状に作る。

204は，幅4cm厚さ1cmの板目板で，遺存する一端から14cm内側に一辺2cmの方形の穴を設ける。欠失する一端は，尖るような感じでもあるがよくわからない。

271は，幅6cm厚さ3cmの柾目板で，長さ14cmを残して下は約2cmと細くし，その一側辺には6cm間隔に幅1.5cm深さ1.2cmの四角いえぐりを入れる。側辺が割れているので，このえぐりは穴になるかもしれない。

(4) 先を尖らせた棒（234・237・362・371・409・416・417・430）

234は，長さ67cm中央の径3cm断面円形の棒で，基部はやや太く，先細りになる先端部は，長さ5cmを四面削り，舌状にするもの。235は，長さ60cm径2cmの断面形かやや方形に近い棒で，先端部6cmを4面削り尖らせる。236は，長さ47cm径2.8cmの断面円形の棒で，先端部を長さ1cmほどを斜めに削り出すもの。237は，断面の径約3cm断面円形の棒で，基部を欠くが，先端部は長さ9.5cmを舌状に削り出すもの。

371は，長さ37cm幅3cm厚さ約2cmの断面方形の棒で，両端は長さ4cmを4面削りを舌状にしているもの。409は，径2cmの断面円形の棒で，先端を長さ3cmを4面削り尖らせるもの。416・417・430は，先端を4面削り，尖らせている。

(5) 有頭棒

棒の一端ないし両端に頭部を作り出すもの。長さが80～100cmの長いものと長さ20～30cmの短いものの2種がある。

A_1（207～213・215・223～225）

207は，全長99cmで，断面が一辺3cmの方形の棒で，両端を長さ2cmを残してその下を4面とも削り，両端に頭部を作り出すもの（両頭棒）。208は，下端を欠くが，断面が一辺3cmの方形の棒で，先端を3面を削り出して，長さ2cmの頭部を作るもの。209は，下端を欠くが，断面が2×3cmの方形で，先端を1面だけ削り長さ2cmほどの頭部を作る

の穴がある。上端と同じように，穴の右側に２個１対の穴が伴うのかもしれない。その場合，板の幅は約10cmになる。

279は，長さ約44cm幅11cm厚さ６mmの板目板で，板の中央両端に縦１cm横２cmの方形の穴があり，穴の左側に径５～６mmの小穴が２個ずつ添う。右側辺に沿って，径５mmほどの穴が，６～８cm間隔に５つ並ぶ。

280は，長さ57cm幅９cm厚さ２cmの板目板で，左側を欠く。両端近くに，粗いはつりによる穿孔を施し，一辺１～２cmの不整形な穴を設ける。

281は，幅12cm厚さ２cmの板目板で，上端を欠く。両端近くに，やや右側辺に近く，一辺1.5cmの方形の穴がある。上端の左側辺と下端の右側辺に，長さ９cm幅３cmの方形のえぐりを入れる。表面にはちょうな痕がよく残る。282は，幅10cm厚さ２cmの板目板で，上端左側辺に縦１cm横３cmのえぐり込みがある。283は，長さ20.5cm幅4.5cm厚さ約１cmの板目材で，右側を欠く。中央側辺には，一辺１cmの方形のえぐりがあるが，穴であるかもしれない。

284は，幅12.5cm厚さ3.5cmの板目板で，上端を欠く。両側辺には，縦４cm横１cmの方形の穴が，相対して設けられる。この一対の穴は約40cmの間隔をおいて，３対以上確認できる。下端近くには，穿孔途中かと思われる荒いはつりがある。中央部に入る段は，意図的なものとみる見方もあるが，はっきりしない。

285は，長さ138.5cm幅９cm厚さ２cmの板目板で，下端近くに左側辺に沿って，一辺２cmの方形の穴がある。上端近くにも，穴があったかもしれないが，その部分を欠いていて不明である。

286は，長さ128cm幅10cm厚さ2.3cmの板目板で，右側辺に沿って一辺１cmの方形の穴が２つある。穴の間隔は，170cmである。287は，幅20cm厚さ１cmの板目板で，下端を欠く。中央左側辺に沿って縦２cm横１cmの方形の穴がある。

288は，厚さ２cmの板目板で，右側辺と上端を欠く。中央左側辺に沿って縦４cm横２cmの方形の穴がある。

289は，長さ85.5cm幅5.2cm厚さ1.6cmの板目板で，左隅をわずかに欠く。上端に一辺２cmの方形の穴が２つあるが，右側辺の近い穴には，同じ大きさの棒がはさまっている。

290・291は，幅15cm厚さ１cmの板目板で，それぞれ一端を欠き，他の辺も欠けているのかもしれない。一側辺に沿って一辺１cmの方形の穴がある。２点は，木の質や特徴がよく似ており，同一個体である可能性が強い。

292は，長さ30cm幅５cm厚さ0.7cmの板目板で，下端を欠く。左側辺に沿って径５mmの小穴が２つあり，その間隔は６cmである。293は，幅６cm厚さ1.5cmの柾目板で，両端を欠く。左側辺に沿って，径２cmの円形の穴と，縦２cm横1.5cmのやや方形に近い穴が２つ以上あり，その間隔は６～８cmである。

294は，幅22.5cm厚さ３cmの板目板で，下端を欠く。上端近くには，両側辺に沿ってはつりによる一辺２cm内外の不整形な穴がある。穴のあけ方は，左右反対方向から行う。上端縁は，やや斜めに削がれ，それにあわせて穴の位置もわずかにずれる。

295は，長さ68cm幅22.5cm厚さ３cmの柾目板で，中央部左側辺に沿って縦４cm横５cmの不整形な穴がある。右側辺はやや外側へ張り出しぎみである。

296は，長さ152cm幅21cm厚さ３cmの板目板で，中央右側辺にはつりを入れて２分割している。上端右側辺に沿って縦３cm横４cmの不整形な穴を設けている。穴は両面からの粗いはつりによる。下端右端には，断面円形の長さ２cmの先端が丸味のある突起部を作り出す。表面は幅２～４cmのちょうな痕や線状の傷痕が残る。

298は，長さ99cm幅13.8cm厚さ3.2cmの板目板で，左側辺を長さ48cmにわたって弧状のえぐりを入れる。えぐりの始まりと終わりの部分は，横に線状の傷痕が認められる。右側辺に沿って一辺２cmの方形の穴がある。下端は二又に分かれているが，意図的なものかどうかはっきりしない。

板Ｆ（253・254・262・268・277・297・299～302）

穴をもたないその他の板を一括する。

253は，幅４cm厚さ1.5cmの柾目板で，両端を欠く。254は，幅2.5cm厚さ0.8cmの板目板で，上端は左隅を一辺1.2cm

の方形のえぐりを入れて，幅１cmの突起を作り出すもの。

262は，長さ20cm厚さ１cmの板目板で右側を欠く。表面にはちょうな痕をよく残す。

268は，長さ28cm幅12.5cm厚さ１cmの板目板で，表裏にちょうな痕をよく残す。

277は，長さ57.5cm幅12.7cm厚さ約２cmの板目板で，上部に幅約6.6cm長さ15cmの突起部を作り出し，下端は左隅を縦10cm横６cmのえぐりを入れる。表面には，ちょうな痕が残る。

297は，長さ127cm幅2.6cm厚さ3.2cmの板目板で，右側辺に沿った部分にちょうな痕がよく残る。

299は，幅10cm厚さ5.5cmの板目板で，表面には長さ９cmの線状の傷痕が密集して残る。下端は二又に分かれているが，意図的なものでない欠けと思われる。

300は，長さ96cm幅16cm厚さ５cmの板目板で，表面には長さ４cmの線状の傷痕が密集して残る。

299と300の線状の傷痕は，これが他の材などを加工する際に台として用いられたためについたものと考えられる。

301は，幅16cm厚さ2.5cmの板目板で，下端を欠く。上端部左隅には，集中してはつり痕があり，穿孔途中のものであろうか。右側辺中央部に，三角形の小さな刻みがあり，編板として使われた可能性がある。

302は，幅12cm厚さ２cmの板目板で，下端を欠く。上端部は，断面を三角形に削っている。

その他（103・264・420～426・429・431・432）

420は，長さ22cm幅２cm厚さ６cmの板目板で，両端を三角形に尖らせる。421は幅３cm厚さ６mmの板目板で，上端を欠くが，下端は三角形に尖らせる。

422は，長さ24.7cm幅1.8cm厚さ0.7cmの板目板で，両端の長さ８cmを両側辺を削って尖起状にしたもの。

423は，長さ18.6cm幅4.3cm厚さ0.8cmの板目板で，中央左側辺を長さ2.6cm幅５mmのえぐりを入れる。

424は，幅11.5cm幅5.4cm厚さ1.2cmの板目板で，一端を三角形に尖らせる。

425は，厚さ６mmの撥形の板だが上端部を欠き，下端は焼けこげていて，もとの形ははっきりしない。

426は，長さ3.7cm幅5.4cm厚さ８mmで，表面はやや丸味をもつが，裏面は平坦である。

429は，長さ24cm幅３cm厚さ８mmでの板の先端部の両側辺を削って細くしたもの。

431は，長さ23cm幅5.5cm厚さ２cmの板目板。432は，幅6.3cm厚さ3.6cmのもので，一端を斜めに切り尖らせている。

３．杭（348～360・418・419）

割材を用いた板や角棒の一端を尖らせたもの。356・418・419が板目板である他は柾目板である。

樹種は103・185～194・196～198・200～204・206・207・209・216～222・224～226・230～231・235・236・245～249・252・255・260～262・264～266・268・270・271・273～277・279～285・288・290～292・296～302・348・350・351・355・356・363・364・371・380・381・386・397・408・416・419～424・426・430がスギ，195はカシ類，238・244はヤマグワ，357はムクロジ，362はアオダモ，367はコナラ。

その他の樹種

橋SX25はスギ，SE26の井筒はウワミズザクラである。

9．木器の組成

江上Ａ遺跡出土の木器は，5,605点あり，そのうち438点を図示した。主要な木器はほとんど収録しており，今回報告できなかったものは，特別な加工のない板や棒が多い。

図示した木器の比率は次のとおりである。

農　具　53点（約12％）　鋤18，鋤17，えぶり１，石包丁形木器８，臼４，杵５

工　具　40点（約10％）　斧柄２，刀子柄１，火鑽臼８，火鑽杵４，鳴子形木器25

狩猟具

漁撈具　13点（約３％）　弓５，鏃形木器５，たも網１，櫂２

紡織具　18点（約４％）　紡錘車２，編板４，椅子５，矢羽根形木器７

食器・容器　41点（約９％）　鉢２，高杯１，槽４，桶７，蓋あるいは底板10，杓子12，籠２，器台２，編物１

楽　器　２点（約0.1％）　琴柱２

建築材　54点（約12％）　はしご３，柱根49，井筒・橋

その他　217点（約49.9％）　棒，板，杭

約50％にあたる221点について，その用途をほぼ推定できるが，その中では，農具24％，工具18％，狩猟具・漁撈具６％，紡織具８％，食器・容器19％，楽器１％，建築材24％である。

2　ガラス玉

SD01D区から採集した土壌の水洗選別によって，ガラス玉１点を得た。直径3.6mm，厚さ３mmで，径1.7mmの穴があいている。色調は薄い青色（明るい空色）で，最大径0.6mmの気泡がみられ，黒色をした不純物が含まれている。

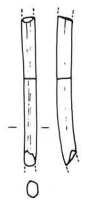
第14図ガラス玉(1/1)

3　骨角器

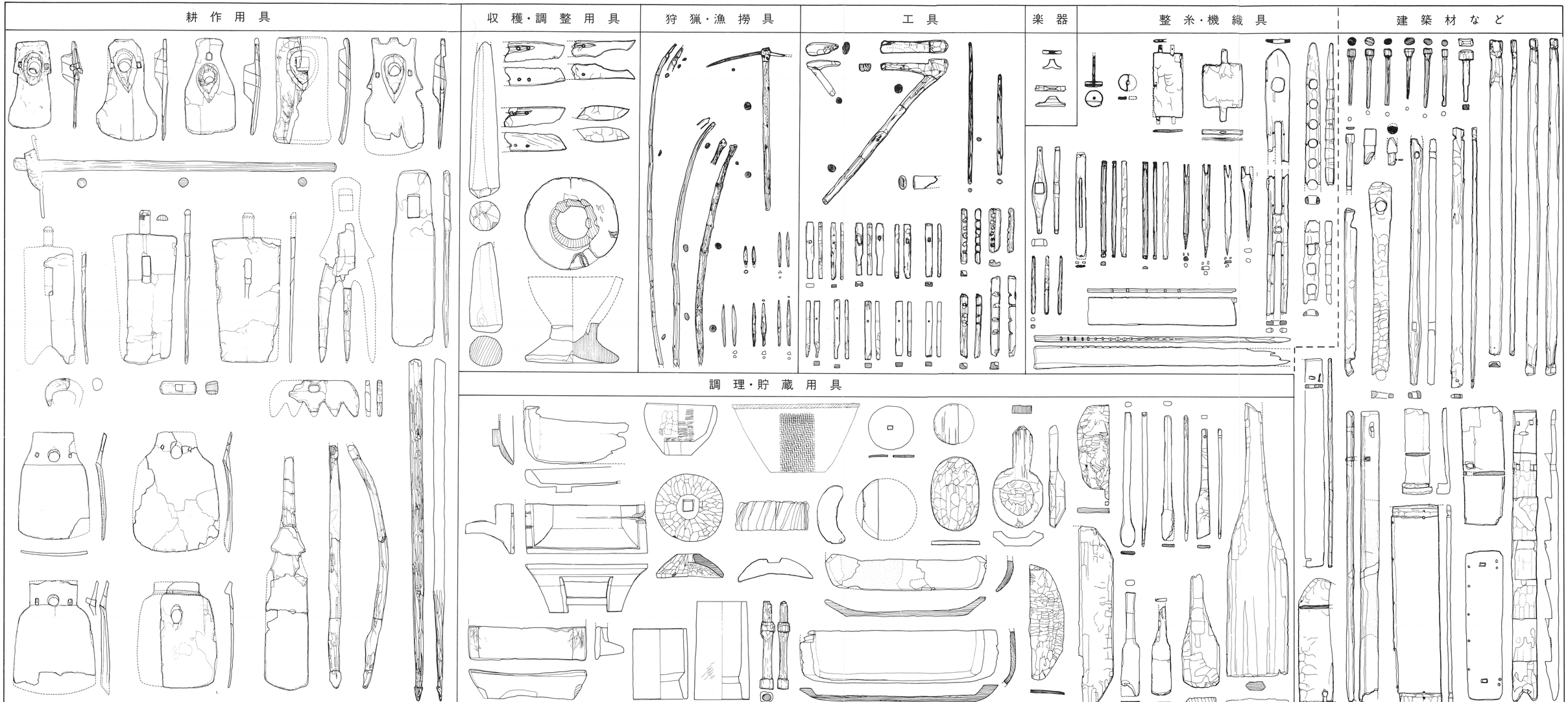
骨針

先端部及び基部を欠くが，長さ2.7cm先端部の径2.2～2.3mm基部の径2.5～2.7mmのもの。ニホンジカの中手・中足骨の一部を磨いてつくったもので，わずかに光沢がある。表面は白いが所々煤けて黒い。もとはまっすぐであったようだが，火熱を受けて先端部が曲ったようである。

X20Y29SD01A区上面から出土した。



第15図　骨針(約1/1)



第16図　上市町江上Ａ遺跡出土木器の組み合せ（弥生時代後期）

溝の区割

SD01　B・SPより南区域をA区
　　B・SPとC・SPの間をB区
　　C・SPとSD05との合流点までをC区
　　SDとの合流点とD・SPの間をD区
　　D・SPとSD03との合流点までをE区
　　SD03との合流点より西区域をF区

SD02　A・SPより西区域をC区
　　A・SPとB・SPの間をB区
　　B・SPとSD01との合流点までをA区

SD03　D・SPより東区域をA区
　　D・SPとC・SPの間をB区
　　C・SPとB・SPの間をC区
　　B・SPより東区域をD区

SD04　A・SPより東区域をA区
　　A・SPとB・SPの間をC区
　　B・SPよりSD02との
　　合流点までをB区

SD05　SD01との合流点と
　　A・SPの間をA区
　　A・SPとB・SPの間をB区
　　B・SPより北区域をC区
　　A・SPとC・SPの間をE区
　　C・SPより東区域をD区

SD09　B・SPより南区域をA・B区
　　B・SPとA・SPの間をC区
　　A・SPより北区域をD区

0　10　20M

第35図　江上A遺跡遺構配置図

E 江上B遺跡

江上B遺跡は弥生時代と中世の複合遺跡である。木製品もこの2時代に分かれるが，大部分は中世である。木製品の総数は木片も含めて17,335点である。生活用具，生産用具，祭祀・呪術用具が5割強を占める。そのうち箸は破片も含めて9,113点で9割を占める。溝の覆土からの出土が大部分で，特にSD070からは大量に木製品が出土した。

建物の柱穴出土木製品（図版171・172）

柱根（1～10）　2・10の時代不明以外は，中世である。柱根は心持ち材と割材を用いて作られている。前者の断面形は丸形，後者のそれは丸形と角形である。下端木口は手斧痕を残す。その木口は平坦なものがほとんどなく，突出したり斜めになったりしている。1・2・5は心持ち丸材で，直径16～18cmの木を使っている。周縁には手斧痕を残す。2の上端木口は心が腐っている。5は丸太材で周囲の一部を面取りしている。4・6～8は一辺13～16cmの角材である。4・6・7の下端木口は斜めになっている。4の上端木口近くには長さ4cm，幅5cm，深さ5cmの穴が一つある。8の下端木口はほぼ平坦である。6～8はほぼ同じ大きさの材である。SB120とSB121には建て替えがあり，柱根を地中に残したままで，新しくSB121を建てたのであろう。3は角材の隅を切り取ったため八角形の断面形となる。9の断面形は一辺14～15cmの五角形に，10のそれは丸形に近い。9の上端木口は折り取られている。

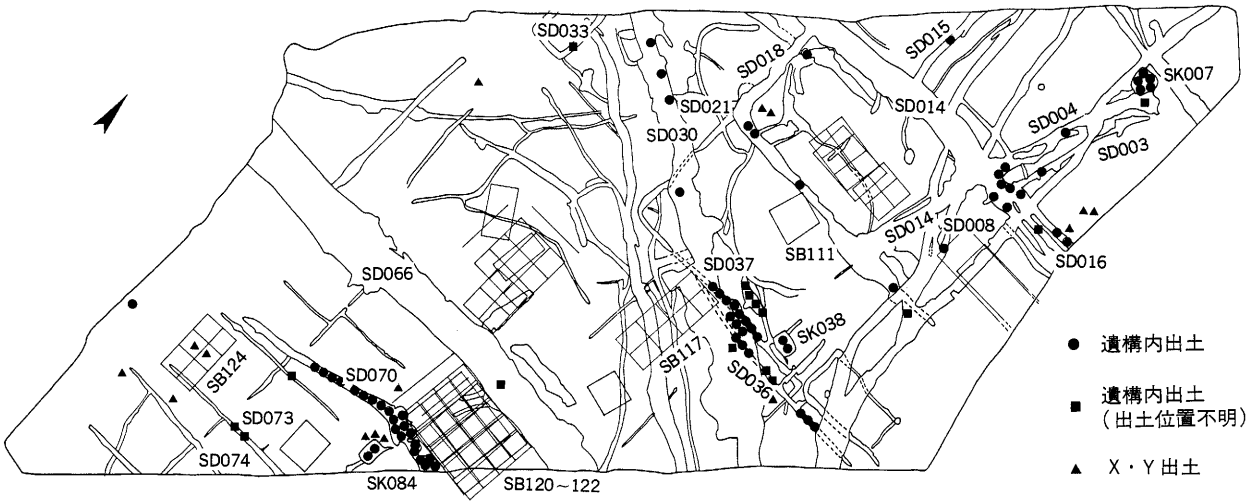
礎板（11・12）　11はSB121かSB122の，12はSB120の柱穴から出土した礎板である。11は長方形の板の一端を丁寧に隅をとり，もう一端を切り取ったままにしている。12は長方形の柾目材で，一面は手斧痕が残り，他の面は削って面取りをしている。樹種は1・5がヤマナラシ，2がキハダ，3・4・6～9がスギ，10がコナラである。

SD070出土木製品（図版173～178・185～187）

大部分の木製品はSD070内の厨房施設の一部であるSX107から出土した。種類には曲物・折敷・下駄・有孔円板・櫛・杓文字形木製品・札形木製品・塔婆形木製品・柄・漆器皿・箸・建築材・用途不明の木製品がある。

曲物（15～33）　完形のものは1点で，大部分は曲物の底板である。33は完形品である。内面に切り込みを入れて曲げ，桜皮でとじ合せた柾目板と円形にした柾目底板とを組み合せたものである。底板は直径32.8～33.6cm，厚さ10cmで，側板の高さは12.8cm，厚さ2mmである。桜皮によるとじ合せは3ヵ所あり，2ヵ所が遺存している。側板と底板には木釘等によるとじ合せは見られない。底板には刃物痕がある。33はSX107の集水用の曲物として利用されている。

曲物の底板は完形のものは1点だけで，他は半截あるいはそれ以下に切り取られている。柾目材と板目材を使用しているが，前者の方が多い。底径は14～37.6cmであり，そのうち25～27cmのものが多い。底板に孔があるもの（18・20・21）やこげ痕を残すもの（19・20・23・27・31）がある。25・29は側面の周縁に2ヵ所の木釘穴がある。両端を



第36図　江上B遺跡木製品出土地点

切り取った30や短冊型にした32は刃物痕を残し，まな板として使用されている。樹種はいずれもスギである。

折敷（34～43）　出土した折敷は底板で，完形のものはない。底板を半截されているものばかりである。41以外は柾目材を使っている。長さは長辺で18～38cmである。周縁には側板をとめる孔がある(35・42・43)。35～37はこげ痕を残す。34・39・43には刃物痕があり，まな板として使用している。

下駄（44～48）　下駄は柾目材を使っている。44は差し歯下駄の歯の部分である。歯の裏はすりへっていて，小砂がつまっている。45は連歯下駄で，長さ15.6cmである。46は連歯下駄で，後壺は後歯の前に穿たれている。歯は使用のため，すりへっていて，４mmの長さである。長さ23.6cmで右足用か。47は前が少し狭まった長方形の下駄の台部である。台部は隅の角が取られている。長さ24.4cm，幅13cm,厚さ1.5cmである。右足用。SB120の礎板に再利用。48は長さ25.8cmの連歯下駄である。後壺はやや大きくあけられている。歯の長さは1.4cmである。樹種は46・48がスギである。

有孔円板（49）　49は直径3.1～3.2cm，厚さ３mmの円盤の板に，中央に１つの孔を持つ。孔は一方より先穿され周縁には刃物痕を残す。一面は丁寧に削り調整をしている。紡錘車として使用されていたのか。板目材。

櫛（50）　50は黒漆塗りの横櫛である。棟は左右に緩やかな円孤を描き，棟頭が山形である。棟厚は0.8cmで,棟高は3.1cmである。歯が１つ１つ離れるような切込みがないことから，ミニチュア品である。

杓文字形木製品（54・55）　54・55は板目材を使っている。54はいちじく形の身で，先端は尖る。幅は身で3.4cm,柄で2.0cmである。55は身の両側と先端がうすく削られて，中央がやや厚いものである。長さ13.9cm，厚さ0.6～0.7cm，幅は身で3.4cm，柄で1.3cmである。樹種は55がスギである。

札形木製品（56・57）　56は長方形の柾目材に孔が１つある。長さ8.7cm，幅3.7cm，厚さ0.5cmである。両面には墨痕が見られない。57は板目材を長方形に切断したものである。長さ11.5cm，幅5.6cm，厚さ0.5cmで，刃物痕が残る。

塔婆形木製品（61）　61は一端を圭頭状にし，その下に２ヵ所の切り込みがあり，もう一端をとがらせたものである。長さ20.4cm，厚さ0.5cmで，最大幅は推定3.3cmである。両面には墨痕が見られない。板目材。

柄（62）　62は小刀や包丁などを入れる柄である。板目材。長さ14.8cm，幅3.5cmで，柄元にはくぼみが入る。

漆器皿（114・115・120）　皿はロクロによる削り出しによって作り出す。平高台のもの(120)と無高台のもの(114・115）がある。115・120は内外面黒漆塗りで，114は内面黒漆塗り，外底面には漆を塗らない。口径は7.4～9.8cm，高さ１～1.2cmである。114は乾燥が激しく，器面がデコボコになっている。120は高台が欠損している。樹種はケヤキ。

箸（122～181）　箸は細長い板を削り調整を加え，両端が細くなる。総点6807点。箸の中央の断面形は長方形のものと略正方形のものと三角形のもの（僅かな量）がある。長方形のものと略正方形のものは３：２の割合である。両端の切断の仕方は一方から強く押し切るものと，両端から切るものがある。切断のため先端が平担になっているものもある。長さは16.6cm～27.9cmで，平均19.3cmである。幅も３～８mmで，平均６mmである。樹種はスギである。

建築材（64～71）　64は棒状のものに２個一対の孔が３ヵ所ある。長さ47.5cm，幅2.1cm,板目材。65は細長い棒状のものの周縁に枘孔が２ヵ所ある。中央には孔が２つある。板目材。67・70は杭状のもので，一端を鋭くけずる。

用途不明の木製品（51～53・60・63）　52・53は一端に三角形状の突出部がつくもので，つくりがほぼ同じである。60は四隅を面取りした細長い棒で，一端をやや山形に切断している。63は細長い棒状の柾目材に６つの孔があり，５ヵ所に木釘が遺存している。一端は欠損しているが，現存長29.2cm，幅1.8cm，厚さ1.2～1.4cmである。60はスギ。

SD037出土木製品（図版179・188）

SD037は弥生時代のSD030を横切る中世の溝である。SD037とSD030との接する所，SB117の北側の部分に遺物が多数出土した。種類には曲物・折敷・杓文字形木製品・箸・用途不明の木製品がある。

曲物（74・77）　74は板目材の曲物底板である。推定底板は25.2cm，厚さ４mmである。77は曲物底板の両端を切断して，まな板として使用している。両面には刃物痕が残る。推定底径17.2cm，厚さ３～５mmである。柾目材。77はスギ。

折敷（79・80）　79は周縁に側板を止めるための孔がある折敷の底板である。両面には刃物痕があり，こげている所もある。柾目材。長辺32.0cm,厚さ0.5cm。80は折敷の底板を短冊部に切り取ったもので，側面には２ヵ所の切り込みがある。周縁には側板を止めた痕が残る。柾目材，長辺32.7cm，厚さ0.5cm。樹種は79がスギである。

杓文字形木製品（75）　75は柄が欠損し，身が長方形になり，先端が薄くて丸いものである。身の幅は6.0cm。

箸（182～198）　箸は総数960点である。形状はSD070と同じ。断面形が長方形のものと略正方形のものの割合は３：２である。長さは16.7～23.8cmで，特に18～22cmのものが多く，平均20.4cm。幅は４～８mmで平均６mmである。

用途不明の木製品（72・76・78）　72は板目材の一側面に鋸歯状の刻みを連続して入れたものである。先端は両方からの削りで尖がり，下端は欠損している。全体に黒っぽい。現存長5.0cm,幅1.4cm,厚さ0.6cmで,刻みの深さ約３mm。76は長方形の柾目材の一側面には「L」字状の切り込みを入れ，他の側面や先端は両方からの削りにより薄くなる。両面には削り痕を明確に残す。78は細長い棒状の板目材の一側面にえぐりを加えて，先端に半円状の突出部をつくるものである。突出部は丁寧な削り調整がされている。長さ14.9cm，厚さ1.6cm。幅は突出部で3.2cm，柄で2.2cmである。

SD030出土木製品（図版180）

SD030は遺跡の中央を東西に流れる弥生時代（後期）の溝である。この溝の北側には弥生時代の竪穴住居SB111があり，その周溝SD020がSD030に流れ込んでいる。また弥生時代の溝SD021もSD030に流れ込む。上記の３つの溝からは大量の弥生土器が出土しているが，木製品はほとんど出土していない。SD030出土のものはSD021が流れ込んでいる所からで，わずかな量である。

下駄（81）　81は連歯下駄で，台部は小判形をし後木口はうすくなっている。後壺は後歯の前に穿たれ，後歯の方はよくへっている。長辺20.1cm，幅9.6cm，台厚1.4cm，前歯の長さ1.5cm，後歯の長さ1.2cm。右足用。板目材を使用。この下駄はSD030の覆土上面（中世の遺構確認面）から出土し，中世である。樹種はスギである。

建築材（82・83・86）　82は板目材を長方形に加工し，側面に刃物痕が残る。孔が２つあり，一つの孔には木釘が残る。83は長方形の板目材の側面に孔が１つある。86は長さ109cm，幅13.7cmの板目材の側面に28.5cm，36cmの間隔で孔が３個ある。厚さ0.6～1.0cmである。樹種は83がスギである。

用途不明の木製品（84・85）　84は長さ68.7cm,幅3.5cmの細長い棒状の木で，先端が丸く，その下はややくびれて細くなる。孔は10ヵ所あり，先端にある孔は大きい。板目材。85は一端を矢羽根のように二又に分かれ，側面を面取りした棒である。二又状部分の断面は四角である。下端は欠損しているが，現存長55.6cm，幅2.2cm，，厚さ2.4cm。

その他の遺構出土木製品（図版181・182・185・188・189）

出土した木製品はSD026の97以外は中世である。

曲物（87）　87は柾目材の底板で，推定底径24.4cm，厚さ0.9cmである。

折敷（88・89・91）　91は中世のSD033出土の折敷の底板である。側板と底板がセットになって出土している。底板は縁に側板を止める孔がある。孔は12個あり，２個一対になっている。長辺30.3cm，短辺27.7cm，厚さ0.7cmである。側板は幅２～３cmである。89はSD074付近から出土している。折敷の底板を短冊型に切り取る。長辺27.8cm,厚さ0.7cmである。一面に刃物痕があり，まな板として使用している。88は細長い板目材の中央にえぐりを入れたもので，脚をとめる孔がないが，折敷の脚であろう。長さ25.6cm，幅2.5～3.5cm，厚さ４mmである。90は長方形の柾目材の木口の一端に木釘が２ヵ所打ち込まれている。折敷底板の一部か。

擂粉木（92）　92は上端が欠損しているが，現存長27.2cmの擂粉木である。擂面はよく使われている。下端の直径5.3～5.8cm，上端の直径3.7～4.3cmである。木には心持ち材を利用している。共伴遺物から室町時代前半である。

杓文字形木製品（94）　94は身の先縁を半円状にする杓文字形木製品である。長さ24.8cmで,柄の幅1.9cm,厚さ0.7cm，身の幅3.6cm，厚さ .4cmである。板目材。92の樹種はウワミズザクラである。

櫛（93） 93は黒漆塗りの横櫛である。半分程欠損しているが，棟が左右に緩やかな円孤を描き，棟頭が丸くなり，棟の端は直線になって角張る。棟幅は3.5cmで，歯の長さは2.6cmである。歯の数は1cm幅に9本ある。樹種はイスノキ。

塔婆形木製品（95） 95は細長い板目材の一端を圭頭状に，もう一端を鋭く尖らせた塔婆形木製品である。圭頭状の下に深さ2mmの切り込みを2ヵ所に入れる。両面には墨痕が見えない。長さ26.7cm，幅2.8cm，厚さ0.5cmである。

漆器皿（116～119・121） 皿には輪高台の皿(118・119・121)，平高台の皿(116)，無高台の皿(117)がある。117～119・121は内外面黒漆塗りである。116は内面黒塗りで，外底面には漆を塗らない。118の外底面に「X」の形の引っ掻ききずがある。口縁外面にはロクロ形成の段が明瞭に残る。119は内底面に筆で朱書した文様がある。

箸（199～213・215～218・220～223・225～231・233～241） 箸の断面が略正方形のものと長方形のものは2：3の割合である。長さは16.2～25.3cm，幅は0.4～0.8cmで，平均は長さ19.9cm，幅6mmである。

建築材（97・99・101） 97は弥生時代の溝SD026から出土している。細長い柾目材を加工し，両側を削り取り，中央に突出部をつくる。101は一端を三角形に尖らした細長い柾目材に，6.1cm×3cmの長方形の孔がある。

用途不明の木製品（96・98・100・102） 96は径0.9cmの丸棒である。両端は欠損しているが，現存長30.9cm。何かの工具の柄であろう。98は偏平な棒状の板目材の一端を両方から削り尖らせ，もう一端を丸く削る。長さ31.3cm，幅2.8cm，厚さ2.0cmである。100は長さ76.0cm，幅18cmの細長い材の一端を削り杭状にする。102は細長い柾目材に切り込みを入れて両端に突出部をつくる。その切り込みは一方が少し凹み，もう一方が「⊔」形をする。突出部の一方は欠損しているが形状から機織具の一部か。長さ37.9cm，幅3.5cm，厚さ1.8cmで，両面の一部にこげ痕がある。96はスギ。

遺構外出土木製品（図版183・184・189）

曲物（103～105） 曲物は完形品がなく底板だけである。底板には柾目材を使用している。103はSD070の南側から出土したもので，推定底径9.6cm，厚さ0.4cmである。104は推定底径16.4cm，厚さ0.7cmで，やや変形している。両面には漆が付着している。X26—30Y41—45出土で，SB117に伴うのか。105は推定底径25.4cm，厚さ1.2cmの底板の両端を切り取ったものでこげ痕がある。両面には3ヵ所に木釘孔があり，2ヵ所に木釘が残っている。また，刃物痕があり，まな板として利用されている。X21—25Y61—65出土。104・105はスギである。

折敷（109） 109は折敷の底板を短冊型に切り，一端を刃物で削りギザギザにする。周縁には側板を止める孔がある。

下駄（106・107） 106・107は柾目材を利用した連歯下駄である。長さが長いので共に男性用か。106は後歯の方がよくすりへり，後壺の孔は大きい。長さ30.2cm。107は木口が直線的で側面はやや丸くなる。長さ29.5cm。

鍬（113） 113は柾目材を長円形に形どり，身部の先端と両側面を尖らす鍬先である。刃部に切り込みがあり，「U」字状の鉄製鍬先が付くのであろうか。柄孔は11cm×7cmの長円形でこげている。頭部の周縁は丁寧な削り調整を施す。刃縁は欠損しているが，現存長35.1cm，厚さ1.7～2.1cmである。X21—25Y61—65の地山上面から出土しており，弥生時代と中世の土器分布状況から考えると中世である。106・107はスギ，113はクヌギである。

斎串形木製品（110） 110は頭部が平担で，一端を削り尖らせた斎串形木製品である。柾目材。長さ17.1cm，幅1.6cm，厚さ0.5cmである。両面には墨痕が見られない。X20—25Y25—30出土。

箸（214・219・224・232・238） 出土はわずかである。長さ17.5cm～20.5cm，幅0.4～0.7cmである。樹種はスギ。

用途不明の木製品（108・111・112） 108は細長い柾目材の一端を削り尖らせ，周縁に穴が貫通している。長さ11.4cm，幅1.3cm，厚さ0.9～11.1cm。111は丸棒に，削りを全周させて頭部を作り出し，下半部を少し削り上半部とに段をつくる。長さ17.1cm，厚さ2.8～3.2cm，幅4.5cm。頭部と体部のある木偶形木製品とも考えられる。県内では上市町弓庄城跡〔上市町1983〕に類例がある。112は一隅が斜めに切られている長方形の板目材の中央部に長方形のえぐりがある。そのえぐりの部分は長辺12.4cm，短辺3.2cm，深さ1.5cmで，その底が削り成形のままでデコボコになっている。長さ19.4cm，幅6.2cm，厚さ3.2cmである。111・112はスギである。

II　総　　括

II 総 括

A 遺跡群の概要

上市町管内において，北陸自動車道建設に先立って発掘調査を実施した遺跡は，神田・正印新・下経田・中小泉・飯坂・江上A・江上B・東江上の8遺跡である。これらはすべて昭和48・49年に行われた事前の分布調査によって発見されたものである〔橋本1974〕。それまでこの地域は，遺跡地図上まったくの空白地帯であった〔県教委1973〕。遺跡群は第17図に示したように，縄文時代から江戸時代に至るまでのものがあり，それらはおよそ4.000年に及ぶこの地域の変遷史を物語る。

遺跡群はすべての時代に亘って継続するものはなく，断絶と移動をくり返している。また，建物や井戸・墓・水路などの遺構を残していてその目的の明らかな時期と，数点の遺物があるだけでその意味が判然としない時期がある。全体を通してみると，1.弥生時代　2.奈良時代初頭　3.鎌倉・室町時代　4.江戸時代中期の4つの時期に遺構が多く，特徴的である。発掘面積が限られるとはいえ，各々の時期にこの地域に生活した人々の社会に大きな動きがあったことを意味するものと考えられる。いわば画期ともいえるこれらの時期については，別に詳しく説明するが，ここでは全体的な状況を簡単に記しておきたい。

遺跡群の中で最も古い時期は，江上B遺跡の縄文時代中期末である。この場所は標高が約16mで遺跡群の中でも最も高いところである。遺構確認面が砂礫層であり，上市川によって形成された洪積世の河岸段丘面で，立山町の常願寺川扇状地末端部の様相と共通している〔県教委1983〕。そこは当時一面の森林であった可能性が高く，そのことは，江上A遺跡の出土種子の構成からも推測できる。このようなところでは，縄文時代の早い段階からの居住が可能である。江上B遺跡では土器片だけの出土であったが，周辺に縄文時代の小集落が点在していたことであろう。下経田・飯坂・江上B遺跡の縄文時代後・晩期の遺物の出土も，そのような森と沖積平野の境に人々の居住地があったことをうかがわせる。

弥生時代は正印新・江上A・江上B遺跡で集落がみられ，中小泉遺跡で水路と堰があり，飯坂遺跡で墓地がつくられている。この場所は第27図と第28図に図示したように，標高14～15mで一段低く白岩川か上市川の旧河道にあたる。中小泉遺跡にみられる水路はそのなごりの河川であろう。このことは稲作を知った人々が，まずそんな自然河川に沿った湿地帯を水田として開いていったことを示している。その時期は弥生時代中期である。稲作農業は次第に発展し，後期になるとあちこちに小集落が形成され，共同墓地を中心にして径約2kmの範囲に一群をなす散居村的景観を呈する。しかしそれも長続きせず，後期末には，水路の中にみられる砂層の堆積状況などから推測されるように白岩川や上市川がしばしば氾濫し，水田を埋め集落を破壊していったようである。

弥生時代の中期から後期にかけての時期は「小氷河期」にあたっており，気候はやや寒冷だが海面が低下し平野が拡大した時代であったらしい。そうであれば背後に山岳地帯をかかえるこの地域では，山岳部に水分が凍結されて，後世にしばしば記録されているような河川の氾濫は比較的少なかったことであろう。弥生時代末期に始まった気候の温暖化は山岳部の雪をとかし河川を氾濫させ，この一帯は幾たびも洪水に見舞われたものと考えられる。この地域での村の廃絶と移動の理由の一つが，そのような気候の変化と関係がありそうである。

古墳時代と奈良時代は，各遺跡で散発的に遺物が発見されているだけで，その実態は不明である。その中で東江上遺跡は特異な存在である。この遺跡は7世紀末～8世紀初頭の集落で，5棟の掘立柱建物と3棟の倉庫風の建物と竪穴住居跡で構成され，周囲が溝で画されるらしい。存続時期が短いことなど問題を残すが，調査担当者は円面硯の出

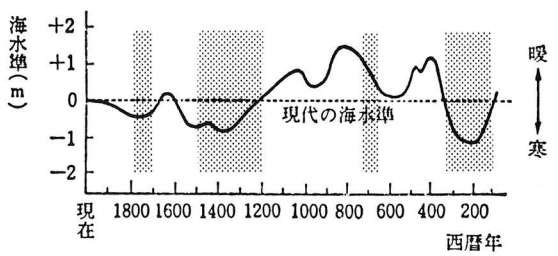
土などから，当時このあたりを領域とする村落の長（里長クラス）の居住地と考えている。東江上遺跡は標高15ｍの比較的高いところである。このことはまた古墳時代以後の集落がこのような高地へ移っていったことをも物語っているようである．。

鎌倉時代は神田・江上Ｂ遺跡で掘立柱建物群がある。総柱の掘立柱建物は県内では中世前半期に一般的にみられるあり方である。平面積の違いで，大型（100～140㎡）中型（50～80㎡）小型（20～40㎡）の３種に分けられる。神田遺跡のように各種が１組になって整然とした屋敷構えをなすものと，江上Ｂ遺跡のように中・小型のタイプが主体的になるものがある。その違いは居住者の階層差を示すものとみられる。遺構編で，橋本正氏は前者を公的な性格をもつもの，後者を一般的集落と考えたが，公的であるかは別としておそらく有力武士あるいは富豪農民の居住地であったろう。

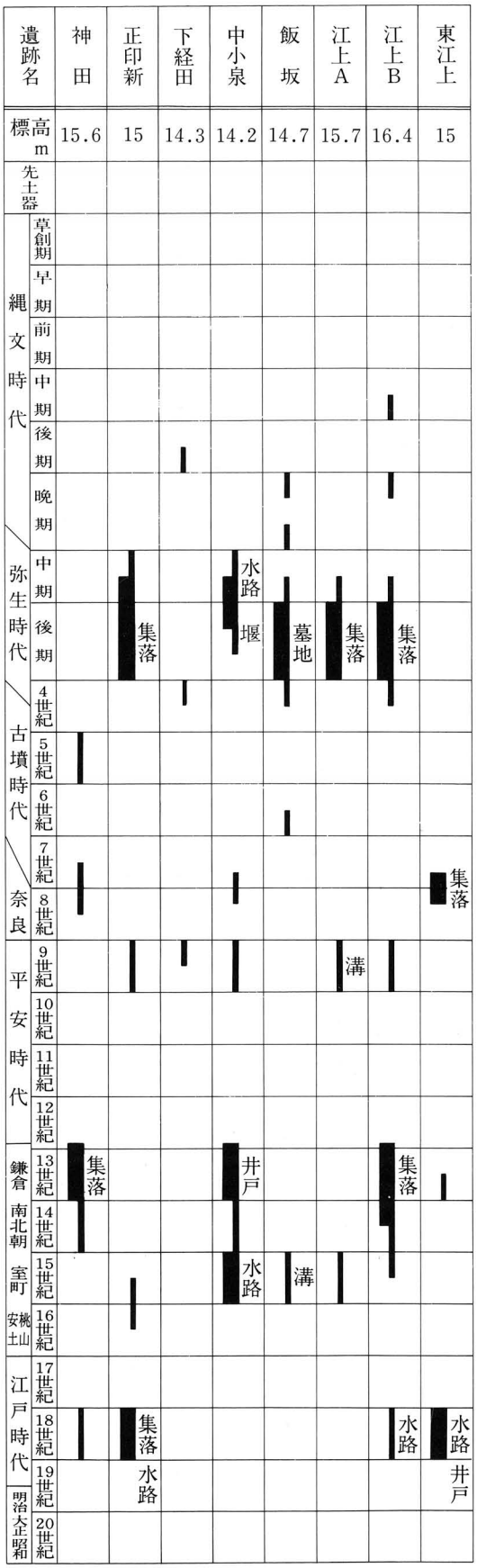
鎌倉・室町時代に入ると中小泉遺跡や飯坂遺跡でも井戸や溝がみられるように，再び低地での活動が認められる。この時期もまた世界的に寒冷化した時期で，氾濫の少ない時期にあたる。

江戸時代中期は正印新で建物と井戸・水路がつくられ，東江上でも幅20ｍ以上の水路と井戸が検出されている。18世紀の江戸中期享保年間は，全国的に新田開発が進められた時期である。杉木文書所収「高免帳」には，正印新領における新田開発の記載がみられる〔上市町1970〕。これらの水路の跡は，その当時大々的に行われた新田開発の跡を示しているのであろう。

以上の遺跡群のあり方は，この地域に生活した人々の洪水との戦いの歴史を物語るようである。第18図はフェアブリッジによる西暦紀元後の海水準変動を示したものである。その数値は地域によって違いがあるらしいが，変化の波はほぼ承認されている。17世紀に上市川がひんぱんに洪水をおこした記録があることや，遺跡群が低地に残された時期が寒冷な時期と対応することはついこの間まで気候の変動によって，人々の生活が大きく左右されていたことを示しているようで，興味深い。



第18図　フェアブリッジによる西暦紀元後の海水準変動〔横山　1980〕
網点部分は遺跡の形成された時期を示す



第17図　遺跡群の時代

B　弥生時代の時期区分

今回の発掘調査で得た資料の中で，最も多いものは弥生時代から古墳時代初めの土器群である。土器は住居跡や水路などの遺構や，一緒に出土した木器などの時代を決定する最も有効な役割を果たす。この時代は日本に稲作農耕が伝わりそれが定着する時代であり，その過程で社会のしくみや生活の様子が急速に変化した時代である。土器による時期区分とその細分化は，そのような時代の変化をより詳しくたどっていくために必要な作業の一つである。

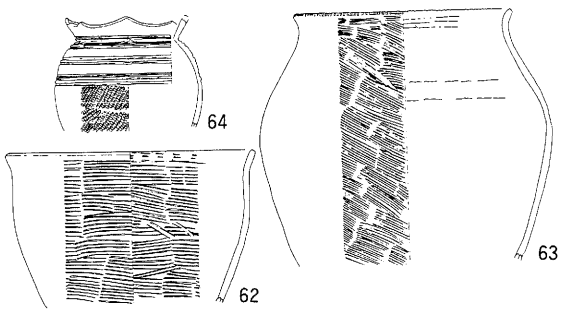
県内におけるこの時期の時期区分は，富山県史『考古編』で上野章氏によって提示されたものが基本的なものといえよう〔上野1972〕。それによれば，中期は初頭期・石塚Ⅰ期，石塚Ⅱ期，石塚Ⅲ期，石塚Ⅳ期の５段階，後期は前半と後半に二分される。それは北陸への弥生文化の伝播を３段階にわけて，その発展と地域性についてまとめた橋本澄夫氏の考え方に照らしたものである〔橋本1966〕。橋本氏はその後新たな資料を踏えて，北陸の弥生土器研究の現状を整理している〔橋本1975〕。

それらの研究成果によって江上弥生遺跡群出土の土器群を時期区分すると，中期はⅠ～Ⅲ期，後期はⅠ～Ⅴ期にわけられよう。後期Ⅳ期・Ⅴ期は，吉岡康暢氏によって設定された塚崎Ⅱ式，塚崎Ⅲ式の段階にそれぞれ対応できるものである〔吉岡1976〕。この時期は古墳の発生をいつの時点で認めるかということで，古墳時代に含める説と弥生時代終末期におく説がありまだ結着をみていない。どちらに分があるのかは即断できないが，土器型式の連続性からここでは後期Ⅳ期・Ⅴ期としておきたい。なお，橋本正春氏は吉岡氏の編年を県内の遺跡にあてはめて詳しく説明している〔橋本1982〕。

中期Ⅰ期（第20図）　北陸における弥生文化の始まりは中期にはいってからであり，前期の段階はまだ縄文文化の段階であるらしい。氷見市大境洞窟第Ⅴ層出土土器群がその指標とされ，中期初頭に位置づけられている。

半隆起線や沈線による工字文風の文様をめぐらす精製土器と，全面に条痕を施す粗製土器があり，粗製土器は口唇部に刻みを施したり口縁部に指頭圧痕を施すものがある。正印新遺跡から出土したが明確な遺構がない。

中期Ⅱ期（第21図）　石塚Ⅰ期・Ⅱ期の時期であり小松式にあたる。この時期は刷毛目原体である櫛状具によって，甕や壺の胴部に平行線文，簾状文，擬流水文，波状文，扇状文などを施す。口唇部に×印状の文様を連ねたり，口縁部内面に綾杉状刺突文を施すものもある。櫛状具を押圧して沈線を描くもの（刷毛目沈線）もこの時期に含まれるものとみたい。第21図１・２・25は，土器・石器編で前期の遠賀川式土器として報告したものである。佐原真氏はこの刷毛目沈線が，



第20図　中期Ⅰ期の土器

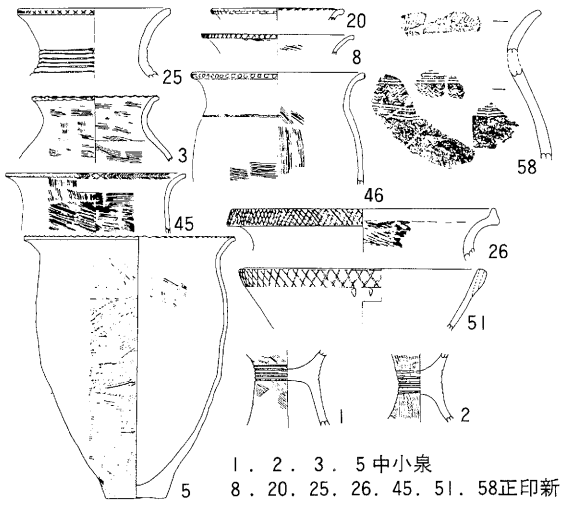
時代	弥生時代 中期			弥生時代 後期			古墳時代		
段階	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	
従来の型式（註）	柴山出村	高田a	高田b	小松	戸水B	猫橋Ⅰ	猫橋Ⅱ	次場上層	塚崎Ⅱ	月影	高畠（古府クルビ）
正印新	―	―	―						
中小泉		―	―	―					
飯坂		―	----	―	―	―	―		―
江上A		―	----	―	―	―			
江上B		―	----	―	―	―	―		
県内の遺跡	大境第5層	石塚	長	・飯坂3号方周	・南太閤山Ⅰ 5号方周	・南太閤山Ⅰ 5号墓	・上野	・南太閤山Ⅰ 13号方周	・平桜川東	・桜谷	・矢ノ方	・利波

註〔吉岡 1976〕〔橋本 1975〕

第19図　江上弥生遺跡の時期区分

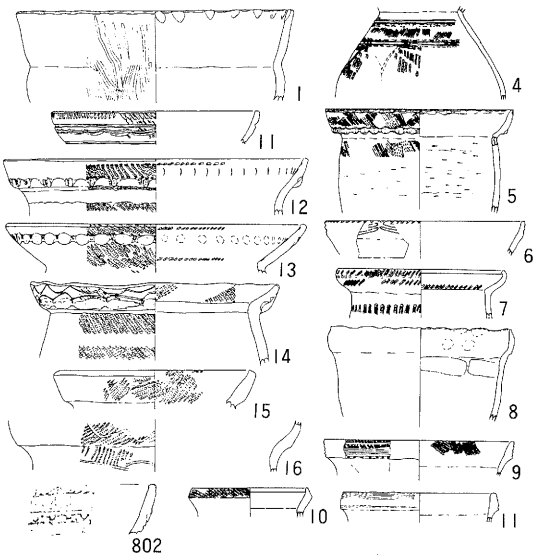
山口県響灘沿岸の貝殻文土器の仲間にみられることや，その文化が島根県から京都府に至る日本海沿岸にみられることを指摘し，その文化が前期後半から中期初頭にかけて，日本海沿岸を北上しながら伝播していったという〔佐原1983〕。しかし，石塚Ⅰ期に遠賀川式に類似した土器があることや，小松式に属する石川県次場遺跡出土の小型長頸壺に刷毛目沈線があることなどから，１・２・25の土器がその文化の波にのった遠賀川式土器であったとしてもそれを中期初頭あるいはそれ以前にさかのぼらせるには，まだ検討の余地があるように思われる。

この時期はそのような西日本的な土器群（近畿ルートの櫛描文土器，山陰ルートの遠賀川式土器）に加えて，東日本的な縄文を多用する弥生土器いわゆる天王山式土器〔坪井1953〕がある。天王山式土器は縄文を地文として口唇部



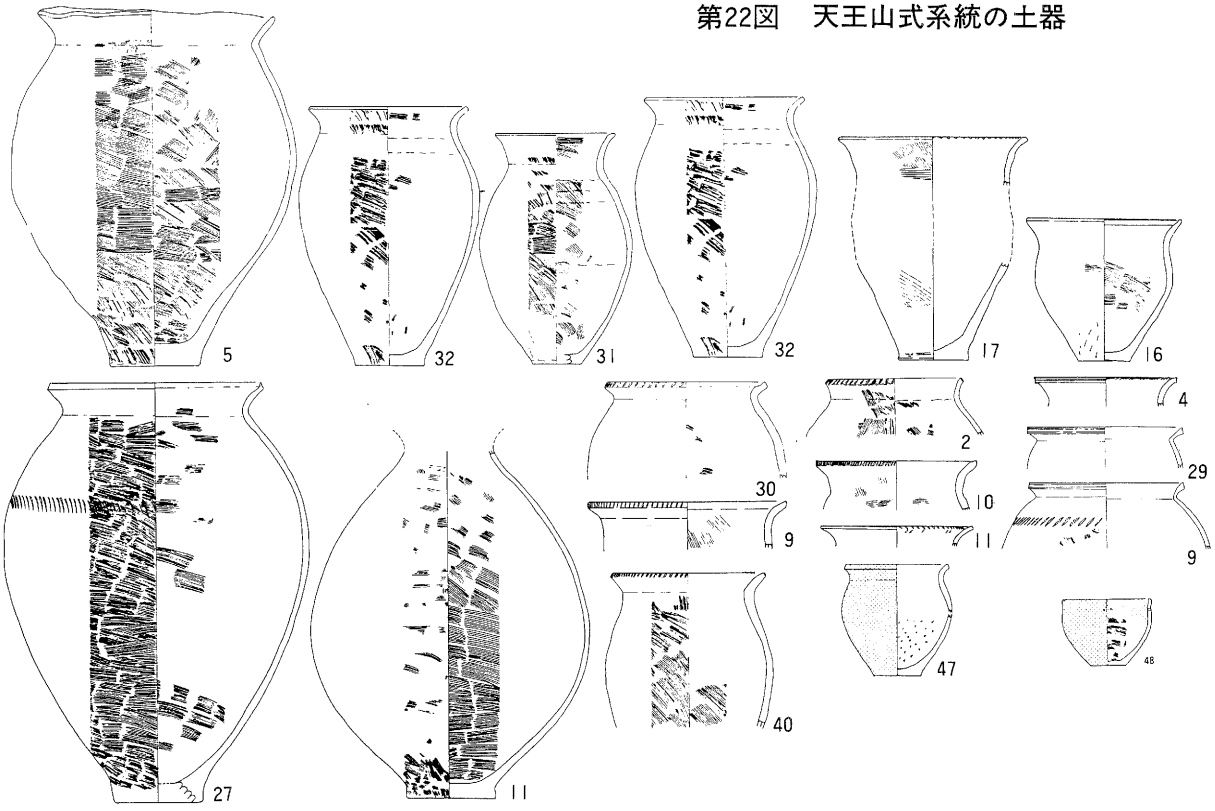
1．2．3．5中小泉
8．20．25．26．45．51．58正印新

第21図　中期II期の土器



4～11飯坂　　1・11～16江上B　　802 江上A

第22図　天王山式系統の土器



第23図　中期III期の土器

に刻みをつけたり，口辺部や胴部に平行沈線文や連弧文・指頭圧痕文・列点文などを施すものである。江上Ａ・江上Ｂ・飯坂遺跡から出土している。

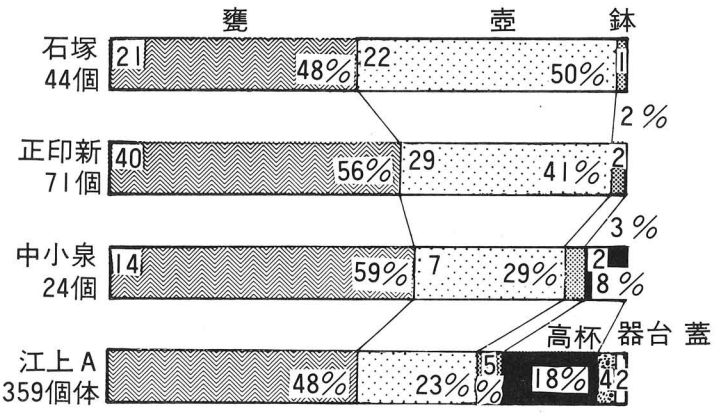
天王山式土器は中期に属するとする説と後期にまで下るとする説があり，意見がわかれている。飯坂遺跡では後期Ⅰ～Ⅱ期にかけてつくられた方形周溝墓の盛土下の旧表土から出土したことから，中期に属するものと考えられる。高岡市頭川遺跡では小松式土器と伴出しており同時期と考えられた〔上野1974〕が，正印新・飯坂遺跡では伴出していない。中期の中でも若干のズレをもっているようでもある。橋本澄夫氏はその時期を柴山出村式（中期Ⅰ期）の条痕文が残存し初期の櫛描文が波及する時期のものと考えている〔橋本1975〕。

中期Ⅰ期はまだ縄文時代的で東日本的な様相の強い時期であるが，天王山式土器はそれに直結していく土器群といえ，いわば在地的な土器群である。中期Ⅱ期はそのような中へ西日本的な土器群がはいりこんできたものではなかろうか。それぞれの土器を使った人々は，それぞれ別個の集団として当初存在したもののようである。天王山式土器だけを出土する遺跡があることや，天王山式土器と櫛描文土器が共伴する遺跡もあることは，この時期に両集団間の接触と融合があったことを予想させる。櫛描文土器を使った集団は，稲作技術をたずさえていたことは明らかで，天王山式土器を使っていた集団より優位にたつことができたのであろう。そして，本格的な稲作の開始される中期Ⅲ期以後は，天王山式土器の使用は行われなくなっていったのではなかろうか。

中期Ⅲ期（第23図）　石塚Ⅲ期・Ⅳ期の時期であり戸水Ｂ式にあたる。この時期は甕の口縁部をヨコナデするものが多い。また口縁端部が面をなしそこへ１～２条の凹線文や刻みをめぐらすものがある。胴部にも櫛状具による刻みをめぐらしたり，口縁部内面に退化的な羽状刺突文が残る。胴部の整形は内外面ともハケメである。

口縁部をヨコナデしたり凹線文を施すなどの特徴は後期に連なるもので，橋本澄夫氏はこれを後期前葉に位置づけている〔橋本1975〕。しかしここでは，正印新遺跡で中期Ⅲ期と後期Ⅰ期との間に集落に大きな変動があり，中期に含めておきたい。

江上Ａ遺跡の土器　江上Ａ遺跡の後期土器はⅡ・Ⅲ期が主体で，若干Ⅰ期の土器を含むと考えられる。中期土器との品種構成をみると明らかなように，供献土器である高杯・器台の著しい増大が特徴的である。全体の20％近くを両者が占めている。このことは「日常的生活の中に供献を主とする行事が急増したことを物語っている」〔鎌木1966〕。そしてそれらは赤く塗彩したものが多い。また小型土器がおよそ100個体近くもあって多いことや壺や甕に特別大きなものがあるのも特徴的である。このような土器群は供献を主とする行事，すなわち稲作農業の発展に伴ってさかんに行われるようになる農耕祭紀に用いられたものと考えられよう。高杯には食物が盛られ，酒などを入れた壺が器台にのせられ，倉庫に納められた壺の中の穀霊にささげられ，豊作が祈念されたものであろうか。また，江上Ａ遺跡の甕は容量が約１～６ℓまでのものが一般的であるのに比べ，約15ℓ入り（376）や約27ℓ入り（116）の大きなものがある。壺は約10ℓ未満のものが多い中に，20ℓ（28・30）の大きなものがある。大型の甕は，祭紀が行われる時に，村の人々がここに集まってともに飲食する時に用いられたものとみられるし，大型壺は籾すなわち穀霊がやどる種の保存のためのものであったろう。



第24図　器種構成の変化

さて後期の時期区分は，橋本澄夫氏の猫橋Ⅰ式・猫橋Ⅱ式の前半と後半に二分する考えがある〔橋本1966〕。猫橋Ⅰ式は幅がせまく内傾する口縁帯に

２～３条の凹線をめぐらすもの，猫橋Ⅱ式は外傾する口縁帯の幅がひろくなり，比較的細く浅い凹線を櫛状具をもちいて施したものである。口縁帯の拡張とそこへ施される凹線文が多条化する変化をとらえている。同様に上野章氏も前半期と後半期にわけ，前半期を氷見市柳田遺跡のもの後半期を高岡市下佐野遺跡Ａ地点のセット土器を指標としている。その視点は橋本氏と大旨変わりがないであろう。

土器・石器編ではその成果をもとに，口縁部に胴部の形態，胴部内外面の整形手法などに数種あることで，２～３段階があることを指摘しておいたが，県内の他遺跡のあり方も踏えて３段階にわけ，また塚崎Ⅱ式・Ⅲ式をそれぞれⅣ期・Ⅴ期として加え５段階を設定する。弥生時代後期は一般に紀元後２世紀と３世紀の約200年間があてられる。またⅢ期とⅣ期の間が紀元300年と考えられている。そうであれば，後期各Ⅰ期が約50年となるが実際はもう少し短い期間のように思われ幅をもって30～50年と考えると，後期Ⅰ期～後期Ⅴ期までは約150～250年間の時間幅をもつことになろう。ただし，本遺跡群はⅤ期にはほとんどみるべき遺構・遺物はない。

後期Ⅰ期　壺は，胴部の張りが強く胴部最大径が中位かやや下位にある。胴部外面はヘラミガキとハケを施すが，内面はハケとナデによることが多く粘土帯の接合痕をよく残している。壺の頸部は口縁部で急に外反度を強くし，口唇面が斜め上を向くことが多い。口唇面は粘土帯を貼付けたり上面に押しひろげて面をつくり，そこへ２～３条の凹線をめぐらすものがある。頸部と胴部の境に粘土帯をめぐらすものは，その上に刻みをつけることが多いが，それは中期の壺にみられる粘土帯へ押圧するものの転化とみられる。長頸壺の頸部は胴部に比べて長いものが多い。胴部に櫛状具による平行線文や波状文をめぐらし，中期的な様相が残存する。底部は底面が凹み底になるものが多い。

甕は口唇面が斜め上あるいは横を向きそこに２～３条の凹線をめぐらすものと，くの字外反のものがある。胴部外面はハケ内面はハケとハラケズリによるものがあるが，概してハケのものが多い。

高杯は適当なものがないが，杯部が中位で屈曲して口縁部が外反するものだが，口縁部がやや直立に近い立ちあがりでしかも短く，脚部は裾ひろがりのラッパ状のものになろう。

器台は口縁部が貼付けによって面をつくりそこへ２～３条の凹線をめぐらす。脚部は太いラッパ状のものであるがそこには３段以上の穿孔装飾を施す。

後期Ⅱ期　壺は胴部の張りが強いがややまるみをもち，胴部最大径が中位にある。胴部内外面の整形は後期Ⅰ期とあまり変化ないが，口唇部が貼付けや押しひろげでなく内側に段をもって立ちあがり複合口縁となる。その幅はまだ狭い。

甕は壺の口縁部と同様内側に段をもつ複合口縁のものと，くの字外反のものがある。複合口縁部は幅が狭く無文のものが多いが，２～３条の凹線文をめぐらすものもある。胴部外面はハケで内面はヘラケズリするものが多くなる。

高杯は杯部が中位で屈曲し，口縁部が外反するものが多いが，杯部の長さはまだ短い。

器台は口縁部や脚台部に８～10条ほどの平行沈線（擬凹線文）をめぐらすものが現われる。

後期Ⅲ期　壺は胴部がまるくなり，胴部最大径が上位にある。胴部外面はハケやヘラミガキするが，内面はヘラケズリするものが多い。複合口縁部は巾が広くなり，外反する傾向があらわれる。頸部と胴部境に隆帯をめぐらすものは刻みを付すことを省略する傾向にある。

複合口縁の甕は壺と同様に，口縁部の幅が広くなり外反する傾向がある。口縁部は無文のものが多く擬凹線をめぐらすものは少ない。くの字外反の甕は底部が小さくなり丸底に近いものがあらわれる。胴部外面はハケ，内面はヘラケズリし，胴部最大径は上位にある。

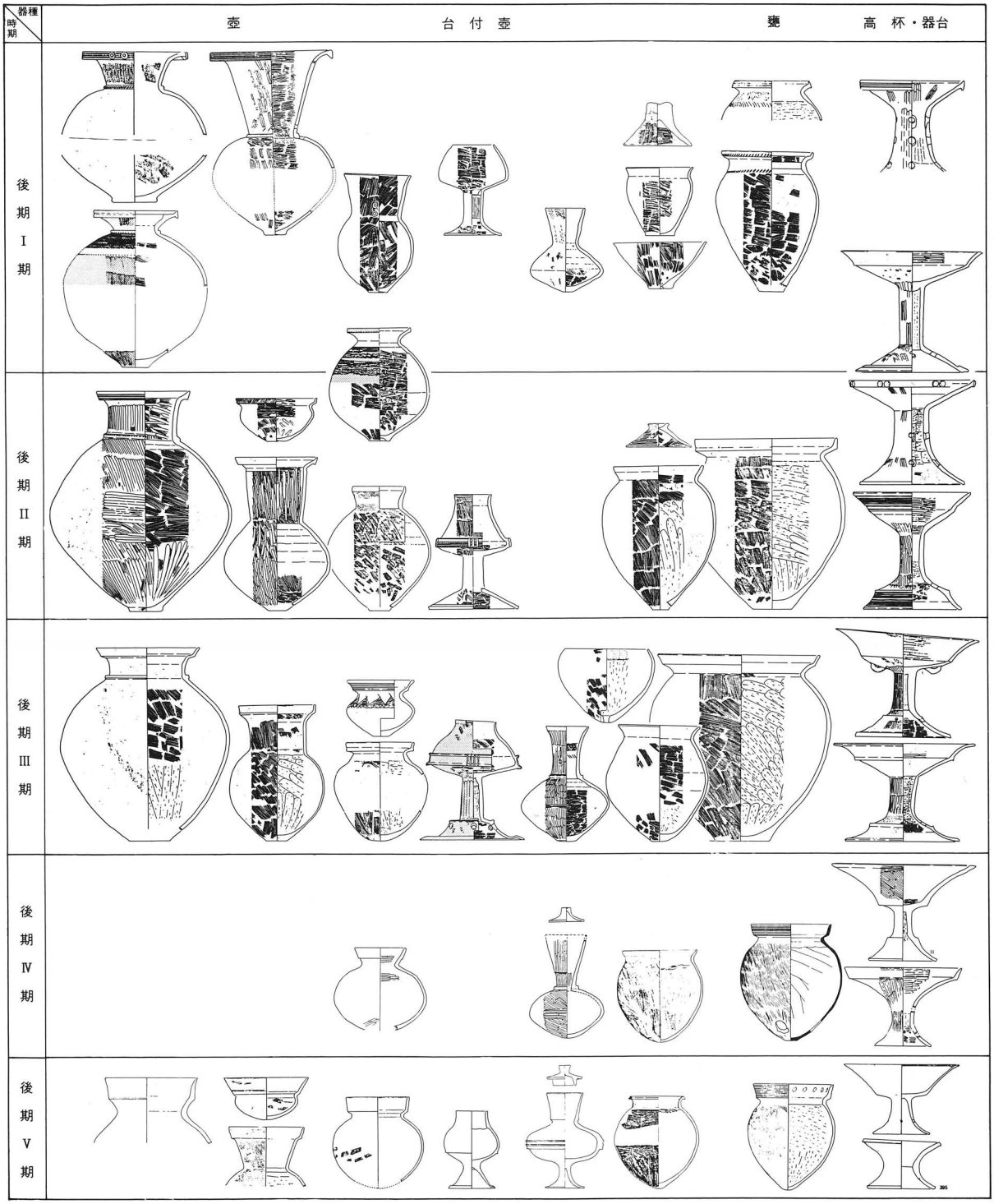
高杯や器台は口縁部がますます長くなり，外反度を強める。器台は太いラッパ状の脚部のものはなくなり，筒状の脚柱部をもつものに変わる。

後期Ⅳ期　壺や甕や鉢の複合口縁部はますます幅広くなり外反し胴部はまるみを増し底部径は小さくなる。高杯や器台の口縁部はますます長くなり外反度を増すとともに，脚部の短小化の傾向がはじまる。

後期Ⅴ期　壺や甕や鉢の複合口縁部はさらに長くなり，外反度を強める。甕は口縁端部がうすく尖り，内面に指頭圧痕を残すものがある。また口縁部に６～９条の擬凹線文を施すものが多い。

高杯は口縁部が長く外反することはⅣ期と同様であるが，脚柱部はなくなり，小さくラッパ状に開くだけのものになる。Ⅳ・Ⅴ期のものは本遺跡群の中では正印新・江上Ｂ遺跡でわずかにみられるだけである。

後期は，壺の記号文や長頸壺や蓋・有孔鉢などの存在から畿内的な様相とともに，高杯や器台脚部のＳ字状スタンプ文や凹線文や鋸歯文などの山陰山陽地方の様相や，台付甕，パレススタイルの壺など東海地方の様相を加えている。各地域との交流の度合が時期によって異なるようであるが，今後の検討課題である。



第25図　後期土器の時期区分と主要器種の変化

C　江上弥生遺跡群について

1．はじめに

富山県内には130以上の弥生時代遺跡が知られている。しかし発掘調査などが行われ，その性格がある程度わかる遺跡は20ヵ所に満たない。[註①] しかも集落遺跡，墓地遺跡が単独で調査されることが多く，集落と耕地（水田）と墓地が一体となった村落の景観を知りうる例は，今まではなかった。

今回上市町で発見された正印新・中小泉・飯坂・江上Ａ・江上Ｂの５遺跡は，弥生時代中期と後期に形成されたもので，相互に関連性があると考えられる集落（正印新・江上Ａ・江上Ｂ）耕地（中小泉）墓地（飯坂）からなる。この５遺跡（江上弥生遺跡群と総称する）は飯坂遺跡を中心とする径約２㎞の圏内にあり，そこを領域とした農業共同体の村と考えられる。

弥生時代は今からおよそ2300年ほど前に，日本列島へ大陸から稲作技術が伝わり，それまでの採集経済の段階から稲作を中心とする生産経済に移行した時代で，今日の日本人の生活の基層を形づくった時代といわれている。そして，農業生産は鉄器の普及とあいまって生産力を高めていくが，水田造成のための前提となる各地域の自然条件や，各地域の人間集団がかかえている労働力などの違いによって，集団間あるいは集団内の人々の間に階級の差があらわれた時代でもある〔和島1966〕。

弥生時代の集団関係のあり方については，和島誠一氏，近藤義郎氏，都出比呂志氏，高倉洋彰氏らの研究がある〔田中1979〕。それらによれば，弥生時代の集団関係は世帯共同体（単位集団・家族集団）農業共同体（生産集団・地域集団・氏族）政治的結合体（共同体・地域統一集団・政治的地域集団・部族機関）の各位の集団から構成されている。

世帯共同体は竪穴住居数棟と高床倉庫と納屋などから構成され，集落遺跡として顕在化する。日常的な生活の単位で，一定程度の耕地の所有と管理（給排水・施肥・除草など）も行う家族体とされる。

農業共同体は複数の世帯共同体を包括しており，耕地の造成や水路の開削，全体的な維持管理などで，共同してことにあたる集団である。彼らは血縁関係で成員相互が強固に結ばれており，近藤義郎氏はそれに氏族という概念をあてている〔近藤1983〕。景観的には複数の小集落ないし一箇の大集落（複数の世帯共同体の集住するもの）と耕地の他に，共同の墓地を含んだ村を構成する。

政治的結合体は耕地の拡大や集落の増大に伴い，その所属する複数の農業共同体の間に生じる紛争や利害の対立を調整し，農業共同体が相互に共存していくためにそれぞれの長が集まって構成された調整機関である。農業共同体を統括しその領域を確保していくとともに，他の政治的結合体との経済交流や政治的同盟関係をもとり結ぶ。

吉岡康暢氏は各々の統率者を，「家長」「邑長」「首長」と呼んでおり，各位の集団の長を呼ぶのに簡便である。〔吉岡1978〕。彼らは単にその代表者であるばかりでなく，共同体全体をまとめ発展へ導いていく使命を帯び，様々な権限がゆだねられた。それが結果として集団間あるいは集団内の人々の間に，支配・被支配の関係を生じることになったと考えられている。

弥生時代における政治的結合体は遺跡としては把握しがたいものであるが，古墳時代の初頭に全国的に出現する前方後円墳や前方後方墳の被葬者が，その首長と考えられている。古墳時代は各地域の政治的結合体の長と畿内の政治的結合体（大和連合政権）との間に政治的同盟関係が成立した時代である。

弥生時代中・後期は，農業生産の発展に伴い，各地域の農業共同体の間で政治的な編成が進み「後の群程度，地域によってはそれよりさらに狭い郷程度の領域を単位」〔甘粕1975〕とした政治的結合体が出来た時期である。

古墳時代前期の前方後円墳や前方後方墳が，各地域の政治的結合体の長の墓であれば，それを生み出し，それに連なる農業共同体，世帯共同体を，弥生時代遺跡群の分布の中から見い出すことが出来るはずである。

県内の前方後円墳や前方後方墳は，高岡市桜谷１号墳（前方後方墳？）同２号墳（前方後方墳？），小矢部市若宮古墳(前方後円墳)，婦中町王塚古墳（前方後方墳）同勅使塚古墳（前方後方墳）が知られている。また近年福岡町板屋古墳〔酒井1982〕小杉町五歩一古墳〔岸本1977〕同変電所西古墳，舟橋村舟橋天神堂古墳〔池野1983〕などの前方後方墳と考えられる墓の発見が伝えられている。

古岡英明氏は県内の古墳群の分布を(1)二上山・氷見ブロック(2)小矢部ブロック(3)音川ブロック(4)立山ブロック(5)黒部ブロックの５地域に分けて説明している〔古岡1973〕が，以上のような前方後円墳・前方後方墳の分布と弥生遺跡群の分布を重ねてみると，ほぼ同様に次の６つの対応関係を見い出すことができる。

(1)氷見市域を母体とする桜谷１号墳・同２号墳，(2)小矢部川下流域を母体とする板屋古墳，(3)小矢部市域を母体とする若宮古墳，(4)射水丘陵・平野を母体とする五歩一古墳・変電所西古墳，(5)山田川・井田川流域を母体とする王塚古墳・勅使塚古墳，(6)白岩川・上市川流域を母体とする舟橋天神堂古墳である。前期古墳は未発見であるが，この他にも(7)庄川下流域や(8)神通川下流域(9)黒部市・魚津市域も一つの地域と把えることも可能であろう。

江上弥生遺跡群はこのうち白岩川・上市川流域に含まれる一農業共同体の村である。

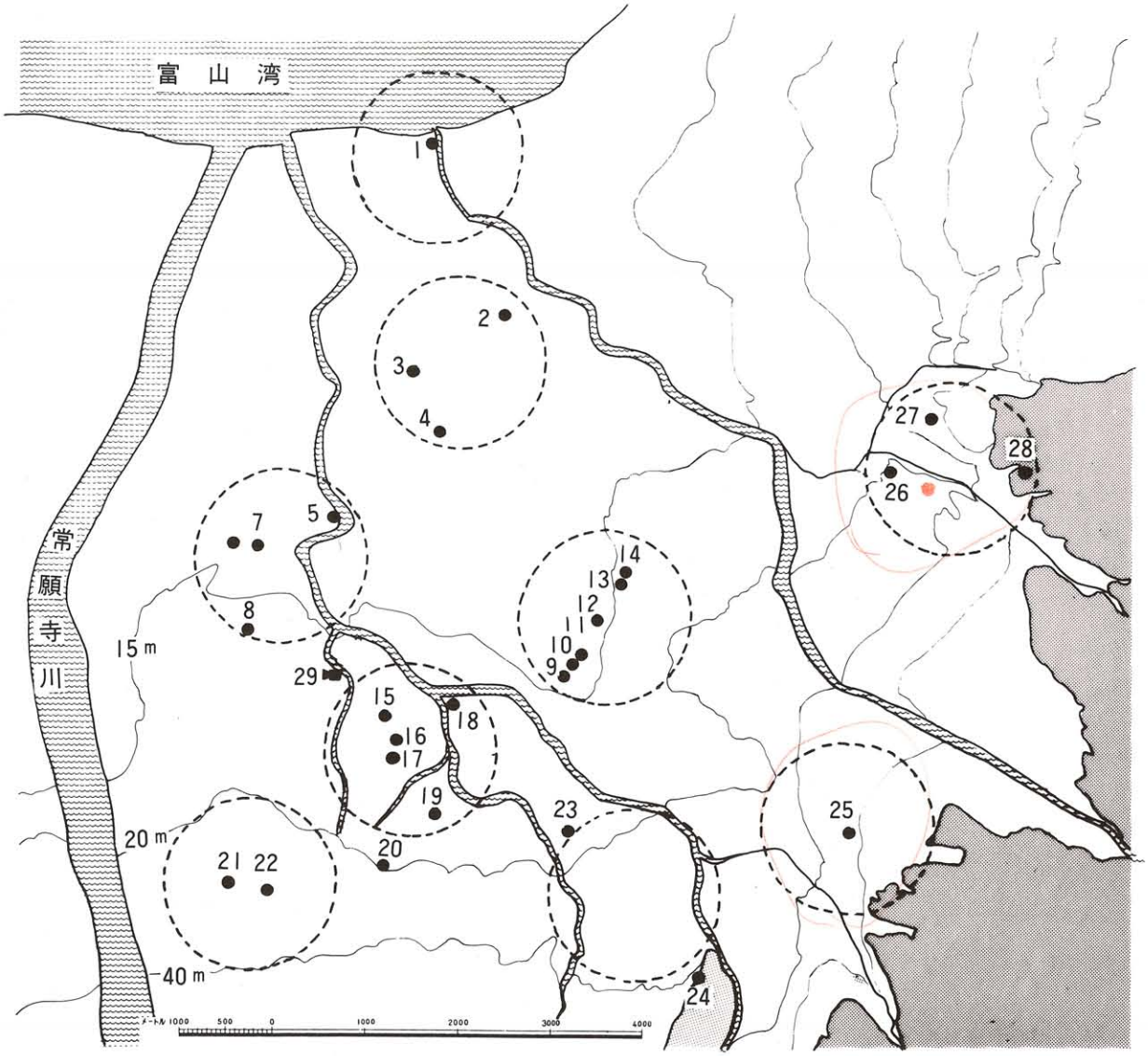
註① 県内の弥生時代から古墳時代初期にかけての遺跡数は139遺跡数を知りうる。そのうち，中期は32遺跡，後期は63遺跡で約２倍に増加している。集落遺跡では，高岡市石塚遺跡〔上野1973〕小杉町中山南遺跡〔橋本1971〕同上野遺跡〔橋本1974〕上市町本江広野新遺跡〔小島1979〕小矢部市杉谷内床ノ山遺跡〔安念1982〕があり，墓地遺跡では，小杉町囲山遺跡〔橋本1970〕同南太閤山Ⅰ遺跡〔池野他1982〕同薬勝寺池南西遺跡〔舟崎他1975〕小矢部市樋掛遺跡〔上野他1978〕富山市杉谷Ａ遺跡〔藤田1975〕同ちょうちょう塚遺跡〔藤田他1981〕がある。このうち南太閤山Ⅰ遺跡と上野遺跡がそれぞれ対応関係にあるらしいことが推定されている他は，それぞれ単独的である。また集落に近接して墓地がある例として小矢部市平桜川東遺跡〔伊藤1980〕や大門町串田新遺跡〔中山1981〕魚津市湯上Ｂ遺跡〔岸本他1981〕がある。

第26図　前期古墳と弥生遺跡の分布

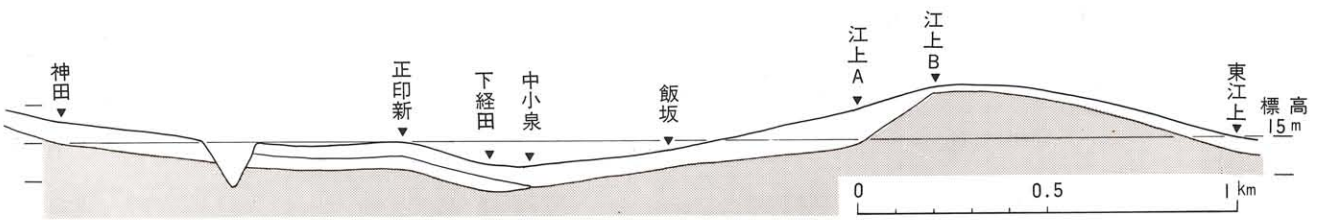
2．白岩川・上市川流域の弥生遺跡群

白岩川・上市川流域の径10㎞圏内標高０～40ｍの平野部には，あわせて28の弥生遺跡が分布する。遺跡の分布調査が徹底しているとはいいがたく，その数はさらに増えることが予想されるが，現段階でみる限り８つのブロックにわけられる。各ブロックはそれぞれ村を構成する農業共同体であり，江上弥生遺跡群はその１ブロックである。

白岩川・上市川は川幅約50ｍの中河川であるが，その源流は標高3,000ｍの立山連峰にあり，特に上市川はしばしば氾濫をおこしその流域にたびたび水害をもたらしている。流路の変動も激しく，上市川が現在の郷川につながったのが17世紀半ばであり，それまでは極楽寺から西流して白岩川へ合流していた〔高瀬1982〕。標高15ｍの等高線をおって



第27図　白岩川・上市川流域の弥生遺跡群の分布



第28図　遺跡周辺の地形横断図

いくと，現在の白岩川の北側に並行して谷がはいっていることがわかる。そこがかつての白岩川あるいは上市川の河道であったことを示している。流路がかわってもそこには幾筋もの小河川が残り，中小泉遺跡の水路はその小河川を利用したものであろう。

また，白岩川流域の標高０～25ｍの区間は，常願寺川が形成した扇状地末端部にあたり，そこでは扇状地下を流れてきた常願寺川の伏流水が噴出する。その伏流水が小さな河筋をいくつもつくり，白岩川へ注いでいる。

白岩川と上市川流域に住んだ弥生時代の人々は，そのようなたび重なる河川の氾濫と伏流水の噴出によってできた湿潤な川筋を利用し，水田として開発していったのである。

８つの農業共同体がどのような力関係にあったかはわからないけれども，流域の安定度（たとえば，縄文時代の早い時期から遺跡群が存在するといったようなこと）や，全長約45ｍの前方後方墳と考えられる舟橋天神堂古墳が近いことや，古墳時代中期に属する径約50ｍ高さ９ｍの稚児塚古墳があることなどを考慮すれば，Ⅴの集団が中でも最も有力な集団であり，その邑長はこの地域の農業共同体を統括する政治的結合体の首長であった可能性が高い。

	番号	遺跡名	弥生時代			性格	文献
				中期	後期	末期	
Ⅰ	1	滑川市魚躬		○	○	○	〔上野他 1973〕
Ⅱ	2	富山市小池				○	〔麻柄 1982〕
	3	〃 小出Ⅱ		○	○	○	〔富山市教委 1976〕
	4	〃 小出					〔麻柄 1982〕
Ⅲ	5	〃 水橋金尾		○	○	○	〃
	6	〃 中野		○	○	○	〔富山市教委 1976〕
	7	〃 金尾新					〃
	8	〃 新堀			○	○	〃
Ⅳ	9	上市町正印新		○	○		集落
	10	〃 下経田				○	
	11	〃 中小泉		○	○		
	12	〃 飯坂		○	○	○	方形周溝墓
	13	〃 江上Ａ		○	○		集落
	14	〃 江上Ｂ		○	○	○	集落
Ⅴ	15	舟橋村小平					墓地 〔安田 1977〕
	16	立山町浦田靄気			○	○	〃
	17	〃 浦田西反				○	〃
	18	〃 泉下段			○	○	〃
	19	〃 稚児塚			○		〔上野 1979〕
	20	〃 二ツ塚		○			〔県教委 1978〕
Ⅵ	21	〃 利田仕入		○	○		〔安田 1977〕
	22	〃 五郎丸		○			〃
Ⅶ	23	〃 辻西吉原田			○		〃
	24	〃 日中源兵衛腰			○	○	〃
Ⅷ	25	上市町湯神子				○	〔富山県教委 1972〕
Ⅸ	26	滑川市本江広野新			○	○	集落 〔小島 1979〕
	27	〃 下石山			○		〃
	28	〃 本江扇平			○		〃
	29	舟橋村竹内天神堂					前方後方墳 〔池野 1984〕

第29図　白岩川・上市川流域の弥生遺跡群

3．江上弥生遺跡群の推移

江上弥生遺跡群は正印新・江上Ａ・江上Ｂ遺跡の集落と，中小泉遺跡の耕地（水路と堰から水田を予想）と飯坂遺跡の墓地とで構成される。各遺跡は約100ｍ～300ｍの距離をおいて点在しているが，飯坂遺跡を中心とする径約２kmの圏内に含まれ，その区域を領域として村落を形成していると考えられる。

正印新遺跡と江上Ｂ遺跡は標高が約15～16.5ｍであるのに対して，その間の３遺跡は約14～15ｍと一段低くなっている。最も低い中小泉遺跡のあたりは，これらの遺跡群の形成以前において，白岩川や上市川の旧河道であったことが，等高線のあり方から知られる。中小泉遺跡には川幅約４～５ｍ深さ約１ｍの溝が蛇行しながら東から西へ流れており，しかも調査区の東半分では二又に分岐しており，旧河道のなごりをとどめている。

以上のことから，耕地はそのような自然河川に沿った所でその水を利用して作られ，耕地に隣接して墓地があり，比較的高く乾燥した所を居住地としていたことがわかる。

ここでは遺跡ごと時期ごとにその概要を記し，遺跡群の形成と廃絶に至るまでの推移をたどってみたい。（第31図）

正印新遺跡　竪穴住居・高床倉庫・建物と水路があり，そこから出土する土器は中期第Ⅲ期～後期第Ⅲ期のものである。中期と後期はおよそ30cmの間層をはさんで層位的にわかれる。下層の中期第Ⅲ期にはＳＢ24・ＳＢ25(建てかえのある１棟）の竪穴住居と，そのまわりに不整形な穴ＳＫ31・ＳＫ34・ＳＸ36がある。

後期Ⅰ期は調査区の中央に東西方向の幅50cmの細い溝が１条あるだけである。

後期Ⅱ・Ⅲ期は調査区北西隅にＳＢ22の竪穴住居跡が設けられる。またその西側に高床倉庫ＳＢ21が伴う。竪穴住居のまわりには幅約１ｍの溝がめぐる。ＳＤ11・ＳＤ12・ＳＤ16・ＳＤ20は幅50cmの細い溝であるが，ＳＢ21をさけてかぎの手状に流れたりＳＢ22の周溝につながるようで，それらの同時存在を示しており，幅４ｍ深さ50cmの大溝ＳＤ01から取水して西方へ流し水田へ導く用水路とみることができるかもしれない。

発掘区外の西側と北側にこの他にも建物が存在する可能性があり，集落の全体があらわれているとはいいがたいが，竪穴住居と高床倉庫の組み合わさる小集落である。

中小泉遺跡　各種の水路と３箇所に堰があり，そこから出土する土器は中期第Ⅲ期～後期第Ⅱ期のものである。中期Ⅲ期はＳＤ33・ＳＤ39・ＳＤ46の幅４ｍ深さ１ｍの大溝とＳＤ40の幅60cm深さ10cmの小溝がある。ＳＤ39とＳＤ46は調査区中央で合流し，ＳＤ33となる１本の溝である。大溝は，途中で二又にわかれていることや，蛇行の具合から自然の河川とみられる。ＳＤ39には，自然木を組み合わせた堰が設けられている。その右側に沿ってＳＤ40が走るが，その先端が調査区北側で消えていくことからＳＤ39からＳＤ40へ取水しそれが調査区北側につくられた水田へ導かれたものと考えられる。

後期Ⅰ・Ⅱ期はＳＤ33・ＳＤ39・ＳＤ46の大溝がたび重なる洪水によって埋まり，かわりにＳＤ27・ＳＤ36・ＳＤ37の幅１～２ｍ深さ0.4～１ｍの溝があらたに出現する。ＳＤ27には２箇所で板材あるいは木器を利用して堰が設けられており，上手の堰から幅80cm深さ50cmのＳＤ32へ導水しており，下手の堰はＳＤ36・ＳＤ37の下流へ導水するためのものであろう。ＳＤ32の左側ＳＤ36・37の右側に水田を想定することができる。

堰の構築の仕方や溝のあり方から水は南東から北西へ流れていく。水田には畦畔などは確認できなかった。後期Ⅲ・Ⅳ期の状況は不明であるが，時期不明の小溝があることなどから水路が別のところに設けられ，全体が水田となったことも予想される。

ＳＤ37とＳＤ39が交差するあたりで小型仿製鏡が出土したが，氾濫などで流されてきたものとみられるが，この場所で祭紀が行われた可能性もあろう。

飯坂遺跡　調査区北橋に９基の方形周溝墓がある。遺構から出土する土器は，後期Ⅰ～Ⅳ期のものである。墓地の中心は調査区の西方にあるようで，調査区のものはその一端であろう。

後期Ⅰ期は3号墓と8号墓がつくられた。3号墓は溝で区画された内側の面積が約80㎡で8号墓は約50㎡である。3号墓は9基の中でも最も大型のものである。

Ⅱ期は3号墓に4号墓が加えられ，8号墓に7号墓と9号墓が加えられる。新たに加わったものはいずれも面積が約16～25㎡と小型であり，溝が接したり一部を共有している。

Ⅲ期は8号墓に6号墓・5号墓が加わる。その面積はさらに小さくなり約6㎡である。1号墓は時期不明であるが，規模が小さいことから調査区外にあるものに連なっていくものであろう。

以上の状況から，少なくともこの墓群は3号墓と8号墓を墓地造営の契機とした2群のまとまりとみることができる。このように大型の区画墓を核として，それと溝を一部共有したり近接して新たに墓が加わる例は，富山市杉谷A遺跡〔藤田1975〕小杉町南太閤山Ⅰ遺跡〔関他1983〕で認められ，南太閤山Ⅰ遺跡ではそんな1群を1世帯共同体の墓と考えている。そのようにみた時には，飯坂遺跡は少なくとも2つ以上の世帯共同体の共同墓地とみられ，杉谷A遺跡では5～6世帯の共同墓地ということができよう。

江上A遺跡　南北方向に流れる幅4ｍ深さ50cmの溝に沿って10の建物と3つの柵があり，そこから出土する土器は後期Ⅰ～Ⅲ期のものである。

Ⅰ期は周囲に幅2.5ｍ深さ40cmの溝を環状にめぐらす竪穴住居SB14と溝をめぐらさない竪穴住居SB19，幅40cm深さ6cmの細い溝を環状にめぐらして区画をつくるSD06・SD04・SD05，そしてSA22の柵がある。SD05を除く他のものは南側をSD02に画され，北側もSD01が西方向へ分岐して流れ両溝で区画されている。

SD01には板橋SX25がかけられ，SB14の西南に井戸SE26がある。

Ⅱ期は新たにSB15・SB16・SB17・SB18・SB20の建物とSA23・SA24の柵が加わる。

SB14は礎板をもつ竪穴住居跡であるが，その柱根には心持ちのものと心去りの割材を用いたものがある。心持ちの柱と同形態の柱根がSD01から出土していて，それが作業台として転用されていることからみて，途中で柱のすげかえがあったことを予想させる。

またSD06とSB15に切り合い関係があり，SD04とSB17，SD05とSB20に対応関係がある。溝で区画するSD06やSD04，SD05はその内部に明確な柱根を残さないけれども，上屋がかけられていたものと考えられ，竪穴倉庫であったものと考えられる。SB17・SB20は柱根が地中に埋めこまれている長さが約80cmもあり深いことや，SB17の桁行が2間であることやSB20の梁の間に束柱をもつことなどで，高床の倉庫と考えられる。このような建物とSD04・SD05の対応関係から，溝で区画するだけの土間の倉庫から，高床の倉庫へ変化したものと考えたい。SD04の溝内から大量の炭化米が出土したことは，高床倉庫SB17からの流出と考えられ，その傍証となろう。

SB17はその北側にSA24が約2.5ｍの距離をおいて並んでいる。SA24はその間隔が約3.2ｍの2本柱のものであるが，地中に埋没している部分の長さが約60cmと深いこと（上部が不安定なことを物語る）や，地上部分が短辺約12cm長辺約16cmの断面形が整った長方形に仕上げられた特異なものである。これがSB17の高床倉庫に付随する門と考えられないだろうか。そのあり方は後の神社建築を思わせ，この門が鳥居にあたるものと思われる[註①]。とすれば，SB17は単に米倉というだけではなく神聖な穀霊をおさめた社であり，そこで祭祀が行われた可能性があろう。当遺跡から出土した大量の小型土器は，その時に用いられたものであろう[註②]。

SB16は平面積21㎡の大型の建物で，柱根は地中部分が約50cmと比較的浅いことや，柱根が細かな面とりによって，断面がまるく仕上げられていることなどから，高床倉庫とは考えがたく掘立柱建物の住居跡と考えられる。SB14の入口右手につくられており，それに付属する別棟の住居と考えることができよう。SB14はその老朽化及びそこに住む人々の人口増加によって，SB16の新しい住居を加えたのであろう。SB14では管玉や勾玉の生産を行っており，その後は，もっぱら工房として用いられたものと考えられる。

同様にSB19はSB18を新たに建物として加えた。SB18も柱根がきれいに面とりされ断面形が円形に仕上げられたもので，掘立柱建物の住居跡と考えられる。

調査区西側・北側・東側にまだ関連する建物群の存在が考えられるが，以上のように江上A遺跡は，竪穴住居と掘立柱建物の住居跡と竪穴倉庫と高床倉庫，そして井戸，柵からなる1世帯共同体の集落で，それは周囲が溝で区画されている。SB17で祭祀を行っていたとすれば，この集落はこの一帯の集落の中でも中核的な存在で，邑長の居住地であった可能性が高い。SB20とSD05は別の世帯共同体の倉庫である可能性があり，ここには複数の世帯が集住していたかもしれない。

江上B遺跡　水路と竪穴住居跡・高床倉庫があり後期Ⅰ～Ⅳ期のものがある。

後期Ⅰ・Ⅱ期は調査区の中央を東から西へ流れる幅3m深さ80cmの大溝があり，その右岸に接して周囲が幅50cm深さ10cmの小溝によって囲まれた竪穴住居跡SB111がある。周囲の溝はその西側に区画をつくっており，柱穴を残さない上屋をもつ倉庫を附設するらしい。

大溝の左側には幅40cm深さ10cmの小溝が幾筋もあり水田への導水路と考えれば，江上A遺跡との間に水田があったことが想定できよう。

後期Ⅱ・Ⅲ期はまずSD032とSB125が加わり，その後SD002・SD008・SD015・SD012が加わる。大溝の左側には幅80～140cm深さ20～40cmの溝SD032にまとめられる。また竪穴住居跡の北側にSD002・SD008・SD012・SD015の幅1m深さ10cmの溝が設けられる。これらは調査区外の西側でSD030から分流されたのであろう。この場所は洪積台地上であり，その当初水田とするには不向きであったろうけれども，時代を経て技術的に高いレベルになるにつれ，低地だけでなく台地上も水田として開発していったことをうかがわせる。

SB125はSB111に付属する高床倉庫と考えられる建物であり，正印新遺跡でもみられたように，江上B遺跡も高床倉庫と竪穴住居がセットになる小集落である。

住居跡の周囲をめぐる溝は，江上B遺跡のように狭いものと，江上A，正印新遺跡のように幅の広いものがあるが，その目的は主に除湿・排水であろうから，その立地する土地の条件によって異なるものといえよう。すなわち，幅広の江上A・正印新遺跡のものはその土地が比較的地下水位が高くジメジメしており，江上B遺跡が比較的乾燥しているためであろう。

註①　鳥居の起源については，これが稲作の伝来とともに日本へ伝わってきたとする考えがある〔鳥越1982〕。東南アジアのアカ族の村では，村の入口に門をたてその門には鳥の造形をのせている。鳥は祖先の霊が宿っていて村を守ると考えられている。大阪府池上遺跡の鳥形木製品などは稲作技術とともにそのような思想も伝わったことを物語っている。

なお，県内では後期Ⅳ期の段階に，2本主柱の竪穴住居跡があり上市町本江広野新遺跡，小杉町中山南遺跡，小矢部市平桜川東遺跡などで見受けられる。中山南遺跡第6号住居跡は，長辺5m短辺4m柱間1.75mである。平桜川東遺跡第2号住居跡は，長辺4.38m短辺3.5m柱間1.9mである。本江広野新遺跡第2号住居跡は長辺5m短辺4m柱間1.6mである。いずれも柱間の距離は2mを超えない。SA24の柱間は3mと長く，これが竪穴住居跡の柱とは考えられない。

註②　小型土器の用途については種々考えられるが，古墳時代の祭祀遺跡に伴って出土することから，祭祀時に供献される用途がある。出土区をみるとSD01B区から10点出土したことは，他区ではそれぞれ5点以下の出土であることと比べて多く，SB17に関連した遺物とみることができる。次いで多いのがSD03A区であり，SB17が建つ以前は，この竪穴住居で祭祀が行われていたことを示すかもしれない。

時期ごとの推移

中期Ⅰ～Ⅲ期　遺跡群の南端で正印新集落と中小泉耕地が出現する。正印新集落は1棟の竪穴住居とその周溝の一部にあたるとみる不整形な穴群と焼土穴で構成される。中小泉遺跡は自然河川と細い水路で構成される。正印新集落と中小泉耕地は約300mの距離がある。中小泉の自然河川には自然木の枝や幹を組み合わせた堰が設けられている。

堰は河川の水をせきとめ，その横の細い水路へ水を分け，水田へと導くためのもので，水路の北側に水田があったものとみられる。しかし，畦畔などは確認できなかった。

後期Ⅰ期　中期Ⅲ期と後期Ⅰ期との間に，白岩川か上市川が氾濫をおこした。正印新集落は厚さ約20cmの砂層の堆積で埋まった。中小泉耕地でも同様で，河川が埋めつくされてしまった。正印新集落は調査区中央に細い水路があるだけである。正印新集落はこの時期の終り頃にはすでに出現しているかもしれない。

正印新集落にかわって遺跡群の北端に江上Ａ集落と江上Ｂ集落が出現し，飯坂墓地もつくられた。中小泉耕地でも新たな水路が設けられた。

江上Ａ集落は２棟の竪穴住居と２棟の倉庫そして小屋・井戸・柵などで構成される。幅２ｍの溝で囲まれた竪穴住居SB14は東に面して入口がある。その入口を出た左手には小屋SD06があり家畜小屋であったかもしれない。８の字に溝をめぐらすSD04，SD05は柱穴を必要としない上屋をもった倉庫とみられ，中央の柵SA22は区画塀であったろうか。SD05を除くとこの一群はSD01とSD02に囲まれているようであり，SD05はSD01をはさんだ別の集団のものであったかもしれない。

江上Ｂ集落は西から東へ流れる大溝に接して１棟の竪穴住居がある。竪穴住居は東に面して入口があり，反対側には倉庫が付設されている。大溝の南側は不整流の細い水路があり，あるいは水田がつくられていたかもしれない。

中小泉耕地は幅が狭く浅い水路が３本ある。そのうちSD27は２ヵ所で堰を設けている。中期Ⅲ期の堰のように自然木を組み合わせたものではなく，板材や鍬，編板などの木器を利用したものである。それらは鉄器によって加工されたもので，この時期に鉄器の普及が進み，それによって多くの木製の道具が生み出されたことを物語っている。江上Ａ遺跡や中小泉耕地で発見された二又の鍬や身の長い鋤，スコップ状の鋤などは，水路の掘削や水田の造成を早め米の生産を高め，村の安定と発展に大いに役立ったことであろう。

飯坂墓地はそのような状況があってこそ出現したものであろう。この時期は３号墓と８号墓の２つの方形周溝墓がつくられた。本格的な水田を造りはじめこの土地での将来への見通しを得た人々は，その開拓者の死に際して大きな墓をつくった。この後の墓はその大型墓を核とし，それより一まわり小さいものが寄りそうように設けられていく。調査区では２群のまとまりがあり，調査区外にも別の墓が存在するものと考えられ，２世帯以上の共同墓地である。核となる大型墓はそれぞれの家長が埋葬されたものであろう。

後期Ⅱ期　江上Ａ集落・江上Ｂ集落は，存続し再び正印新集落があらわれる。正印新集落は１棟の竪穴住居と１棟の高床倉庫があり，北西部に流れる細い水路はそのあたりに水田が開かれたことを物語る。飯坂墓地では新たな墓が設けられた。３号墓には４号墓が加えられ，８号墓には７号墓と９号墓が加わる。家長の妻などが埋葬されたのであろう。

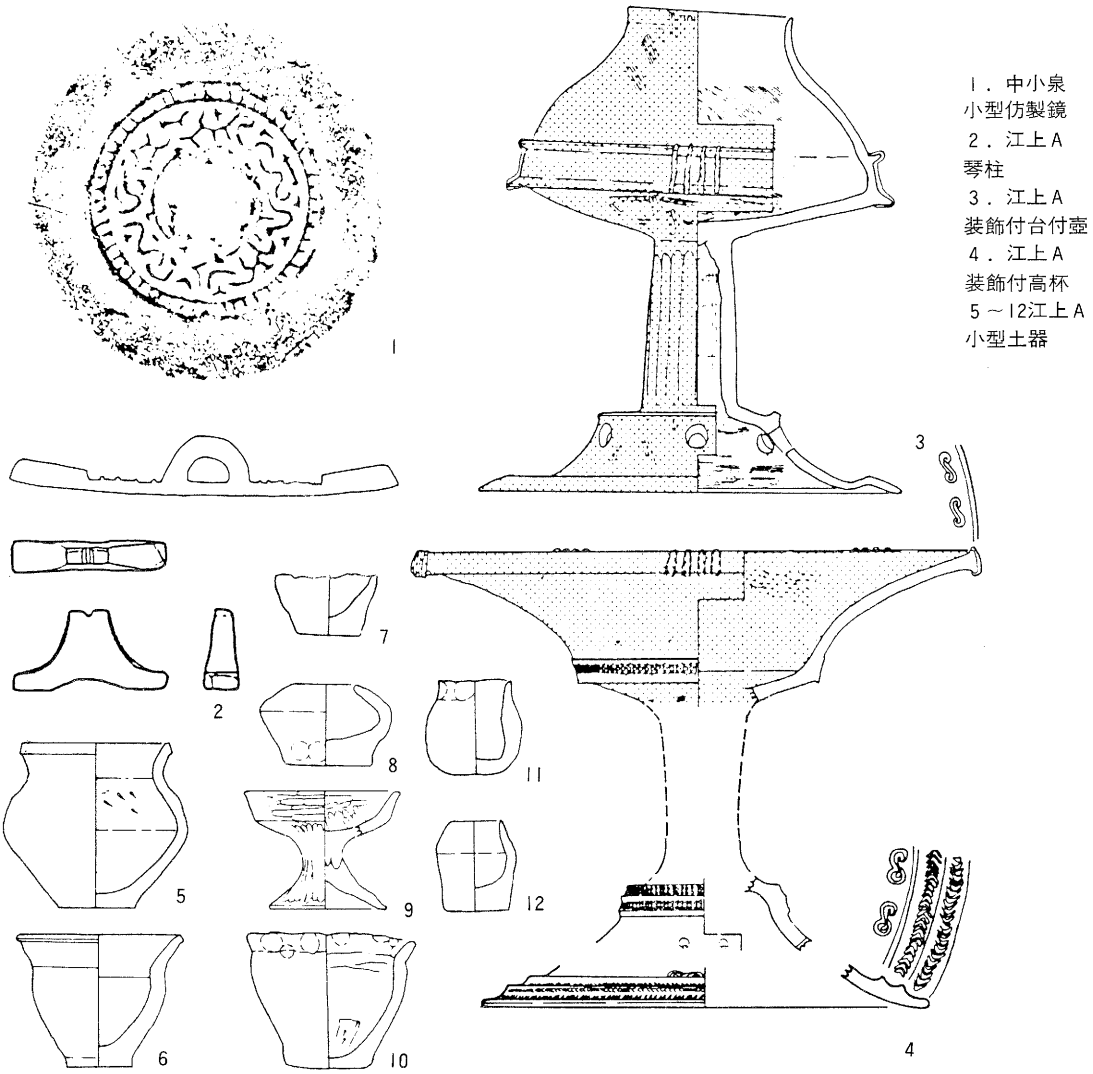
後期Ⅲ期　村は順調に発展していくが，第Ⅱか第Ⅲ期にはいって集落の中に掘立柱建物（住居と倉庫）が出現するらしい。高床倉庫は江上Ａ集落・江上Ｂ集落でも出現し，さらに江上Ａ集落では竪穴住居に加えて，掘立柱建物の住居がつくられる。SD06はSB15の掘立柱建物小屋に建てかえられた。SD04とSD05の竪穴倉庫は，SB17とSB20の高床倉庫へその主な機能が移された。SB14の入口右手にはSB16の掘立柱建物住居が新たに建てられ，SB19はSB18の掘立柱建物住居を加えた。SA22はSA23にかわった。集落の変化は古いものをすべて壊して新しく建てかえるというのではなく，古いものに新しいものが加わる形でまず進行するものと考えられる。たとえば，SB14は住居としての機能がSB16に移ったとしても，玉生産の工房や倉庫としてしばらくの間は存続していたであろう。この村での掘立柱建物の出現がどのような契機で始まったかは必ずしも明らかではないが，後期中葉以降，山陰地方との交流の活発化が土器のあり方などから推測されており，かの地方から伝えられたことも考えられよう。

高床倉庫SB17に並んで建つSA24をそれに伴う門と考え，神社建築の祖型ではないかと考えた。江上集落は周囲が

溝で画されていることや，大量の土器や木製農具を保有していること，管玉や勾玉の生産を行っていること，小型土器や丹塗り土器など祭祀的な色あいの強い土器があることなどは，正印新集落や江上Ｂ集落とは異なる集落の様相である。このことは江上集落の住人が，この一帯にひろがる複数の世帯共同体の中でも最も有力なものであったことを示しているものと考えられる。江上集落は複数の世帯共同体で構成される農業共同体の邑長の居住地であった可能性が高いものといえよう。邑長はその農業共同体を代表し統括していくが，その権限の中に祭祀の執行がある。高床倉庫におさめられた稲籾に宿る穀霊を対象として豊かな実りを祈念する農耕祭祀は，村の代表である江上Ａ集落で行われたことは充分考えられることである。江上Ａ集落から出土した木器の中に琴柱が含まれていることは，その祭祀にあたって琴が用いられたことも予想させる。

江上Ｂ集落は第Ⅰ期の段階で大溝の南側にあった不整流の小溝がSD032にまとめられ，高床倉庫が加わる。

中小泉耕地はこの時期の明確な遺構を残していない。水田として使用されなくなったためともみられるが，後の時代の河川の氾濫や削平で破壊された可能性もあろう。



第30図　祭祀に用いられたとみられる遺物

後期IV期　飯坂墓地で7号墓と溝を共有して6号墓・5号墓が加えられる。北側では1号墓があらわれる。正印新集落・江上A集落・江上B集落は，その初めの段階で存在していたようだが，まもなく廃絶を迎える。江上B集落は，竪穴住居の北側に水路が設けられる。大溝の上流で分水されたものであろう。江上B集落は高台にあり，遺構形成面は灰褐色土や砂礫層で，中小泉耕地と比べて乾燥した所である。このことは，この時期にそんな台地上を耕地として開発していったことを示しているものと考えられる。

この時期の気象は「A 遺跡群の概要」でもふれたように，弥生時代中・後期の冷涼な時期から急激な温暖化がはじまった時期である。そのために3.000m級の山岳地帯を背後にかかえるこの地域は，白岩川や上市川が何度も氾濫をおこし，中小泉耕地のような低地の水田は大きな水害におそわれたことであろう。農業技術の向上とあわせて，そのような自然条件が，台地上の開発を進める一因であったかもしれない。

調査区の中でこの時期以後の集落がみられないことは，そのようなことで集落と耕地が大きく移動したためであろう。現在の江上・東江上・中江上の村のあたりへ移った可能性がある。やや時代が降りるが，東江上集落（7世紀末～8世紀初頭）へつながっていく古墳時代集落の存在を予想しておきたい。

水田のあり方　江上弥生遺跡群の水田はどのようであったろうか。八賀晋氏は水田土壌がその土地の地下水位の高低によって，グライ土壌・灰色土壌・灰褐色・黄褐色土壌の3種に識別されることから，それぞれ地下水型（湿田）中間型（半湿・半乾田）表面水型（乾田）の3型態の水田を分類した。そして，弥生前期は地下水型の湿田経営であり，中期後半以後中間型の半湿・半乾田経営へと移行し，表面水型の乾田は古墳時代以後にあらわれると考えた〔八賀1971〕。

中小泉耕地の遺構形成面は灰色粘質土でありその中間型にあてられ，江上B集落の北側に予想される耕地は，灰褐色・黄褐色土であろうから表面水型の水田である。八賀氏の指摘するとおりの展開をここではたどることができる。正印新集落では中期Ⅰ期・Ⅱ期の土器が出土しているが，その時期の水田がどのようであったかは遺構からはわからないが，稲作が始まったばかりのこの時期は，まだグライ土壌の湿地帯に限られていたかもしれない。

小杉町南太閤山Ⅰ遺跡A地区では，古墳時代中期の堰が発見されている〔池野他1982〕。谷奥からの湧水が山を削って樹枝状の谷地形を発達させていて，その谷平野は湿潤なグライ土壌である。そんなところでは，堰の役割は中小泉耕地の堰とは異なり，豊富な湧水を一定方向へ排水することにあり，湿田を乾田化するために設けられたものである。

弥生時代後期の水田遺構は，群馬県の熊野堂遺跡や同日高遺跡，岡山県百間川遺跡，静岡県登呂遺跡などの例が知られている〔稲田1978〕。熊野堂遺跡は水はけの良い扇状地につくられた乾田で，日高遺跡は低台地にはさまれた幅20～40mの浅い谷部で，湧水を利用した湿田である。また水田の一筆あたりの面積が，百間川遺跡では10数m^2から約100m^2で日高遺跡では平均90～120m^2でいずれも狭いが，登呂遺跡では平均約1,400m^2と大規模なものである。このようなことは，遺跡の立地条件や水田造成につぎこまれる労働力の違いによって，地域によって様々な型の水田があったことを示している。中小泉耕地は，百間川遺跡や日高遺跡のような小区画水田であったろうか。

江上弥生時代遺跡群では，低地での半湿，半乾田から台地上での乾田の開発がみられた。一方で，小杉町南太閤山Ⅰ遺跡の谷平野部のように，古墳時代における湿田の開発があったことを知ることができ，県内における水田開発も様々な型が予想される。

百間川遺跡では，田植えの跡が検出されており，西日本では後期には田植えが行われていたようである。江上A遺跡では炭化米の粒の大きさがよく揃っていることや，水田面のならしに用いられたとみられるえぶりがあり，この地域でもすでに田植えが行われていたことを推測させる。稲の刈りとりは，石包丁形木器が出土していることからこれを用いた穂摘みであったようである。

石包丁は弥生前・中期に盛行し，後期にはほとんどみられなくなるが，長野県や岐阜県では後期までつづくとされ

る。県内においては，氷見市岩上遺跡，高岡市石塚遺跡，滑川市魚躬遺跡などで出土がみられ，中期に属するようである。江上A遺跡の不整形な石包丁形石器が後期に属する可能性があるが，全体として後期に属するものはきわめて少ないといってよい。

後期には石包丁にかわって鉄鎌が使用されるようになるため〔木下1966〕とする考えもあるが，木製のものに変わったとみるのがよさそうである。鉄器の刃物を用い木製のもので鋭利な刃部が作り出されたためであろうが，まだ鉄器そのもので作り出すまでに至っていない段階である。鉄鎌は根刈りを可能とするが，木製の石包丁はまだ穂摘みが主流であったことを示しているのであろう。

鉄鎌は古墳時代以後に盛行したようで，古墳時代の石包丁形木器は，奈良県纒向遺跡の例では祭器として用いられていることが指摘されており，この時期になって石包丁形木器から鉄鎌への移行があったことを示すものであろう。

集落と墓地のあり方　弥生時代の集落構成については，中期後葉の岡山県沼遺跡〔近藤・渋谷1957〕，中期中葉～後葉の福岡県宝台遺跡〔高倉他1970〕などで，竪穴住居が4～5棟で一グループをなす小集落が発見されている。沼遺跡では他に高床倉庫や作業小屋とみられる建物も伴っている。都出氏はこれを世帯共同体と呼び，近藤氏はこれを単位集団と呼び，高倉氏はこれを家族集団と呼んでいる。いずれも普段の水田経営や消費生活において自立的な集団である。

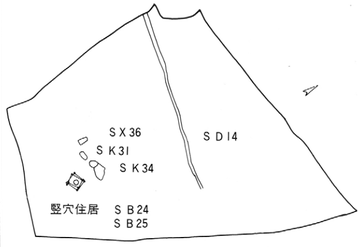
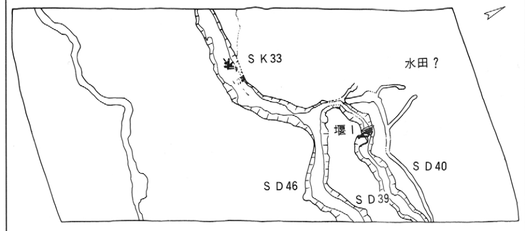
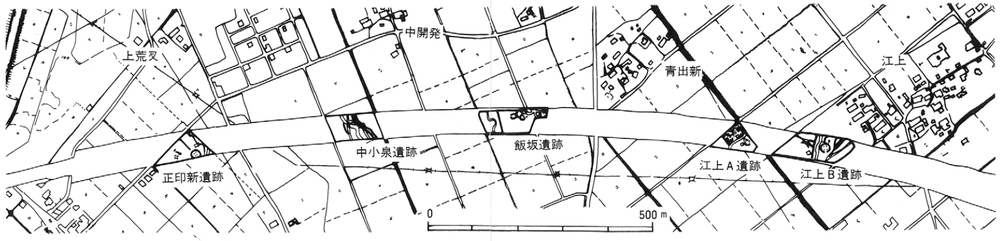
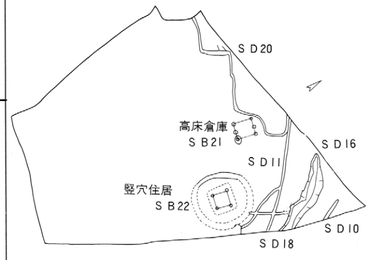
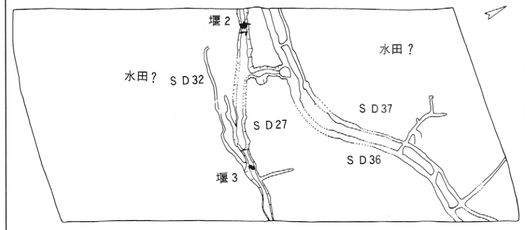
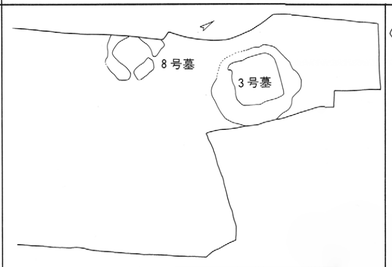
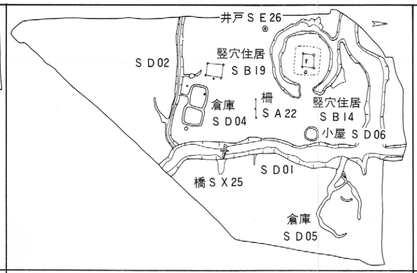
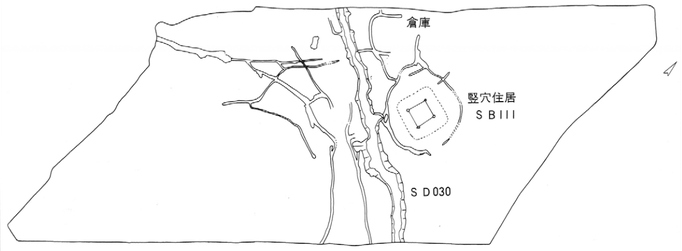
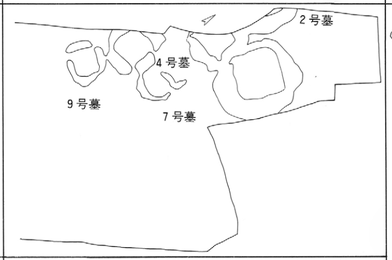
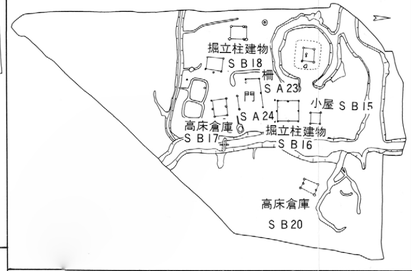
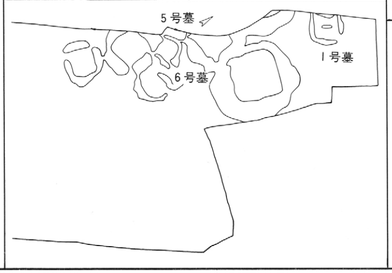
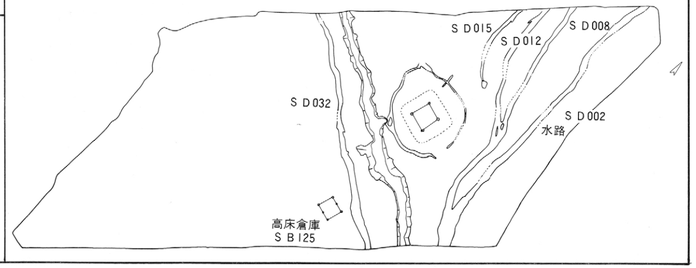
江上遺跡群の正印新集落・江上A集落・江上B集落は，1～2棟の竪穴住居と1棟の高床倉庫が基本的な構成である。後期IV期の魚津市湯上B遺跡は3棟の竪穴住居と墓地（土壙墓）から構成される〔岸本他1981〕。また，後期III～IV期の小杉町上野遺跡では，第III台地に3棟の竪穴住居がまとまっている〔橋本1974〕〔橋本1976〕。後期III～IV期の小杉町中山南遺跡では2～3棟の竪穴住居のまとまりがあるようにみられる〔小島1971〕。

このような状況からみると，県内の弥生集落は1～3棟の竪穴住居と1棟の倉庫（竪穴・高床）で構成されるものが多いことが知られる。先の諸例に比べて数はやや少ないが，それぞれ1世帯共同体の居住地と考えてよかろう。

宝台遺跡の小集落は谷をへだてて3群が認められる。またその中央あたりに共同墓地が設けられている。後期に属する神奈川県大塚遺跡は，環濠に囲まれた内側に3つの住居跡群が分布している。またその墓地とみられる歳勝土遺跡では，方形周溝墓が3つの群にまとまるという〔横浜市埋文編1975〕。このような墓地を同じところに設ける3つの群を高倉氏は地域集団と呼んで，水路の掘削や水田の造成にあたって共同してことにあたる農業共同体と考えている。

江上遺跡群の飯坂墓地は，少なくとも2群のまとまりをみることができる。また，上野遺跡は第III台地の住居群の他に，第I台地にも同時期の住居跡が発見されている。この墓地と考えられる南太閤山I遺跡では，墓群が3群にまとまっており，上野遺跡にそれに対応する住居跡群が3群存在することが予想される。

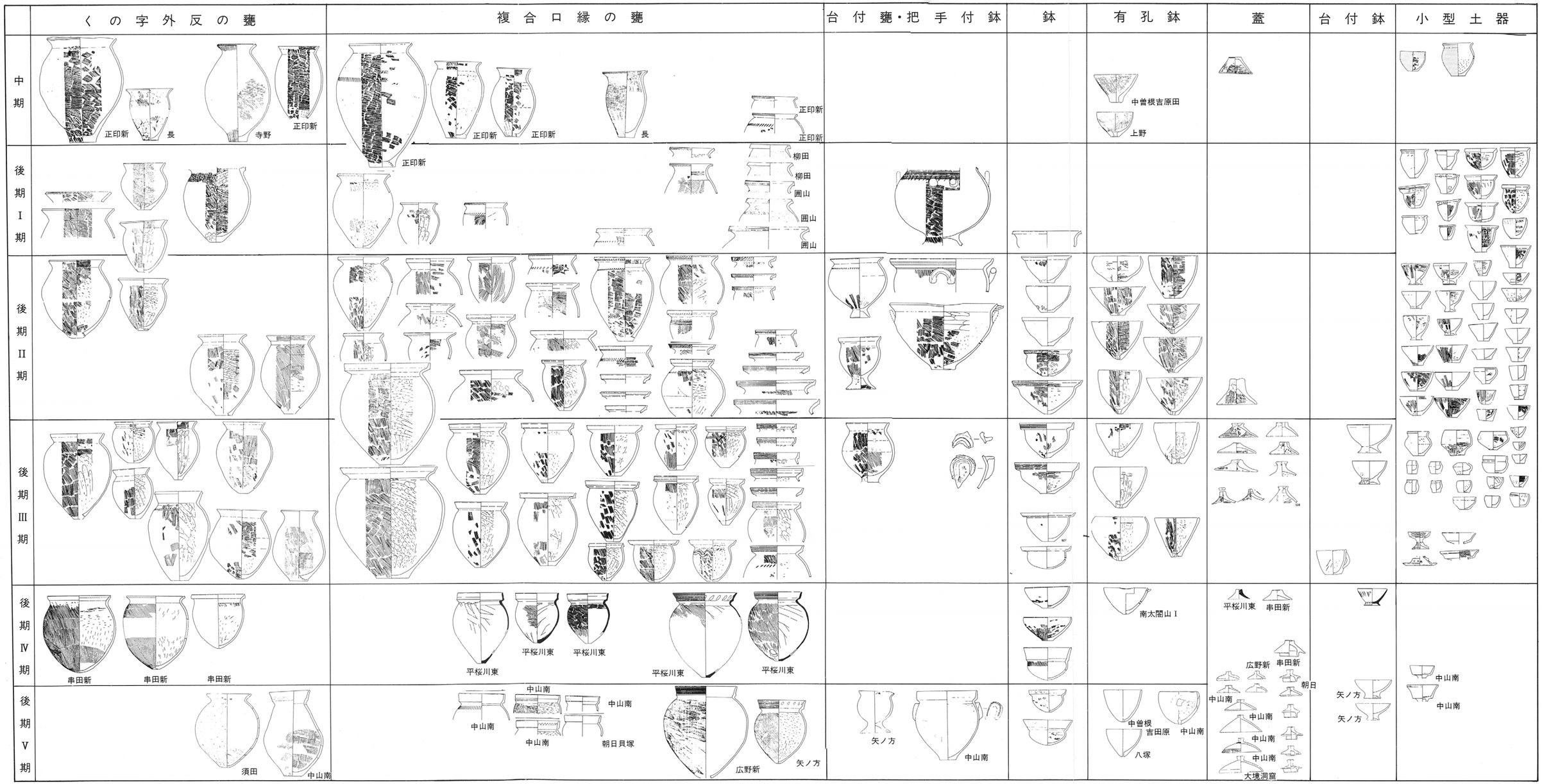
このような状況から，県内の弥生後期においては小集落が2～3群集まって農業共同体を構成し，共同墓地を形成していたことが知られる。ところが，後期IV期の湯上B遺跡や平桜川東遺跡の例は，1世帯共同体が単独で存在し，墓地も備えている形であり，やや趣きを異にしている。このことは，この時期に村落の中から小集落が分散していったことを示すものでなかろうか。また，その分散化と同時に，本江広野新遺跡〔小島1979〕や大門町串田新遺跡〔中山1981〕などの出現にみられるように，山地への進出がみられることも注目される。農業生産の発展に伴い人口が増大したことや，稲作技術の向上によって谷部や台地上の開発が可能になったことなどで，村落の分村化が進んだためと考えられるが，先にもふれたようにこの時期の気候の温暖化によって低地での耕地が減少したこととも関係があったかもしれない。このような集落の分村化は，西日本ではすでに中期にみられることであり，富山県ではやや遅れ，後期のおわり頃にはじまるようである。

	正印新遺跡（住居）	中小泉遺跡（水路・堰）	飯坂遺跡（墓地）	江上A遺跡（住居）	江上B遺跡（住居）
中期					
後期前葉（Ⅰ期）					
後期中葉（Ⅱ・Ⅲ期）					
後期後葉（Ⅳ・Ⅴ期）					

第31図　北陸自動車道遺跡群上市町地区弥生時代遺跡群の時期変遷

	大・中型壺	小　型　壺	無頸壺	広　口　壺	長　頸　壺	台　付　壺
中期	赤祖父　石塚		寺野		石塚	
後期Ⅰ期	下佐野				下佐野　囲山　柳田　南太閤山Ⅰ	
後期Ⅱ期						
後期Ⅲ期						
後期Ⅳ期	上野　南太閤山Ⅰ	平桜川東			南太閤山Ⅰ　南太閤山Ⅰ	上野　須田
後期Ⅴ期	上野　大境	広野新　中山南　中山南　大境				千原崎　中山南　矢ノ方

第32図　上市町江上Ａ遺跡土器群の位置(Ⅰ)



第33図　上市町江上A遺跡土器群の位置(2)

D　中世の遺跡の性格

1．遺物の年代と器種組成

北陸自動車道建設に先立ち調査した中世遺跡――立山町若宮Ｂ遺跡，上市町神田遺跡，江上Ｂ遺跡――の各遺物の概要を述べ，日常土器の組合せについて考えてみたい。

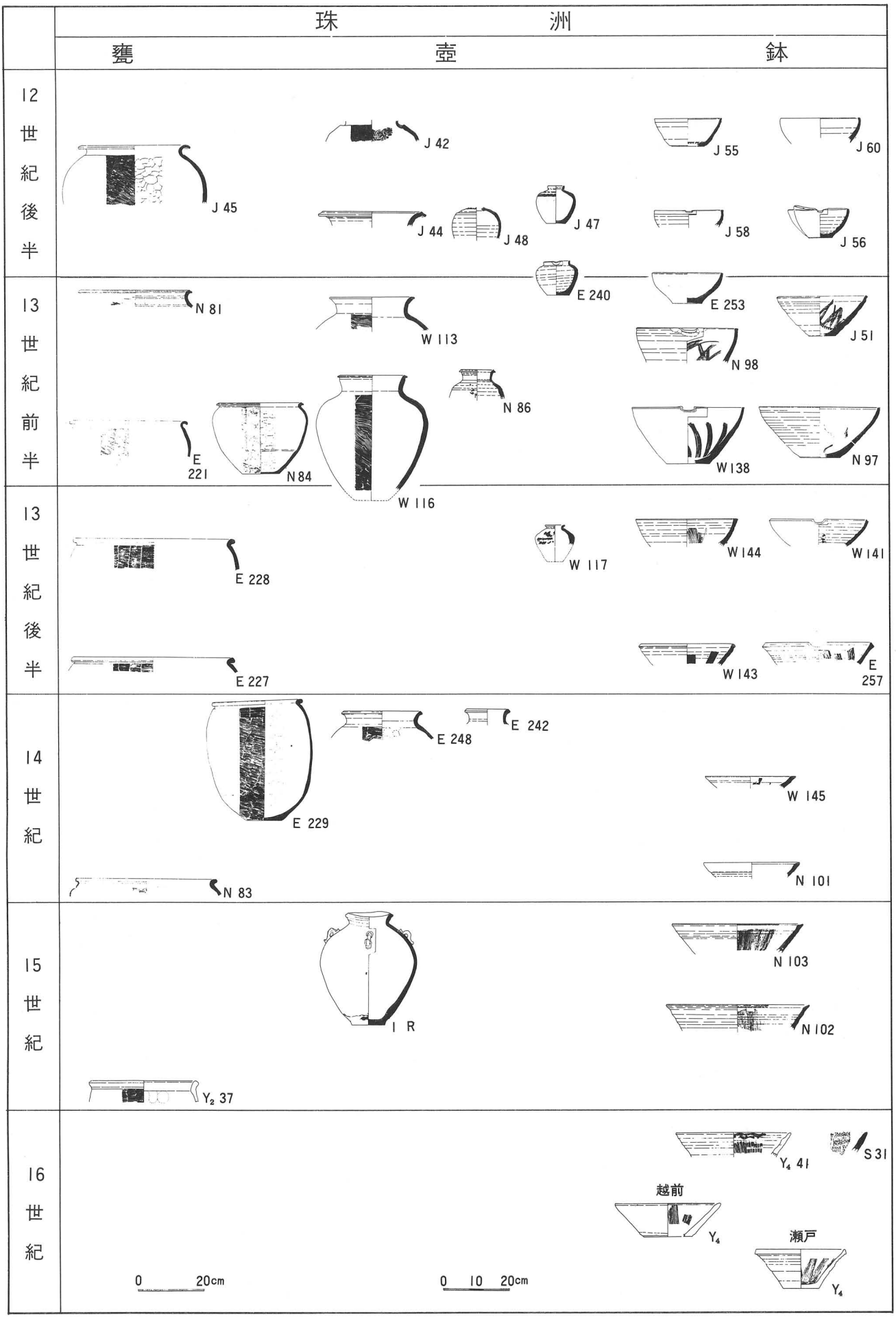
神田遺跡　珠洲編年〔吉岡1981ａ〕のⅠ期を中心にⅡ期に及び，年代も12世紀後半から13世紀前半である。そのことは４回以上の建物の建て替えが確認されていることからも頷ける。珠洲は甕・壺・鉢である。甕には体部内面に同心円状の押圧痕を残すものがある。鉢は回転糸切り底が多い。土師質土器は皿がほとんどである。ロクロ成形のものと手づくね成形あるいは型押し成形のものがある。[註①] 輸入陶磁器には青磁・白磁・青白磁がある。青磁は龍泉窯系と同安窯系の割合が１：１である。前者は鎬蓮弁文椀(太宰府分類〔横田他1978〕の椀Ⅰ－５類)，椀Ⅰ－２類，後者は皿Ⅰ類・椀Ⅰ類である。白磁には玉縁椀（Ⅳ－２類）があり，白磁出土量の２割を占める。青白磁は合子である。

出土した土器の口縁部・底部より個体数を出してみた（ただし，必ずしも個体別に分類できた訳でなく土師質土器などに重複があるかもしれない。また，Ⅰ－Ⅱ期以外の土器も含めて数えた)。内訳は珠洲45点（26％）－甕13点(7.5％)・壺６点（3.5％)・鉢26点（15％)，土師質土器皿・椀106点（61％)，輸入陶磁器22点(13％)－青磁12点(７％)・白磁９点（５％)・青白磁１点（0.5％）である。捏鉢と擂鉢は２：１の割合である。輸入陶磁器は龍泉窯系青磁III類，口禿皿の白磁IX類の出現を見ない点から，太宰府での時期区分III期1・2小期(12世紀中葉～13世紀中葉)にあたり，年代観もほぼ一致する。この点は入善町じょうべの遺跡のＣ地区でも同様な状況である〔山本1982〕ことからも輸入陶磁器の伝播が早いものと考えられる。[註②]

若宮Ｂ遺跡　珠洲Ⅱ期を中心にIII期に及び，年代も13世紀前半を中心に13世紀までつづく。500ｍ離れた神田遺跡の甕・壺の破片が若宮Ｂ遺跡のものと接合することから，神田遺跡の後半に並存していたことがわかる。珠洲は甕・壺・鉢がある。珠洲の外底面に回転糸切り痕を残すものはない。土師質土器は皿が大部分で椀が少量である。回転糸切り底は少ない。輸入陶磁器は龍泉窯系青磁III類が多く同安窯系のものが出土していない。瀬戸は花瓶・瓶子(？)・碗がある。その花瓶は13世紀後半であり，この時期になり，瀬戸が出現する。土器の個体数の内訳は珠洲39点(27％)－甕５点(３％)・壺10点(７％)・鉢24点(17％)，土師質土器皿・椀91点(63％)，輸入陶磁器８点(６％)－青磁５点(3.5％)・白磁３点(2.5％)，瀬戸６点(４％）である。全出土量が少ないのは，表土直下にある遺構が耕作等による撹乱を受けたためであろう。

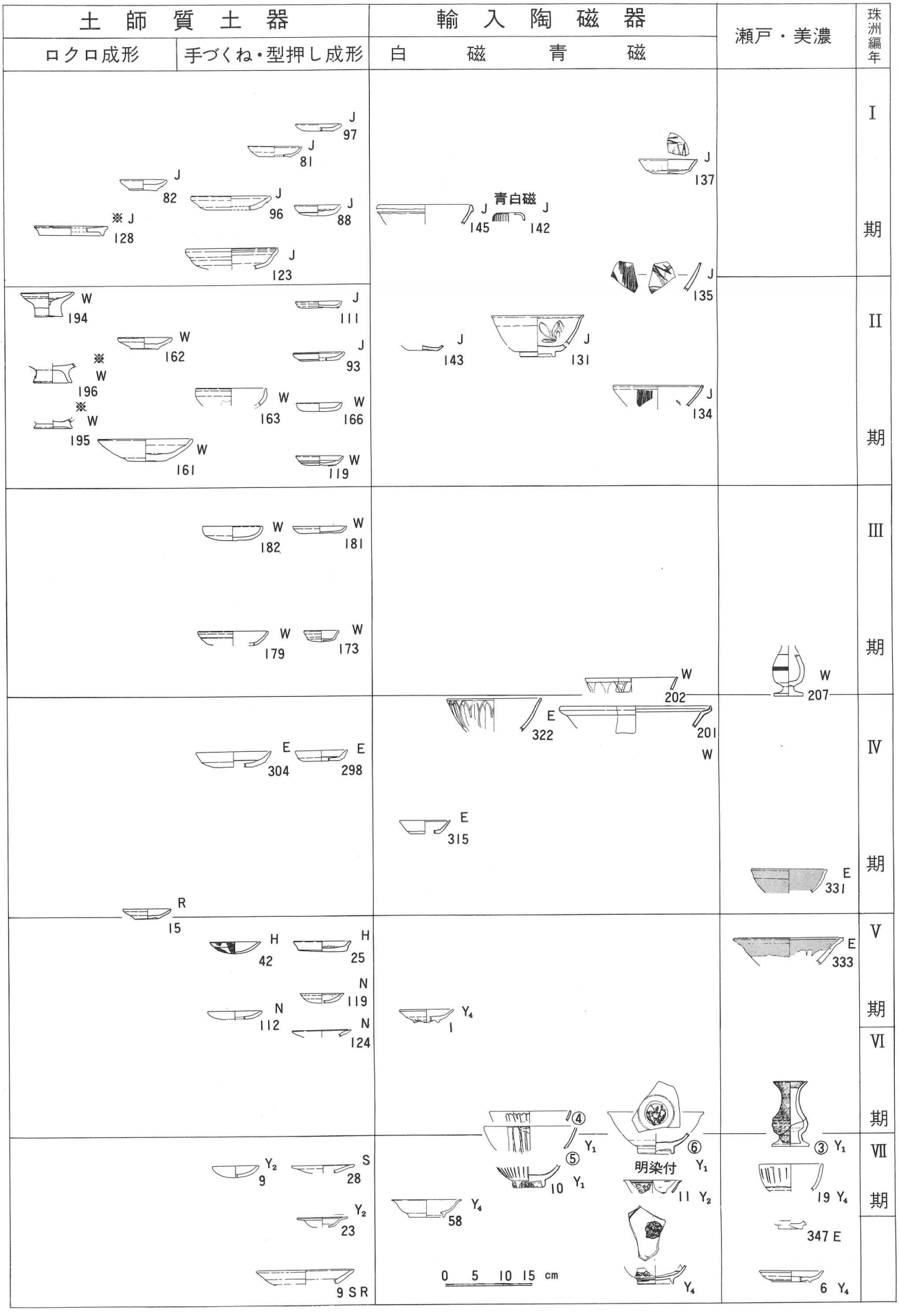
江上Ｂ遺跡　珠洲Ⅱ－Ⅴ期まで見られるが，III・Ⅳ期が中心である。年代は13～15世紀で，13世紀後半～14世紀が中心となる。珠洲には甕・壺・鉢がある。鉢は擂鉢が多い。土師質土器は皿のみで椀が見られない。ロクロ成形のものはない。輸入陶磁器には青磁・白磁がある。青磁には龍泉窯系のものは大部分で，蓮弁文椀が多い。白磁には口禿皿がある。瀬戸には瓶子・碗・太平鉢・天目がある。瓦質土器には火鉢がある。個体数の内訳は珠洲111点(43.5％)－甕30点（11.5％)・壺27点（11％)・鉢54点（21％)，土師質土器皿108点（42％)，瓦質土器火鉢１点(0.4％)，輸入陶磁器12点（4.6％)－青磁９点（3.5％)・白磁３点(1.1％)，瀬戸及び瀬戸・美濃20点（８％)，越前３点（1.1％）である。ここでは土器以外に大量の木製品が出土した。下駄・櫛・曲物・折敷・杓文字・箸・擂粉木・漆器皿などの生活用具，工具の柄・鍬先・紡錘車・機織具・建築材などの生産用具，塔婆形・斎串形・木偶形木製品などの祭祀・呪術用具があり，中世における多種多様な日常用具の一面がうかがえる。

以上から，日常土器は珠洲[註③]と土師質土器が基本であり，輸入陶磁器，瀬戸及び瀬戸・美濃，越前がそれらに加わる。13～14世紀には瀬戸，越前が出現し，15～16世紀には瀬戸・美濃，越前が多くなり，珠洲が減少する。各遺跡ごとに供膳用具・調理用具・煮沸用具・貯蔵用具をあげてみる。神田遺跡――供膳用具(土師質土器皿・椀)，調理用具（珠



第37図　県内出土の中世土器編年図

E；江上B遺跡，J；神田遺跡，S；下経田遺跡，N；中小泉遺跡，W；若宮B遺跡，Y_1；上市町弓庄城跡〔上市町1981〕Y_2；弓庄城跡〔上市町1982〕，Y_4；弓庄城跡〔上市町1984〕，R；婦中町華花寺遺跡〔岸本1984〕，SR；富山市白島城跡〔藤田1981〕H；小矢部市日の宮遺跡〔上野1978〕


土師質土器
ロクロ成形
手づくね・型押し成形
輸入陶磁器
白磁
青磁
瀬戸・美濃
珠洲編年
I 期
II 期
III 期
IV 期
V 期
VI 期
VII 期
J 97
J 81
J 82
J 96
J 88
※ J 128
J 123
J 137
青白磁 J 145
J 142
J 135
W 194
J 111
W 162
J 93
※ W 196
W 163
W 166
※ W 195
W 161
W 119
J 143
J 131
J 134
W 182
W 181
W 179
W 173
W 202
W 207
E 322
201 W
E 304
E 298
E 315
E 331
R 15
H 42
H 25
N 119
N 112
N 124
Y4 1
E 333
④ Y1
⑤ Y1
10 Y1
⑥ 明染付 Y1
11 Y2
③ Y1
19 Y4
347 E
6 Y4
Y2 9
S 28
Y2 23
9 S R
58 Y4
0 5 10 15 cm
Y4

洲捏鉢・擂鉢），貯蔵用具（珠洲甕・壺）。若宮Ｂ遺跡――供膳用具（土師質土器皿・椀，瀬戸瓶子・椀，漆器椀），調理用具（珠洲捏鉢・擂鉢，木製品），貯蔵用具（珠洲甕・壺）。江上Ｂ遺跡――供膳用具（土師質土器皿・椀，瀬戸瓶子・椀・太平鉢，木製品），調理用具（珠洲捏鉢・擂鉢，木製品），貯蔵用具（珠洲甕・壺，越前甕）。珠洲のうち，鉢が多いのは日常消耗品としての性格を示していると考えられる。煮沸用具の鍋・釜は出土せず，明確ではない。[註④]以上のような日常土器のあり方は西日本の例〔安田1977〕と異なる。

2．遺跡の性格

神田・若宮Ｂ・江上Ｂ遺跡の性格を，①建物配置と規模，②鍛冶工房跡，③輸入陶磁器の面から考えてみたい。

①については，復原された建物の時期ごとの配置は明確ではないので断言することができない。しかし，大局的に見れば，神田・若宮Ｂ遺跡は「コ」の字配置を取る建物群とそれらに付随する建物群である。江上Ｂ遺跡はSB117～123の「Ｌ」の字配置を取る建物群とそれに付随する建物群であり，それらは溝によって区画されている。神田・若宮Ｂ遺跡では発掘面積が少ないためかどうかわからないが，溝による区画が見えない。建物規模については，棟別当り12坪以上のものと以下のものがあり，後者のものが多い。神田・若宮Ｂ遺跡では大規模な建物が多い。[註⑤]②については，神田・若宮Ｂ遺跡で検出され（SK103，SB005），フイゴの羽口と鍛冶滓が出土している。両遺跡は屋敷内で鍛冶が行われていたことを示している。中世前期の鍛冶について網野善彦氏が給免田を保障された国々の鍛冶集団が鍬・鎌の農具の生産を行っていたことを指摘されている〔網野1983〕。このことからも，神田・若宮Ｂ遺跡の鍛冶工房跡は中世の鍛冶集団の存在を裏付けるものと考えられる。[註⑥]また，両遺跡の立地する所は白岩川・栃津川の河川の自然堤防上であり，河川の水運の拠点となりえるのである。さらに，神田・若宮という地名から想起すれば，寺社を背景に開発されたこの地域で鍛冶が行われ，周辺に供給されていったと想像される。③の輸入陶磁器は中世の建物が検出される遺跡やそれ以外の遺跡でも出土している。県内では40ヵ所の出土例が数えられ，輸入陶磁器の広範囲な普及が見られる。出土遺物に占める割合は類例が少ないので明確ではないが，神田・若宮Ｂ・江上Ｂ遺跡の例から，１割前後のものと１～５％のものがあり，これは県内の中世村落での輸入陶磁器のあり方を示すものであろう。

以上，①～③から，神田・若宮Ｂ遺跡は中小河川の拠点に位置し，その屋敷内に鍛冶を組入れた村落領主のあり方を示している。それに比べ，江上Ｂ遺跡は棟別当り20坪以上の建物群と12坪以下の建物群で組み合されており，溝で区画されたそれらの建物は名主あるいは小百姓の住居と考えられる。

註①　土師質土器は成形技法により３つに分類できる。それは，①ロクロ成形技法（回転糸切りとヘラ切り）②型押し成形技法，③手づくね成形技法である。③がよくわかる例は福井県朝倉氏遺跡の土師質土器Ｂ類〔朝倉氏遺跡調査研究所1974〕で，一般には②・③が併用されており，両者を分けることが困難なことが多い。県内では小矢部市日の宮遺跡〔上野1978〕の土師質土器は型押し技法がよくわかるものである。石川〔四柳1980・田嶋1981〕・京都〔松藤1978・横田1981〕では②・③が中世の主流を占めており，①の回転糸切り技法は13～14世紀で見えなくなる。鎌倉〔斉木1983〕では，①（回転糸切り）～③が中世を通じて見られる。草戸千軒〔志道1977〕では①のヘラ切り技法がある。このように，それぞれの技法は地域差があり，技法の解明は手工業生産のあり方の違いとして意識されるであろう。県内では②・③が中世の主流を占める。①の回転糸切り技法はわずかであるが，14世紀後半から15世紀までは確認されている〔岸本1984〕。

註②　吉岡康暢氏は「龍泉窯系青磁の初見ないし流通の一般化が九州北部より半世紀ほど遅れる」と述べられている〔吉岡1981ｂ〕。

註③　県内で珠洲と言われている土器には能登半島の珠洲地方で焼かれた製品とそれ以外で焼かれたと考えられる製品がある。県内では珠洲系窯が発見されていないことから，県内の珠洲は珠洲地方からの搬入・供給を示していると考えられる。しかし，珠洲の中に見られるやや瓦質に似た土器は，東日本に見られる瓦質土器〔吉岡1982〕との関連は明確でないが，珠洲地方とは産地を異にすると考えられる。

註④　県内の中世遺跡では鍋・釜は確認されておらず煮沸用具は不明である。わずかに，日の宮遺跡〔上野1978〕のＣ地区から16世紀の鉄鍋が出土している。しかし，鍋・釜は中世農具の資財であること〔黒田1983・安田1982〕からも発掘例の不足によるためであろう。

註⑤　県内の建物規模表〔橋本1984〕から見ても，神田・江上Ｂ遺跡は大規模な建物が多いといえる。なお，中世の農村の住居の規模分布がわかる延慶３年の伊勢国沼浦村江向村検注名寄帳（醍醐寺宝衆院文書所収）によれば，本在家の棟別当り坪数35坪のもの（21棟）が最大で，12坪のものが最も多いことがわかる。新在家では21坪のもの（１棟）が最大で，４坪が最も多いことがわかる。また，伊藤鄭爾氏によれば，「室町時代の農家の階層別規模を見ると地侍層の24坪を最大として最小3.5坪である。実際にはこれ以上の開きがあったろう（中略）階層的な上下関係が直ちに住居規模の大小に反映していた。（後略）」という〔伊藤1958〕。これらの史料の言う「坪」と遺跡から復原された建物の坪とは面積が違うのであるが，検討すべき視点であろう。

註⑥　黒田日出夫氏は資財から見た中世農民と在地領主の相違を述べておられる。両者の差は銭貨の蓄積，消費生活の規模の大きさ，豪華さ，武器用具の差に見られる。農民諸階層は経営レベルに照応する。名主は牛犂・馬鍬を所有し，小百姓は鍬が農具の中心であるという〔黒田1083〕。この点からも建物に伴う鍛冶工房跡の存在は鍛冶集団をくみ入れた在地領主のあり方を示していると考えられる。なお，山口県下右田遺跡の屋敷内にある鍛冶工房跡と建物を中世鍛冶集団の集住として捉えられている〔三浦1981〕が，本遺跡のあり方とも関連するが，鍛冶集団の集住と考えるには問題があろう。

参考・引用文献

ア．朝倉氏遺跡調査研究所　1975　『特別史跡―乗谷朝倉氏遺跡Ⅳ』

網野善彦　1983　「中世の鉄器生産と流通」　『講座日本技術の社会史』第５巻　日本評論社

安念幹倫　1982　『富山県小矢部市杉谷内床ノ山遺跡―発掘調査現地説明会資料―』　小矢部市教育委員会

イ．池野正男・宮田進一・斎藤　隆　1983　『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』富山県教育委員会

伊藤鄭爾　1958　『中世住居史』　東京大学出版会

伊藤隆三　1980　『富山県小矢部市平桜川東遺跡Ⅱ』　小矢部市教育委員会

稲田孝司　1978　「古代水田遺構の発掘調査」　月刊文化財第181号

ウ．上野　章　1972　「六・弥生時代附古式土師器」　『富山県史考古編』

上野　章　1974　「高岡市頭川遺跡」　大境第５号　富山考古学会

上野　章・岸本雅敏・池野正男・久々忠義　1982　『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会

瓜生堂遺跡調査会　1980　『恩智遺跡』

カ．鎌木義昌　1966　「５　祭祀と信仰」　『日本の考古学Ⅲ』　河出書房

上　市　町　1970　『上市町誌』

上市町教育委員会編　1981～84　『富山県上市町弓庄城跡第１次～第４次緊急発掘調査概要』

キ．岸本雅敏　1977　「小杉町五歩一発見の前方後方墳」　連絡紙70　富山考古学会

岸本雅敏　1984　『蓮花寺遺跡の調査』　婦中町教育委員会

木下正史　1966　「農具」　『日本の考古学Ⅲ』　河出書房

木下正史　1980　「第Ⅱ章藤原宮西Ⅱ地区の調査４考察Ｇ木製品」　『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』　奈良国立文化財研究所

ク．黒田日出男　1983　「中世農業技術の様相」　『講座日本技術の社会史』第１巻　日本評論社

コ．小清水貞二　1963　「古代日本の住居跡から出土する桃核について」　『近畿古文化論攷』橿原考古学研究所編

小島俊彰　1979　「本江遺跡」　『滑川市史考古資料編』

近藤義郎・渋谷泰彦　1957　『津山弥生住居址群の研究』　津山郷土館

近藤義郎　1959　「共同体と単位集団」　考古学研究第６巻第１号

近藤義郎　1983　『前方後円墳の時代』　岩波書店

サ．斉木秀雄　1983　「かわらけ」　『研修道場用地発掘調査報告書』　鎌倉市鶴岡八幡宮

酒井重洋　1982　「板屋古墳」　『昭和56年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会

佐藤敏也　1971　『日本の古代米』　雄山閣

佐原　真　1983　「日本海沿岸の弥生文化」　歴史公論88号

シ．志道和直　1977　「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案」　草戸千軒ニュースNo.48

セ．関　　清・久々忠義　1984　『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺路群発掘調査概要(2)』　富山県教育委員会

タ．高倉洋彰　1975　「弥生時代の集団組成」　『九州考古学の諸問題』　東出版寧良社

高瀬信隆　1982　「白岩川を中心とした流域の変遷について」かんとりいNo.６

田嶋正和　1981　「中世土師器」　『勅使館跡発掘調査報告』　加賀市教育委員会

田中義昭　1979　「弥生期における耕地と集落」　『日本考古学を学ぶ(3)』　有斐閣

ツ．都出比呂志　1970　「農業共同体と首長権」　『講座日本史１』　東京大学出版会

坪井清足　1953　「福島県天王山遺跡の弥生式土器」　史林36―１

ト．富山県教育委員会　1973　『富山県遺跡地図』

富山市教育委員会　1976　『富山市遺跡地図』

富山県埋蔵文化財センター編　1981　『北陸自動車遺跡調査報告―上 市 町 遺 構 編―』上市町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター編　1982　『北陸自動車遺跡調査報告―上市町土器・石器編―』上市町教育委員会
富山県埋蔵文化財センター編　1981　『北陸自動車遺跡調査報告―立 山 町 遺 構 編―』富山県教育委員会
富山県埋蔵文化財センター編　1982　『北陸自動車遺跡調査報告―立山町土器・石器編―』富山県教育委員会
富山県埋蔵文化財センター編　1982　『北陸自動車遺跡調査報告―魚　津　市　編―』富山県教育委員会
鳥越憲三郎　1982　『原弥生人の渡来』　角川書店
ナ．中山修宏　1981　『串田新遺跡Ⅱ』　大門町教育委員会
ネ．根木　修　1976　「木製農耕具の意義―弥生時代を中心に―」　考古学研究第22巻第4号
ハ．八賀　晋　1971　「古代の農耕と土壌」　『古代の日本2・風土と生活』
橋本澄夫　1966　「弥生文化の発展と地域性―北陸―」　『日本の考古学Ⅲ』　河出書店
橋本澄夫　1975　「入門講座弥生土器―北陸―」考古学ジャーナルNo.106，107，109，111
橋本　正　1970　『囲山遺跡―小杉町囲山遺跡緊急発掘調査報告書』　富山県教育委員会
橋本　正　1974　『小杉町上野遺跡―記録写真編―』富山県教育委員会
橋本　正　1974　『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書―富山市・朝日町間―』富山県教育委員会
橋本　正　1976　「竪穴住居の分類と系譜」考古学研究第23巻第3号
橋本正春　1982　「富山県の土師器研究史概観」　富山市考古資料館紀要第1号
橋本正春　1984　「中世建物のあり方について」　『北陸自動車遺跡調査報告―立山町木製品・総括編―』
フ．藤澤良祐　1976　「瀬戸窯出土遺物編年図」　『瀬戸市史』　陶磁史篇第2巻　瀬戸市役所
藤田富士夫　1975　「富山市杉谷Ａ遺跡」　『富山県杉谷（Ａ・Ｇ・Ｈ）遺跡調査報告書』　富山市教育委員会
藤田富士夫　1981　『白鳥城跡試掘調査概要』　富山市教育委員会
古岡英明　1972　「7　古墳時代」　『富山県史考古編』
マ．麻柄一志・麻柄幸子　1982　「白岩川流域における遺跡群の形成―初期農耕文化の成立をめぐって―」かんとりいNo.6
松藤和人　1978　「同志社キャンパス内出土の土器陶磁器の編年」　『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物Ⅱ』
ミ．三浦圭一　1981　「技術と信仰」　『技術の社会史』　第1巻　有斐閣
ヤ．安田龍太郎　1977　「中世における日常土器類の組合せと問題点―西日本を中心として―」『考古論集―慶祝松崎寿和先生63歳論文集―』
安田龍太郎　1983　「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」　『文化財論叢』
山本正敏　1982　「Ⅳ遺物」　『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)』　入善町教育委員会
ヨ．横浜市埋蔵文化財調査委員会編　1975　『歳勝土遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅴ
横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」九州歴史資料館研究論集第4巻
横田洋三　1981　「出土土師皿編年試案」　『平安京跡研究調査報告』　第5編　古代学協会
横山卓雄　1980　「三世紀の地質学」　『三世紀の考古学上巻』　学生社
吉岡康暢　1976　「Ⅳ総括　1土器編年と遺構の年代」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」石川県教育委員会
吉岡康暢　1978　「瓊のムラからクニへ」　『古代の地方史4東海・東山・北陸編』朝倉書店
吉岡康暢　1981ａ　「中世陶器の生産と流通」　考古学研究108号
吉岡康暢　1981ｂ　「北東日本海域における中世陶磁の流通」　月刊文化財No.215
吉岡康暢　1982　「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」　庄内考古学第18号
四柳嘉章　1980　「中世雑器―土師質土器―の編年」　『西川島Ⅰ』　穴水町教育委員会
ワ．和島誠一　1966　「弥生時代社会の構造」　『日本の考古学Ⅲ』　河出書房

III 自然遺物

A　江上遺跡群出土の種実遺体

大阪市立大学理学部　粉　川　昭　平
富山大学教養部　吉　井　亮　一

1．はじめに

北陸自動車道建設工事に先だって，富山県下において多くの遺跡が発掘・調査された。江上遺跡群は，このうち富山県東部，上市町域内に存在する複数の遺跡の総称で，正印新・中小泉・飯坂・江上A・江上B・神田・東江上・下経田の8遺跡を含む。詳しくは『遺構編』および『土器・石器編』を参照されたい。遺跡の発掘調査にともない遺構内から多数の植物遺体が出土したが，今回はこのうち正印新・中小泉・江上A・江上Bの4遺跡から出土した植物遺体[註①]について検討した。その結果得られた知見について以下に報告する。なお，この報文をまとめるにあたって，富山大学教養部の藤井昭二教授から多くの御教示を得た。また同教養部の小島覚教授，同理学部の小林貞作教授と増田恭次郎氏には調査研究に格別の配慮をいただいた。深く感謝の意を表する。

2．遺跡および種実遺体の出土状況

正印新・中小泉・江上A・江上Bの4遺跡は，いずれも上市川・白岩川などいくつかの中小河川によって形成された複合扇状地上の湧水帯付近に位置し，海抜高度は約15mである（『遺構編』の第1図参照）。

正印新遺跡は弥生時代中期・後期と江戸時代中期の集落遺跡である。種実遺体は弥生時代中期および後期の溝と穴の覆土中から現地にて直接に採取された。覆土は黒褐色粘土である。

中小泉遺跡は弥生時代中期・後期の水路遺跡で，考古遺物は鎌倉時代・室町時代のものもあわせて出土する。種実遺体は弥生中期・後期の水路・溝から現地にて直接に採取されたが，多くは覆土由来ではなく溝・水路壁からのものである。したがってこの種実遺体の多くは遺構形成以前のものである。種実遺体包含層は茶褐色粘土である。

江上A遺跡は住居址・穴・溝などよりなる弥生後期の集落遺跡である。主として穴および溝の覆土から多数の土器・木製品にともなって夥しい数の種実遺体が出土した。種実遺体の一部は現地にて穴，溝などの覆土から直接に採取されたが，多くは大量に採取された覆土試料中から後に選別・検出された。試料は灰白色の中粒～細粒砂質の粘土およびシルト質粘土で，溝（SD01～SD06, SD09, SD10, SD13），建物（SB16, SB19），井戸（SE26），穴（SK27～SK29, SK31），柵列（SA22, SA23）などの覆土である。供試料総量は約1.5m³で，その多くはSD03とSD08の覆土である。

江上B遺跡は多くの建物跡・溝よりなる中世（鎌倉時代～室町時代）の集落遺跡（『遺構編』参照）で，主として溝・穴の覆土中から種実遺体が得られた。江上A遺跡の場合と同様に，種実遺体の一部は溝・穴などの覆土中から現地にて直接に採取されたが，その多くは覆土試料中から後日選別・検出された。試料はやや湿性の有機質黒色粘土で，溝（SD005, SD016, SD036, SD037, SD070），穴（SK007），建物（SB008），などの覆土である。供試料総量は約3.5m³で，その多くはSD070の覆土である。

3．試料の処理

江上A遺跡および江上B遺跡から採取された覆土試料は，opening 約1㎜の金属篩およびガーゼ二枚を重ねたものでふるい，種実遺体をとり出した。こうして得た種実遺体および遺跡で直接に拾い上げた種実遺体を，ある程度種類ごとに選別し，約3％のホウ酸ホウ砂水溶液中に保存した。

以上の処理によって選別・保存された種実遺体は，主に双眼実体顕微鏡下で観察検討し，同定につとめた。

4．同定結果

江上A遺跡出土種実遺体の同定結果については，表1，表2に示した。66分類群が検出同定されたが，そのうち多

数出土しているものはオニグルミ，アサ，マタタビ，モモ，アカメガシワ，トチノキ，ブドウ属，マクワウリ，ヒョウタン，エゴノキ，イネなどである。針葉樹はマツ属（複維管束亜属），イヌガヤおよびカヤ[註②]の３分類群，常緑広葉樹はアカガシ？と同定したものとヤブツバキ[註③]の２種のみである。他は落葉広葉樹（28分類群）と草本（30分類群）である。栽培植物にはアサ，モモ，アズキ属(リョクトウ？)，マクワウリ，ヒョウタン，イネの６分類群がある。また耕地雑草・人里植物と考えられるものに，クワクサ，カナムグラ，イシミカワ，ミゾソバ，アカザ，カタバミ，エノキグサ？，ノブドウ，メナモミ，ヤブミョウガ，イボクサなどがある。

江上Ｂ遺跡出土種実遺体の同定結果については表３，表４に示した。57分類群が検出同定されたが，多数出土しているものは，スギ，アサ，コブシ，サクラ属，モモ，フジ属，アカメガシワ，トチノキ，マクワウリ，ヒョウタンである。針葉樹はマツ属（複維管束亜属）とスギの２分類群のみで，確かな常緑広葉樹はシイノキのみであった。他は落葉広葉樹（25分類群）と草本（27分類群）である。栽培植物にはアサ，ソバ属，ウメ，モモ，アズキ属（リョクトウ？），アズキ？，スイカ？，マクワウリ，トウガン？，ヒョウタン，ムギ類，イネ，millet 類の13分類群がある。

正印新遺跡出土種実遺体の同定結果は表５に示した。中小泉遺跡については表６と表７に示した。この２遺跡では，ともに検出同定された種実遺体の分類群数が少なく，各分野群ごとの出現数もわずかであった。ただ，中小泉遺跡でトチノキの種子が426個体ときわめて多数出土している。また，イネが炭化米の状態で出土している。

なお，種実遺体の代表的なものについては，その写真を図版１～４に掲げた。

５．考察

正印新および中小泉の両遺跡では種実遺体の出土量が少なく，意味のある考察をなしえない。そこで江上Ａ遺跡と江上Ｂ遺跡の結果についてのみ考察する。

堆積環境　種実遺体の包含層はいずれの場合も，湿性ないしやや湿性の中～細粒砂質またはシルト質の粘土層で，種実遺体の保存状況はきわめて良好であった。種実遺体の内容は林域を構成する植物から耕地雑草・栽培植物までを含む。また，たとえば食用に供しうるトチノキ，オニグルミの種実は，幼果と成熟果が混在して出土している。以上のことから，遠隔地よりの流入や，搬入といった人為的影響を無視しえないが，種実遺体の多くは遺跡内とその周辺に生育していた植物に由来したものと考えられる。すなわち，江上Ａ・江上Ｂ両遺跡の種実遺体群は定性的に当時の遺跡周辺の植物相をよく反映しているものと推定できる。

古植生　江上Ａ・江上Ｂ両遺跡の種実遺体群中に出現するほとんどの分類群は，富山県下の丘陵地から山麓部にかけての現存植生中に見出される（土井林学振興会･緑地研究会，1976；富山県植生調査研究会，1977；環境庁，1980；太田・小路・長井，1983)。いま試みに黒崎・里見による植物相の詳細な調査報告（黒崎・里見，1968）のある大岩川流域の植生と出土種実遺体群の組成を比較してみよう。[註④]「大岩川流域」は江上遺跡群から南東へ約７kmの距離にあり，遺跡群所在地との比高は約80～940ｍである。当地域ではコナラ・ミズナラなどを主体とする落葉広葉樹の二次林域とウラジロガシなどの常緑広葉樹の小林域が入り組んだ植生相を呈している。江上Ａ遺跡では栽培植物を除く検出された種子植物48分類群中37分類群が，江上Ｂ遺跡では同43分類群中31分類群が黒崎・里見（前出）の植物目録中に認められる。このことは江上Ａ・江上Ｂ両遺跡の時代の植生はいずれも現在の富山県下の丘陵部から山麓部域のそれときわめてよく似た状況であったことを示している。また種実遺体群は，ブナ，キハダ，シイノキ，イタヤカエデ，オニグルミ，トチノキなどの成林要素，コウゾ，ヤマグワ，マタタビ，スズメウリ，キカラスウリ属，ノブドウ，ブドウ属，アカメガシワなど林縁に出現する要素とタラノキ，クサギなど伐採跡地に出現する要素，およびアカザなどの耕地雑草・人里植物の要素の各群を含む。このことは遺跡が耕地に隣接しつつも，林域への人為的干渉が強く働いていた地点からあまり遠くないところに立地していたことを意味する。さらに推論を進めるならば，遺跡周辺とくに平野が海へ向かって展開する遺跡の北側に耕作地等が拡がり，後背地(南側)に林域がひかえていたというような景観も想像しうる。

しかし，林域および耕地などの植物構成割合や量(面積)，配置などを推定するには今回の結果のみでは不十分である。

江上Ａ・江上Ｂ両遺跡出土種実遺体の比較　江上Ａ遺跡のみで出土した種実遺体は30分類群(うち栽培植物０)，江上Ｂ遺跡でのみ出土した種実遺体は20分類群（うち栽培植物７）であった。栽培植物では，江上Ａ遺跡でアサ，モモ，アズキ属(リョクトウ？)，マクワウリ，ヒョウタン，イネの６分類群が出土しているが，これは弥生時代後期としては一般的なものである。江上Ｂ遺跡ではこれに加えてソバ属，ウメ，アズキ？，スイカ？，トウガン？，ムギ類，millet 類が出土する。中世には弥生時代後期に比べて農業生産活動が活発化・多様化していることが示唆される。栽培植物以外の植物については，弥生時代後期と中世の植生の差異を明示するものは認められない。しかし江上Ａ遺跡に出土したブナ，イヌガヤ，カヤ，ガマズミ，ウリノキなどは江上Ｂ遺跡では認められず，また江上Ｂ遺跡ではスズメウリ，キカラスウリ属が出土するとともに耕地雑草・人里植物の出土数も江上Ａ遺跡に比べて多い傾向を示す。江上Ａ・江上Ｂ両遺跡の距離は約60ｍ，それぞれの遺構確認面の比高は約１ｍであるから，微環境によって植生に差異の生ずる可能性があることを考慮しても，中世においては伐開など林域に対する人為的干渉がより強力なものとなっていたことがうかがえる。また，江上Ａ遺跡でスギ遺体がまったく出土していないにもかかわらず，木製品にはスギ材が多用されている（「木製品の樹種」参照)。弥生時代における有用材の調達方法，調達場所などを考える上で興味深い点といえよう。

特記すべき種実遺体　**マルミノヤマゴボウ**．種子遺体が江上Ａ遺跡から出土しているが，現在富山県内での自生は知られていない。富山県の植物目録（大田ほか，前出）にも記載はない。**ムクロジ**．種子遺体が江上Ａ・江上Ｂ両遺跡より出土している。富山県内での生育は稀で，太田ほかの目録(前出)では栽培品の逸出として県内２ヵ所での生育を記載している。**ウキヤガラ**．果実が江上Ａ・江上Ｂ両遺跡から出土している。現在富山県下では氷見市十二町潟が唯一の自生地とされる（大田ほか，前出)。以上３種の種実遺体は富山県内の現存植生の成立を考えるうえで重要な意味をもつ。**ウリノキ**．種子遺体の破片が１個，江上Ａ遺跡から出土している。本種は林内の小低木で着果数もごく少ないために自然遺物としての出土はきわめて稀で，特筆に値する。**モモ**．江上Ａ・江上Ｂ両遺跡から多数の核が出土している。品種の違いによると思われるが，江上Ａ遺跡出土のものと江上Ｂ遺跡のものではその形態が異なる。時代や性格が明確な同一地域の複数の遺跡から遺体が多数出土して詳しく比較検討しうる例はきわめて少なく重要である。

６．まとめ

多数の種実遺体を予察的に検討した結果，それらは森林植物と人里植物・栽培植物などに由来するものであることがわかった。植生は，弥生時代後期・中世ともに富山県下の山麓部域の現存植生とよく一致する。それは温帯性の落葉広葉樹を主体とするもので，現在富山県下に自生の知られていないような特記すべき分類群をも若干含んでいる。

註①　今回，対象とした植物遺体は材遺体を除く大型植物遺体であり，その多くは種実遺体であった。報文中では「種実遺体」という語を用いて記述したが，その内容は種実のみでなく植物の他の部位たとえば芽や葉などの遺体をも若干含むことを諒解されたい。

註②　イヌガヤおよびカヤは現存植生を考慮するとそれぞれハイイヌガヤとチャボガヤである可能性が強い。種実からは特定できないので今回は，イヌガヤ，カヤとして記述した。

註③　ユキツバキ，ユキバタツバキである可能性もある。種実からは特定できないので，今回はヤブツバキとした。

註④　現在，遺跡周辺は水田と化して自然植生を反映する植物はほとんど残存しない。

参考文献

大田　弘・小路登一・長井真隆　1983『富山県植物誌』廣文堂

環境庁編　1980『日本の重要な植物群落　北陸版　富山県・石川県・福井県』大蔵省印刷局

黒崎史平・里見信生　1968「富山県大岩川流域の植物地理学的研究」金沢大学理学部植物園年報第１号

土井林学振興会・緑地研究会　1976「社寺林の研究・５（富山県)」森林・第５号抜刷

富山県植生調査研究会　1977『富山県の植生』富山県

表1　江上A遺跡出土種実遺体の組成

植物名	生育地等		出土部位
マツ科 Pinaceae			
マツ属（複維管束亜属）*Pinus*（*Diploxylon*）sp.		C	球果・樹皮
イヌガヤ科 Cephalotaxaceae			
イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia*（KNIGHT）K. Koch f. *dropacea*（SIEB. et ZUCC.）KITAMURA	低地－山地	C	種子
イチイ科 Taxaceae			
カヤ *Torreya nucifera* SIEB. et ZUCC.	低地－山地	C	種子
クルミ科 Juglandaceae			
オニグルミ属 *Juglans* sp.		D	核
オニグルミ *J. mandshurica* MAXIM. subsp. *sieboldiana* KITAMURA	低地－山地－河畔	D	核・幼果
ブナ科 Fagaceae			
アカガシ？ *Quercus acuta* THUNB. ?	低地－山地	E	堅果
ブナ *Fagus crenata* BLUME	山地－適潤地	D	殻斗
クワ科 Moraceae			
クワクサ *Fatoua villosa*（THUNB.）NAKAI	低地－畑地，荒地	H	種子
カナムグラ *Humulus japonicus* SIEB. et ZUCC.	河畔，林縁，路傍	L・H	痩果
アサ *Cannabis sativa* L.	栽培植物	H	種子
コウゾ *Broussonetia kazinoki* SIEB.	低地－林縁	D	種子
ヤマグワ *Morus australis* POIRET	山地	D	種子
タデ科 Polygonaceae			
タデ属 *Polygonum* sp.		H	種子
イシミカワ *P. perfoliatum* L.	低地－河畔，湿地	H	種子
ミゾソバ *P. thunbergii* SIEB.et ZUCC.	低地－山地－水辺	H	種子
ヤマゴボウ科 Phytolaccaceae			
マルミノヤマゴボウ *Phytolacca japonica* MAKINO	山地－林縁	H	種子
ナデシコ科 Caryophyllaceae			
ナデシコ科 Caryophyllaceae-ind.		H	種子
アカザ科 Chenopodiaceae			
アカザ *Chenopodium album* L.	畑地，耕地	H	種子
モクレン科 Magnoliaceae			
コブシ *Magnolia kobus* DC.	山地	D	種子
マタタビ科 Actinidiaceae			
マタタビ *Actinidia polygama*（SIEB. et ZUCC.）PLANCH. et MIQ.	山地－林縁	L・D	種子
ツバキ科 Theaceae			
ツバキ属 *Camellia* sp.		E	種子
ヤブツバキ *C. japonica* L.	低地－海岸風衝地	E	種子
バラ科 Rosaceae			
キイチゴ属 *Rubus* sp.			小核
サクラ属 *Prunus* sp.		D	核
モモ *P. persica* BATSCH	栽培植物	D	核
マメ科 Leguminosae			
マメ科 Leguminosae-ind.			種子
アズキ属(リョクトウ？) *Phaseolus* sp.	栽培植物	H	子葉
フジ属 *Wisteria* sp.		L	芽
カタバミ科 Oxalidaceae			
カタバミ *Oxalis corniculata* L.	低地－路傍	H	種子
トウダイグサ科 Euphorbiaceae			
エノキグサ？ *Acalypha australis* L. ?	低地－畑地	H	種子
アカメガシワ *Mallotus japonicus*（THUNB.）MUELLER-ARG.	低地－林縁	D	種子
ミカン科 Rutaceae			
キハダ *Phellodendron amurense* RUPRECHT	山地－渓谷	D	種子
カラスザンショウ *Fagara ailanthoides*（SIEB. et ZUCC.）ENGLER	低地－山地	D	種子
イヌザンショウ *F. mantchurica*（BENNETT）HONDA	山地	D	種子
サンショウ属 *Zanthoxylum* sp.		(D)	種子
ムクロジ科 Sapindaceae			
ムクロジ？ *Sapindus mukorossi* GAERTN. ?	低山地－丘陵	D	種子

表1 つづき

植物名	生育地等		出土部位
トチノキ科 Hippocastanaceae			
トチノキ *Aesculus turbinata* BLUME	山地－谷部	D	種子・幼種子・果皮・幼果
クロウメモドキ科 Rhamnaceae			
クマヤナギ属 *Berchemia* sp.	山地-湿性地, 林縁	D	種子
ブドウ科 Vitaceae			
ブドウ属 *Vitis* sp.		L・D	種子
ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* (MAXIM.) TRAUTV.	低地, 山地－林縁	L・H	種子
ウリ科 Cucurbitaceae			
マクワウリ *Cucumis melo* L.	栽培植物	L・H	種子
ヒョウタン *Lagenaria leucantha* RUSBY	栽培植物	L・H	種子・果皮
ウリノキ科 Alangiaceae			
ウリノキ *Alangium platanifolium* (SIEB. et ZUCC.) var. *trilobum* (MIQ.) OHWI	山地－適潤地	D	種子
ミズキ科 Cornaceae			
ミズキ *Cornus controversa* HEMSLEY	低地, 山地-適潤地	D	核
ウコギ科 Araliaceae			
タラノキ *Aralia elata* (MIQ.) SEEMANN	山地－伐採跡地	D	種子・刺
カキノキ科 Ebenaceae			
マメガキ？ *Diospyros lotus* L. ？	丘陵地	D	種子
エゴノキ科 Styracaceae			
エゴノキ *Styrax japonica* SIEB. et ZUCC.	低地－山地	D	種子
クマツヅラ科 Verbenaceae			
ムラサキシキブ属 *Callicarpa* sp.	低地－山地	D	種子
クサギ *Clerodendron tricotomum* THUNB.	低地	D	種子
シソ科 Labiatae			
シソ科 Labiatae-ind.		H	瘦果
シソ属 *Perilla* sp.		H	瘦果
スイカズラ科 Caprifoliaceae			
ガマズミ *Viburnum dilatatum* THUNB.	低地－山地	D	核果
ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (MIQ.) HARA	低地, 山地－林縁	D	種子
キク科 Compositae			
キク科 Compositae-ind.		H	瘦果
メナモミ *Siegesbeckia pubescens* MAKINO	低地－荒地, 路傍	H	瘦果
ツユクサ科 Commelinaceae			
ヤブミョウガ *Pollia japonica* THUNB.	低地－陰湿地	H	種子
イボクサ *Murdannia keisak* (HASSK.) HAND.-MAZZ.	低湿地, 池畔, 休耕田	H	種子
イネ科 Gramineae			
イネ科 Gramineae-ind.		H	瘦果・地下茎
イネ *Oryza sativa* L.	栽培植物	H	瘦果
ミクリ科 Sparganiaceae			
ミクリ属 *Sparganium* sp.	水辺	H	果実
カヤツリグサ科 Cyperaceae			
カンガレイ属 *Scirpus* sp.		H	果実
ウキヤガラ *S. fluviatilis* (TORR.) A. GRAY	低地－湿地, 池畔	H	果実
カヤツリグサ属 *Cyperus* sp.		H	果実
スゲ属 *Carex* sp.		H	果実
コケ植物 Bryophytes			
菌類 Fungi			

※「生育地等」欄の記号は，C……針葉樹，D……落葉広葉樹，E……常緑広葉樹，H……草本，L……つる植物を示す。

表2　江上A遺跡出土種実遺体の遺構別出土数

種類	SD01	SD02	SD03	SD04	SD05	SD06	SD09	SD10	SD13	SB16	SB19	SE26	SK27	SK28	SK29	SK31	SA22	SA23	その他	計
マツ属	2(1)																			2
イヌガヤ	(3)																			(3)
カヤ	3(2)				1															4(2)
オニグルミ属		(2)	(3)																	(5)
オニグルミ	44(30)	3(1)	1		(4)														36(34)	84(69)
アカガシ?	2																			2
ブナ																			(1)	(1)
クワクサ	2(1)																			2(1)
カナムグラ																			(1)	(1)
コウゾ							1													1
ヤマグワ									1											1
アサ		1							111(110)											112(110)
タデ属	2		1						30(3)											33(3)
イシミカワ									7(5)											7(5)
ミゾソバ									2											2
マルミノヤマゴボウ		2				1			9											12
ナデシコ科			3						14											17
アカザ	9(7)	2	13(7)						30(2)										10(7)	64(23)
コブシ																			1	1
マタタビ	6(1)	1	5				68(14)		21										5	106(15)
ツバキ属	2(1)																			2(1)
ヤブツバキ																			1	1
キイチゴ属	1	1					10(1)		11											23(1)
サクラ属	1			3(2)															1	5(2)
モモ	43(9)	4(2)	4(2)	9(1)	7(2)		2		4(1)		2(1)	1	15(2)	2	1	1	1	1	89(31)	176(51)
マメ科									1										3	4
アズキ属(リョクトウ?)																			1	1
フジ属																			1	1
カタバミ							4(1)													4(1)
エノキグサ?							3													3
アカメガシワ	2	36(14)	1	189(16)			18(5)		134(19)										47(1)	427(55)
キハダ	1	5(1)		1			1		5(2)											13(3)
カラスザンショウ		6(1)							5										1	1
イヌザンショウ																			3(1)	3(1)
サンショウ属		1		1	(1)		2												3	8(1)
ムクロジ?																			(2)	(2)
トチノキ	345(40)	9(4)			1		(3)	1								(4)			14(13)	377(64)
クマヤナギ属		(1)																		(1)
ブドウ属		1		50(7)			7		2(1)	1									15	76(8)
ノブドウ	5(1)			1			2(1)		26(7)										1	35(9)
マクワウリ	多数	多数	多数	65(13)			2(1)		31(19)										多数	多数
ヒョウタン	39(19)	(9)	多数	3(1)	多数		2		多数					26(20)					45(30)	多数
ウリノキ		(1)																		(1)
ミズキ	1	(1)		1			9(3)		13(2)										9(6)	34(12)
タラノキ							2		1										2	5
マメガキ?				1															1	2
エゴノキ	8(3)		7(3)	17(8)		1	12(7)		(4)			(2)	(1)						60(55)	112(83)
ムラサキシキブ属	1	1							11											14
クサギ	2	8(5)		1					16(12)											27(17)
シソ科	3						10		6(3)											19(3)
シソ属	1																			1
ガマズミ	1																			1
ニワトコ							2		5											7
キク科	1						1		1											3
メナモミ									1											1

※（ ）内はそのうち破損しているものの数を示す。

表2 つづき

種類	SD01	SD02	SD03	SD04	SD05	SD06	SD09	SD10	SD13	SB16	SB19	SE26	SK27	SK28	SK29	SK31	SA22	SA23	その他	計
ヤブミョウガ									1											1
イボクサ																			(1)	(1)
イネ科									1											1
イネ	多数	多数	(1)	多数	1		多数		多数	1						多数	2		多数	多数
ミクリ属							9													9
カンガレイ属	5	5	1	1			多数		7										多数	多数
ウキヤガラ							3													3
カヤツリグサ属																			1	1
スゲ属	1						1		5(4)											7(4)
コケ植物							1													1
菌類									21										2(1)	23(1)

※（ ）内はそのうち破損しているものの数を示す。

表3 江上B遺跡出土種実遺体の組成

植物名	生育地等		出土部位
マツ科 Pinaceae			
マツ属（複維管束亜属）*Pinus* (*Diploxylon*) sp.		C	球果・樹皮・鱗片
スギ科 Taxodiaceae			
スギ *Cryptomeria japonica* D. DON	低地－山地	C	雄花序
クルミ科 Juglandaceae			
オニグルミ *Juglans mandshurica* MAXIM. subsp. sieboldiana KITAMURA	低地－山地－河畔	D	核
カバノキ科 Betulaceae			
ハンノキ属 *Alnus* sp.		D	雄花序
ブナ科 Fagaceae			
シイ *Castanopsis cuspidata* (THUNB.) SCHOTTKY	低地－山地	E	果の破片
ニレ科 Ulmaceae			
ケヤキ？ *Zelkova serrata* (THUNB.) MAKINO?	低地	D	葉身の一部
クワ科 Moraceae			
カナムグラ *Humulus japonicus* SIEB. et ZUCC.	河畔，林縁，路傍	L・H	痩果
アサ *Cannabis sativa* L.	栽培植物	H	種子
タデ科 Polygonaceae			
タデ属 *Polygonum* sp. (*Persicaria* ?)		H	種子
イシミカワ *P. perfoliatum* L.	低地－河畔，湿地	H	種子
ミゾソバ *P. thunbergii* SIEB. et ZUCC.	河畔，水辺	H	種子
ソバ属 *Fagopyrum* sp.	栽培植物	H	種子
アカザ科 Chenopodiaceae			
アカザ *Chenopodium album* L.	畑地・耕地	H	種子
モクレン科 Magnoliaceae			
コブシ *Magnolia kobus* DC.	山地	D	種子
クスノキ科 Lauraceae			
クスノキ科？ Lauraceae-ind. ?			芽
ツヅラフジ科 Menispermaceae			
アオツヅラフジ *Cocculus trilobus* (THUNB.) DC.	低地－丘陵	L・D	種子
バラ科 Rosaceae			
サクラ属 *Prunus* sp.		D	核・樹皮
ウメ *P. mume* (SIEB.) SIEB. et ZUCC.	栽培植物	D	核
モモ *P. persica* BATSCH	栽培植物	D	核
マメ科 Leguminosae			
マメ科 Leguminosae-ind.			子葉・鞘
アズキ属(リョクトウ？) *Phaseolus* sp.	栽培植物	H	子葉
アズキ？ *Phaseolus angularis* W. F. WRIGHT ?	栽培植物	H	子葉
フジ属 *Wisteria* sp.	山林	L・D	芽・鞘

表3 つづき

植物名	生育地等		出土部位
トウダイグサ科 Euphorbiaceae			
アカメガシワ *Mallotus japonicus* (THUNB.) MUELLER-ARG.	低地－林縁	D	種子
ミカン科 Rutaceae			
カラスザンショウ *Fagara ailanthoides* (SIEB. et ZUCC.) ENGLER	低地－山地	D	種子
イヌザンショウ *F. mantchurica* (BENNETT) HONDA	山地	D	種子
サンショウ属 *Zanthoxylum* sp.		(D)	種子
カエデ科 Aceraceae			
イタヤカエデ *Acer mono* MAXIM.	山地	D	翼果
ムクロジ科 Sapindaceae			
ムクロジ *Sapindus mukorossi* GAERTN.	低山地－丘陵	D	種子
トチノキ科 Hippocastanaceae			
トチノキ *Aesculus turbinata* BLUME	山地－谷部	D	種子・幼種子
アワブキ科 Sabiaceae			
アワブキ *Meliosma myriantha* SIEB. et ZUCC.	丘陵地－山地	D	種子
クロウメモドキ科 Rhamnaceae			
クマヤナギ属 *Berchemia* sp.		D	核果
ブドウ科 Vitaceae			
ブドウ属 *Vitis* sp.		L・D	種子
ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* (MAXIM.) TRAUTV.	低地，山地－林縁	L・H	種子
ウリ科 Cucurbitaceae			
スズメウリ *Melothria japonica* (THUNB.) MAXIM.	野原，水辺	L・H	種子
スイカ？ *Citrullus vulgaris* SCHRAD. ?	栽培植物	L・H	種子
マクワウリ *Cucumis melo* L.	栽培植物	L・H	種子
トウガン？ *Benincasa hispida* COGN. ?	栽培植物	L・H	種子
ヒョウタン *Lagenaria leucantha* RUSBY	栽培植物	L・H	種子・果皮
キカラスウリ属 *Trichosanthes* sp.	低地－丘陵地	L・H	種子
ミズキ科 Cornaceae			
ミズキ *Cornus controversa* HEMSLEY	低地，山地-適潤地	D	核果
クマノミズキ *Cornus macrophylla* WALLICH	低地，山地-適潤地	D	核果
ウコギ科 Araliaceae			
タラノキ *Aralia elata* (MIQ.) SEEMANN	山地－伐採跡地	D	刺
ツツジ科 Ericaceae			
ネジキ？ *Lyonia ovalifolia* (WALL.) DRUDE?	丘陵－低山地	D	朔果
カキノキ科 Ebenaceae			
カキノキ属 *Diospyros* sp.		(D)	種子
エゴノキ科 Styracaceae			
エゴノキ *Styrax japonica* SIEB. et ZUCC.	低地，山地	D	種子
クマツヅラ科 Verbenaceae			
クサギ *Clerodendron tricotomum* THUNB.	低地	D	種子
シソ科 Labiatae			
シソ属 *Perilla* sp.		H	瘦果
ヒルムシロ科 Potamogetonaceae			
ヒルムシロ *Potamogeton distinctus* BENNETT	池・沼	H	果実
ツユクサ科 Commelinaceae			
ツユクサ *Commelina communis* L.	低地	H	種子
イネ科 Gramineae			
イネ科 Gramineae-ind		H	地下茎
ムギ類 *Hordeum* or *Triticum* sp.	栽培植物	H	瘦果
イネ *Oryza sativa* L.	栽培植物	H	瘦果
Millet 類 *Setaria* sp. ?	栽培植物	H	瘦果
ミクリ科 Sparganiaceae			
ミクリ属 *Sparganium* sp.	水辺	H	果実
カヤツリグサ科 Cyperaceae			
カンガレイ属 *Scirpus* sp.		H	果実
ウキヤガラ *S. fluviatilis* (TORR.) A. GRAY	低地・湿地，池畔	H	果実

※「生育地等」欄の記号は，C……針葉樹，D……落葉広葉樹，E……常緑広葉樹，H……草本，L……つる植物を示す。

表4　江上B遺跡出土種実遺体の遺構別出土数

種　類	SD016	SD036	SD037	SD070	SK007	SB008	SD005	その他	計
マツ属				3	1		1	1	6
スギ				60					60
オニグルミ			(2)	(4)	2(1)		8(7)		16(14)
ハンノキ属				1					1
シイ				1					1
ケヤキ?					1				1
カナムグラ				1	1				2
アサ				19	32				51
タデ属				2	8				10
イシミカワ					1				1
ミゾソバ				4	1				5
ソバ属					14				14
アカザ					16				16
コブシ				1	39				40
クスノキ科					1				1
アオツヅラフジ					2				2
サクラ属				2	31(2)				33(2)
ウメ				(20)	2				22(20)
モモ	1	多数	18(3)	多数	多数	1		5(1)	多数
マメ科					7(2)				7(2)
アズキ属(リョクトウ?)				5	1			3	9
アズキ?				7					7
フジ属				6	66				72
アカメガシワ				多数					多数
カラスザンショウ				13					13
イヌザンショウ					1				1
サンショウ属				5					5
イタヤカエデ					1				1
ムクロジ					1				1
トチノキ			(4)	(9)	(6)			多数	多数
アワブキ					1				1
クマヤナギ属					9				9
ブドウ属					6				6
ノブドウ				9	16(1)				25(1)
スズメウリ					2				2
スイカ?				1					1
マクワウリ				11841(2710)	23(2)				11864(2712)
トウガン?				1					1
ヒョウタン				多数	1			多数	多数
キカラスウリ属				4(3)	2				6(5)
ミズキ				13	27		1		41
クマノミズキ				4	1				5
タラノキ				1	2				3
ネジキ?				1					1
カキノキ属				3					3
エゴノキ				5(1)	1				6(1)
クサギ				4	2			9	15
シソ属					6				6
ヒルムシロ					4				4
ツユクサ				1	1				2
イネ科				12					12
ムギ類				4					4
イネ				4					4
Millet類								1	1
ミクリ属				1					1
カンガレイ属					11				11
ウキヤガラ				2					2

※（ ）内はそのうち破損しているものの数を示す。

表5　正印新遺跡出土種実遺体の組成

植物名	生育地等		出土部位
クワ科 Moraceae			
カナムグラ *Humulus japonicus* SIEB. et ZUCC.	河畔，林縁，路傍	L・H	痩果
シソ科 Labiatae			
シソ属 *Perilla* sp.		H	痩果
イネ科 Gramineae			
イネ *Oryza sativa* L.		H	痩果

※「生育地等」欄の記号は，C……針葉樹，D……落葉広葉樹，E……常緑広葉樹，H……草本，L……つる植物を示す。

表6　中小泉遺跡出土種実遺体の組成

植物名	生育地等		出土部位
クルミ科 Juglandaceae			
オニグルミ *Juglans mandshurica* MAXIM. subsp. *sieboldiana* KITAMURA	低地－山地－河畔	D	核
モクレン科 Magnoliaceae			
コブシ *Magnolia kobus* DC.	山地	D	種子
トチノキ科 Hippocastanaceae			
トチノキ *Aesculus turbinata* BLUME.	山地－谷部	D	種子
ウリ科 Cucurbitaceae			
ヒョウタン *Lagenaria leucantha* RUSBY.	栽培植物	L・H	種子・果皮
イネ科 Gramineae			
イネ *Oryza sativa* L.	栽培植物	H	痩果
コケ植物 Bryophytes			

※「生育地等」欄の記号は，C……針葉樹，D……落葉広葉樹，E……常緑広葉樹，H……草本，L……つる植物を示す。

表7　中小泉遺跡出土種実遺体の遺構別出土数

種類	SD045	SD045 地山壁中	その他	計
オニグルミ	2			2
コブシ			1	1
トチノキ	64(30)	362(71)		426(101)
ヒョウタン			2	2
イネ			1	1

※（ ）内はそのうち破損しているものの数を示す。

付　記

この報文をまとめる時点で，同定作業をおこなえなかった種実遺体試料が少なからず残されている。したがって，今回表に示した以外の分類群が今後に検出・同定される可能性も残されている。

B　木製品の樹種

富山県木材試験場　飯　島　泰　男・長谷川　益　夫

1．はじめに

樹種鑑定を行った木製品は，江上A，同B，東江上，中小泉，正印新および飯坂の計6遺跡から出土したものである。これらのうち約500点について樹種同定を行った。担当は富山県木材試験場の飯島泰男，長谷川益夫および㈱元興寺文化財研究所の松田隆嗣である。

以下，鑑定法および写真図版は富山県木材試験場の結果，その他に関しては2機関の結果をとりまとめて記述する。

2．鑑定法

樹種鑑定はつぎの方法にしたがって行った。

各試料は予めホウ酸処理されていたため，まず水中でこれを除き，ついでアルコール脱水処理を行った。さらに，セロイジン包埋法によって鑑定試料を作成した。これより厚さ約20μの切片（木口，板目，柾目の3面）を採取し，光学顕微鏡で観察した。

樹種同定にあたっては，「木材の組織」（森北出版），「木の事典」（かなえ書房），「木材工学辞典」（工業出版）などを参考にした。また広葉樹の識別は，解剖学特徴によるコンピューター検索法を併用して行った。使用したシステムはNEC—PC8801，プログラムは筆者の1人，長谷川が作成したものであり，検索用ファイルには須藤の研究（林試研究No.118，1959）を用いた。本プログラムは附録に掲載している。

各試料の保存状態は概ね良好であったが，一部，変形または腐朽によって組織が著しく破壊されている例もあった。そこで広葉樹については確認し得る組織要素のみからコンピューター検索によって予め対象樹種を検出し，次に前述の参考資料と比較検討することによって樹種を決定した。

3．同定樹種とその特徴

同定された樹種とその特徴を簡略に述べる。組織的特徴は特記のない限り顕微鏡下で確認できたもののみである。また道管径等の各寸法は，組織の変形がかなり影響を及ぼしているものと思われるので，参考値の意味で記述した。

樹種番号4までは針葉樹，5以降は広葉樹である。なお，カヤ，マツ属，カエデ属の3種は元興寺研究所のみで検出されたものであり，写真図版は割愛した。材質は参考資料から引用した。

(1)　スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　（図版1～3）

樹脂細胞は晩材部に接線状に並ぶ傾向が強い。早晩材の移行は比較的急である。分野壁孔はスギ型とされるが，やや不鮮明。柱材として用いられた試料の中には，樹脂分が溶出し，柔細胞（短冊状）のみが残った例が多い。また，軟腐朽菌によるものと思われる仮道管壁の腐朽例もあり，一見らせん肥厚状の様相を呈する。

材質は，加工容易，心材耐久性中，軽軟，強度やや小。

(2)　モミ属　*Abies* spp.　（図版4～5）

樹脂細胞，樹脂道（軸方向細胞間道）ともに認められない。早晩材の移行はスギに比較するとやや緩慢である。放射仮道管はなく，放射柔細胞はじゅず状端壁であるが，結晶，内容物とも認められなかったため，モミ *A. firma* SIEB. et ZUCC.との確認は得られなかった。分野壁孔はスギ型とされるが不鮮明。

材質は，加工容易，耐久性小，軽軟，強度やや小。

(3) カヤ *Torreya nucifera* SIEB. et ZUCC.

樹脂細胞，樹脂道ともにない。早晩材の移行は緩慢で，分野壁孔はヒノキ型。仮道管内壁にらせん肥厚があるが，遺物では不明瞭な場合が多いとされる。

材質は，加工容易，耐久性大，比重中庸，強度中，弾力性に富む。

(4) マツ属 *Pinus* spp.

樹脂道があり，早晩材の移行は急ないしやや急。分野壁孔は窓型。その他は不明。

材質は軟松類(ヒメコマツ *Pinus pentaphylla* MAYR. など）と硬松類（アカマツ *Pinus densiflora* SIEB. et ZUCC. など）によって異なるが，一般的に加工性普通，耐久性中，水湿に強い，比重中庸，強度やや大。

(5) ヤマナラシ *Populus sieboldii* MIQ. （図版６～７）

散孔材。道管は一様に分布，２～４個放射方向に接続。直径は放射方向に30～70μで小さく，多数分布。顕著なターミナル状柔組織が認められる。放射組織は単列同性。道管径と分布数からドロノキ *P. maximowiczii* HENRY. と区別される。

材質は，加工容易，耐久性小，軽軟，強度小。

(6) オニグルミ *Juglans ailanthifolia* CARR. （図版８～10）

散孔材。道管径はかなり大きく，孤立管孔は放射方向に80～200μ，２～４個放射方向に接続することがある。軸方向柔組織はターミナル状および切線状。放射組織は１～５細胞幅で同性。

材質は，加工容易，耐久性小，比重中庸，強度中。

(7) ハンノキ *Alnus japonica* STEUD. （図版11～13）

散孔材。道管は孤立ないし２～４個放射方向に接続。孤立管孔径は放射方向に50～80μ。軸方向柔組織はターミナル状。放射組織は単列ないし２列，および集合状で同性。集合放射組織をもつことから該当樹種としては，他にケヤマハンノキ *A. hirsuta* TURZ. の可能性もある。

材質は，加工容易，耐久性小，比重中庸，強度やや大。

(8) ブナ *Fagus crenata* BLUME. （図版14～15）

散孔材。道管は孤立ないし２～４個放射方向に接続。孤立管孔径は放射方向に30～80μ。晩材部に近づくにしたがって大きさと径を減ずる。軸方向柔組織不顕著。広放射組織あり，異性III型。

材質は，加工性中庸，耐久性小，比重やや大，強度やや大。

(9) カシ類 *Quercus* spp. = *Cyclobalanopsis* spp. （図版16～18）

放射孔材。道管はすべて円形ないし楕円形で孤立し，管孔径は放射方向で60～120μ，厚壁，チロースが認められる。軸方向柔組織は短接線状。広放射組織がある。同性。道管と放射組織間の壁孔は柵状。なお，カシ類は道管径，色調から数種類に分類可能とされ，試料中ではアカガシ *Q. acuta* THUNB. が比較的多いようである。

材質は，加工性困難，耐久性中庸，水湿に強い，比重大，強度大，弾力性に富む，硬い。

(10) コナラ類 *Quercus* spp. = *Lepidobalanus* spp.

環孔材。孔圏道管は大きく１～３列，放射方向の径は100～300μ。短接線状の軸方向柔組織が顕著。広放射組織がある。同性。コナラ類はさらに次の２種に大別でき，その両者とも検出された。

ａ．コナラ *Q. serrata* THUNB. （図版19～20）

孔圏外道管は比較的小さく，多角形で薄壁。道管と放射組織間の壁孔は不規則。柔細胞中の結晶が不明瞭であったため，ミズナラ *Q. mongolica* FISCH. var. *grosseserrata* REHD. et WILS. の可能性もある。

材質は，加工性普通，耐久性中庸，比重やや大，強度やや大。

b．クヌギ　*Q. acutissima* CARR.　（図版21～22）

孔圏外道管はコナラより大きく，円形で厚壁。道管と放射組織間の壁孔は柵状。柔細胞中の結晶は不明瞭。なお，現代の富山県の植生分布ではクヌギは極めて少なく，当該試料の一部あるいは全てがアベマキ *Q. variabilis* BLUME. である可能性もある。

材質は，比重が大である他はコナラとほぼ同等と見なせる。

(11) シイノキ　*Castanopsis cuspidata* SCHOTTKY.　（図版23～25）

環孔材であるが，孔圏道管の配列は疎で，やや放射孔材的な様相を呈する。孔圏道管の放射方向直径は150～350μ。軸方向柔組織は短接線状。放射組織は単列同性。道管と放射組織間の壁孔は柵状とされるものの，材の腐朽が著しいため識別は不可能であった。なお，シイノキをスダジイとコジイ（ツブラジイ）に分類する方法を採用すれば，放射組織の状況から「スダジイ」（*C. c.* var *sieboldii* NAKAI.）となる。

材質は，スダジイの場合，加工性普通，耐久性小，比重中庸，強度やや大。

(12) ケヤキ　*Zeikova serrata* MAKINO　（図版26～27）

環孔材。孔圏道管１～２列，直径は放射方向で200～400μ。孔圏道道管は房状でらせん肥厚がある。軸方向柔組織は周囲状。放射組織は１～８細胞幅，異性III型。

材質は，加工比較的容易，耐久性大，水湿に強い，比重やや大，強度やや大。

(13) ムクノキ　*Aphananthe aspera* PLANCH.　（図版46～47）

試料の変形は著しいが，ほぼ散孔材とみられる。道管は単独ないし２個程度接続。直径は150μ前後。柔組織は圧縮変形のためやや不明瞭であるが，周囲状，帯状のものが認められる。放射組織は１～３細胞幅，異性，結晶を含む。

材質は，比重中庸ないしやや大，強度中庸，靱性に富み割れにくい。

(14) ヤマグワ　*Morus bombycis* KOIDZ.（図版30～31）

環孔材。孔圏道管１～３列，放射方向直径100～250μ。孔圏外道管は不規則に接続，らせん肥厚がある。軸方向柔組織は周囲状，随伴状。放射組織１～７細胞幅，異性III型。

材質は，加工性困難，耐久性大，比重中庸，強度中庸，靱性に富み曲げ易い。

(15) カツラ　*Cerciphyllum japonicum* SIEB. et ZUCC.　（図版32～33）

散孔材。道管は２～３個が接続方向に接続するものが多く，放射方向の直径は30～120μで，晩材部に近づくにしたがって小さくなる。階段せん孔である。また小道管にはらせん肥厚がある。軸方向柔組織はターミナル状。放射組織は１～２細胞幅，異性Ⅰないし II 型。

材質は，加工性極めて容易，耐久性小，比重やや小，強度中庸。

(16) ホオノキ　*Magnolia obovata* THUNB.　（図版34）

散孔材。道管は単独または２～４個放射方向に接続。孤立道管径は接続方向に50～100μ。階段せん孔とされるが試料では不鮮明であった。ターミナル状柔組織が認められる。放射組織は１～２細胞幅，異性III型。道管と放射組織間壁孔は階段型とされるが，やはり不鮮明であった。類似樹種にコブシ（*M. kobus* D. C.）があるが，放射組織は殆んど２細胞幅以内であることから，ホオノキとした。

材質は，加工性極めて容易，耐久性小，比重やや小，強度やや小。

(17) カゴノキ　*Actinodaphne lancifolia* MEISN.　（図版35～37）

散孔材。道管径は100μ前後，２～３個接続したものが認められる。分布数は20/mm²で少ない。軸方向柔組織は周囲状が著しい。放射組織１～２細胞，異性III型。ピスフレックが認められる。腐朽が著しいため，せん孔，異形細胞

等は不鮮明であった。

材質は，データが少ないが比重やや大で靱性があるとされる。

⑱ イスノキ *Distylium racemosum* SIEB. et ZUCC. （図版38～39）

散孔材。特徴的な赤褐色である。道管直径は30～70μで極めて小さく，ほぼ均等に分布。階段状せん孔をもつ。道管内にゴム状物質が認められる。軸方向柔組織は散在および線状。内部に結晶がある。放射組織は１～２細胞幅，異性Ⅰないし Ⅱ型。

材質は，加工困難，耐久性大，比重大，強度大。なお，産地は本州南部以南であり，富山県に自生した例は報告されていない。

⑲ ウワミズザクラ *Prunus grayana* MAXIM. （図版40～42）

散孔材。道管は放射方向に２～３個接続するものがあり，孤立道管径は放射方向で20～80μ，晩材部に向って次第に数と径を減ずる傾向にある。軸方向柔組織は不顕著。放射組織は１～10細胞幅，異性Ⅲ型。

材質は，加工性普通，耐久性大，比重中庸，強度やや大。

⑳ キハダ *Phellodendron amurense* RUPR. （図版43～45）

環孔材。孔圏道管２～３列，孤立または２～３個接続，径は放射方向に100～200μ。孔圏外道管は波状，接線状などに接続，らせん肥厚が認められる。軸方向柔組織は帯状のものが顕著。放射組織は１～５細胞幅，同性。木繊維に隔壁が認められる。

材質は，加工性普通，耐久性不明，比重やや小，強度中庸。

㉑ カエデ属 *Acer* spp.

散孔材。道管の多くは孤立または２ないし数個放射方向に接続。孤立管孔径30～100μ。軸方向柔組織はターミナル状，隋伴散在状など。放射組織は１～５細胞幅，概ね同性。しばしばピスフレックが現われる。

材質は，加工性普通，耐久性小，比重やや大，強度やや大。

㉒ トチノキ *Aesculus turbinata* BLUME. （図版46～47）

散孔材。道管は孤立または２ないし数個放射方向に接続。孤立管孔径30～100μでやや小さい。らせん肥厚が認められる。軸方向柔組織はターミナル状。隋伴状。放射組織は単列同性で層階状配列を示す。

材質は，加工容易，耐久性極めて小，比重中庸，強度中庸。

㉓ ムクロジ *Sapindus mukorossi* GAERTN. （図版48～49）

環孔材。孔圏道管は放射方向に100～300μ，１～３列である。孔圏外道管は著しく小さく，らせん肥厚が認められる。軸方向柔組織は幅の広い隋伴帯状が著しい。放射組織は１～３細胞幅，同性。木繊維に隔壁がある。

材質はデータ不足。比重やや大であるが脆弱であるとされる。

㉔ ハクウンボク *Styrax obassia* SIEB. et ZUCC.（図版50～51）

一般的には散孔材とされるが，試料は年輪幅約４㎜であり，環孔材の様相を示す。道管径は早材部で100μ，晩材部で30μ程度である。軸方向柔組織は短接線状のものが顕著である。放射組織は１～４細胞幅で，同属のエゴノキ *S. japonica* SIEB. et ZUCC. よりやや広い。異性Ⅰないし Ⅱ型。

材質は，加工性容易，耐久性不明，比重やや大，強度中庸。

㉕ ヤチダモ *Fraxinus mandshurica* RUPR. var *japonica* MAXIM. （図版52～54）

環孔材。孔圏道管は２～３列で、放射方向径は150～350μ。孔圏外は散在状である。軸方向柔組織は周囲状，翼状で，晩材部では連合翼状を示す。放射組織は１～３細胞幅，同性。

材質は，加工性容易，耐久性中庸，比重中庸，強度やや大。

(26) **アオダモ** *Fraxinus lanuginosa* KOIDZ. （図版55～56）

環孔材。孔圏は通常１列，道管径は100～250μ。材質はヤチダモよりやや重硬かつ強度大。その他はヤチダモとほぼ同様。

4．利用方法と樹種特性

前節で述べたように，同定された樹種数は計26種である。表１には，「木製品・総括編（図版）」に掲げられている遺体について，利用方法別に樹種点数を一覧した。

各遺跡を年代順に記述すると，中小泉と正印新が弥生中・後期，江上Ａが弥生後期，江上Ｂ，飯坂，東江上および中小泉の一部が中世，ということになる。また，正印新の一部には近世と考えられる遺物も混在している。

これらのうち，東江上遺跡の試料２点はいずれも「板」で，両者ともスギであったが，本表からは割愛している。

以下，利用方法と樹種特性について考察してみよう。

(1) 農具

農具のうち，特に強度を必要とする鋤，鍬，えぶり，杵にはカシ，クヌギの使用例が目立っている。クヌギの植生の可能性については，やや検討の必要が残されているが，いずれにしろこの結果は従来の知見と一致する。キハダ（江上Ａ，図版26）の利用は強度性能からみてやや問題が残る。図版からみると，板面が平面で，他とは異なる形状を示すことから，鋤ではなかった可能性も強い。

石包丁形木器はいずれもムクロジである。それほど強度が必要とはされなかったのであろうが，何か特異な性質を利用しているのかも知れない。今後の検討が必要である。

臼はホオノキが１点である。現代でもこうした利用が行われている。加工が容易であることが大きな理由の一つと思われる。

(2) 工具

斧柄はカシ，およびヤマナラシである。広葉樹の強度の最大級と最小級の両者が出現していて興味深い。カシの利用は従来の知見と一致する。ヤマナラシ（江上Ａ，図版61）のものはかなり小型でもあり，斧柄かどうか疑問が残る。

火鑽杵はスギ，火鑽臼はスギ，カエデ，オニグルミ，クヌギで雑多な材を用いている。この点は検討の余地があろう。

鳴子形木器はすべてスギであった。加工が容易であったためと思われる。

(3) 狩猟具・漁撈具

弓は３点，カヤ，ハクウンボク，ムクノキである。弓は材質を特に選ぶであろうことは容易に推測がつく。いわゆる「弾力性」が必要である。力学的にいえば「曲げ比例限仕事量の大きい」あるいは「衝撃曲げ吸収エネルギーの大きい樹種といえるかも知れない。よく「靱性がある」という表現がこれと対応している。また適度な曲げヤング係数も重要であろう。試みに主要樹種の比重あたりの衝撃曲げ吸収エネルギーと曲げヤング係数の関係を図１に示した。図中に，曲げヤング係数の割りに比重あたりの衝撃曲げ吸収エネルギーの大きいと考えられる樹種を破線で区分してみた。ここには，これまで弓に利用されたと考えられるイヌマキ，ヤマグワ，トネリコ属，ムクノキ，それに現代でも靱性，あるいは耐衝撃性を必要とする用途に使われている材が多く含まれている。例えばバット，スキー，洋弓などのスポーツ用品をトネリコ属，カエデ，ブナ），銃床（オニグルミ），天秤棒（ムクノキ），下駄（ホオノキ，キリ），碁将棋盤（カツラ）などである。したがってこれは一つの指標にすぎないものの，弓用樹種を選択した力学的根拠を示す可能性があるものと考える。ただ，イチイ，カヤに関しては明確な傾向は認められていない。針葉樹の場合，さらに異なった観点で検討してみることも必要であろう。なお，ハクウンボクのデータは不明であるが，同属のエゴノキは靱性があるとされており，同様の材質を持つものとみられる。

表1　利用方法と樹種

	江上A				江上B		中小泉	
農具								
鍬	カシ類	9	クヌギ	5	クヌギ	1		
鍬柄	ムクロジ	1						
えぶり	クヌギ	1						
鋤	カシ類	8	クヌギ	5				
	キハダ	1						
石包丁形木器	ムクロジ	6						
杵	クヌギ	3	カシ類	1				
臼	トチノキ	1						
工具								
斧柄	カシ類	1	ヤマナラシ	1				
火鑽杵	スギ	2						
火鑽臼	スギ	2	カエデ	1				
	オニグルミ	1	クヌギ	1				
	不明	1						
鳴子形木器	スギ	23						
狩猟具・漁撈具								
弓	カヤ	1	ハクウンボク	1				
	ムクノキ	1						
鏃形木器	マツ	1						
たも網	モミ属	1						
櫂	スギ	2						
紡織具								
紡錘車	スギ	1	ムクロジ	1				
椅子	スギ	2	ヤマナラシ	1				
矢羽根形木器	スギ	6						
編板	スギ	3						
紡織具の一部					スギ	1		
容器・食器・日用具								
鉢	スギ	3	トチノキ	1				
脚付鉢	スギ	3						
高杯	キハダ	1						
槽	スギ	2	キハダ	1				
	オニグルミ	1						
蓋または底板	スギ	6			スギ	18		
杓子	スギ	6	カシ類	1	スギ	2		
	コナラ	1	クヌギ	1				
桶	スギ	6						
擂粉木					ウワミズザクラ	1		
下駄					スギ	6	ホオノキ	1
箸					スギ	6		
櫛					イスノキ	1		
漆器皿					ケヤキ	3		
					ブナ	3		
楽器								
琴柱	スギ	2						
その他・用途不明								
板	スギ	42	ムクロジ	1	スギ	5	スギ	5
棒または柄	スギ	47	ヤマグワ	2	スギ	4	スギ	4
	カシ類	1	コナラ	1				
	アオダモ	1						

表1　利用方法と樹種（つづき）

	江上A	江上B	中小泉	正印新	飯坂
土木・建築用					
栓	スギ 21				
梯子	スギ 2				
柱・柱根	スギ 21	スギ 6		スギ 6	ハンノキ 4
	コナラ 6	ヤマナラシ 2		シイノキ 2	ヤマグワ 1
	カツラ 3	コナラ 1		クヌギ 1	
	ヤマナラシ 3	キハダ 1		ヤマナラシ 1	
	ヤマグワ 3				
	ウワミズザクラ 2				
	オニグルミ 1				
	モミ属 1				
	キハダ 1				
	ヤチダモ 1				
	カゴノキ 1				
杭	スギ 6	スギ 2	スギ 1		
	ムクロジ 1				
井筒	ウワミズザクラ 1				
橋	スギ 1				
礎板		スギ 2			
矢板			スギ 3		
その他		スギ 6			

簗形木器，たも網，櫂はいずれも針葉樹であった。

(4) 紡織具

紡織具は一般的に加工の容易な樹種が選ばれており，スギが多い。

(5) 容器・食器・日用具

容器・食器の大部分は紡織具と同様の理由で樹種が選択されているようである。ただ杓子には重硬な広葉樹を用いているものが含まれている（江上A，106，109，113）。このうち113のコナラは形状から杓子であることは問題ないと思われる。しかし，106のクヌギ，109のカシは，杓子の先端がややクサビ状を示しており，杓子として用いられたとするには疑問が残る。

下駄のうち中小泉のホオノキは中世のものである。これは現代と同様である。ホオノキを使う理由は加工性のみならず，その軽さと前述の耐衝撃性によるものであろう。

櫛はイスノキと同定された。イスノキが県

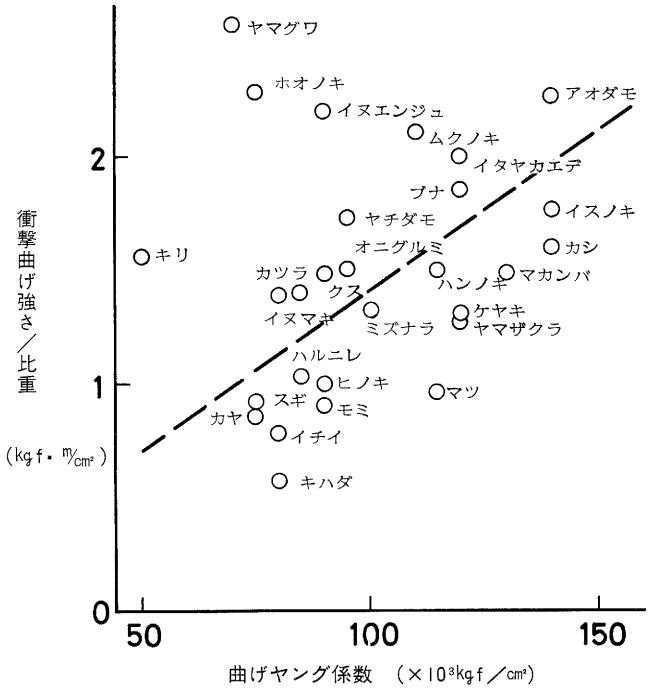


図1　単位比重あたりの衝撃曲げ強さと曲げヤング係数の関係
注：データは「木材工業ハンドブック」（丸善）および富山県木材試験場未発表強度資料より引用した。

内で自生した例は極めて少ない。おそらく何らかの方法で，製品として移入されたものと思われる。

漆器皿にはケヤキとブナが用いられている。こうした利用方法も現代と全く同様である。両樹種とも県内での自生例は多いが，検出例はこれらのみであった。

(6) 楽器

楽器はスギによる琴柱２点のみであった。

(7) 土木・建築用

栓および梯子はすべてスギである。

柱・柱根は５遺跡からかなり大量に出土しているので，少し詳しく考察してみよう。

まず江上Ａである。その内訳は，組合わせのない単独柱はスギ５，カゴノキ，ウワミズザクラ，ヤマグワ各１の計８本であり，残りはそれぞれ２～８本の組を形成している。これらのうち最古の建築物と思われるのはSB14の竪穴式住居で，カツラ２，オニグルミ，ウワミズザクラ各１の４本で構成されている。また，すべて広葉樹で，しかも複数の樹種で構成されているのはSB20の高床式倉庫がある。竪穴式住居はもう１棟（SB19）があるが，これは全てスギの心去り材で径は10cm程度である。時代がやや新しいと思われるのはSB16，SB18の堀立柱建物であり，前者は８本（１本不明），後者は４本（１本不明）のスギ心去り材(15～16cm径）で構成されている。この後者にはヤマナラシ２本，モミ１本の支え柱がある。さらにSB17は６本のコナラ柱で構成された高床式倉庫と考えられている。材はいずれも心去りであり，同一原木を割って用いたものと推定される。仮りにそうであれば，原木直径は70～80cmと考えられ，あるいは樹種がミズナラである可能性も大きい。なおSA24はスギ角材２本のみで構成され，門と考えられている。

他の遺跡では，江上Ｂの４本の広葉樹はいずれも心持ち，スギは心去り角材であり，飯坂のものは室町時代とされる心持ち広葉樹材の５本組である。また正印新はヤマナラシのみが単独出土，クヌギ１，シイノキ２は３本で弥生中期の竪穴式住居を構成している。

以上から，広葉樹心持ち材⟶スギ小径心去り材⟶スギ中径心去り材および大径広葉樹心去り，という構造材の時代的推移がほぼ認められるように思われる。したがって，先住民はまず現地近くの小径広葉樹を伐採して竪穴式住居を建築し，次いでスギを導入，さらにこれを高次加工して使用した，ということになろう。ただ大径広葉樹の利用の報告例は多くないようであり，あるいは特殊な建築物であったのかも知れない。なお，江上Ａの種子等の鑑定結果によれば，スギおよびコナラの植物遺体の検出は皆無である。これに対して他の広葉樹の検出例は比較的多く，先の時代的推移についての仮説を補強しているように思われる。

杭，橋，板類はスギが大部分を占める。井筒はウワミズザクラである。これは耐久性が高いことを利用したものであろう。

(8) その他

板類はスギが大部分である。棒または柄はやはりスギが多いが重硬な広葉樹も多く，農耕具の柄が含まれている可能性もある。

5．おわりに

樹種同定を行った件数は約500点である。本表にはそのうち約８割406点のみを掲載しており，全体の概要はほぼ推定可能と思われる。また，顕微鏡写真もそのすべてを掲載できなかった。御了承願いたい。

附録　樹種鑑定プログラム

```
10 '     ┌──────────────────────────────────────┐
20 '     |        ｼﾞｭｼｭｶﾝﾃｲ ｹﾝｻｸ  PROGRAM (ｶﾝｼﾞ)       |   by Masuo Hasegawa
30 '     |                          Version 2.0         |   1984.5.7.
40 '     └──────────────────────────────────────┘
50 '     <<<<<<<        ｼｮｷ  ｾｯﾃｲ           >>>>>>>
60 '
70       WIDTH 80,20:CONSOLE 0,20:CLS
80       LPRINT :PRINT SPC(10);"*****  ｼﾞｭｼｭｶﾝﾃｲ ｹﾝｻｸ  *****"
90       CONSOLE 2,18,1:CLS
100      DEFINT A-Z:OPTION BASE 1:DIM NX$(200)
110 '       RANDOM FILE ﾉ ｼｮｷｾｯﾃｲ
120      OPEN "2:ｼﾞｭｼｭ.DAT" AS #1
130      FIELD #1,65 AS SPECIES$,41 AS SDATA$,150 AS COMENT$
140 '
150      CM$="ｺﾏﾝﾄﾞ"+CHR$(&H60)
160      KEY 1,CM$+CHR$(13):      KEY 2,"Y"+CHR$(13):      KEY 3,"N"+CHR$(13)
170      KEY 4,"P"+CHR$(13):      KEY 6,"?4JUｺﾆ$N6hJL!(": KEY 7,"D>7B"
180      KEY 8,"J!<MAH?%":        KEY 9,"ｺYK&I)":          KEY 10,CHR$(26)
190 '
200 '    <<<<<<<        ｺﾏﾝﾄﾞ  ｼｮﾘ          >>>>>>>>
210 '
220 *CMDIN: SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:LOCATE 60,1:PRINT SPC(10):LOCATE 0,2
230      PRINT SPC(10);"ｼｮﾘ ﾊﾞﾝｺﾞｳ ｦ ﾆｭｳﾘｮｸ ｼﾃ ｸﾀﾞｻｲ。":PRINT
240      PRINT SPC(20);"0: ｼｮﾘ ｵﾜﾘ"
250      PRINT SPC(20);"1: ｼﾞｭｼｭ ｹﾝｻｸ"
260      PRINT SPC(20);"2: ｼﾞｭｼｭ ﾃﾞｰﾀ ﾍﾝｺｳ"
270      PRINT SPC(20);"3: ｼﾞｭｼｭ ﾃﾞｰﾀ ﾂｲｶ"
280      PRINT SPC(20);"4: ｼﾞｭｼｭ ﾃﾞｰﾀ ﾘｽﾄ"
290      PRINT SPC(20);"5: ｼﾞｭｼｭ ﾄｸﾁｮｳ ｺｰﾄﾞ ﾘｽﾄ"
300      PRINT SPC(20);"6: ﾌｧｲﾙ ｼﾝｷ ｻｸｾｲ        ";:INPUT K:CLS
310      IF K=0 THEN *PROEND
320      IF K<1 OR K>6 THEN *CMDIN
330      ON K GOTO *JSR,*JHEN,*JTSI,*JLIST,*KLIST,*JSAK
340 '
350 '    ──────────────────────────── SUBROUTIN ────────────────────────────
360 '
370 '
380 '    <<<<<<  SUB 0 ; ｼｮﾘ ｵﾜﾘ  >>>>>>> ──────────────────────────────
390 '
400  *PROEND:
410      FOR I=0 TO 159:POKE &HE6F2+I,PEEK(&H1B0+I):NEXT
420      CONSOLE 0,,1:SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:END
430 '
440 '    <<<<<<  SUB 1 ; ｼﾞｭｼｭ ｹﾝｻｸ  >>>>>> ──────────────────────────────
450 '
460 *JSR:
470      IF LOF(1)=0 THEN *NODATA
480 *JSR1:SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:K=0
490      PRINT SPC(10);"ｹﾝｻｸ ｴﾘｱ ﾊﾞﾝｺﾞｳ ｦ ﾆｭｳﾘｮｸ ｼﾃ ｸﾀﾞｻｲ。":PRINT
500      PRINT SPC(20);"1: ｼﾞｭｼｭ No."
510      PRINT SPC(20);"2: ｼﾞｭｼｭﾒｲ"
520      PRINT SPC(20);"3: ﾄｸﾁｮｳ ｺｳﾓｸ ｺｰﾄﾞ"
530      PRINT SPC(20);"4: ｺﾒﾝﾄ              ";:INPUT K:CLS
540      IF K<1 OR K>4 THEN *CMDIN
550       LOCATE 60,1:PRINT "ｹﾝｻｸ ｴﾘｱ";K
560      ON K GOTO *JSRNUM,*JSRN,*JSRF,*JSRC
570 '
580 '    <<<  SUB 1-1 ; ｼﾞｭｼｭ No.  >>> ──────────────────────
590 '
600 *JSRNUM:    INPUT "ｻﾝﾌﾟﾙ No. : ";SN$:IF SN$=CM$ THEN *CMDIN
610      INPUT" ｼﾞｭｼｭ No. (0=ｺﾏﾝﾄﾞ) : ";NO
620      IF NO=0 THEN *CMDIN
630      LPRINT:LPRINT:LPRINT"Sample No. : ";SN$
640      LPRINT" ｼﾞｭｼｭ No. : ";NO:LPRINT
650      IF NO>LOF(1) THEN LPRINT "ｶﾞｲﾄｳﾃﾞｰﾀ ﾅｼ !!":BEEP:PRINT:GOTO *JSRNUM
660      GET #1,NO
670      FG=1:H$=SDATA$:GOSUB *DCML:GOSUB *DATAPRT
680      GOTO *JSRNUM
```

```
690 '
700 '    <<<  SUB 1-2 ; ｼﾞｭｼｮﾒｲ  >>> ------------------------------
710 '
720 *JSRN:    INPUT "ｻﾝﾌﾟﾙ No. : ";SN$:IF SN$=CM$ THEN *CMDIN
730           INPUT" ｼﾞｭｼｮﾒｲ or ｷｰﾜｰﾄﾞ : ";NA$
740     IF NA$=CM$ OR NA$="" THEN *CMDIN
750     LPRINT:LPRINT:LPRINT"Sample No. : ";SN$
760     LPRINT" ｼﾞｭｼｮﾒｲ or ｷｰﾜｰﾄﾞ : "+NA$:LPRINT:NO=1:FG=0
770 *WSERCH: GET #1,NO:J=INSTR(SPECIES$,NA$)
780     IF J=0 THEN *NXTSR
790     FG=1:H$=SDATA$:GOSUB *DCML:GOSUB *DATAPRT
800 *NXTSR: IF NO<>LOF(1) THEN NO=NO+1:GOTO *WSERCH
810     IF FG<>0 THEN *JSRN
820     LPRINT "ｶﾞｲﾄｳﾃﾞｰﾀ ﾅｼ !!":BEEP:PRINT:GOTO *JSRN
830 '
840 '  <<<  SUB 1-3 ; ﾄｸﾁｮｳ ｺｳﾓｸ ｺｰﾄﾞ  >>> ------------------------
850 '
860 *JSRF
870     SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:PRINT "DATA READING !  JUST A MINUTE !":NO=1
880    *DT: GET #1,NO
890     J=INSTR(SDATA$,CHR$(32))
900     IF J=0 THEN I$=SDATA$ ELSE I$=LEFT$(SDATA$,J-1)
910     NX$(NO)=I$
920     IF NO<>LOF(1) THEN NO=NO+1:GOTO *DT
930 *JSRF1
940     INPUT"ｻﾝﾌﾟﾙ No. : ";SN$:IF SN$=CM$ THEN *CMDIN
950     INPUT" ﾄｸﾁｮｳ ｺｳﾓｸ ｺｰﾄﾞ(FORMAT /###/###...): ";NA$
960     IF NA$=CM$ OR NA$="" THEN *CMDIN
970     LPRINT:LPRINT:LPRINT"Sample No. : ";SN$:LPRINT"ﾄｸﾁｮｳ ｺｳﾓｸ ｺｰﾄﾞ : "+NA$
980     LPRINT:NO=1:FG=0:D$=NA$
990     GOSUB *HX:I$=H$
1000 *WSERCH.F
1010     FOR I=1 TO LEN(I$)
1020         PART$=CHR$(ASC(MID$(I$,I,1)))
1030         J=INSTR(NX$(NO),PART$)
1040         IF J=0 THEN *NXTSR.F
1050     NEXT I
1060     GET #1,NO:FG=1:GOSUB *DATAPRT5
1070 *NXTSR.F: IF NO<>LOF(1) THEN NO=NO+1:GOTO *WSERCH.F
1080     IF FG<>0 THEN *JSRF1
1090     LPRINT "ｶﾞｲﾄｳﾃﾞｰﾀ ﾅｼ !!":BEEP:PRINT:GOTO *JSRF1
1100 '
1110 '  <<<  SUB 1-4 ; ｺﾒﾝﾄ  >>> ------------------------------------
1120 '
1130 *JSRC:    SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0
1140           INPUT "ｻﾝﾌﾟﾙ No. : ";SN$:IF SN$=CM$ THEN *CMDIN
1150           INPUT" ｺﾒﾝﾄ or ｷｰﾜｰﾄﾞ : ";NA$
1160     IF NA$=CM$ OR NA$="" THEN *CMDIN
1170     PRINT:PRINT "Sample No. : ";SN$
1180     PRINT "ｺﾒﾝﾄ or ｷｰﾜｰﾄﾞ :";:PRINT #,NA$:PRINT
1190     INPUT "ｺﾚﾃﾞ ｲｲ ﾃﾞｽｶ ? (Y/N)";ANS$
1200     IF ANS$<>"Y" GOTO *JSRC
1210        GOSUB *DATAPRT6
1220     NO=1:FG=0
1230 *WSERCH.C: GET #1,NO:J=INSTR(COMENT$,NA$)
1240     IF J=0 THEN *NXTSR.C
1250     FG=1:H$=SDATA$:GOSUB *DCML:GOSUB *DATAPRT
1260 *NXTSR.C: IF NO<>LOF(1) THEN NO=NO+1:GOTO *WSERCH.C
1270     IF FG<>0 THEN *JSRC
1280     LPRINT "ｶﾞｲﾄｳﾃﾞｰﾀ ﾅｼ !!":BEEP:PRINT:GOTO *JSRC
1290 '
1300 '  <<<<<<  SUB 2 ; ｼﾞｭｼｮ ﾃﾞｰﾀ ﾍﾝｺｳ  >>>>>> ------------------------------
1310 '
1320 *JHEN:
1330     IF LOF(1)=0 THEN *NODATA
1340 *JHIN: INPUT "ﾍﾝｺｳ ｽﾙ file ﾉ No ｶ ";K$
1350     IF K$=CM$ OR K$="" THEN *JHEXIT
1360     SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:NO=VAL(K$)
1370     IF NO<1 OR NO>LOF(1) THEN BEEP:GOTO *JHIN
1380     GET #1,NO:GOSUB *DATAPRT1
1390     INPUT "ｺﾚﾃﾞ ｲｲﾃﾞｽｶ (Y or N)";K$
1400     IF K$=CM$ THEN *JHIEXT
1410     IF K$="Y" OR K$="y" THEN *JHIN2
1420     SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:GOTO *JHIN
1430 *JHIN2: GOSUB *DATAIN                    ' ﾍﾝｺｳ ﾃﾞｰﾀ INPUT
1440     IF K$=CM$ THEN *JHEXIT
1450     PUT #1,NO
1460     SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:GOTO *JHIN
1470 '
```

```
1480 *JHEXIT:                                          ' EXIT
1490    SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:GOTO *CMDIN
1500 '
1510 '   <<<<<<  SUB 3 ; ｼﾞｭｼｭ ﾃﾞｰﾀ ﾂｲｶ  >>>>>> ------------------------------
1520 '
1530 *JTSI:
1540    MAX=LOF(1):NO=MAX+1
1550 *JTSI1:
1560    GOSUB *DATAIN
1570    IF K$=CM$ THEN *CMDIN
1580    PUT #1,NO
1590    NO=NO+1:GOTO *JTSI1
1600 '
1610 '   <<<<<<  SUB 4 ; ｼﾞｭｼｭ ﾃﾞｰﾀ ﾘｽﾄ  >>>>>> ------------------------------
1620 '
1630 *JLIST: IF LOF(1)=0 THEN *NODATA
1640    INPUT"ﾅﾝﾊﾞﾝ ｶﾗ ﾅﾝﾊﾞﾝ ﾉ ｼﾞｭｼｭ ﾏﾃﾞ ﾃﾞｽｶ (FORMAT ###,###) <0=ｺﾏﾝﾄﾞ> : ";A,B
1650    IF A=0 OR B=0 THEN *CMDIN
1660    IF B>LOF(1) THEN B=LOF(1)
1670    INPUT " ﾌﾟﾘﾝﾄ ｼﾏｽｶ (Y or N)";K$:IF K$="Y" THEN *JLIST1
1680     FOR NO=A TO B:GET #1,NO:GOSUB *DATAPRT2:NEXT
1690    GOTO *CMDIN
1700 *JLIST1: BEEP:INPUT"ﾌﾟﾘﾝﾀ ﾉ ﾍﾟｰﾊﾟ ﾉ ﾎｰﾑ･ﾎﾟｼﾞｼｮﾝ ｦ ｱﾜｾﾃ ｸﾀﾞｻｲ｡";K$
1710     FOR NO=A TO B
1720         C=NO-1:C=C MOD 8
1730         IF C<1 THEN LPRINT CHR$(12);
1740         GET #1,NO:GOSUB *DATAPRT3
1750     NEXT NO
1760    GOTO *CMDIN
1770 '
1780 '   <<<<<<  SUB 5 ; ｼﾞｭｼｭ ﾃﾞｰﾀ ｺｳﾓｸ ﾘｽﾄ  >>>>>> --------------------------
1790 '
1800 *KLIST
1810   *PS:BEEP:INPUT" ﾌﾟﾘﾝﾀ ﾉ ﾍﾟｰﾊﾟ ﾉ ｲﾁ ｦ ｱﾜｾﾃ ｸﾀﾞｻｲ｡";K$
1820    K$="":FOR I=1 TO 114:READ ITEM$:PRINT ~1,ITEM$:NEXT I
1830   *PCUT: BEEP:INPUT "ﾍﾟｰﾊﾟ ｦ ｶｯﾄ ｼﾃ ｸﾀﾞｻｲ｡";K$
1840    GOTO *CMDIN
1850 '
1860 '    <<<<<<  SUB 6 ; ﾌｧｲﾙ ｼﾝｷ ｻｸｾｲ  >>>>>> ------------------------------
1870 '
1880 *JSAK:
1890    INPUT "ｼﾝｷ ｻｸｾｲ ﾃﾞ ｲｲ ﾃﾞｽｶ (Y or N)";K$
1900    IF K$="Y" OR K$="y" THEN CLOSE #1 ELSE *CMDIN
1910 '
1920    KILL "2:ｼﾞｭｼｭ.DAT":GOSUB *RFSET
1930    SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:NO=1
1940     GOTO *JTSI1
1950 '
1960 ' -------------------------  COMMON SUBROUTIN  --------------------------
1970 '
1980 '   ****** CMN SUB 0 ; ｼﾞｭｼｭ ﾃﾞｰﾀ ﾆｭｳﾘｮｸ  ****** ------------------------
1990 '
2000 *DATAIN:
2010     PRINT "file No. = ";NO:PRINT
2020     INPUT"ｼﾞｭｼｭ       : ";K$:IF K$<>"" THEN LSET SPECIES$=K$
2030     IF K$=CM$ THEN RETURN
2040     PRINT "----------------------------------------------------------------------
---------------"
2050     INPUT"ｼｷﾍﾞﾂ ﾃﾞｰﾀ :  ";K$:IF K$="" THEN 2090
2060    IF K$=CM$ THEN RETURN
2070    D$=K$:GOSUB *HX
2080            LSET SDATA$=H$:NX$(NO)=H$
2090    INPUT"ｺﾒﾝﾄ          : ";K$:IF K$<>"" THEN LSET COMENT$=K$
2100     IF K$=CM$ THEN RETURN
2110     GOSUB *DATAPRT1
2120 *DAIN: INPUT "ｶｸﾆﾝ ｼﾃ ｸﾀﾞｻｲ｡ ｺﾚﾃﾞ ｲｲ ﾃﾞｽｶ｡ (Y or N)";K$
2130     IF K$=CM$ THEN RETURN
2140     IF K$="P" OR K$="p" THEN GOSUB *DATAPRT4:GOTO *DAIN
2150     IF K$="N" OR K$="n" THEN *DATAIN
2160     SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:RETURN
2170 '
2180 '   ******  CMN SUB 1 ; ﾌﾟﾘﾝﾄ ****** -----------------------------------
2190 '
2200 *DATAPRT: SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0:        ' ｶｸﾆﾝ Display + 'P'
2210    PRINT "   <  file No. = ";NO;" >"
2220    PRINT "SPECIES      : ";:PRINT SPECIES$
2230    PRINT "SPECIES DATA: ":PRINT D$
2240    PRINT "COMENT       : ":PRINT @,COMENT$
2250    PRINT:PRINT "** ｲﾝｻﾂ ｦ ｽﾙ ﾊﾞｱｲ ﾊ 'P' ｷｰ ｦ ｵｼﾃｸﾀﾞｻｲ｡  ";
```

```
2260    INPUT K$:IF K$="" THEN PRINT:RETURN
2270    IF K$="P" THEN GOSUB *DATAPRT4:PRINT:RETURN
2280    IF K$=CM$ THEN *CMDIN
2290 '
2300 *DATAPRT1:                                         ' ﾃｲｾｲﾖｳ Display
2310    H$=SDATA$:GOSUB *DCML
2320    SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0
2330    PRINT "   <  File No. = ";NO;" >
2340    PRINT "SPECIES      : ";:PRINT SPECIES$
2350    PRINT "SPECIES DATA: ";:PRINT H$:PRINT D$
2360    PRINT "COMENT       : ";:PRINT COMENT$:PRINT @,COMENT$
2370    PRINT:PRINT:RETURN
2380 '
2390 *DATAPRT2:                                         ' ｺｳﾓｸ ｽｷ Display
2400    H$=SDATA$:GOSUB *DCML:SCREEN 0,3:CLS 3:SCREEN 2,0
2410    PRINT NO:PRINT SPECIES$:PRINT D$:PRINT @,COMENT$
2420    RETURN
2430 '
2440 *DATAPRT3:                                         ' ｺｳﾓｸ ｽｷ LPRINT
2450    H$=SDATA$:GOSUB *DCML
2460    LPRINT :LPRINT NO:LPRINT SPECIES$:LPRINT D$:PRINT ~1,LEFT$(COMENT$,120)
2470    PRINT ~1,MID$(COMENT$,121,30):RETURN
2480 '
2490 *DATAPRT4:                                         ' ｺｳﾓｸ ｱﾘ LPRINT
2500    LPRINT "   <  file No. = ";NO;" >"
2510    LPRINT "SPECIES      : ";:LPRINT SPECIES$
2520    LPRINT "SPECIES DATA: ":LPRINT D$
2530    LPRINT "COMENT       : ":PRINT ~1,LEFT$(COMENT$,120)
2540                               PRINT ~1,MID$(COMENT$,121,30)
2550    LPRINT:RETURN
2560 '
2570 *DATAPRT5:                                         ' Display & LPRINT
2580    H$=SDATA$:GOSUB *DCML
2590    PRINT NO,:PRINT SPECIES$
2600    LPRINT NO,:LPRINT SPECIES$:LPRINT D$:LPRINT
2610    RETURN
2620 '
2630 *DATAPRT6:
2640    LPRINT:LPRINT :LPRINT "Sample No. : ";SN$
2650    LPRINT " ｺﾒﾝﾄ or ｷｰﾜｰﾄﾞ : ":PRINT ~1,NA$:LPRINT
2660    RETURN
2670 '
2680 '  ******  CMN SUB 2 ; ﾌｧｲﾙ ｶﾞ ﾅｲ ﾄｷ ﾉ ｴﾗｰ ｼｮﾘ  ****** --------------------
2690 '
2700 *NODATA:
2710    PRINT "ﾌｧｲﾙｶﾞ ｱﾘﾏｾﾝ !!":BEEP:PRINT:GOTO *CMDIN
2720 '
2730 '  ******  CMN SUB 3 ; ｷｬﾗｸﾀｰ ﾓｼﾞﾚﾂ ﾆ ﾍﾝｶﾝ  ****** ----------------------
2740 '
2750 *HX:       H$=""
2760            FOR I=1 TO LEN(D$) STEP 4
2770                E$=MID$(D$,I,1)
2780                PART$=CHR$(VAL(MID$(D$,I+1,3))+32)
2790                IF E$="/" THEN H$=H$+PART$ ELSE H$=H$+CHR$(232)+PART$
2800            NEXT I
2810            RETURN
2820 '
2830 '  ******  CMN SUB 4 ; 10 ｼﾝｽｳ ﾓｼﾞﾚﾂ ﾆ ﾍﾝｶﾝ  ****** ----------------------
2840 '
2850 *DCML:     D$="":C=1:FG=0:E$=MID$(H$,C,1)
2860            WHILE E$<>CHR$(32)
2870                IF E$=CHR$(232) THEN FG=1:C=C+1:E$=MID$(H$,C,1)
2880                S$=STR$(ASC(E$)-32)
2890                PART$=RIGHT$("00"+RIGHT$(S$,LEN(S$)-1),3)
2900                IF FG=0 THEN D$=D$+"/"+PART$ ELSE D$=D$+"*"+PART$
2910                C=C+1:FG=0:E$=MID$(H$,C,1)
2920            WEND
2930            RETURN
2940 END
2950 '
2960 '  *******   DATA TABLE   *******
2970 '
2980 DATA #0#0#1!!01HLE*@-<A!!?'D4$082Cx
2990 DATA #0#0#2!!!!!!!!!!!!!!!Gr?'
3000 DATA #0#0#3!!!!!!!!!!!!!!!3l?'
```

〈以下省略〉

C　江上遺跡群の泥土の花粉分析

広島大学総合科学部　安　田　喜　憲

1．試料の採取と層序

江上A遺跡

弥生時代後期の江上A遺跡の竪穴住居（SB14）を取りかこむ周溝（SD03）から採取された。花粉分析試料採取地点と層序は，遺構編図版18・21に示す如くである。

江上B遺跡

鎌倉時代後期のPit状遺構（SK007）と室町時代前期のPit状遺構（SK106）から採取された黒灰色有機質シルト質細～中砂。花粉分析試料採取地点は遺構編図版25・30・31に示す如くである。

飯坂遺跡

弥生時代後期の2号方形周溝墓の周溝部から採取された暗灰色有機質シルト質細～中砂。花粉分析試料採取地点は遺構編図版16・17に示す如くである。

正印新遺跡

江戸時代中期の井戸状遺構（SK29）から採取された暗灰色有機質粘土。花粉分析試料採取地点は遺構編図版8に示す如くである。

2．花粉分析の方法

花粉分析の方法は，Pit処理——水洗——比重分離（70%塩化亜鉛水溶液，比重2.2使用）——水洗——酢酸処理——アセトリシス処理(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液にて3分間湯煎）——酢酸処理——水洗——マウント——検鏡の順に行った。

花粉分析の結果は表1ならびに図1の花粉ダイアグラムに示した。図1の花粉ダイアグラムは総出現花粉・胞子を基数とするパーセントで示した。また特徴的花粉については，顕微鏡の写真撮影を行った（図—9）。

3．考察

弥生時代後期

江上A遺跡の竪穴住居址を取り囲む溝の中から採取された泥土では，イネ属型（*Oryza* type）が著しく高い出現率を示す。これとともにウリ属(*Cucumis*)，ユウガオ属(*Lagenaria*)それにアブラナ科（Cruciferae），ネギ属と推定されるユリ科（Liliaceae. cf. *Allium*），クズ属と推定されるマメ科(Leguminosae, cf. *Pueraria*)などの有用植物に関連する花粉が多くみられる。またヨモギ属(*Artemisia*)，アカザ科（Chenopodiaceae），オオバコ属（*Plantago*)，オナモミ属(*Xanthium*)イネ科(Gramineae)、ギシギシ属（*Rumex*）などの人里植物が多産する。さらに大量の炭片が検出された。溝内の泥土が黒色を呈する背景には，この大量の炭片を含有することがかかわっているとみられる。

一方，樹木花粉の出現率は低い。スギ属（*Cryptomeria*），ハンノキ属（*Alnus*），トチノキ属（*Aesculus*），二葉マツ亜属（*Pinus, Diploxylon*），アカガシ亜属（*Quercus Cyclobalanopsis*），クリノキ属（*Castanea*），カエデ属（*Acer*），ハシバミ属（*Corylus*），ヤナギ属（*Salix*）などが比較的高い出現率を示す。

しかし，この花粉分析の結果にしたがうかぎり，竪穴住居周辺は，イネ科を中心とする草原であったとみなければならない。全出現花粉・胞子の中で，イネ属型やイネ科の花粉のみが50%以上の高い出現率を示す花粉分析の結果

は，弥生時代の遺跡の泥土の花粉分析において，たびたびみられる（例えば安田1973[1]・1974[2]）。この異常なイネ属型花粉の高い出現率が，一体当時のどのような古環境を反映しているのか興味深い。図1の花粉ダイアグラムで，近世の遺構においても，イネ属型花粉の出現率はせいぜい30%以下である。ところが弥生時代後期の溝遺構では，75.9%に達する層準さえみられる。近世に比して弥生時代の稲作の集約度が高かったとはみられない。現時点で考えられる可能性としては，この溝遺構でイネが栽培されていたか，あるいは，脱穀したモミガラが溝に捨てられ，モミガラに付着した花粉が大量に出現するかである。

一方，弥生時代後期の飯坂遺跡の2号方形周溝墓の周溝部からは，イネ属型の花粉はわずか一粒検出されただけである。またイネ科の出現率も竪穴住居をとりまく溝内の分析結果に比して低い。かわってヨモギ属，キク科（Compositae），羊歯類胞子（Monolete spore）と，カヤツリグサ科（Cyperaceae），フサモ属（*Myriophyllum*），アヤメ属（*Iris*）などの湿地性植物の花粉が特徴的に出現する。そして炭片の出現率も，竪穴住居址に比して低い。また樹木花粉ではスギ属が多産し，周辺にスギ林が存在したことを示している。方形周溝墓周辺において羊歯類胞子やヨモギ属が多産する傾向は，大阪府瓜生堂遺跡でも同様の結果がえられている（安田1982a[3]，b[4]）。

このように弥生時代後期の竪穴住居址周辺と方形周溝墓周辺では，環境にかなりの相違が認められた。前者はウリ属・ユウガオ属・クズと推定されるマメ科・ネギと推定されるユリ科などの有用植物やオオバコ属・オナモミ属・ギシギシ属・イネ科などの人里植物を多く含むイネ科を中心とする草原であった。これに対し後者はヨモギ属・羊歯類胞子が優占し，スギを中心とし，これにハンノキ属・ハシバミ属・アカガシ属・クリノキ属などを混生する林分も存在した。

弥生時代後期における稲作は，イネとともにウリ属・ユウガオ属などをセットとしてもち，オナモミ属・オオバコ属・アカザ科・ギシギシ属が雑草として随伴している。オナモミ属の高い出現率は三重県津市納所遺跡の分析結果等でも多くみられ（安田1979[5]），弥生時代の水田農業とともに拡大した特有な随伴雑草として位置づけられよう。

鎌倉時代～室町時代

鎌倉時代の遺物包含層において特徴的な点は，ハンノキ属が高い出現率を示し，イネ属型の花粉出現率が低率であることである。またフジと推定されるマメ科（Leguminosae, cf. *Wisteria*）が多産することも特徴的である。この花粉分析の結果からみるかぎり，鎌倉時代に，このSK007地点周辺は，水田として利用されてはいなかった。そうした傾向は室町時代においても言える。室町時代にはヨモギ属，羊歯類胞子が優占した。

鎌倉時代は，全時代を通して，もっとも樹木花粉が高い出現率を示す。スギやハンノキの低地林が拡大している。江上A遺跡の古墳～古代の泥土は手元にないが，弥生時代後期に比して，鎌倉時代の遺跡周辺の景観は，スギやハンノキなどの平地林の多い景観である。このハンノキ属が現在の富山湾沿岸の水田の畦や水路にそってみられるハンノキにつながるものであろう。

江戸時代中期

江戸時代中期の正印新遺跡のSK29遺構の分析結果では，イネ属型が28.4%の出現率を示し，周辺が水田として利用されていたことを示す。興味深いのは，西日本においては，江戸時代中期以降，ワタなどの商品作物が導入されるとともに，アカマツの二次林が拡大し，人口圧の増加による林地の荒廃が明瞭になってくる（例えば1983[6]）。ところがこの正印新遺跡の分析結果では，二葉マツ亜属の出現率は低い。富山平野周辺の林地の荒廃の程度は，大阪湾沿岸や瀬戸内海沿岸に比して，江戸時代中期においても，それほど著しくなかったとみられる。

炭片の物語るもの

今回の遺跡の泥土の花粉分析結果においても，大量の炭片が検出された。その出現率の変化の傾向は，時代によって変化するのではなく，泥土がどのような遺構のところから採取されたかに深くかかわっていた。同じ弥生時代後期の遺構においても，竪穴住居跡周辺の泥土が最も多くの炭片を含み，方形周溝墓の泥土の炭片の含有量は少なかった。また人間の居住の痕跡の少なかった鎌倉時代の出現率は低く，水田として利用されていたとみられる近世の出現率も，弥生時代後期にはおよばなかった。このように炭片の出現率は，既に述べたことであるが(安田1982)[7]，人間の居住のパターン，土地利用をビビッドに反映しており，遺構の性格（住居址に近い溝かそれとも水田や方形周溝墓に近接する溝かといった）を人間との接触の頻度で判断できる指標となる。

引用文献

(1) 安田喜憲（1973）三重県上箕田遺跡における弥生時代の自然環境の変遷と人類，人文地理，25.

(2) 安田喜憲（1974）弥生時代遺跡の泥土の花粉学的研究，立命館文学，358・359.

(3) 安田喜憲（1982ａ）瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析III，瓜生堂遺跡調査会「瓜生堂遺跡」

(4) 安田喜憲（1982ｂ）瓜生堂，巨摩廃寺遺跡の泥土の花粉分析，大阪文化財センター「巨摩・瓜生堂」。

(5) 安田喜憲（1979）三重県津市納所遺跡の泥土の花粉分析的研究，三重県教育委員会編「納所遺跡」。

(6) 安田喜憲（1983）西大井遺跡の泥土の花粉分析，大阪府教育委員会編「西大井遺跡第３次発掘調査概要」。

(7) 安田喜憲（1982）炭片が示す森林破壊，古文化財総括班編「縄文農耕の実証性」。

表１　花粉・胞子出現率表

試料採取地点・層序	江上ASD03 Bセ７⑥層		江上ASD03 Bセ７⑤層		江上ASD03 Bセ７④層		江上ASD03 Bセ７③層		江上ASD03 Bセ７②層		江上ASD03 Bセ７①層		飯坂2号方形周溝墓⑤層		江上Ｂ ＳＫ007		江上Ｂ ＳＫ106		正印新 ＳＫ29	
花粉・胞子	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
Abies（モミ属）			1	0.2	1	0.2			3	1.2	1	0.6					1	0.3	2	0.5
Tsuga（ツガ属）			1	0.2			1	0.3	1	0.4	2	1.1	1	0.2	1	0.2			1	0.2
Pinus (*Haploxylon*)（五葉マツ亜属）			1	0.2									1	0.2						
Pinus (*Diploxylon*)（二葉マツ亜属）			9	1.9	2	0.5	1	0.3	5	2.0	3	1.7	3	0.6	7	1.3	8	2.2	3	0.7
Cryptomeria（スギ属）	7	1.8	9	1.9	14	3.4	5	1.5	16	6.3	6	3.4	51	9.7	33	6.4	7	1.9	13	3.2
Cupressaceae（ヒノキ科）							1	0.3					2	0.4	3	0.6			1	0.2
Sciadopitys（コウヤマキ属）			5	1.1			1	0.3			1	0.6	1	0.2	1	0.2			1	0.2
Salix（ヤナギ属）	1	0.3	6	1.3	1	0.2					4	2.3							1	0.2
Juglans（オニグルミ属）	1	0.3	1	0.2					1	0.4	1	0.6			2	0.4			1	0.2
Pterocarya（サワグルミ属）	1	0.3	1	0.2															1	0.2
Betula（カバノキ属）	4	1.0					1	0.3							1	0.2			6	1.5
Alnus（ハンノキ属）	12	3.0	16	3.4	2	0.5	1	0.3	6	2.4	3	1.7	9	1.7	62	11.9	11	3.1		
Carpinus（クマシデ属）	1	0.3	1	0.2															3	0.7
Corylus（ハシバミ属）	6	1.5	1	0.2	2	0.5			1	0.4			13	2.5	8	1.5			2	0.5
Fagus（ブナ属）			6	1.3	1	0.2			2	0.8			2	0.4	4	0.8				
Ulmus（ニレ属）	1	0.3					1	0.3			2	1.1	3	0.6	1	0.2			1	0.2
Zelkova（ケヤキ属）			1	0.2	1	0.2														
Acer（カエデ属）			2	0.4			2	0.6	1	0.4	5	2.8								
Platycarya（ノグルミ属）			1	0.2	1	0.2	1	0.3												
Aesculus（トチノキ属）	6	1.5	7	1.5	4	1.0	5	1.5	1	0.4	3	1.7	1	0.2	2	0.4	1	0.3		
Fraxinus（トネリコ属）			2	0.4																

試料採取地点・層序	江上ASD03 Bセ7⑥層		江上ASD03 Bセ7⑤層		江上ASD03 Bセ7④層		江上ASD03 Bセ7③層		江上ASD03 Bセ7②層		江上ASD03 Bセ7①層		飯坂2号方形周溝墓⑤層		江上B SK007		江上B SK106		正印新 SK29	
花粉・胞子	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%	個	%
Leguminosae (cf. *Wisteria*) (マメ科・フジ属)															51	9.8				
Leguminosae (cf. *Lespedeza*) (マメ科・ハギ属)	4	1.0																		
Vitis (ブドウ属)	1	0.3											3	0.6			1	0.3		
Ilex (モチノキ属)	1	0.3																		
Eurya (ヒサカキ属)	10	2.5	1	0.2																
Quercus (*Cyclobalanopsis*) (アカガシ亜属)	11	2.8	8	1.7	5	1.2	1	0.3	1	0.4	2	1.1	10	1.9	14	2.7	2	0.6	1	0.2
Quercus (*Lepidobalanus*) (コナラ亜属)	1	0.3	7	1.5	6	1.5	4	1.2	3	1.2	3	1.7	5	0.9	5	1.0	2	0.6	6	1.5
Castanopsis (シイノキ属)			1	0.2	2	0.5			4	1.6	1	0.6	1	0.2					1	0.2
Castanea (クリノキ属)	1	0.3	10	2.1			2	0.6			2	1.1	12	2.3	6	1.2	6	1.7	1	0.2
Celtis (エノキ属)			1	0.2											1	0.2				
Styrax (エゴノキ属)			2	0.4																
Mallotus (アカメガシワ属)					1	0.2														
Clerodendron (クサギ属)															1	0.2				
Total AP (樹木花粉合計)	69	17.3	101	21.6	43	10.6	27	8.2	45	17.9	39	22.2	118	22.3	203	39.1	38	10.6	45	11.0
Oryza type (イネ属型)	71	17.8	47	10.0	309	75.9	66	20.1	103	40.9	65	36.9	1	0.2	16	3.1	24	6.7	116	28.4
Gramineae (イネ科)	150	37.6	77	16.5	19	4.7	161	48.9	14	5.6	10	5.7	66	12.5	54	10.4	50	13.9	111	27.1
Xanthium (オナモミ属)	1	0.3	9	1.9	3	0.7	1	0.3	3	1.2	12	6.8								
Artemisia (ヨモギ属)	9	2.3	14	3.0	5	1.2	9	2.7	8	3.2	3	1.7	53	10.0	32	6.2	29	8.1	28	6.8
Compositae (キク科)			4	0.9	2	0.5			2	0.8	1	0.6	10	1.9			2	0.6		
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	4	1.0	2	0.4	4	1.0	1	0.3	7	2.8	1	0.6	19	3.6	12	2.3	3	0.8	14	3.4
Persicaria (サナエタデ節)					1	0.2			1	0.4	2	1.1	2	0.4			1	0.3	1	0.2
Polygonum (タデ属)	1	0.3	2	0.4															1	0.2
Umbelliferae (セリ科)	1	0.3	2	0.4	2	0.5			2	0.8			2	0.4	7	1.3	1	0.3		
Chenopodiaceae (アカザ科)					2	0.5	15	4.6	16	6.3	3	1.7			11	2.1			2	0.5
Caryophyllaceae (ナデシコ科)			1	0.2					4	1.6			1	0.2	3	0.6	1	0.3		
Cruciferae (アブラナ科)	1	0.3	7	1.5	3	0.7	12	3.6	1	0.4	2	1.1	1	0.2	6	1.2	4	1.1	1	0.2
Leguminosae (cf. *Pueraria*) (マメ科・クズ属？)	17	4.3																		
Moraceae (cf. *Humulus*) (クワ科・カナムグラ属？)	1	0.3			1	0.2			4	1.6			5	0.9	37	7.1	1	0.3	3	0.7
Cucumis (ウリ属)	1	0.3																		
Lagenaria (ユウガオ属)	2	0.5																		
Plantago (オオバコ属)			2	0.4											5	1.0			1	0.2
Rumex (ギシギシ属)							1	0.3												
Sagittaria (オモダカ属)															1	0.2				
Potamogeton (ヒルムシロ属)			1	0.2											1	0.2	3	0.8		
Impatiens (ツリフネソウ属)	2	0.5	7	1.5			3	0.9					5	0.9						
Myriophyllum (フサモ属)																	1	0.3		
Ranunculaceae (キンポウゲ科)											1	0.6			1	0.2				
Liliaceae (cf. *Allium*) (ユリ科・ネギ属？)			1	0.2					1	0.4										
Thalictrum (カラマツソウ属)							1	0.3												
Trichosanthes (カラスウリ属)			1	0.2									1	0.2						
Iris (アヤメ属)																				
Monolete spore (単条型胞子)	36	9.0	144	30.8	11	2.7	17	5.2	30	11.9	27	15.3	211	40.0	124	23.9	192	53.3	70	17.1
Trilete spore (三条型胞子)	34	8.5	46	9.8	2	0,5	14	4.3	11	4.4	10	5.7	33	6.3	6	1.2	10	2.8	16	3.9
Osmunda (ゼンマイ属)							1	0.3												
Total NAP (草本花粉・胞子合計)	331	82.7	367	78.4	364	89.4	302	91.8	207	82.1	137	77.8	410	77.7	316	60.9	322	89.4	364	89.0
AP+NAP (樹木・草本花粉+胞子総計)	400		468		407		329		252		176		528		519		360		409	
AP／NAP (樹木と非樹木花粉の比)																				
Charcoal (木片)	4306	1079	8004	1710	3095	760.4	3191	969	3142	1246	3210	1824	2021	382	770	382	1630	452	765	187

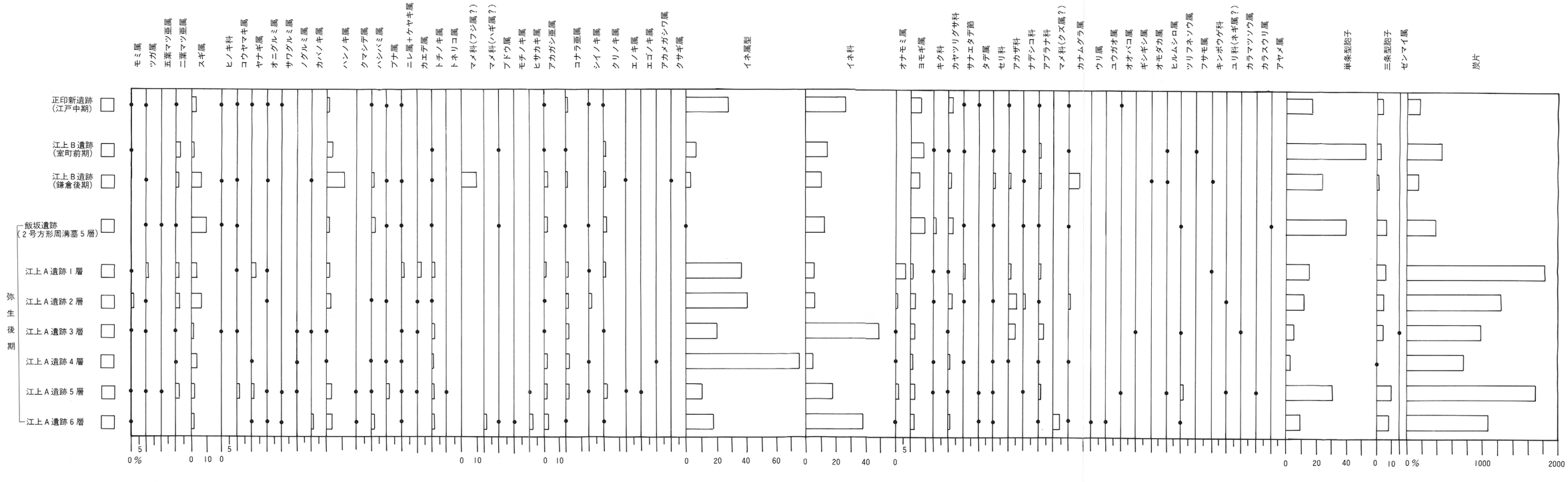


図1　花粉ダイアグラム（出現率は総出現花粉・胞子を基数とするパーセント）

D　江上A遺跡およびB遺跡から出土したヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* STANDL. とメロン仲間 *Cucumis melo* L. の遺体について

大阪府立大学農学部　藤　下　典　之

はじめに

ウリ科の栽培植物の中で，有史前より日本で盛んに利用されていたものにヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* STANDL. とメロン仲間 *Cucumis melo* L. とがある。1984年１月現在，それぞれの種子が108と103の遺跡から出土しているが，新しい発掘に伴ってまだまだ出土してくるに違いない。筆者はこれまでに60遺跡出土のヒョウタン仲間と66遺跡出土のメロン仲間の遺体を計測し，19編の報文にまとめてきた。それらの成果は要約すると以下のようになる。

ヒョウタン仲間：１．縄文時代では早期の鳥浜遺跡（福井県）からの出土が最も古く，その他にも６遺跡から種子や果皮が出土し，当時から各地で利用のあった事実が明らかとなった。弥生時代になると全国各地の37遺跡から多数の種子が出土し，2100年前ごろにはすでに栽培があったと推察できた。２．中世以降，遺体出土の遺跡数が急減しているが，これは陶磁器・金属器・木器の普及によって，ヒョウタン仲間の生活用具としての需要が減ったためであろう。３．出土種子は現生の栽培種に比べるとかなり小さく，アフリカのナイジェリアの野生型や栽培種の中で最も小果の‘センナリヒョウタン’の種子よりまだ小さいものが多く，特に縄文時代と弥生時代のものにその傾向が強かった。４．現生の栽培種に近い大型の種子は，古墳時代～中世にかけての４遺跡からしか出土がない。５．出土種子はいずれも種皮のみの遺体で，中身の胚と幼根は分解消失し，発芽能力のあるものは全く認められていない。６．出土種子全部が発育不十分な‘しいな’（empty seed）で，東南アジアや中近東方面で普通にみられる野菜としての利用が想定できるような場合もあった。７．完形果実が７遺跡から10果出土しているが，球型・偏球型・フラスコ型がほとんどで，中央部がきれいにくびれたヒョウタン型は，近世の布留遺跡（奈良県）から‘センナリヒョウタン’相似のものが２果でただけである。８．古代の日本におけるヒョウタン仲間の利用法は，容器・杓などの生活用具が一般的で，その他に種子ないし果実の食用や祭祀儀礼上の供物などもあったと思われた。

メロン仲間：１．縄文時代晩期の菜畑遺跡（佐賀県）から最古の１粒が確認され〔藤下1983ａ〕，弥生時代には各地の36遺跡から多数の種子が出土しており，すでにこの頃から食生活の上で重要な品目として各地で栽培されたものと考えられた。２．出土種子を現生の各種メロン仲間のそれらと対比して，古代に利用された種類を推測してみた。マクワ・シロウリ型はすでに弥生時代の初めから渡来し栽培されていたが，その前中期の頃には野生種に近い原始的な特性を持った雑草メロン型（後述）のものもかなり利用されていた。奈良・平安時代には，現在，東南アジアやインド方面で栽培の多いモモルディカメロン型のものが新たに渡来し，都宮官衙の人たちに利用されていた。３．各遺跡からの出土種子は大きさが変異に富み（粒揃いが悪く），日本には古代から多種多様な種類，あるいは未分化な状態の種類が渡来していたことを物語っていた。中世～近世の遺跡出土の種子の大きさの変異は，現生のそれに近かった。４．出土種子はいずれも中身が消失し発芽能力はなかった。５．古代の日本における利用法には，果実の生食・漬物・煮食・供物以外に，種子の食用や薬用もあったかもしれない。

江上遺跡から，ヒョウタン仲間の完形果実が複数個まとまって発掘されたとの連絡をうけて以来，富山県埋蔵文化財センターを三度訪ね，遺跡の性格・環境，出土状況などについて教示をうけながら，出土したウリ科植物の遺体を計測調査してきた。その結果，江上Ａ・Ｂ遺跡出土のヒョウタン仲間とメロン仲間の遺体から，植物の種類，渡来伝

播の時期や経路を初め，日本海側の遺跡の位置づけにも役だちそうな示唆に富む成果が得られたのでここに報告する。

材料および方法

調査対象にした遺体は表１・２・３に示したが，富山県立山町の若宮Ｂ遺跡から出土した種子も併記した。表示したもの以外に，土壌採集から水洗・選別まで２年間放置されたために，ラベルが汚染したり紛失して，遺跡や遺構が不明になったものがサンプルビンと種子数にして，ヒョウタン仲間で４本と189粒，メロン仲間で３本と122粒あった。それらの中にも興味深い材料があったが論義からは省いた。調査方法は従来から行ってきたものと同様で，まず水に浸漬貯蔵中の種子を直射日光のあたらない室内でゆっくり乾燥させて，吸水前の大きさに戻す（水に浸漬保存中の種子は自然乾燥させると小さくなり，長さと幅はヒョウタン仲間で保存時の90.0と89.9%に，メロン仲間で95.4と98.0%に減少する〕。次に正常，奇形，部分欠損，‘しいな’（未熟または不受精による)に分ける。計測は原則として正常種子全粒を対象とするが，標本No.（サンプルビン）あたり100粒以上あるものについては，その中から無作意的に抽出した100粒をあてた。遺構によっては‘しいな’も計測して正常種子と比較した。計測には0.1mmまで読みとれるルーペ（ピーク・ライト・スケール・ルーペ，×７）を使用した。出土した種子をヒョウタンあるいはマクワ・シロウリと断定せず，仲間の字句を添えたのは，現在の種子でもその大きさや形態だけからでは，分類学上同属同種で変種のみ違うヒョウタン・ユウガオ・フクベ・センナリヒョウタンを識別することは全く不可能であり，農学や植物学分野の研究がより進んでいるマクワ・シロウリ・メロンでも同じことが言えるので，分類学上同種のものを一括して仲間とした〔藤下1984ａ〕。

計測結果と考察

１．ヒョウタン仲間

１．完形果実の出土

首長フラスコ型の完全な果実（成熟果，図版10－２）が５果，江上Ａ遺跡の溝SD03のＣ区からかたまって出土している（図版10－１）。溝SD03は竪穴住居趾SB14の周溝であるが，単にこの溝に捨てられたものなのか，溝の埋没時やその他の時期に神霊を祈念して溝に流されたものなのか，よくわからない。発掘担当者の間では祭祀儀礼的なものとは考えられないとの意見である。数個の完形ヒョウタンがかたまって出土した事例は筆者の知る限りでは，弥生時代中・後期の下池田遺跡（大阪府）しかなく，ともにかたまって出土している点が興味深い。

２．出土遺構別にみた種子

江上Ａ遺跡では７本の溝と一つの井戸および３ヵ所の包含層から，江上Ｂ遺跡は溝SD070と穴SK007からそれぞれ出土している（表４)。ここでは溝内の区と層位は省略した。溝からの出土が圧倒的に多いが，なかでも溝SD03と04からがめだっていた。SD03は上述したようにヒョウタンの完形果実５個が発掘された住居趾の周濠で，そこが生活の場に近く湿潤であったという条件のために，ほぼ７ないし８果分に相当する847粒もの種子が腐敗せずに発掘され得たのであろう。‘しいな’のⅠ型やⅡ型および奇形種子と，出土遺構との間には特に強い関係は見いだせなかった。ただし，標本No.(サンプルビンのNo.)ごとでみると，‘しいな’のⅠ・Ⅱ型はともに溝SD03のNo.663とSD04のNo.639で特異的に高率であったこと（表２）から，同じような熟度や受精条件のもとにあった果実に由来する種子が比較的限られた場所に埋蔵されていたものと考えられた。

３．出土種子の特徴

(1) 種子の大きさと形態

標本No.（サンプルビンのNo.）別にみた種子の平均長では，最小が溝SD01No.701の9.70mm，最大が溝SD04No.92の12.25

mmであった（表２）。次に，正常種子が比較的まとまって出土し，そのうえに出土遺構の違う江上Ａ遺跡のNo.662，No.665，No.701と江上Ｂ遺跡の溝SD070と若宮Ｂ遺跡からの種子，および江上Ａ遺跡から出土した５果の完形果実内の種子の，それぞれ平均長と平均幅を，他の遺跡からのそれらと比較できるようにまとめたのが第１図である。江上Ａ・Ｂ両遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子は，既往の他遺跡からの出土種子同様に現生のものに比べると非常に小さく，日本で現在入手できるこの仲間の内で，果実・種子ともに最も小さい‘センナリヒョウタン’の種子よりもまだ小さかった。土圧や水流や生物などによる変形・損傷の少ない完形果実の種子も，５果とも非常に小さかった（表１，第１図）。完形果実No.４とNo.２，標本No.701および若宮Ｂ遺跡の種子は，編年別に出土種子の大きさを比較した資料〔藤下1984ａ〕からすると，縄文・弥生時代のものに類似した小粒で，既往の計測材料の中で最も小さかった弥生時代中期の里田原遺跡（長崎県）の種子に近かった（第１図）。メロン仲間で認められたような江上Ａと江上Ｂ両遺跡間（時代の間）の種子の大きさの差は，江上Ｂ遺跡からの出土種子数が少ないこともあって明らかにできなかった。次に江上Ａ遺跡からの完形果実No.１～５，果皮を伴わないNo.662，No.665，No.701と江上Ｂ遺跡の溝SD070および若宮Ｂ遺跡からの種子のうち，それぞれの計測した100粒（No.701は48粒，江上Ｂ遺跡は40粒）の一粒ごとの長さと幅を点で示して，大きさの分布や形（細身，太身）を理解しやすくしたのが第２・３図である。図中の斜線は長さ/幅＝2.0となる直線で，種子の長さが幅の丁度２倍ある種子がこの直線上に乗る。長さと幅の平均値だけでは種子の特徴がつかみにくいが，これらの図からは以下のようなことがわかる。１．完形果実ごとの種子の最小粒と最大粒の差は，長さで1.5～2.6mm，幅で0.7～1.5mmとなり，大きさの変異は少なかった。２．よく似た形をしていた完形果実でも，No.１の種子は他の果実のものより大きく（分布が右または上方に寄る），しかも最も太身（分布が斜線の上側にある）であった。３．江上Ａ遺跡のNo.662では，出土数が403粒と非常に多かったにもかかわらず，無作意的に抽出した100粒の大きさの変異幅は，完形果実のそれらと大差なかった。これらは種子の大きさが遺伝的にほとんど違いのない種類，または同一種類の数果の果実に由来する種子が，一緒に埋蔵されていたことを示すものであろう。出土種子中で最も大きかった（分布が右上方に寄る）No.665，逆に最も小さかった（分布が左下方に寄る）若宮Ｂ遺跡の種子についても同様なことが言えよう。一方，江上Ｂ遺跡の溝SD070の種子の長さと幅の開きは，計測数が完形果実の一果分の１/２にもおよばない40粒であったにもかかわらず，それぞれ4.5mmと2.3mmと大きかった。これは，上述のNo.662などとは反対に，種子の大きさが遺伝的に違う種類の複数の果実に由来する種子が，一緒に埋蔵されていたものとみて差し支えなかろう。３．No.662の種子は，大きさの分布が長さ/幅＝2.0の斜線より下位の側にあり（長さ/幅の平均値は2.28），他の遺構のものとは違った縦長の細身の種子であった。逆に，No.701と完形果実No.４のそれは斜線より上位の側にあり（長さ/幅の平均値は1.74と1.86），太身のものであった。５～８世紀の翁橋遺跡（大阪府）〔藤下1984ｂ〕の中で，出土完形果実に限ってみると，球型果には細身の種子が，フラスコ型果には太身の種子が入っている傾向の強いことを述べた。このような種子の形と果実の型との間の関係がかりに普遍的にあるとすれば，No.662の細身の種子は球型果のもので，No.701の太身の種子はフラスコ型果のものであるかもしれない。細身の種子はNo.662以外にNo.147，No.658にも，太身の種子はNo.700にも認められた。４．筆者は既往の報告書の中で，「小粒種子＝センナリヒョウタン」とする他の研究者の同定記載に危惧のあることを再三にわたって指摘してきたが，今回の江上Ａ遺跡から出土した完形果実では，‘センナリヒョウタン’と比べて果実ははるかに大きいが種子は逆に小さく（図版10－２，第１図），これからしても，果実（完形果）を見ずしての種子の大きさだけからする，ヒョウタン仲間の種類（変種）の同定がいかに難しいものであるかを理解いただけよう。

(2)　‘しいな’（empty seed）

出土種子の形態からⅠ型とⅡ型に分けた。Ⅰ型：種皮の発育が全体に不十分な未熟種子（図版11－２）。縫線（ヒョウタン仲間の種子に特有な種皮表面の縦の線条）はほとんど認められないか，発芽孔よりの部分にわずか見られる程

度で，全体に軟らかく平たくて角ばらず，一見スイカの種子を連想させる(図版11—２)。この程度の未熟種子は現生のものでも発芽は不可能である。‘しいな’Ⅰ型を同じ遺構(同じサンプルビン）から伴出した正常形の成熟種子と比べると，No.639では長さが10.78㎜（前者が‘しいな’Ⅰ型，後者が正常，以下同じ)，幅が5.68㎜と5.60㎜，No.663では長さが10.22㎜と10.65㎜，幅が5.29㎜と5.20㎜で，大きさに大差はないが，‘しいな’Ⅰ型の方がやや太身の傾向を示した。この‘しいな’Ⅰ型はNo.639の溝SD04から110粒，No.663の溝SD03から182粒とまとまって出土しているが,その他の遺構からは散見される程度で，その数も10粒前後に過ぎなかった。上記のNo.639とNo.63ではこのⅠ型以外に，種皮が部分的に欠損している多数の‘しいな’Ⅱ型と，少数の正常形の成熟種子が伴出している。多数の未熟果由来の‘しいな’と成熟果由来の正常形種子の伴出は，熟度の違う果実の種子がほぼ同じ場所に埋蔵されていたことを示している。他の遺跡で同様な‘しいな’Ⅰ型をまとまって出土したものに，古墳時代の水越（大阪府)，和爾（奈良県)，古墳～平安時代の吉身南（滋賀県)，７世紀の周防国府跡（山口県)，室町時代の草戸千軒町（広島県)などの遺跡がある。Ⅱ型：一粒の種子のうち発芽孔よりの１/２～１/３の種皮のみ残り，その他の部分が欠損しているもの（図版11—３)。受精後の胚珠(成熟すると種子になる）では珠皮（種皮）は珠孔（発芽孔）側の方から発育していくので，その部分が他より厚く，ごく若い未熟な状態で埋蔵されるとその部分のみが比較的残りよく，反対側の種皮の薄い部分は欠損してしまうものと思われる。欠損部分を紙上に復原しても正常種子は勿論のこと，‘しいな’Ⅰ型よりも小さく，縫線もほとんど認められない。残存部分と欠損部分の境界の種皮がまるで歯でかみ切ったように見えることから，現生のスイカやカボチャの種子利用と同じように中身（胚と幼根）を食べたあとの皮の残りとまちがわれ易い。このような特徴から‘しいな’Ⅱ型は上記のⅠ型よりさらに若い未熟果の種子であったものと思われる。‘しいな’Ⅱ型はNo.639から82粒，No.663から72粒,No.699（遺構不明）から48粒というように比較的まとまって出土している。他の遺跡では平安時代の清水（宮城県)，室町時代の草戸千軒町などから出土しているが,いずれも20粒前後であった。江上遺跡からの‘しいな’Ⅰ型とⅡ型のまとまった数の出土に対し意義をみい出したいが，現在のところはよくわからない。ただし，多数の‘しいな’採集は発掘，土壌採集，水洗，選出の過程の技術や姿勢に秀でたものがあったことはまちがいない。未熟果に由来するとみられる多数の‘しいな’が，野菜として利用しようとしたものの種子なのか，福井県三方町の曹洞宗派で今日みられるような祭祀儀礼上のやや未熟な供物果実の種子なのか，それとも単に成熟に至らないうちにツルが枯死または引き抜かれたためのものなのか判然としない。これらは今後の考古学的資料の集積によっておいおい解明されていくだろう。なお，‘しいな’の中には未熟以外に不受精に起因するものもあるが，現段階では両者の識別はできていない。

(3) 奇形種子

ヒョウタン仲間の種子は通常偏平であるが，全体が肥厚したり変形した奇形種子が，出土種子にも現生の種子にも時にみられる。江上Ａ遺跡ではNo.665から16粒，No.700からは14粒，No.701からは10粒，若宮Ｂ遺跡からは19粒と，他の遺跡では見られなかった高い率で出土している。No.700の奇形種子は特に肥厚が目だち,ヒョウタン仲間の種子とは思えないような形（図版11—６）をしていた。奇形の原因にはウイルス病などの病気の感染も推測されるが，これも今後に残された課題の一つである。

２．メロン仲間

１．出土遺構別にみた種子

江上Ａ遺跡では６本の溝と一つの井戸および２ヵ所の包含層から出土している（表４）が，正常，奇形，‘しいな’を合せた総数で314粒，最も出土数の多かったSD03と04の溝でもともに100粒余で，現生のメロン仲間の一果当たりの種子数200～500粒と対比すると，遺跡・遺構当たりとも出土数は少ない。一方，江上Ｂ遺跡では溝SD070と井戸SK007の２ヵ所からしか出土していない（表４）が，溝からの出土数は正常形だけでも9,436粒,さらに部分欠損の

2,710粒（埋蔵中や発掘，水洗の時に壊れたもので，同一種子を二度以上数えている可能性もある）を加えると，優に10,000粒を越えており，池上遺跡や藤原宮とならぶ大量出土の遺跡である。江上Ａ遺跡の溝 SD05と穴 SK28・47のみ，ヒョウタン仲間かメロン仲間かのどちらか一方の種子しか出土していないが，その他の江上Ｂ遺跡をも含む８遺構からは，完全な伴出であったかどうかは確かめていないが，両方の種子が出土していた（表４）。

２．出土種子の特徴

江上Ａ遺跡出土の種子は，大部分が中粒（長さ6.1～8.0㎜）のマクワまたはシロウリ型のものであった。ただし，No.610の溝SD03の正常種子68粒中の20粒と，No.465（SD01），No.615（SD01），No.705（SD04）中の数粒は，小粒（長さ6.0㎜以下）の雑草メロン型（表３，図版12－１・２）であり，No.96（SD04）の数粒は大粒（長さ8.1㎜以上）のモモルディカメロン型（表３）であった。これらのうち，No.610の出土種子の約30％を占めた小粒種子は雑草メロンと推定され，68粒全部の長さと幅の平均値を他の遺跡から出土した種子と比べても非常に小さい（第４図）。他の標本No.中の小粒や大粒種子には，マクワやシロウリの中の小さめや大きめの種子が混ざっている可能性もある。上述した雑草メロンは世界各地に分布するが，日本でも瀬戸内や九州西北辺の離島の畑地に雑草として，今日もなお自生が認められる〔藤下1983ｂ・ｃ〕。果実の大きさはウズラからアヒルの卵大（図版12－４）で，幼果は強烈に苦く，成熟すると苦味は消えるが甘味が出ず，野生種に近い原始的な特徴ばかりを持っているが，温室メロンとも，マクワやシロウリとも相互に自由に交雑できる極めて近縁な間柄にある。一方，江上Ｂ遺跡出土の種子は，溝SD070，井戸SK007のものとも大粒種子の占める比率が高く，特にSD070から出土した約10,000粒余の種子は，その40％近くが大粒のモモルディカメロン型であった（表３，第４図，図版12－３・５）。大きい種子ではその長さが10.7㎜もあって明らかにマクワやシロウリの種子ではなかった〔藤下1980ａ・ｂ，1984ａ〕。キュウリの種子はメロン仲間によく似ているが，大型で全体的に細身（slender）で発芽孔側がとがり気味であるほか，顕微鏡でみると種皮表面の模様が違っている〔藤下1977〕。江上Ｂ遺跡からの大粒種子は検鏡していないが，外部形態の特徴からモモルディカメロンと推定してもほぼ間違いなかろう。ただし，モモルディカメロン以外のもので，大粒種子をつけるような種類がもし古代に存在していたら話は別である。今日までの筆者の調査で，モモルディカメロン型の大粒種子を高い頻度で出土した遺跡は，奈良・平安時代の難波宮・藤原宮・平城京・長岡京・平安京と多賀城などの著名な大きい都宮官衙趾〔藤下1980ｂ〕ばかりで，例外として室町時代の草戸千軒町遺跡があるくらいであった。最近，古墳～奈良時代の坂尻遺跡（静岡県）からもこの大粒種子が出土したが，その後，この遺跡も小さいながら官衙趾であることが明らかとなった。このような既往の成果から，江上Ｂ遺跡も官衙趾ではなかろうかと意見を具申したが，埋蔵文化財センターの方からは可能性なしとの見解を得た。当のモモルディカメロンは，現在も東南アジアやインド方面では盛んに栽培利用されているが，日本では不思議なことに本土から遠く離れた八丈島と五島の福江島とで，絶滅も間近いと心配されるほどの小面積で栽培が伝承され，ババゴロシやバーウリの方言で呼ばれながら老人だけが食べている。このメロンは種子，果実（図版12－６，１～３kg）とも大型で，成熟すると芳香を放つが甘味と水気がなく，果肉はこなごなに砕ける。日本を含むいずれの生産地でも普通砕けた果肉に少量の砂糖をふりかけて食べている。筆者は現在のところ，このモモルディカメロンは遣隋使や遣唐使などによって中国大陸から難波宮あたりにもたらされ，つぎつぎと畿内の都宮官衙近くで栽培され，大宮人たちが食用にしたものとみている。しかし，当時は砂糖の入手が極めて困難であったことや食味が日本人の好みに合わなかったことから，中世以降急激に姿を消していったものと推測される。八丈島や福江島に残っていたのは，イモに似た肉質から主食代用に利用されてきたからであろう。中国でもこのメロンを“老太婆瓜„と呼び，主食代用にしていた時代や地域があったという。

計測対象にした弥生時代後期の江上Ａ遺跡の245粒と，中世の江上Ｂ遺跡の217粒の長さの平均値はそれぞれ6.69㎜と7.73㎜で，モモルディカメロン型の大粒種子の頻度が高かった江上Ｂ遺跡の方が，雑草メロン型の小粒種子を含ん

でいた江上A遺跡より大きかった（表3，第4図）。これは弥生時代以降に大粒種子（大型果実）をつける新しい種類が，江上にもたらされ栽培されるようになったからであろう。江上B遺跡からモモルディカ型の大粒種子が高い頻度で出土した事実は，都宮官衙趾との関係は別にしても，日本海側では最初のものであるから，朝鮮半島の北部やシベリヤ方面をも含む渡来経路やその時期，栽培地などを考察していくうえに一つの重要な手がかりとなるであろう。また，鳥浜遺跡などとともに，日本海側に，栽培植物の系統発生学や農耕の歴史・技術あるいは食生活の究明に直結するような文化財が埋もれていたことを示すものである。

結　　論

江上A遺跡およびB遺跡から出土したヒョウタン仲間と，メロン仲間の遺体の特徴をまとめると以下のようになる。ヒョウタン仲間：①弥生時代後期の住居趾の周溝から，首長フラスコ型ヒョウタンの完形果実が5個かたまって出土した。これらの果実からは，一果実内に含まれる種子の粒数および大きさの変異を知ることができた。その成果は，今後出土してくるこの仲間の種類（果実の形態）や埋蔵個体数を推定するさいの貴重な基礎資料となろう。②：弥生時代後期の江上A，中世の江上B両遺跡から出土した種子は，既往の他の遺跡から出土した種子同様に，ともに現生の栽培種のそれに比べると小さく大部分の種子は縄文・弥生時代の遺跡から出土した特に小さい種子に近いものであった。③種皮全体の発育が不十分な未熟種子の‘しいな’Ⅰ型と，発芽孔の反対側の種皮が欠損していてⅠ型よりさらに未熟な（若い）‘しいな’Ⅱ型，および原因不明の奇形種子が，他の遺跡では例がないほどまとまった粒数で正常種子と伴出した。メロン仲間：①種子の長さが8.1㎜以上あるモモルディカメロン型の大粒種子が，中世のB遺跡から高い頻度でしかも大量に出土した。既往の調査で，このような大粒種子の出土様相を示した遺跡は，そのほとんどが奈良・平安時代の畿内を中心とした7箇所からなる都宮官衙趾であった。それが江上B遺跡からの出土となると，時代は中世であり，集落の溝と井戸からであり，さらに日本海側で最初のものであるという特殊性がみられた。これらの事実は，メロン仲間の渡来・伝播の経路や歴史と種類を追究していくうえで極めて興味深いといえよう。②中世の江上B遺跡の溝SD070からは，遺跡あたりの出土数にして最も多い部類に入る10.000粒以上の種子が発掘された。③江上A，江上B両遺跡を通して，出土種子の大部分はマクワ，シロウリ型の中粒種子であったが，上記の大粒種子のほかに，長さが6㎜以下の雑草メロン型の小粒種子も弥生時代後期の江上A遺跡から少数ではあるが出土した。④出土遺構はヒョウタン仲間とほとんど同じであった。

引用文献

藤下典之　1977　「草戸千軒町遺跡および尾道中世遺跡より出土した *Cucumis melo* L. の種子について」『草戸千軒町遺跡　1975』55～62．広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

藤下典之　1980ａ　「池上遺跡より出土した *Cucumis melo L.* の種子について，特に現生のメロン仲間の種子および他の遺跡から出土した種子との対比」『池上・四ツ池』6，105～124．大阪文化財センター

藤下典之　1980ｂ　「本邦各地の遺跡から出土したウリ科植物の遺体について」『考古学，美術史の自然科学的研究』223～233．日本学術振興会，東京

藤下典之　1982　「本邦各地の遺跡から出土したヒョウタン仲間（*Lagenaria siceraria* STANDL.）の遺体について」『近畿作育会報』27，40～45．

藤下典之　1983ａ　「菜畑遺跡から出土したメロン仲間とヒョウタン仲間の種子について」『菜畑』40～48．唐津市教育委員会

藤下典之　1983ｂ　「メロン：植物としての特性」『農業技術大系』4，1～44．農文協，東京

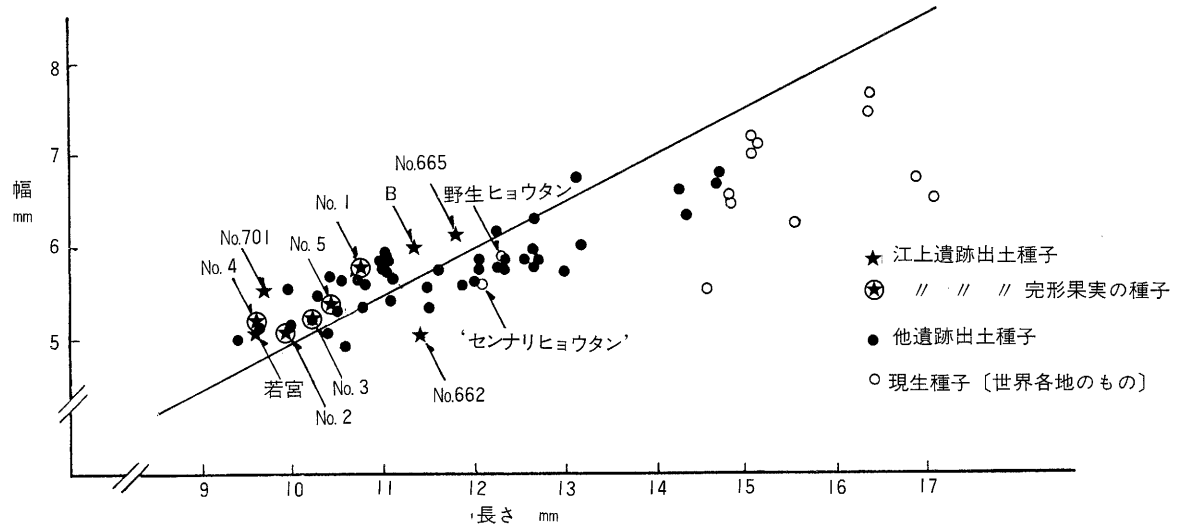
藤下典之　1983 c　「メロン仲間（*Cucumis melo L.*）の系統分化と多様性」『育種学最近の進歩』24，3～21．日本育種学会編，啓学出版，東京

藤下典之　1984 a　「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」628～644．古文化財編集委員会編，同朋舎出版，東京

藤下典之　1984 b　「翁橋遺跡より出土したウリ科植物の遺体」『翁橋』101～108堺市教育委員会

表1　江上A遺跡(弥生後期)から出土したヒョウタン *Lagenaria siceraria* STANDL. の完形果実に含まれていた種子

果実No.　出土遺構	発掘日	種子数					種子の特徴			
		正常	奇形	部分欠損	しいな	合計	計測	平均長 mm	平均幅 mm	長さ/幅
1　溝SD03 C区	79.10.17	99	2	0	7	108	99	10.69	5.73	1.864
2　〃　〃	〃	111	3	0	0	114	100	9.94	5.09	1.950
3　〃　〃	〃	114	3	3	0	120	100	10.21	5.24	1.949
4　〃　〃	〃	65	4	0	0	69	65	9.62	5.16	1.864
5　〃　〃	〃	112	5	11	7	135	100	10.38	5.34	1.944



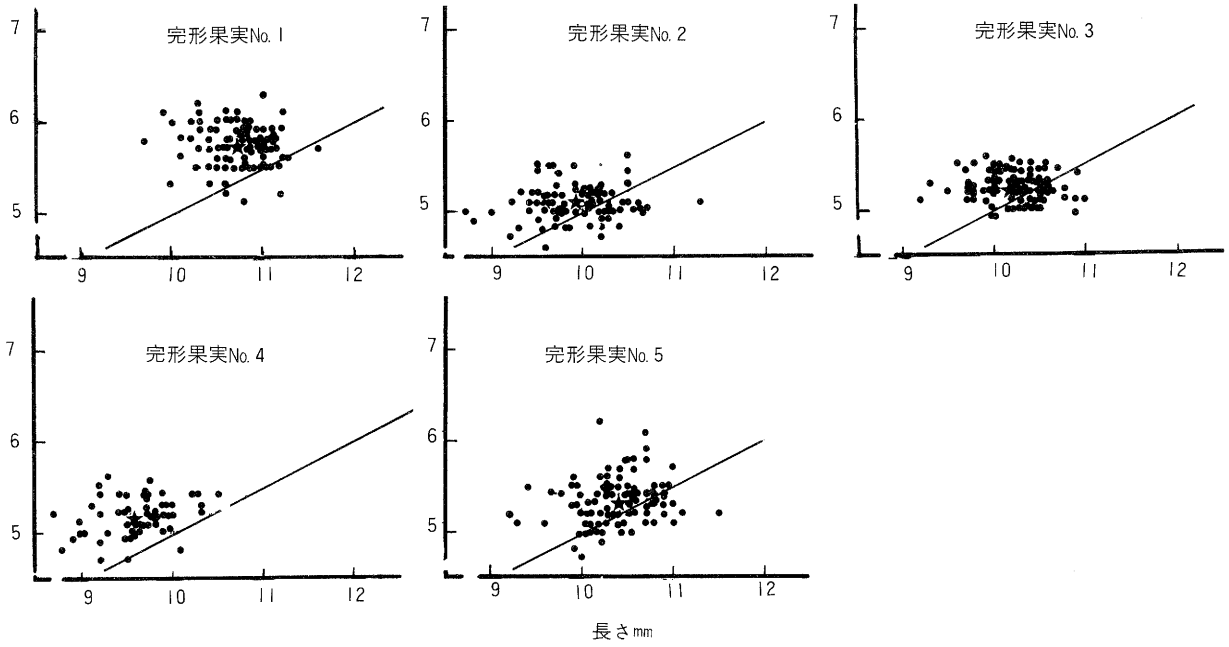
第1図　江上AおよびB遺跡と他遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子の大きさ

遺跡ごとの長さと幅の平均値を示した。斜めの直線は長さ／幅＝2.0を示し斜線より上方は太身下方は細身の種子となる

表2　江上Aおよび江上B遺跡より出土したヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* STANDL. の種子

標本No.	出土遺構	発掘日	種子数						種子の特徴		
			正常	奇形	部分欠損	しいな		計測	平均長 mm	平均幅 mm	長さ/幅
						I型	II型				
A 遺跡〔弥生後期〕											
92	SD04	79.10.18	2					2	12.25	6.35	——
117	?	79 ——					1	0	——	——	——
147	X16·17, Y23·24	79.09.11	16		7			16	11.21	5.06	2.213
222	SD13	——	11		1			11	11.05	5.54	1.993
291	X12, Y24·25	79.09.17	2					2	10.85	5.50	——
466	SD02	79.08.29	7		7			7	10.80	5.50	——
467	SD01 A区	79.09.12	3					3	11.03	5.73	——
470	〃 〃	79.09.12					1	0	——	——	——
474	〃 〃	79.09.12			5			0	——	——	——
517	SD09	79.10.17	1					1	10.7	5.2	——
639	SD04 B区	79.10 —	29			110	82	29	11.08	5.60	1.977
650	SD01 D区	79 ——	15	3				15	10.96	5.34	2.051
651	〃	79.09.20	2					2	10.95	5.20	——
652	SK28	79.10.23	6					6	11.38	5.78	——
653	X17, Y23 (SD04付近)	79.11 —	1					1	12.0	6.6	——
654	SD09	79.10.17			1			0	——	——	——
655	SD13	——			1			0	——	——	——
656	〃	79 ——			1			0	——	——	——
657	SD05	79.10.18			2	15	16	15	11.94	5.61	2.127
658	〃	79.10.10	14		2			14	11.70	5.10	2.292
659	〃	——					4	0	——	——	——
660	SD03	79.09.20	2					2	10.05	5.00	——
661	〃 C区	79.10.11	49	1				49	10.31	5.37	1.921
662	〃 〃	79.10.17	368	9	13	7	6	100	11.44	5.01	2.280
663	〃 D区	79 ——	37		6	182	72	37	10.65	5.20	2.047
664	SD04	——		1				0	——	——	——
665	〃	——	106	16	22	8		100	11.76	6.14	1.913
666	SD03 D区	——	6		3		5	6	10.81	5.35	2.021
668	〃 〃	79.10.24	74	6	1			74	10.78	5.39	2.000
669	?	——		5			11	0	——	——	——
699	?	——	96				48	96	11.19	5.73	1.953
700	?	——	7	14		7		7	11.10	6.31	1.759
701	SD01 A区	——	48	10		7		48	9.70	5.56	1.743
B 遺跡〔中世〕									11.33		
	SD070	79.10.16	40	6	20	10		40		5.97	1.897
	SK007	79.09.21	1					1	10.4	5.8	——
若宮B遺跡〔古墳〕											
	SD042	79.06.22	286	19	2			100	9.60	5.08	1.890

長さ／幅は10粒以上計測した標本No.のみに記入した。



第2図　江上A遺跡(弥生後期)の周溝SD03から出土したヒョウタンの完形果実に含まれていた種子の大きさの変異

横軸に長さ(mm)縦軸に太さ(mm)を示した斜めの直線は長さ／幅＝0.2の直線
各果実とも無作意抽出した100粒の一粒ごとの長さと幅を示した
星印は各果実ごとの種子の平均長と平均幅

表4　遺構別にみた出土種子数

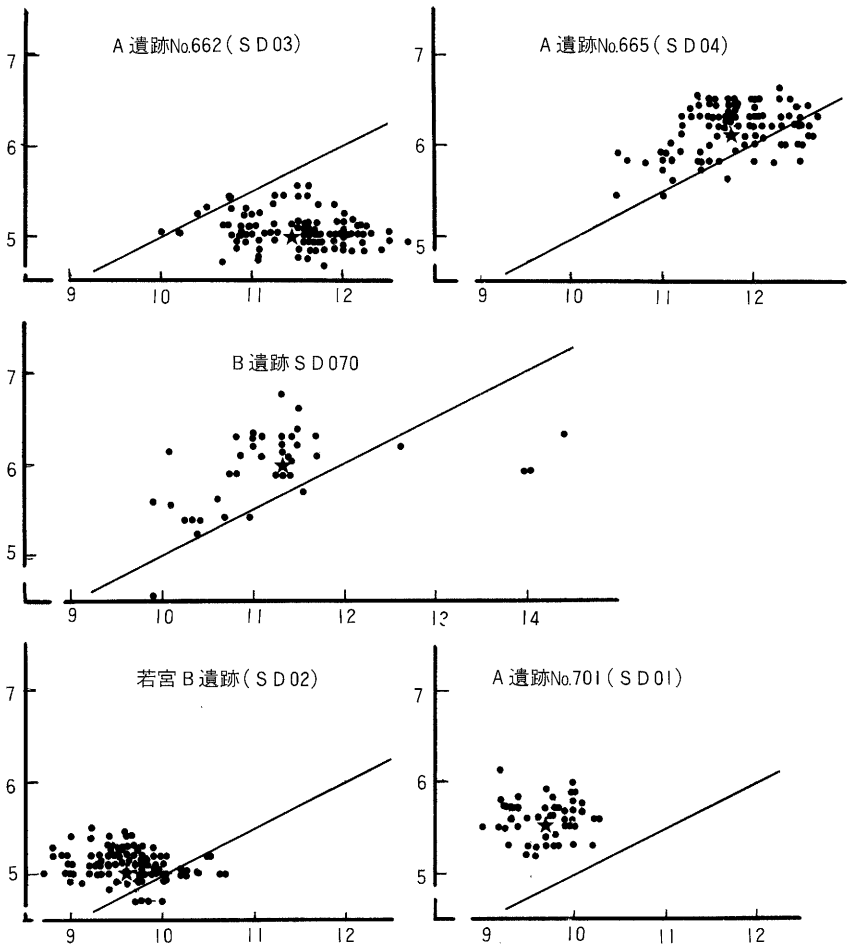
	江上A遺跡											江上B遺跡		若宮B遺跡
	溝SD							穴SK		包含層	?	溝SD 070	穴SK 007	溝SD 02
	01	02	03	04	05	09	13	28	47					
ヒョウタン仲間														
正常種子	69	7	536	137	14	1	11	6		19	103	40	1	286
しいなI	7		189	118	15						7	10		
〃 II	1		83	82	20						60			
奇形種子	13		16	17							19	6		19
部分欠損種子	5		23	22	4	1	3			7		20		2
合計	94	7	847	376	53	2	14	6	0	26	189	76	1	307
メロン仲間														
正常種子	30	6	79	74		5	18				93	9436	17	
しいな	1		6						7	3				
奇形種子			10								1			
部分欠損種子	16	1	7	27			23			1	28	2710		
合計	47	7	102	101	0	5	41	0	7	4	122	10,000以上	17	0

?遺構不明の材料（メロン仲間ではA，Bも不明）

表3　江上Aおよび江上B遺跡より出土したメロン仲間 *Cucumis melo* L. の種子

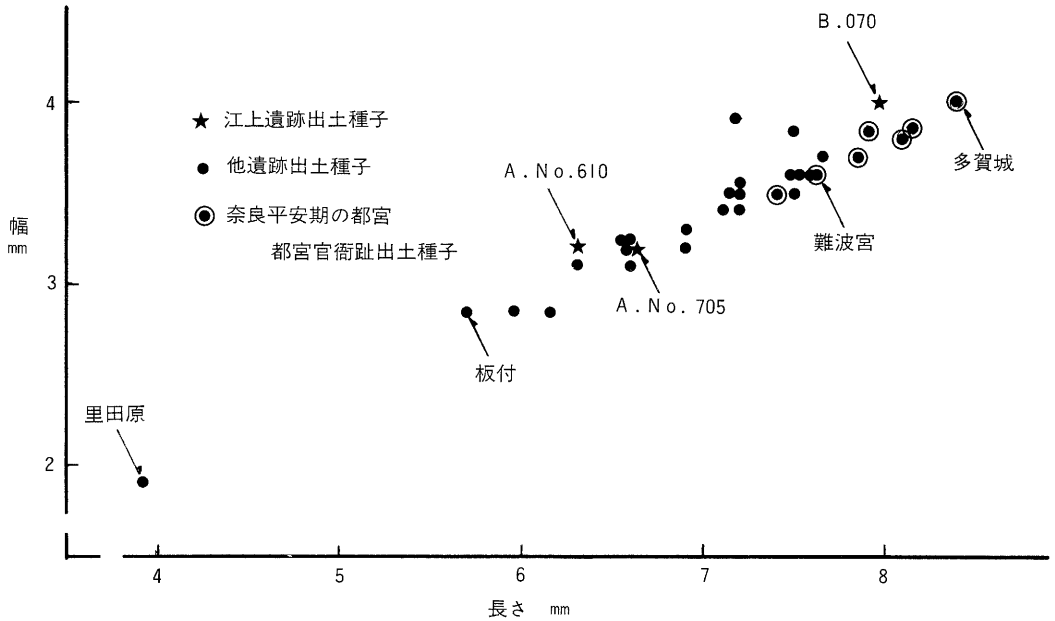
標本No.	出土遺構	発掘日	種子数					種子の特徴				
			正常	奇形	部分欠損	しいな	計測	平均長 mm	平均幅 mm	長さ/幅	種子数 6.0mm	種子数 8.1mm
A 遺跡〔弥生後期〕												
13	SD13	——			1		0	——	——	——		
27	SD01 A区	79.09.12	4				4	6.75	3.12	——		
96	SD04	——	21				21	7.47	3.65	2.042		6
226	SD13	79	6		8		6	6.30	3.13	——		
303	SK47	79.10.23	5				5	7.04	3.36	——		
328	SD04	——			1		0	——	——	——		
465	SD01 A区	——	4		6		4	5.85	3.00	——	3	
468	〃 〃	79.09.17	4		3		4	6.60	3.35	——		
469	X19, Y24·25 (SD04付近)	——	3				3	6.56	3.30	——	1	
472	SD19	——	1				1	6.0	3.1	——	1	
473	X19, Y24・25 (SD04付近)	79.09.17			1		0	——	——	——		
475	SD02	79.08.29	6		1		6	6.61	3.36	——	1	
493	SD13	79.08.29	2		4		2	6.80	3.30	——		
533	〃	——	3		1		3	6.56	3.26	——	1	
599	SD09	——	1				1	5.1	2.7	——	1	
600	〃	——	1				1	7.3	3.5	——		
601	SD03	79.10 —	1				1	7.1	3.1	——		
602	SK47	79.10.23	2				2	6.20	3.15	——		
603	SD03 B区	——	1	1	1		1	5.8	3.4	——	1	
604	SD13	79 ——	6		8		6	6.90	3.35	——		
605	〃	——	1		1		1	7.2	3.4	——		
606	SD01 B区	79.11.03	1				1	7.4	3.3	——		
607	〃	——	1				1	6.0	3.3	——	1	
608	〃 D区	79 ——	2			1	2	6.95	3.25	——		
609	SD03	79.09.20	8		3		8	6.23	2.96	——		
610	〃 B区	79.10 —	68	9	3	6	68	6.32	3.20	1.975	20	
611	〃 C区	79.10.22	1				1	7.2	3.3	——		
612	?	——	6				6	7.20	3.36	——		1
613	SD06	——	11				11	6.72	3.23	2.078	1	
614	?	79 ——	70	1	24		70	7.73	3.80	2.034		26
615	SD01	79.09.20	13		7		13	6.60	3.13	2.105	4	
616	?	79 ——	17		4		17	7.80	3.87	2.012		8
617	SD09	79.10.17	1				1	7.20	3.4	——		
618	〃	——	1				1	6.0	3.1	——	1	
619	SD01	79.09 —	1				1	7.10	3.8	——		
705	SD04	——	42		26		42	6.62	3.21	2.056	5	
B 遺跡〔中世〕		——										
	SD070	79.07.30	205	4			100	7.53	3.84	1.960	1	19
	〃	79.10.16	9231		2710		100	7.99	4.02	1.984	3	56
	SK007	79.09.21	12				12	7.46	3.84	1.943	1	3
	〃	——	3				3	7.53	3.70	——		1
	〃	79.10.21	2				2	6.85	3.50	——	1	

長さ／幅は10粒以上計測した標本No.のみに記入した。



第3図　江上A，Bおよび若宮B遺跡から出土した種子の大きさの変異

横軸に長さ(mm)縦軸に幅(mm)を示した斜めの直線は 長さ／幅 ＝2.0の直線
No.701は48粒，B遺跡は40粒，その他は無作意抽出した100粒の一粒ごとの
長さと幅を示した。星印は標本No.（サンプルビン）ごとの種子の平均長と平均幅



第4図　江上AおよびB遺跡と他遺跡から出土したメロン仲間の種子の大きさ

50粒以上を計測した遺跡または遺構ごと長さと幅の平均値を示した。

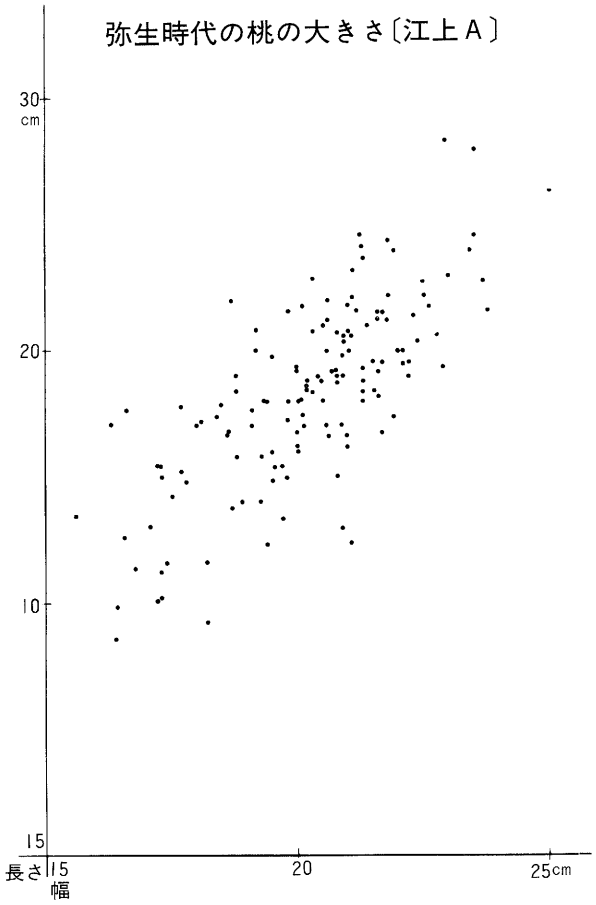
E　桃の核の大きさ

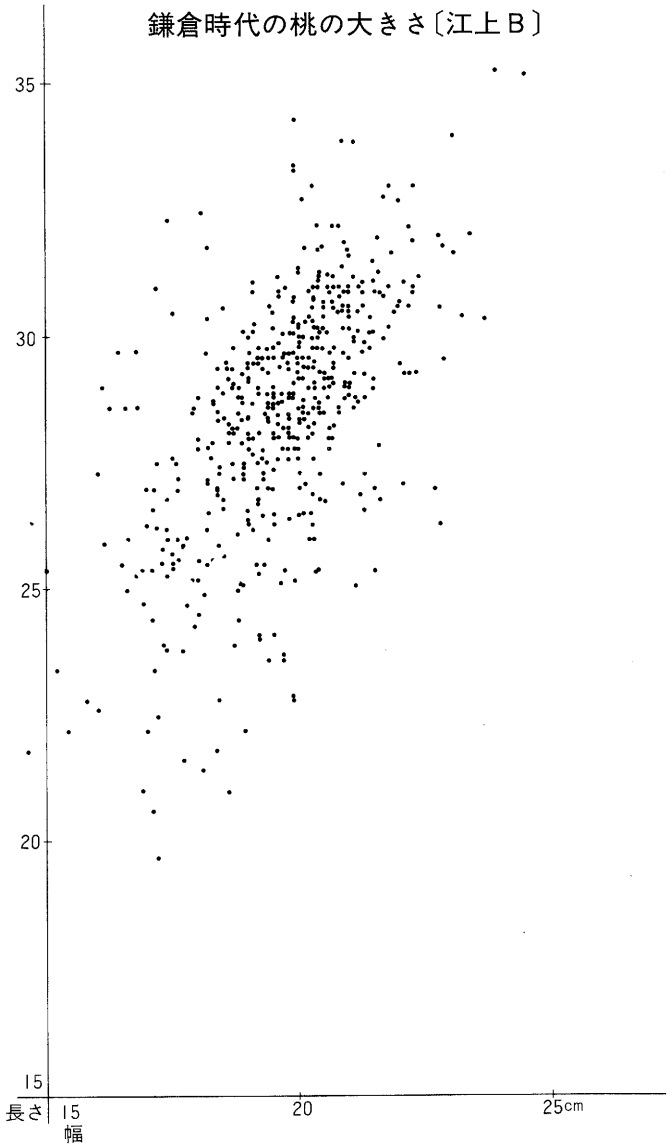
江上Ａ遺跡・江上Ｂ遺跡から桃の核が出土している。

桃は，米・ウリなどと伴に古くから日本で栽培された果樹の１つである。そのため出土例も多く小清水卓二氏などにより研究が進められている〔小清水1963〕。小清水氏によると，遺跡から発見される桃の核は，コダイモモ，ノモモ，モモ，スバイモモなどが知られている。核は，栽培・管理技術により個体差が見られるようだが古い時代のものが小さく時代が新しくなるにつれ栽培技術の向上により核が大形化すると考えられている。

江上Ａ遺跡では，完形品が96点出土している。核は，遺跡内の溝・井戸・土坑・建物の柱根など大半の遺構内から小数づつ出土している。中でも遺跡の中央を流れる溝SD001（34点）と住居跡SB14の周溝SD003（21点）からの出土が多い。核の大きさは，最大(全長29㎜・幅25㎜)，最小（全長19.4㎜・幅16㎜）との差はみられるが，全長22～27㎜，幅17～23㎜の大きさに集まる。また核の最大・最小の差は，全長で約10㎜，幅で約９㎜を測る。

江上Ｂ遺跡出土品は完形品が534点ある。核は，溝SD016（１点），036（９点），037（14点），070（38点），土坑SK007（432点）から出土しておりSK007出土品が大半をしめる。核の大きさは，最大（全長35㎜，幅24.5㎜），最小(全長19.4㎜，幅15.4㎜）を測り全長で15㎜，幅10㎜の差が認められる。しかし，全長25～32㎜，幅18～22㎜に集まり中でも全長30㎜，幅20㎜前後に最も集中する。両遺跡出土の桃の核は出土遺物から江上Ａ遺跡が弥生後期，江上Ｂ遺跡が15世紀に位置づけられる。また，核は，江上Ａ遺跡で長さが短かく幅広，江上Ｂ遺跡では長さが長く幅がせまい特徴をもつ。これは栽培技術の差であるか品種の違いを示すかは断定できない。





F　炭化米の大きさ

正印新，江上A，江上Bの3遺跡から，炭化米が出土した。籾殻付きのものと付かないものがあり，後者のものについて計測を行った。

1．正印新遺跡

全部で約400粒ある。SK26の11粒とX13・14Y30出土の19粒について計測した。（右図上段）

SK26は，平安時代後半か鎌倉初期とされる穴で，炭化米は長さ4.2～5.3㎜幅2.3～2.9㎜のものがある。平均は長さ4.58㎜幅2.52㎜長幅比1.82である。X13・14Y30出土の炭化米は，出土状況から江戸時代中期のものとみられる。長さ4.2～5.8㎜幅2.9～4.1㎜で，平均は長さ4.93㎜幅3.24㎜長幅比1.52である。

2．江上A遺跡

SD01～05・09・13，SB16・SK31・SA22他から出土しており，総量約1.2ℓである。すべて弥生時代後期に属する。SD09出土のものが99%を占め，それは炭化米で埋まったような出土状況であった。隣接する高床倉庫SB19が焼失した時にはまりこんだ可能性が強い。

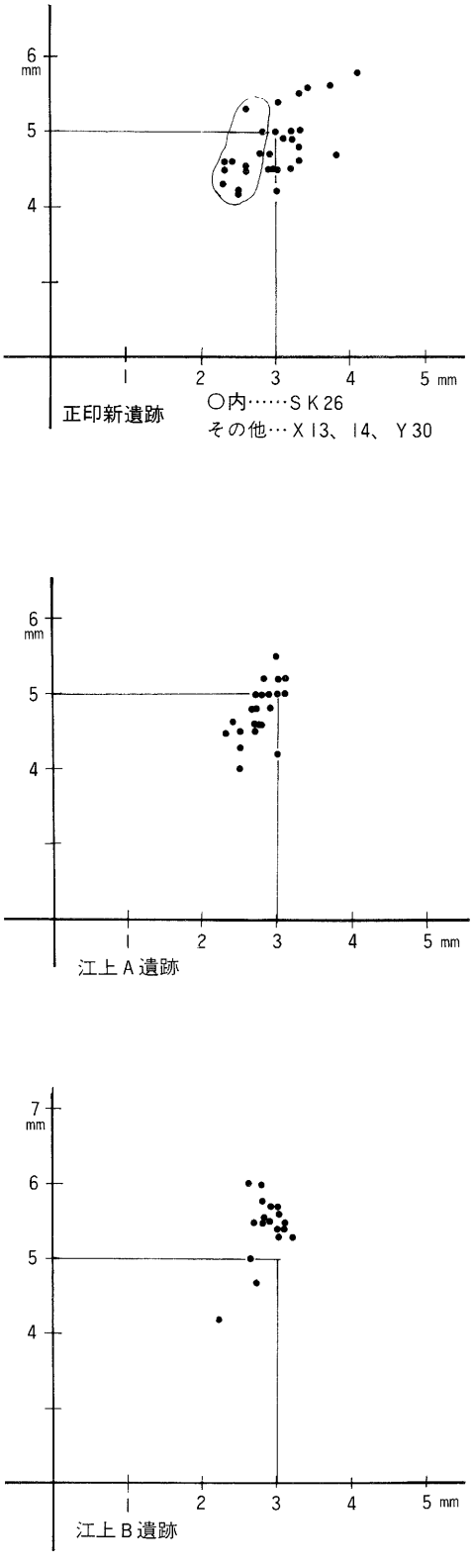
SD09の100粒を計測したが，図示しているのはそのうち20粒である。長さ4～5.7㎜幅2.3～3.3㎜で，平均の長さ4.8㎜幅2.73㎜長幅比1.76である。（右図中段）

3．江上B遺跡

SK007，SD070から約1,000粒出土している。鎌倉時代に属する。SK007の20粒について計測したが，長さ4.2～6㎜幅2.2～3.2㎜で，平均の長さ5.44㎜幅2.83㎜長幅比1.93である。（右図下段）

4．まとめ

以上の計測結果をみると，時代によって長さや幅が異なることがわかる。弥生時代後期のものは，長さ5㎜幅3㎜ほどのものが多い。鎌倉時代のものは，長さ5.5㎜幅3㎜ほどのものが多く，弥生時代後期に比べ長くなっている。江戸時代中期は，かなりバラツキがあり，長さ4.8㎜幅3.2㎜ほどのものと，長さ5.5㎜幅3.5㎜ほどのものがあり，鎌倉時代のものに比べ長さは変わらないが幅の広いものがある。平安時代後半か鎌倉時代初期とされる正印新遺跡SK26のものは，江上A遺跡の炭化米より小さく米の長さが時代を経るにつれ大きくなる傾向にあるとするとおかしい。県内の資料では，過去に弥生時代中期とされる炭化米の計測が行われている〔佐藤1971〕。高岡市石塚遺跡のもので，6粒である。平均の長さ4.7㎜幅3㎜長幅比1.57である。この数値は，正印新遺跡出土の江戸



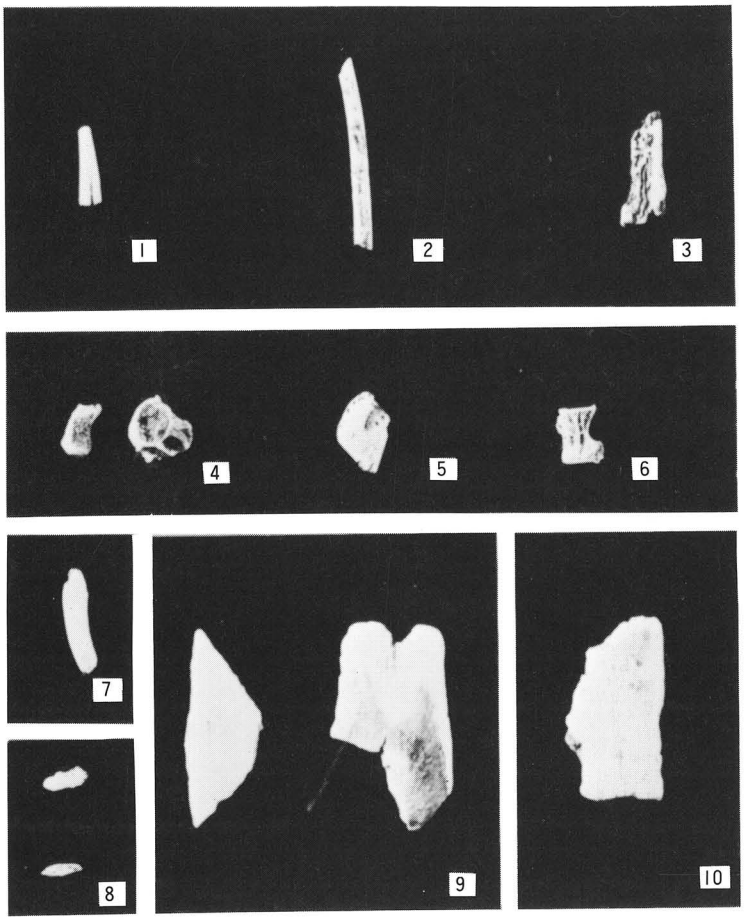
第1図　炭化米の計測

時代中期のものに近い数値で，果して弥生時代中期であるのか問題をなげかけている。平安時代後半，鎌倉初期とされる正印新の炭化米が小さいといったこともあり，もう少し多くの資料を測定して，結論を出したい。

G　動物遺体

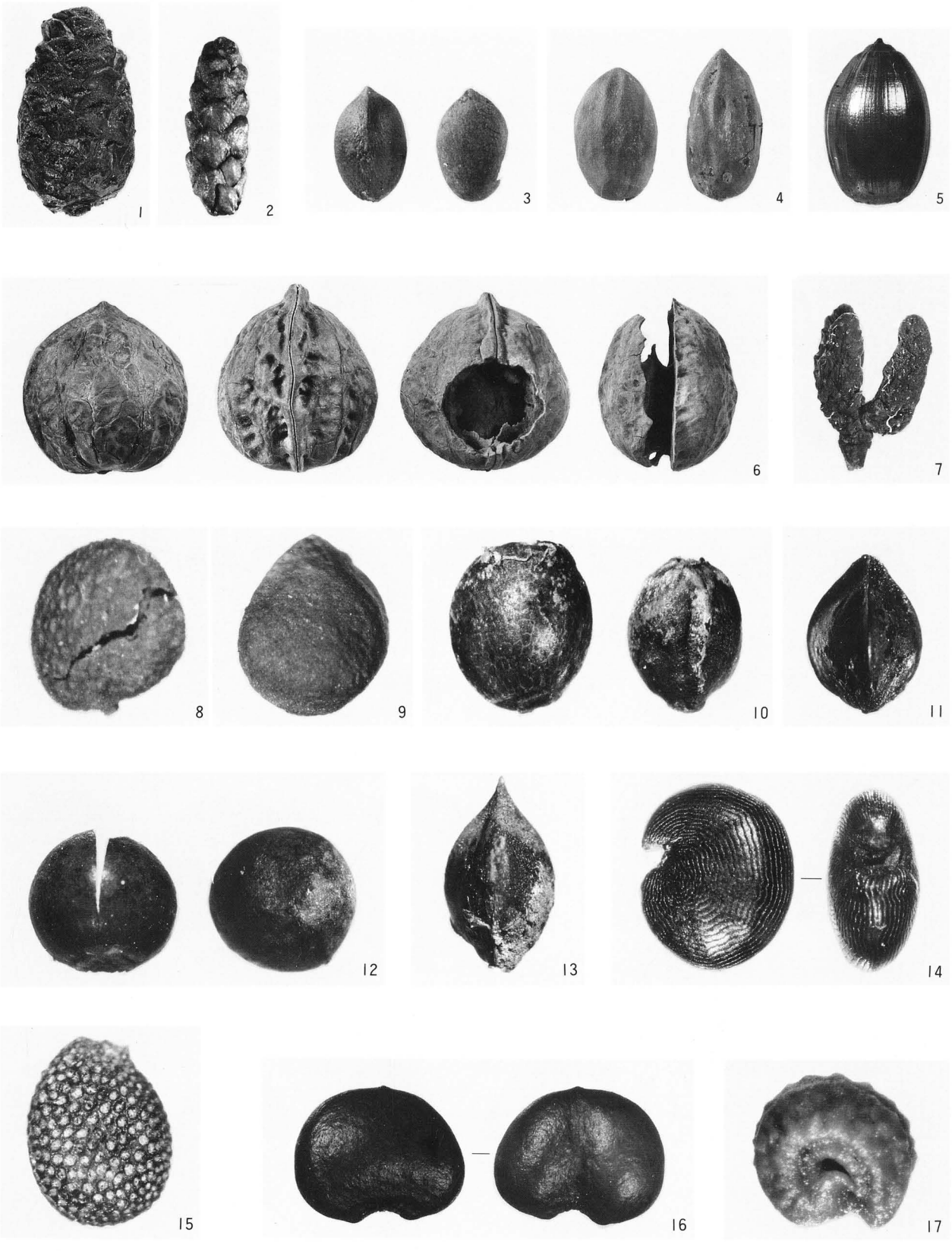
動物遺体は，江上Ａ遺跡と江上Ｂ遺跡から出土した。早稲田大学教育学部金子浩昌氏の同定により，次表のとおりである。（写真は実大）

No.	遺跡名・出土区	種　類・部　位	備　　考
1	江上ASD01Ｃ区	カエル類　脛腓骨片	弥生時代後期
2	〃　X20Y29	ニホンジカの中手・中足骨	骨針　火熱を受けている。
3	〃　SD03	獣骨（種名不明）	〃
4	江上BSD070	スズキ　右歯骨片・椎骨片	鎌倉時代
5	〃　〃	クロダイ　上顎骨	
6	〃　〃	フグ類？尾椎骨	
7	〃　〃	魚骨片	
8	〃　〃	〃	
9	〃　SD014X21Y58	獣骨片	
10	〃　〃　X17Y58	人骨大腿・脛骨片	火熱を受けている。



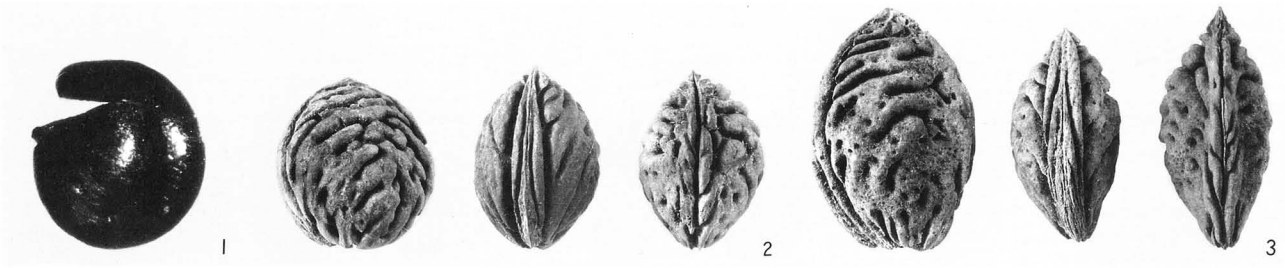
H　昆　　虫

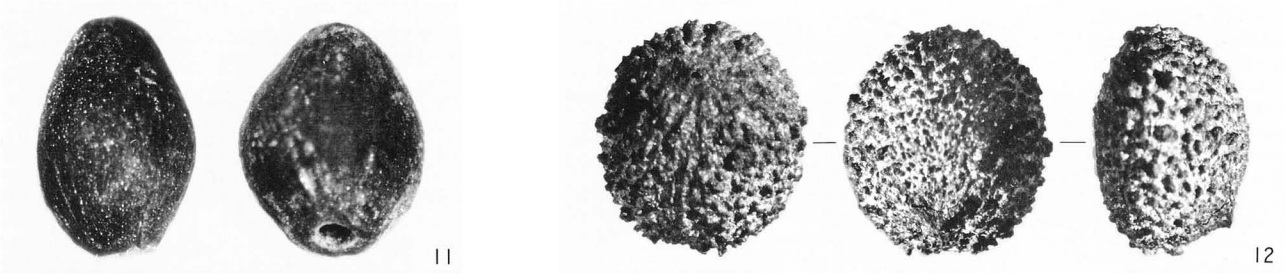
江上Ａ・江上Ｂ遺跡から，採取土壌の水洗選別によって，昆虫の翅・足・頭・卵・蛹など，約20サンプルを得た。種子の同定をお願いした粉川昭平先生によれば，ハチとかアリ（膜翅目），ゾウ虫や甲虫（鞘翅目），ハエとかアブ（双翅目）などがあるらしい。当時の生活環境を知るうえでも，これら昆虫の同定はぜひ必要なものであるが，今回は機会がなく，行えなかった。

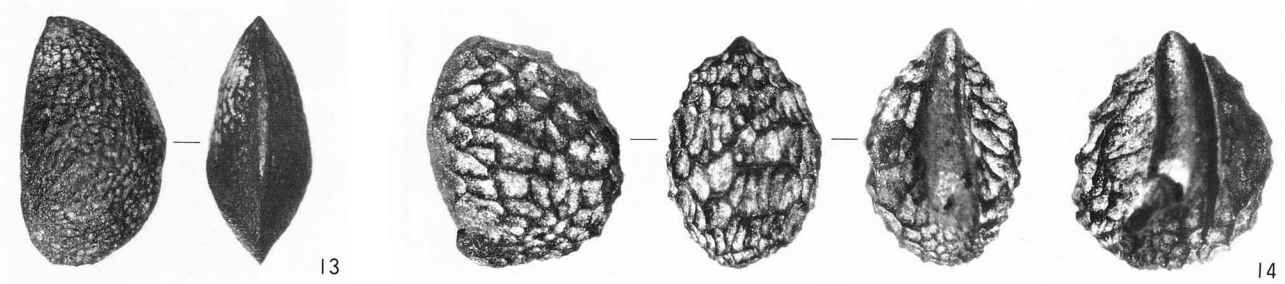


図版 I

1.マツ属(複維管束亜属):江上A-SD01,×1　2.スギ属:江上B-SD070,×5　3.イヌガヤ:江上A-SD01・SD04, ×1.5　4.カヤ:江上A-SD05・SD01, ×1　5.アカガシ?:江上A-SD01, ×1.5　6.オニグルミ:江上A-SD01, ×1　7.ブナ:江上A, ×1.5　8.コウゾ:SD09, ×12　9.マヤグワ:江上A-SD13, ×15　10.アサ:江上A-SD13, ×8　11.ソバ属:江上B-SK007, ×5　12.イシミカワ:江上B-SE007・江上A-SD13, ×7　13.ミゾソバ:江上A-SD13, ×7　14.マルミノヤマゴボウ:江上A-SD13, ×10　15.マタタビ:江上A-SD09, ×20　16.コブシ:江上A, ×3　17.アオツヅラフジ:江上B-SK007, ×8

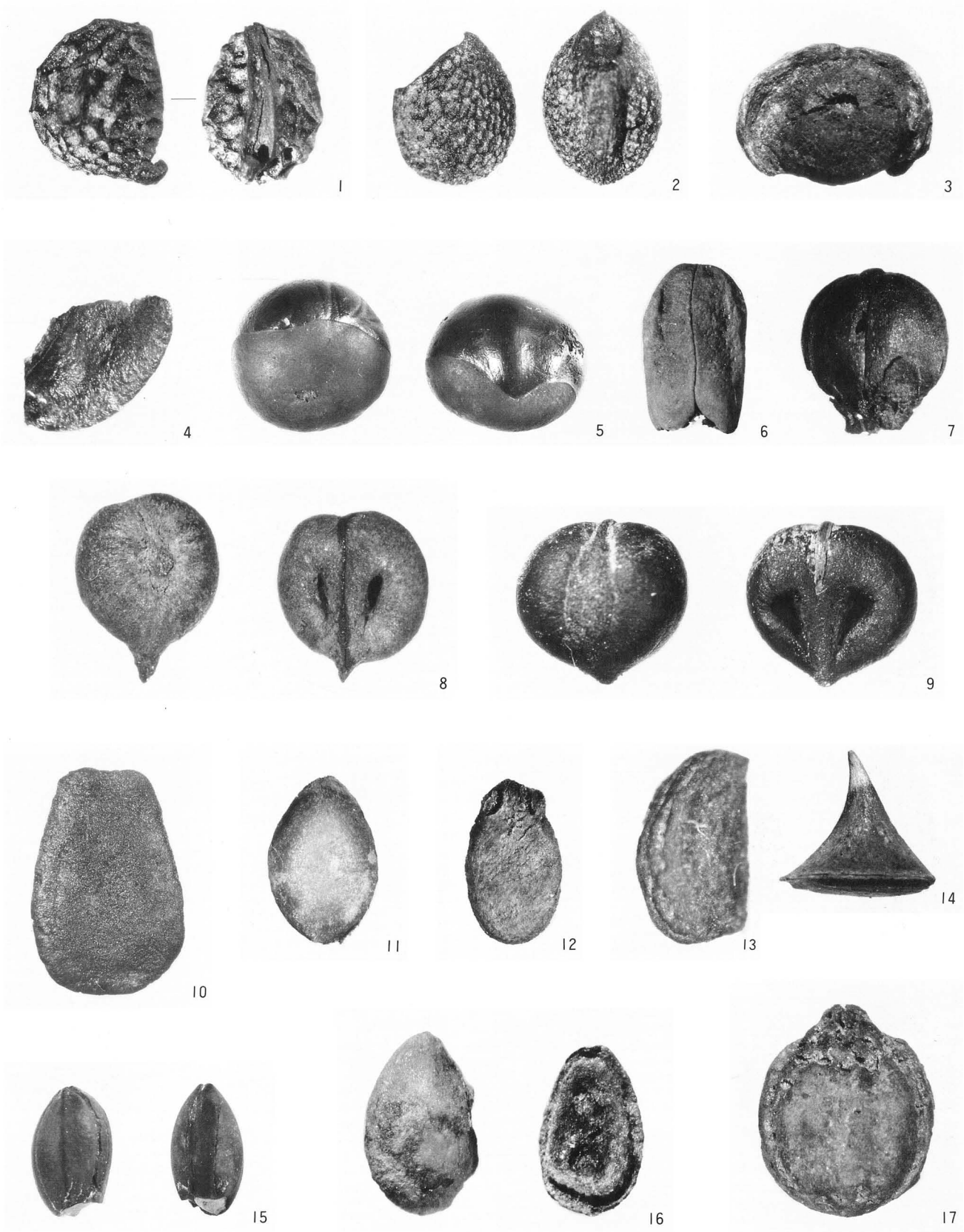






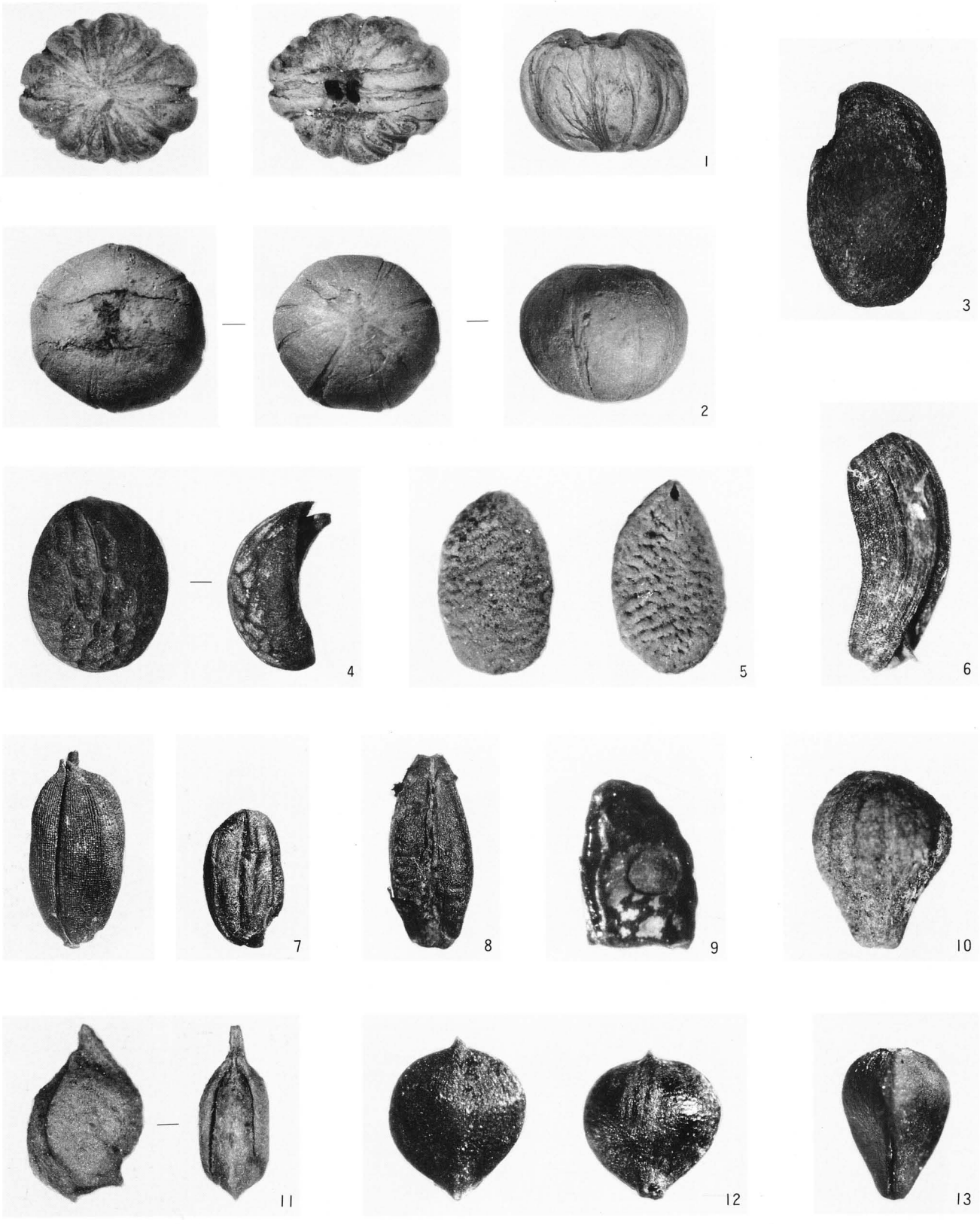
図版 2

1.アカザ:江上B-SK007, ×20　2.モモ: 江上A-SD01, × 1　3.モモ: 江上B-SK007, × 1　4.サクラ属 : 江上A-SD04, × 5　5.キイチゴ属:江上A-SD09, ×17　6.ツバキ属:江上A-SD01, × 1　7.リョクトウ?:江上A, × 6　8.アズキ?:江上B-SD070, × 5　9.フジ属:江上B-SD070, × 3　10.カタバミ:江上A-SD09, ×14　11.エノキグサ?:江上A-SD09, ×20　12.アカメガシワ:江上A-SD13, × 7　13.キハダ:江上A, × 7　14.カラスザンショウ:江上A-SD13, × 9



図版 3

1.イヌザンショウ:江上A-SK47, × 9　2.サンショウ属:江上A, × 7　3.ムクロジ:江上B-SK007, × 5　4. イタヤカエデ: 江上B-SK007, × 5　5.トチノキ:江上A-SD01, × 1　6.クマヤナギ属:江上B-SK007,×5　7. ネジキ: 江上B-SD070, × 7　8.ブドウ属:江上A-SD04, ×6　9.ノブドウ:江上A-SD01, × 7　10.キカラスウリ:江上B-SD070, × 3　11.スズメウリ:江上B-SK007, × 5　12.スイカ?:江上B-SD070, × 3　13.タラノキ(種子): 江上A-SD09, ×20　14.タラノキ(刺): 江上B-SK007, ×3　15.エゴノキ:江上A-SD03, × 2　16.ムラサキシキブ属:江上A-SD13, ×15　17.ウリノキ:江上A, × 4



図版 4

1.ミズキ:江上A-SD01・SD09,×6　2.クマノミズキ:江上B-SK007,×7　3.マメガキ?:江上A,×4　4.クサギ:江上A-SD01・SD04,×5　5.ニワトコ:江上A-SD13,×15　6.メナモミ:江上A-SD13,×15　7.イネ:江上A-SD04,×5　8.ムギ類:江上B-SD070,×6　9.ツユクサ:江上B-SD070,×10　10.ミクリ属:江上A-SD09,×20　11.ヒルムシロ:江上B-SK007,×9　12.カンガレイ属:江上A-SD09,×14　13.ウキヤガラ:江上A-SD09,×10